私乃見多明治文壇

野崎左文著

春陽堂版

SANSEIDO
KANDA TOKYO

PL
726
.6
N6

Nozaki, Sabun
Watashi no mita Meiji bundan

East
Asiatic
Studies

PLEASE DO NOT REMOVE
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY

Digitized by the Internet Archive
in 2010 with funding from
University of Toronto

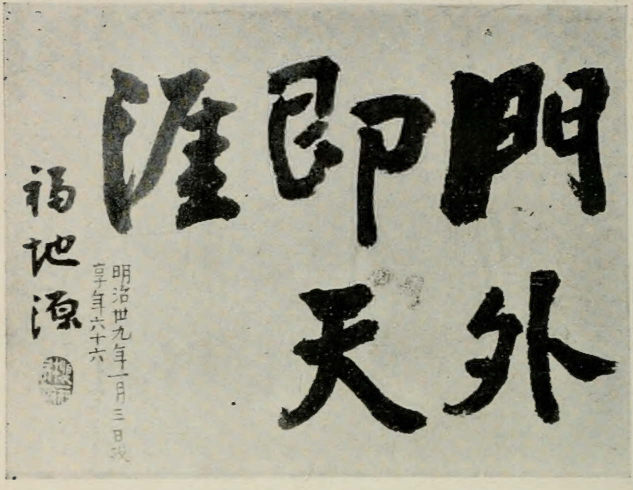
http://www.archive.org/details/watashinomitamei00noza

野崎左文著

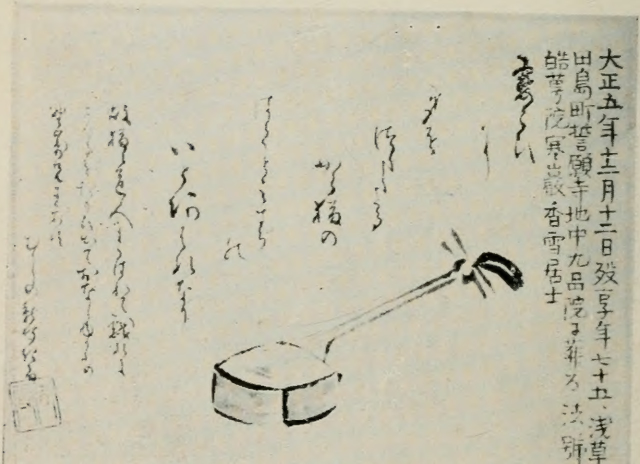
私乃見多
明治文壇

PL
726
.6
N6

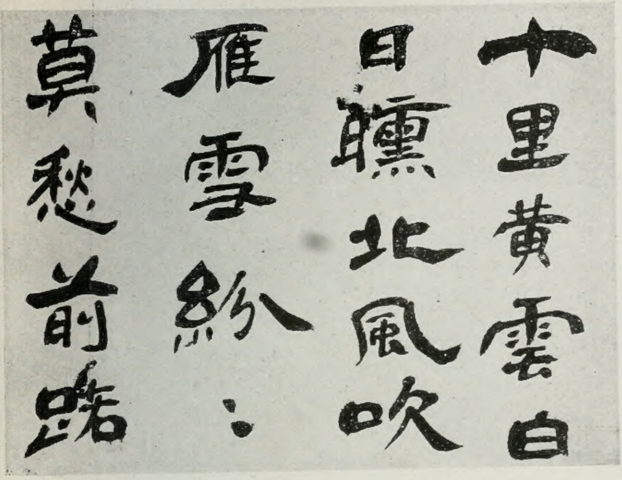
LIBRARY
JAN 18 1967
UNIVERSITY OF TORONTO



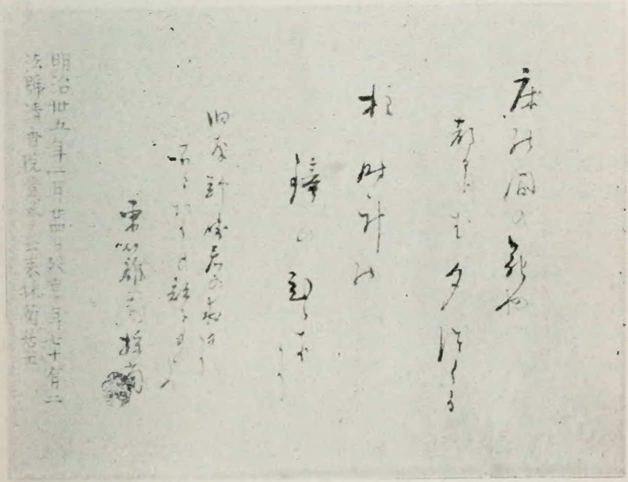
福地櫻痴居士筆跡



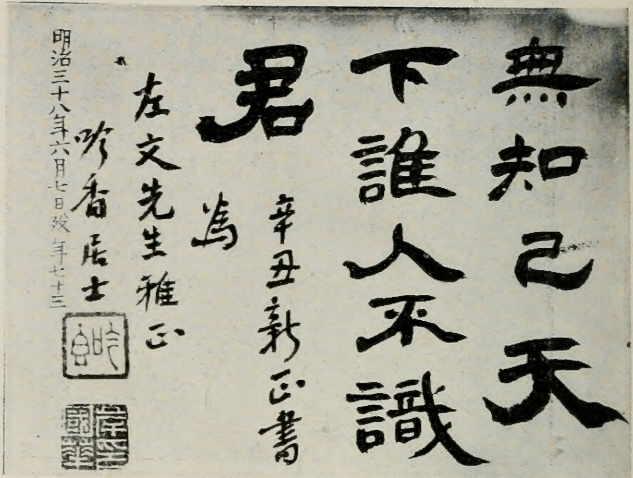
前田夏繁氏筆跡



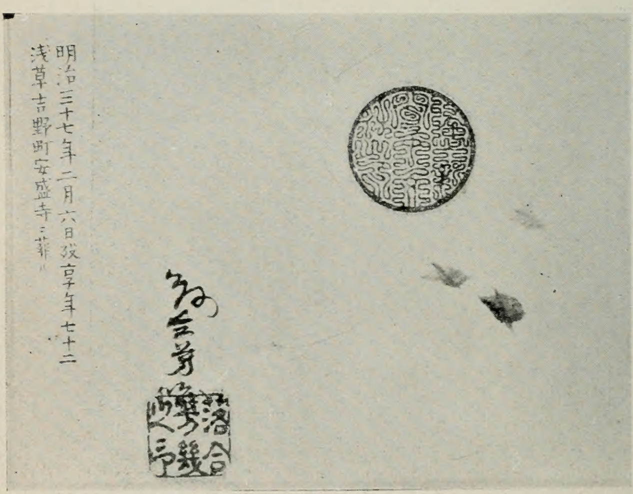
岸田吟香



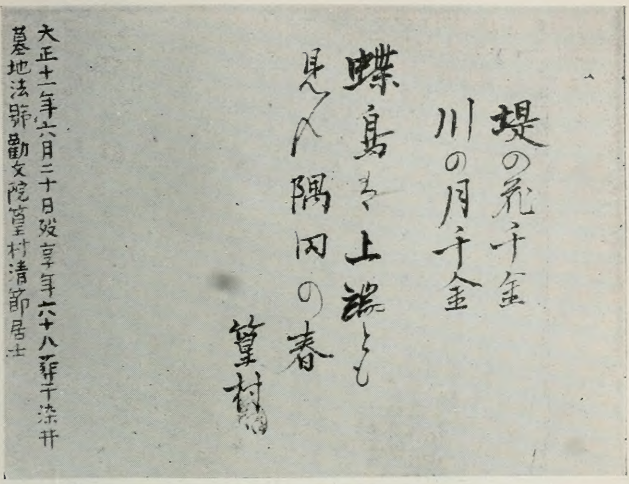
條野採菊翁筆跡



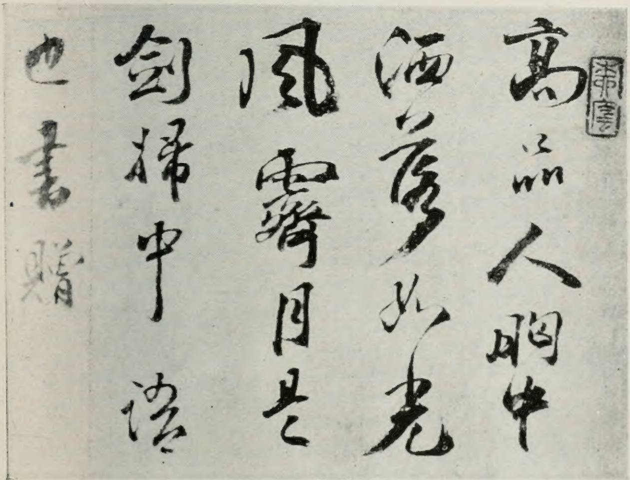
居士筆跡



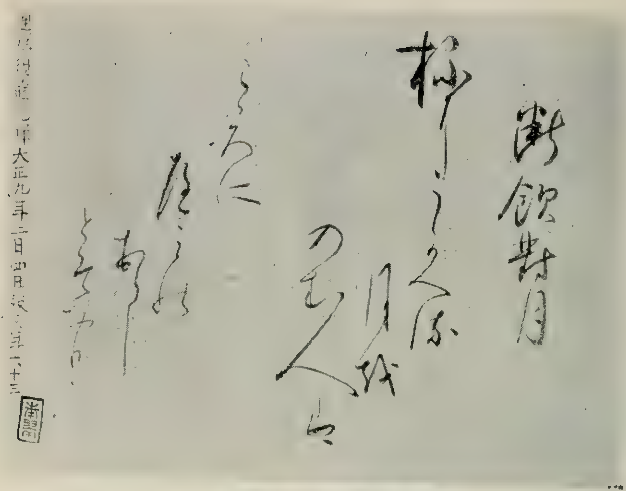
落合芳幾翁筆跡



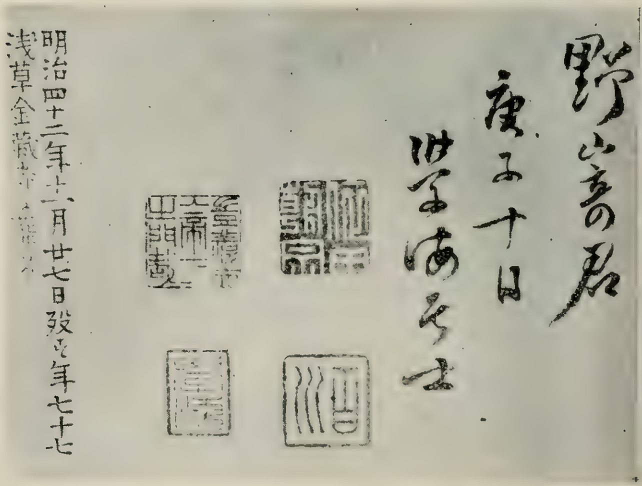
饗庭篁村翁筆跡



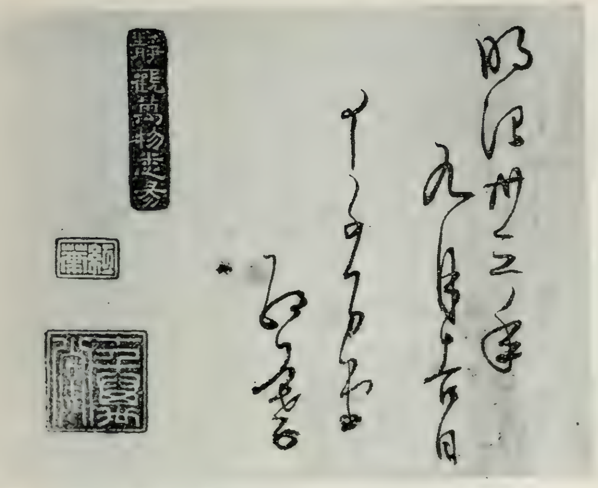
依田學海



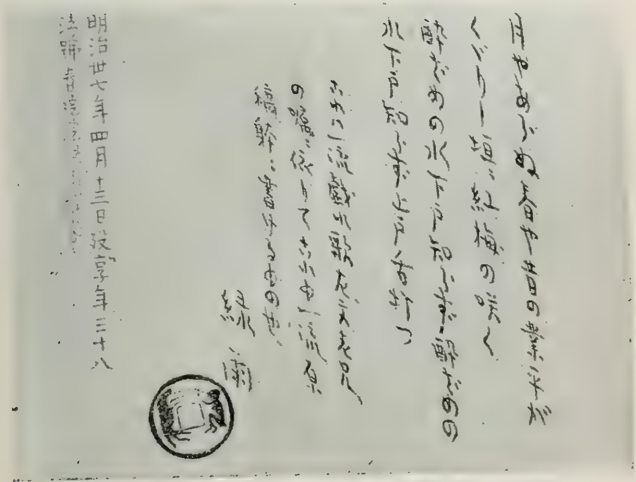
須藤南翠居士筆跡



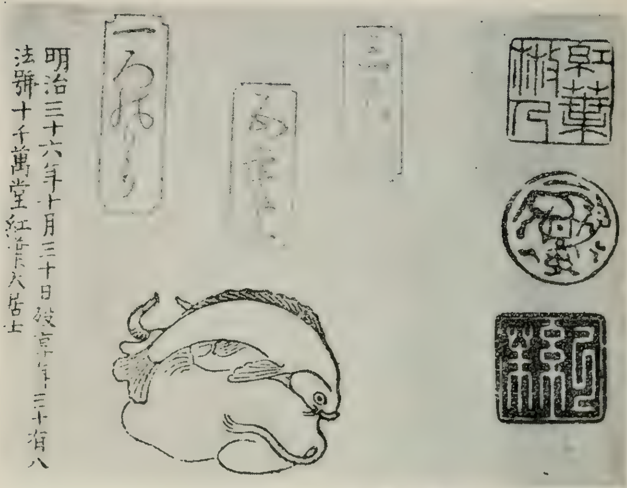
居士筆跡



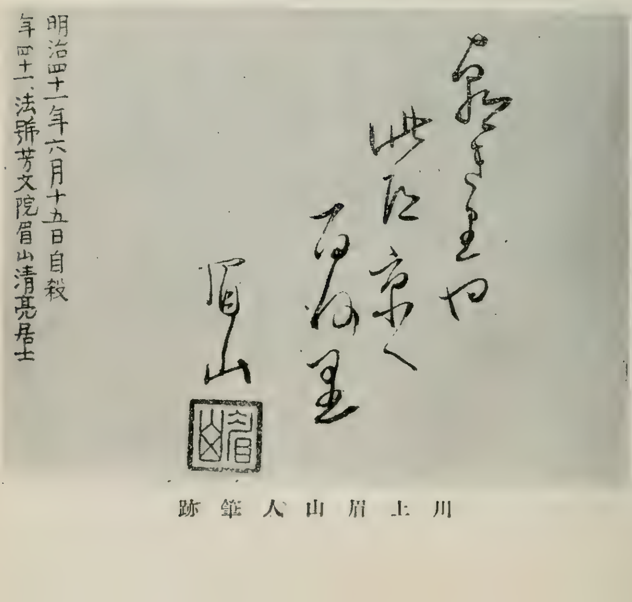
尾崎紅葉



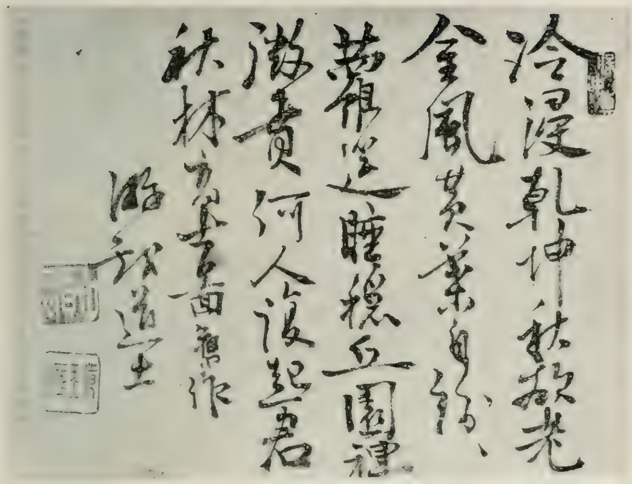
齋藤綠雨醒客筆跡



山人筆跡



川上眉山人筆跡



宮崎三昧道人筆跡

石田寅彦氏筆跡

（以上著者所藏判取帳より）

目次

明治初期の新聞小説……一
（一）大新聞と小新聞（二）新聞小說の嚆矢（三）新聞小說の作法（四）小說記者の狀態（五）新聞小說家の流派（六）投書家の勢援（七）小新聞の經營（八）新聞挿繪の沿革（九）其他の思ひ出
今日新聞と浪華新聞……八三
今日新聞○齋藤綠雨氏○櫻痴居士の自傳○小說神髓○浪華新聞○坂崎紫蘭氏
明治初期に於ける戲作者……一一九
稗史年代記の一部……一四一
名聞面赤本○嘉永より明治に至る作者四十二名の小傳
田島任天翁の遺著……一六九
其の小傳○五十年前の東京（田島象二）

假名垣魯文翁の自傳……二〇五
傳記補遺〇門人小傳いろは連々名〇遊京日記（魯文）
柳亭種彦氏の逸事……二一七
柳塢亭寅彦氏の狂歌……二二五
其の略傳〇反故無盡勸進帳（寅彦）〇狂歌百廿八首
成島柳北仙史の面影……二五九
其の略傳〇ごく內ばなし（柳北）
石井南橋散史の一面……二九九
其の略傳〇年中行辭一百韻（南橋）
服部撫松居士の評判……三二一
其の略傳〇東京新繁昌記の內新聞社（撫松）
山田風外翁と鬭樣盆居士……三二三

明治年間の狂詩と飲仙會……三三五
明治年間の狂歌と鶯蛙會……三五五
昔の銀座と新橋藝者……三七七

附　錄

狂歌一夕話……三九九
狂歌の字義○狂歌の沿革○天明調狂歌の勃興○江戸の狂歌と大阪の狂歌○狂歌と落首の區別○狂歌の詠み方○天明調狂歌書目

明治初期の新聞小説

（一）　大新聞と小新聞

新聞小說の事を書くのに先だつて、日刊の新聞が大小の名稱を以つて區別された事を云つて置く必要がある。明治六七年から十年までの間に東京に於て發行されて居た新聞紙は東京日々新聞、郵便報知新聞、日新眞事誌（明治八年廢刊）曙新聞（新聞雜誌改題）朝野新聞（公文通誌改題）讀賣新聞、平假名繪入新聞（後東京繪入と改題）假名讀新聞花の都女新聞等であつた。此內報知新聞が兩國藥研堀にあつたのを除く外は、言ひ合せたやうに銀座の煉瓦地に集まつて居た。先づ日々新聞が明治十年には銀座二丁目から、柳北仙史の所謂華甍雲を淩いで聳え粉壁日に映じて輝き十字街頭に屹立する吳服店恵比壽屋跡の大煉瓦家屋に引移り、表口に太政官記事御用と書いた白字の竪看板を揭げ、軒先に日報社の三文字を現はした輪郭附きの花瓦斯を取付け、大祭日などには之に點火して景氣を添へて居た。朝野新聞は銀座四丁目の角今の三共會社のある處に本社を設けたが、玆は元英人ブラック氏の經營にかゝる日新眞事誌社であつたのを、その廢刊後に買收したのである。私は、其頃近傍の西紺屋町十四番地に住つて居たので、每朝同社の駒寄せの處に立ち、張出しの新聞

——特に柳北仙史の雜錄——を讀むのを樂みにして居たが、他の新聞は皆五號活字であるのに獨り朝野新聞のみは四號活字で印刷して居た。又曙新聞は朝野社と相對した尾張町新地の角則ち今の八十四銀行の支店のある處で、明治十六年には其の東南角、今のカフエーライオンの處へ東京横濱毎日新聞が移轉し來り、東北角には絵入朝野新聞社が出來て、此四ツ角を四新聞社で占領した時代もあつた。それから讀賣新聞の日就社は虎之門外琴平町から銀座一丁目京橋際の角元の西村洋服裁縫店跡へ引移り、絵入は銀座二丁目に、假名讀は出雲町に在つた。

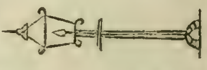
元此の銀座は新兩替町と云つたのを改稱したもので、四丁目までしか無いのを、今では尾張町新地の電車交叉點以南新橋までの尾張町、竹川町、出雲町、南金六町をもひつくるめた總稱のやうになつて居るが、火災燒失後家屋建築の制を定め、明治七年から煉瓦家屋に改築したのである。然るに床は底く窓は少く、通風が惡い爲めに、濕氣多く且陰鬱なので、好んで住む人少く、私の知つて居る明治八九年ごろは新橋京橋間の大通りにすら空家が數軒あつて、中央の車道には雜草が茫々と生えて居る處もあつた。そして銀座四丁目の角や其の裏通りでは活人形、猿芝居などの觀せ物を興行し、まるで新開地へ往つたやうな有樣であつたが、十年後には各新聞が競うて此地に本社を置く

事となつたゆゑ、世人は銀座を新聞町と稱へるに至つた。私が明治十四年の春自宅から『於見喃誌』といふ滑稽雜誌を發行して居た頃、此の銀座の新聞雜誌を戲れに引手茶屋に擬し、その記者を娼妓に見立てた新聞細見といふのを揭げた事があるから、其の當時を偲ぶまでにこゝに一頁分を採錄する事とした。

此内何々屋とある新聞雜誌社と專ら活版飜刻ものを出した書肆等は、凡そ其の位置に依て順序を定めたもので、左方が京橋寄り右方が新橋寄りであつて、風雅鳳鳴其他の一二社を除く外は、上段は大通りより東の方、下段は西の方に在つたものである。そして其の屋の字を社又は堂の字に改むれば大概實の稱號となるのであるが、此内かつら林とあるは桂林一枝社、あさ野とあるは朝野新聞社の事で、又粹文社は私の發行して居た於見喃誌の本社（自宅）であつた。次に源氏名に擬した名前主を說明すれば、櫻池は櫻痴居士福地源一郞、鳴島は成島柳北、奴間は沼間守一、末廣は重恭、竹雄は岡本武雄、西園は東洋自由新聞の西園寺公望、小安は讀賣の社長子安峻、初鳥は服部誠一、早志は近事評論の林正明、柄原は後の澁柿園塚原靖、津多は學農社の津田仙、哉垣は假名垣魯文、夏重は夏繁前田健次郞、菊池は菊地九江、瀨喜は關直彥、芳田は吉田熹六、犬飼は犬養毅、染咲は

○江湖屋　○東洋屋　○いろは　○工業屋　○自由屋　○信敬屋　○扶桑屋　○近事屋　○あけぼの　○歌舞伎屋　○まんじ屋　○成章屋　○廣告屋　○鳳鳴屋　○風雅屋　○芳譚屋　○繪入屋

新橋の瓦斯燈



六七年前には見世物小屋いと多かりければ見世物町と稱へたりしも今は人呼んで新聞町とあだ名す

京橋の柳

○新經濟屋　○政談屋　○經濟屋　○開拓屋　○うさぎ屋　○學農屋　○日報屋　○あさ野　○花月　○九春屋　○開知屋　○かつら林　○時習屋　○毎日屋　○粹文屋　○人情屋　○讀うり屋

千輯屋文作

△櫻池　△鳴鳥　△奴間　△末廣　△竹雄　△西園　△小安　△初鳥　△早志　△柄原　△津多

△哉垣　△夏重　△菊池　△瀬喜　△芳田　△犬飼　△染咲　△蘭泉　△桑乃　△内多　△永沼　△栗多　△春虹

△山多　△持月　△長井　△瓢也　△橋唐　△柳江　△佐文　△安樂

かぶろ　をちの　たより　ひゞの　はなし　えり鳥　みどり　やりて　よせ　ふみ

染崎延房即ち二世爲永春水、蘭泉は高畠藍泉の三世柳亭種彦、桑乃は桑野鋭（以下略す）等、等、等の諸氏である。

さて之等の新聞を區別して大新聞小新聞と呼んだのは、紙幅の大小に基いたのは勿論であるが、猶大新聞の主とする所は國家の政治に在つて、專ら政府を反省せしむると共に一方國民をも覺醒せしめんといふ主義から筆を執るのであるから、毎號必ず社說を掲げて時事問題を論議し、その雜報欄にても亦多く政治法律若くは農商工業界の出來事を報じ、市井の雜記殊に花柳界、演藝界の記事の如きは、新聞の品位を落すものとして之を避ける風があつた。二三年後に報知新聞がその紙上へ劇評を載せはじめた時、報知もそろ／＼墮落しかけたのだと眉を顰める人もあつた程ゆゑ其他は推して知るべしである。然るに小新聞は之に反して政治には殆ど無頓着といふ風で論文などは掲げず――中には社說の代りに茶說と云つたやうな滑稽文を載せる新聞もあつたが――專ら世上の出來事を報ずるのを以て務めとし、就中艶種と稱し男女間の癡情に關する記事などを此上なき好材料とする傾きがあつた。夫れ故花街劇場の通信にも重きをおき、假名讀新聞の如きは「猫々奇聞」といふ一欄を設け、藝妓のあら捜しの記事を掲げて看客を歡ばせて居た。これを對照表で示して見れば、

大新聞

一、紙幅の廣き事
二、社説を掲げて政治を論ぜし事
三、社説雜報寄書其他の記事にもすべて傍訓を施さゞりし事
四、雜報は專ら政治經濟上の事件を報じ花柳界演藝界其他卑俗の記事は新聞の品位を墮すものとして掲載せざりし事
五、雜報の文は概して「したり」「せし由」の文章體なりし事
六、小説を掲げざりし事
七、壹枚の定價は貳錢以上なりし事
八、賣子をして呼賣を爲さしめざりし事

小新聞

一、紙幅の稍や狹き事
二、社説を掲げず政論には殆ど無頓着なりし事
三、官令(おふれ)雜報(はなし)寄書(よせぶみ)等にもすべて振假名を施せし事
四、政治上の記事は至極簡單にして重もに市井の出來事花柳界演藝界の通信及艶種と稱するものを掲げし事
五、雜報の文は「御座います」「ありました」等の俗談平話體なりし事
六、續き物と稱する小説を連載せし事
七、壹枚の定價は八厘より壹錢五錢までなりし事
八、昔の讀賣に習ひ是は今日發行の何々新聞と呼びあろく者ありし事

ざつと右の如き相違があつて、約言すれば大新聞は中流以上の知識階級を顧客とし、小新聞は中流以下の社會を相手とする通俗本位のものであるから自から硬軟の區別を生じ、前者は主人公向、後者は細君向であつた。

新聞に大小の差別あると共に其の記者の閲歷、性行、風俗等にも相違があつた。大新聞の記者は重

に政治家、法律家、洋學者、漢學者、官吏から轉じた者、一介の書生から上つた者等で、皆文明の先導者を以て任じて居るから、中には擧動粗暴今いふ壯士風の人もあつたが、概して相應の人格者で、服裝にしても洋服とか袴羽織のキチンと極つた風俗が多かつた。併し前に云ふ壯士風の人々には紺飛白の腕まくりに小倉袴を高くからげ、朴木齒の下駄を引ずつて來る、まるで芝居で見る田舍武士其儘のもあり、且一體が議論家の集まりで當時の政談演說に辯士たりし記者もあつて、筆も口も達者揃ひであるから、編輯局に於ても口角泡を飛ばして激論する事も珍らしく無かつた。之に反して小新聞記者には戲作者、狂言作者又は俳人歌人といふ風の軟文學者が多かつたが、別に天下を望む大伴黑主もなく、筆一本を櫓櫂にして浮世の荒浪を渡つて來た苦勞人の寄合ひであつたゆゑ、人附合ひも穩かで世事に馴れた風があつて、隨つて共の服裝も道行振あり書生羽織あり、夏は大形の浴衣に角帶、冬は古渡り唐棧にカキ更紗の下着といふ通人好み、惡くすれば半開きの扇で額を敲き、オホンといふ咳拂ひを仕兼まじき人もあつた。若し助六の股を潛る人を求むれば、當時の硬派記者にも軟派記者にも其人には乏しくなかつた。

前に揭げた內で、日々、報知、朝野、曙、東京橫濱每日が大新聞に屬し、讀賣、繪入、假名讀

が小新聞である（花の都女新聞は暫時にして廢刊 猶小新聞としては繪入自由、自由燈、有喜世（後ち改進と改題）いろは、めざまし（後東京朝日と改題）魁、あづま、今日（後都新聞と改題）繪入朝野（後中央と改題）やまと等が續々發行されたのであるが、是れは明治十年以後の事で、十年以前には此の讀賣、繪入、假名讀が三社鼎立して各その特色を發揮して居た。當時ある人は之を菅原傳授の三人兄弟に見立て、讀賣は率直堅實で松王、假名讀は活潑洒落で梅王、繪入の溫雅艶麗で櫻丸と云つたのは適評である。

此の三小新聞の内で讀賣が最も古く、私は初號から購讀者の一人であつたが其の沿革等に就ては記憶がない、幸ひ同社の編輯長であつた亡友永井碌（小石）氏が同新聞第一千號の祝宴席上で演述されたものがあるから、左に全文を借用する。

今日は明治十一年五月十九日にして卽ち讀賣新聞第一千號刷出の日に當る、創始以來日尚淺しと雖も、已に一千號の多きに至り夥多の紙數を刷出するもの蓋し都下に冠たるべし、否豈都下に止まらんや。

夫れ斯の如きは幸に時好に適し機會に逢ふと雖も、蓋し又社運の茲に至るは全く社友諸君の勉勵

と刻苦とに依るなるべし、啻に刻苦と勉勵とのみに非ず、焦思碎心剛毅不撓の結果と云ふべし、然り而して一千號に達するの日子に休日を加へて之を通算すれば則ち一千二百九十五日吁又長からずや、故に今一千號の壽を祝するに當り、先づ諸君へ本紙發兌以來の事歴の大略を陳述し、又併せて本社の幸榮と本紙の隆昌とを祝し、諸君の勉勵を感謝し尙ほ將來を淬勵せんとす。

明治八年九月二十日即ち本紙二百三號の日に於て、幸ひにして本社の員末に列り探訪の事に與かる故に、其以前に在つては、與り知らずと雖も、又或は傳聞する所に因て以て敢て陳ぜんとす、訛傳は叱正を後日に請はん。抑も本紙を發兌するや時維明治七年十有一月二日、初めて東京虎の門外なる琴平町一番地に於て第一號を發兌するや、漸く發行高百二三十枚に過ざりし、此時に平假名新聞ありしと雖も 極めて微々として寥々影を市隅に潛めり、而して鐸を鳴らし記事を呼んで勸懲を致すことは實に本紙を以て嚆矢とす、然るに往古より讀賣と唱へ天災奇變の在るごとに、之を記し之を呼んで市中を高呼して之を賣る者あり、人頗る之を賤む、是故に其初めに於ては人或は讀賣の二字面より看過し來り頗る輕視したるものなり、且加ふるに紙地狹隘にして隔日の出版なりしかども、幸ひに時好に適せしと且諸君の勉勵とに因て、新は益々新、奇は益々奇にして

記事の疾早なるを以て、初めに輕視せしもの却て賞譽して大に聲價を博し看るもの日に時に益々多く購求するもの比々として日に幾千幾百枚を增殖するに至る。是に於て隔日の出版は隔靴爬痒の嘆なきに非ざるを以て益々奮勵し、明治八年四月十有九日即ち僅に第八十號より每日の出版となし、同年六月一日第百五十號に至つては已に一萬〇八十八枚の多きを發兌せり、爾來益々進みたりき、而して予は同年十一月一日を以て橫濱派遣の命令あり、之れ則ち探訪者を隔地に出すの始めとす、却說また予は則ち該港に在つて探訪の事を盡すを以て、本社の事に至つては聞知する能はずと雖も、現に明治九年一月十六日を以て新年宴會を東兩國中邑樓上に開くの日、社友の會するもの百有餘人なりき、吁又盛んならずや。

此年一月四日即ち二百八十三號は已に一萬五千の多きを致し、又紙地を廣げて今の四ページとなし、題字を故佐瀨得所翁に書かしめ草體なりしが、幾干もなく明朝に革む、此年六月二十八日をトし、各新聞相稟議して、曾て新聞紙に記載したる無緣の靈と又禁獄諸子の安全とを併せ兼て、米國自由祭に倣ひ大施餓鬼を淺草觀世音の廣前に修す。之なん則ち新聞供養なり。幾干もなく第四百四十八號に於て局長鈴木田正雄氏編輯長たりしが、野村某は云々を記載せしに因て罰金二十

圓に處せらる。此際に臨み予遠く擧られて氏が重任を委ねられ、第四百九十九號より予が姓名を紙末に署するや否や、第五百二十二號に於て森時之助の事に因て罰金五圓に處せらる。時に妖氣紫溟の天を蔽ひ九州將に亂れんとし、肥後に神風黨、萩に前原、秋月に福岡に群賊尋で蜂起し、旁報櫛比の如く人心恟々として、群賊漸く平らぐの日に當り漸く吉報を得る日に及び、第五百四十三號に於て「故内閣顧問木戸公は切つてしまふがいゝ」云々と筆記せる科に因り、予は禁獄三ケ月罰金十五圓に處せらる。故に第五百六十四號より加藤瓢乎氏代つて名を署す。又幾干もなく氏も亦第五百八十二號に於て三野村云々に依て罰金五圓に處せらる。而して明治十年二月十日は大和國傍火山に於て神武天皇の紀元祭に付　天皇陛下は一月二十七日龍駕を大和に向はせ給ひ、尋で二月七日を以て神戸京都間の鐵道開業式をも　陛下親しく行はせ給ふを以て、局長鈴木田氏は工部卿の招待に應じ該地に赴かる。而して加藤氏は又某號に於て、戸長某は地劵を僞造す云々に付罪を治せられ、予が三月六日に於て禁獄三ケ月の期滿ちて放免せらるゝや、又加藤氏は禁獄一ケ月罰金五圓に處せらる。時に薩賊猖獗にして道路に說くところ囂々として少しく心ある人は眉を顰むる時に際し、綿々縷々實際の報道緻密にして且怠らざるを以て紙數を增殖し、第六百三

十九號の如きに至つては三萬三千四百五枚の多額を致せり、吁又盛んなる哉。

然り而して予は六百三十八號より復任して姓名を署するや、第六百八十一號に於て平沼專藏の事に係り罰金五圓に處せらる。而して當時我が內訌は貿易上に影響し船載の物品頗る減少し、紙種の如き朝暮その供給に苦しみ甚しきは白紙にして價額新聞紙の定價に過るものあり、爲めに非常の損害を蒙ると雖も、予や其事に與らざるを以て其の損害を證明する能はず。故に當局者の詳悉するに讓る。

此年五月十六日を以て本社を今の銀座に移す。社業の進步を一層せり。九月十四日鹿兒島の賊斃るゝを以て爾來紙數を減ずるも千の聲を聞かず。第八百三十六號に於て摺子木坊主云々に依て罰金五圓に處せらる。

又十一年に至り八百六十二號及六十六號に於て、伊勢三云々に付山本卯兵衞は大馬鹿物云々、同七十號に於て惡事は千里走る馬車會社の總隊長云々に依り罰金五圓に處せらる。又九百三十九號に於て、成瀨久太郎云々に依り罰金五圓に處せらる。時に予祖先の祭祀に際り間を乞うて歸省せるの故を以て、饗庭與三郎氏が代つて宣告を受く、又奇ならずや。

又第九百八十一號に於ては、裁判所小使云々に付罰金五圓に處せらる。是に於て總括して算すれば則ち禁獄四ヶ月、罰金七十五圓也

此一千二百九十五日間に本紙の爲めに生を失ふもの三人、得るもの其數幾千なるを知らず其德大なる哉。

探訪者は初め一人を置き、漸次に增加して已に十有餘人に及び、横濱を初めとして隔地に派遣するもの三人。

客歲十二月廿七日を以て、警視局は猥りに附會揚言して新聞紙を賣る者云々、違警七十一條に加ふると布達せり。是に於て本年三月第九百五十號より斷然携賣を廢止して單に箱賣のみとす。本年三月を以て瓦斯を諸室工場に引く。本月十六日六兇大久保參議を參朝の途中に邀撃す。一時都下騷然として新聞紙の報道を待ち買ふもの比々として多く、第九百九十六號の如きは俄かに二千七百十五枚を增殖せり。今日に至つて尙依然たり。

商業の景況、會計年度出納精算の事に至つては予の關する所にあらず、必ず其の詳細を報ずるの人あらん。

夫れ斯くの如く開陳し來るものは、則ち讀賣新聞第一號より一千號まで予が見聞する所の概略にして、此外悉く網羅するに於ては又幾百端を增加するを知らず。實に盛大と云ふべし、茲に於て一言の戒策以て砭針を呈せんとす。夫れ事とし物として窮まれば必ず戻り滿れば必ず缺けざるもの非ず。試みに古來能く天下を一統し四海を制御するものを見よ、終りは必ず創始起業の勞を忘れ、漫りに驕奢に耽り私意を究めて以て一世を滅亡するもの昭々として史上に徵すべし。故に一國に於けるも一社に於けるも大と小とのみ、豈理に大小輕重あらんや。維持するもの只至公至明のみ、偏に乞ふ覆車の轍を戒め以て百事務を整理し社業の本旨に背かず益々孳々として開進の道を拓き、社名を海の內外に雷轟せん事を希望すと頓首再拜　　日就社員末　永　井　碌

それから平假名繪入新聞は明治八年四月に初號を發行したもので、主筆は高畠藍泉氏、畫家は落合芳幾氏であつたが、重なる雜報に繪畫を挿入したのが此の新聞の特色で、我邦繪入新聞の元祖である。又假名讀新聞は同年十一月橫濱にて發行し後に本社を東京に移したもので、主筆は假名垣魯文翁である。そこで大新聞といへば如何にも得意が多く發行高も多いやうに思はれるが、所謂大聲は俚耳に入らずで、賣れ高は小新聞の方が多く、日々新聞よりは讀賣、平假名繪入の方が發行高に

於ては遙かに勝を占めて居たのである。

（二）　新聞小説の嚆矢

小新聞は中流以下の階級を讀者とするものであるから、其人々の好みに投ずるやう、何か目先の變つたものを掲げて呼び物とするのが營業上の祕訣であつた。そこへ行くと繪入新聞はよい處へ着眼したもので、毎日の雜報へ繪を入れて出すといふのが同社の誇りであつた。其繪は同社投資者の一人落合芳幾氏が筆を把つたもので、新聞挿畫の筆者は此人を以て鼻祖とすべきである。

新聞に繪を入れる順序はどうであるかと云へば、警察受持の探訪者が歸社して差出す原稿の內から、繪を入れるべきものを擇んで畫工が直ちに版下を描き之を其夜の版活大組の終るまでに急いで彫刻させるので、繪入社では三人の彫刻師が雇入れてあつた。其頃は今の新聞の如く地方へ宵出しといふ事は無かつたけれども、八頁掛のロール二臺で――一臺で表、一臺で裏を――印刷するのである。而かも蒸氣とか電氣とかいふ動力もなく、人の手で車を廻させゴト〳〵と印刷するのであるから、夜の十時前後から刷り始めねば翌朝の配達に間に合はぬので、どうしても五六時間に彫上げ

ねばならぬのである。（まだ版木の出來上らぬ時に大組に取掛る場合はボール紙などにて版木の寸法だけの型を取り、夫れだけを殘して活字を組込み、あとで版木の出來上つた時之を嵌め込んで印刷するのである）かゝる急ぎ仕事の爲めに其の版木を二ツにも三ツにも割り、彫刻師が手別けをして彫刻し、あとで之を繼合すといふ窮策を施す事もあつたが、かゝる急拵への版畫ゆゑ頭彫り――彫刻師の腕利きが專ら人物の面部や頭髮の毛筋などを彫つたもので、之を頭彫りと稱し、其他の胴體や背景を彫上げるのは弟子分の仕事であつた――などは粗雜なもので、殊に版木の割り目が白い筋を引いたやうに、ハッキリと紙面に顯はれるなどは不手際なものであつた。そこで版木を丁寧に彫らせるにはどうしても一日以上の餘裕を與へねばならぬといふ處から、同記者の前田夏繁氏が明治十一年九月に（明治全小說戲曲大觀に九年十一月とあるは誤り）「金之助の話」といふ、三分の事實へ七分の潤色を加へた續き話を載せ始め、挿畫も二三回づゝ前以て版下をゑがき、ゆる／＼彫刻させる事となつたが、此續き話が恐らく新聞へ小說を載せはじめた嚆矢で、其後小新聞は競うて續き物を紙上に揭げるやうになり、且其社では必ず一二の續き物擔當の記者を聘するやうになつた。其の續きものも最初の內は別立ての標題ではなく其の筆者も署名せず、謂はゞ長い雜報を連載するやうな

ものであつたが、一二年後には外題を一行の別見出しとし、何某作とか何某綴とか其の筆者の作名を掲げ、外題も草雙紙風の五字題七字題のものが用ひられるやうになり――讀賣新聞のみは久しく繪も入れず續き物も載せなかつた、饗庭篁村氏が繪入らずの小説を署名もせずに雜報の片隅へ載せ始めたのも、ズッと後の明治十五年頃である――それが後年には小新聞を卑俗だと譏つて居た大新聞までが之に倣ひ、終には講談ものまで連載して讀者の御機嫌を取るやうになつた。

（三）　新聞小説の作法

小新聞は前にも述べた通り通俗本位のものであるから、其の記者には多年文筆を以て業として居た戲作者の出が多かつた。先づ假名讀――後いろは新聞――の社長假名垣魯文翁は『西洋膝栗毛』や『安愚樂鍋』の戲作で名を知られた人、繪入新聞主筆の高畠藍泉氏は後に二代目（其實は三代目）柳亭種彦の名を繼いだ草雙紙の作者、藍泉氏が繪入新聞を退き其後を襲いだ染崎延房氏は二代目爲永春水と號した人で、初代春水の『いろは文庫』は實は此の染崎氏の筆に成つたものだと傳へられ、別に維新前後には『近世奇聞』其他の著作に從事された人である。獨り讀賣新聞の鈴木田正雄

氏は畠違ひの學者であつたが同氏が讀賣を退社後は一時藍泉氏が入社して編輯を總括して居られたから、小新聞は元の戯作者に依て占領せられた傾きがあつた。主筆が多く其道の人であつたゆゑ、新聞に續き物を載せる事が流行り出すや否や、魯文藍泉等の諸氏は率先して小説の筆を取り、門人又は社中の軟文學に心得のある者にも書かせ、或は社外からの寄稿をも歡迎して、後には一新聞には必ず二種の小説を載せる事となつたが、其一つは主筆又は社外大家の寄稿 他の一つは社中門人株の記者が受持つたもので、後者は則ち小説記者としての學力試驗に値するものであつた。

さて其作り方はどうであるかと云へば、先つ一つの材料を捉へてその腹稿が定まると、之を豫め三十回とか四十回とかの回數に分ち、その回數の下に是から書かんとする脚色のヤマ（例へば何回では誰と誰とが船中での邂逅とか、何回では誰が山中での遭難といふの類）を覺書に記して置き、此覺書に隨つて前以て四五回づゝの下繪を付け畫家に送つて挿畫を注文して置くのである。此の下繪を付けるといふ仕事もやはり昔の戯作者から傳はつたもので、馬琴種彦等の草雙紙の稿本を見ても皆作者が自筆で下繪を付けて居る。これは單に作者の物好といふでは無く、畫は文の書き盡せぬ處を補ひ文と畫と相俟つて始めて讀者を滿足せしむるものであるが、何分當時の畫家には時代

の研究といふ事が足らず、甚しいのには昔の草雙紙の挿畫や俳優の舞臺上の着附けぐらゐを唯一の粉本としてその風俗服裝等にとんでもない誤りが起る事がある。そこで作者はその下繪に先づ時代（天保年間とか慶應年間とか）時節（夏の夜とかの冬の朝とか）場所、人物の身分年齡、時によると人物服裝の縞柄、附け立ての屛風の繪、猫一疋のあしらひまで巨細に朱書して送らねばならぬ事であつた。此の必要上から魯文、藍泉——藍泉氏は玄人の畫家——春水其他の人々も皆相應に畫をかく事が出來たのであつた。

　それから愈々筆を下すといふ段取だが、是れも四五回づゝ書き溜るといふ事はなく、彫り上つた挿畫の版木を机上に置き、かの覺書を見ながら其の畫面に合ふやうに一回づゝ其日々々に綴つて行くので、內勤の小說記者が之を書く時間は一時間か一時間半ぐらゐに限られて居る。それから其の原稿の書き方も一回を書き了つて跡から假名を振るのではなく、漢字には書きながらルビを振つて行くので、今の振假名なしの原稿を投出せばルビの附いた活字で組んで吳れるとは餘程手數の相違がある。殊に植字方や文選も幼稚であつたから原稿の文字は明瞭に書かぬと誤植が多く、塗抹した箇所や細字で書入れをする場合は朱筆を用ふるのが例で、編輯局の机上には必ず朱硯朱筆が附き物

であつた。それから最初の腹稿と實際筆を把る場合とは、そこに多少の喰違ひが生じて本文と挿畫とが併行せぬ場合が起る。本文が後れた時は挿畫一個を無駄にすれば濟むもの丶、本文が進み過ぎる際は全く挿畫が無い事となるから、斯る時の用意として豫め本文には餘り關係のない景色畫などを彫らせて置き、之を挿入して一時を糊塗する事もあり、又は據なく「畫家病氣の爲め本日の挿畫を略す」などと何にも知らぬ畫家に罪を負はせるやうな窮策を施す事もある。つまり大體の筋立ては定まつて居ても、其日々々に筆を下すものゆゑ、往々にして作者自ら斯かる窮地に陷る事もあり、其甚だしい一例は外題は忘れたが魯文翁の綴つた續き物の内、一度谷間へ投込まれて死んだと書いた惡婆がいつの間にか六七回目に顯はれてやはり惡事を働いて居る。先生その惡婆は疾に死んで居るのですよと注意すれば、翁は始めて心付きさうであつたか、併しこんな惡運の强い姦婆はいつ蘇生するかも知れぬものだと大笑ひをした事がある。要するに當時の續き物記者は其筆を小說に專らにする餘裕がなく、日々出社して雜報を書く片手間に其日々々の課業として之を綴るのであつたから、隨つてこんな間違ひも起つたのであるが、それが後には分業的に小說記者は自宅に在つて專心小說の筆を把り其の原稿を畫家に廻して畫家の思ふ通りの下繪を描かせるやうになつたので、新聞

の小說も追々發達するに至つたのである。此の續き物記者の狀態に就て私が三十年前、一友人に答へた筆記の控が筐底に殘つて居たゆゑ、其の一節を左に揭げる事とした。

　現今の新聞小說受持記者は自宅に在つて其の原稿を草し、之を郵便に付して本社へ送りさへすれば一日の課業は濟むものなれど、その以前（明治十二三年頃）の續き物受持記者はなか〳〵さう優長なるものにはあらで隨分眼の廻る程忙しきものに候ひき、先づ午前十時頃出社して其日の續き物一回を草すれば、既に十一時過となり、府下及地方の重立ちたる新聞に目を透して拔萃すべきものには符合を付け、寄書通信の類を調べ晝辨當を濟ませし時分（午後二時頃）そろ〳〵探訪者は歸り來り、夫れ〴〵探り得たる事件を筆記して机上に差出すを、一々點檢して他の記者に分配し、自分も其内の四五件を書き了れば早や時刻は五時六時と迫り印刷方より原稿の〆切りを促され、漸く筆を止むれば今度は自分の書きたる原稿が廻つて來る故之を校正し、小短册やうのものに記事の標題と行數を記したる小紙片を並べて大組の順序付けを爲し、時には大組の刷り終る迄居殘る事もありて、家に歸るのは大概夜の九時過ぎ十時と相成候、此間に自分が受持の挿畫の下繪をつけて二三回づゝ前に畫家の方へ持たせ遣らねばならず、材料の仕込みとして讀書もせねばな

らず、又出社中あちらの開業こちらの祝宴と三日にあげず招かれる事もあり、芝居其他の興行物もその景況や評判を紙上に掲げる必要上一々見物せねばならず、他より見れば氣樂な家業と羨まるれど其身になつて見る時は中々骨の折れる職掌に御座候。

今一つ當時續き物の狙ひ處としたのは、毎回必ず一つの見せ場――芝居で云ふヤマ――が無くてはならぬ事であつた。同じ人物が同じ場所で對話して居る事で三四回も續けると云ふが如きは、縱令その談話中に波瀾があるにもせよ、挿畫の目先が變らず讀者の厭飽を來すものとして之を避ける風があつた。要するに一回中に讀者を惹付けるだけの趣向を設け、其話の漸く佳境に入らんとする處で、馬琴の次回に解分くるを聽きねかしの筆法で、跡の續きを樂しませる事に注意を拂つて居た。其邊はすべて昔の草雙紙式であつたが、唯幾分か新しい文明の匂ひを含ませるといふのが、其頃一般の傾向で、散髪もの〻小說もそろ〳〵起るやうになつて來た。而して其の脚色に至つては作者の思ひ〳〵で、幕末志士の傳說、舊華族のお家騷動、孝子節婦の話、俠客義賊の物語、其他主に維新前後の事件を綴つたものが多かつたが、既に大家と呼ばれた一流の主筆の書たいものには世間に自から定評があるから別として、第二流の小說記者の作つた續き物が其社の呼び物となり、夫が爲に

發行紙數の增す事ともなれば、これが則ち卒業證書を受けたのも同樣の手柄で、若し幸ひに其作が脚本となつて舞臺に演ぜらるゝ事にもなれば、それこそ大々的成功で隨つて記者其人の增俸となるのである。

これらの小說記者の生活狀態、社會に對する勢力又は其の逸話などを語るのも面白からうが、それは個人々々によつて異なる所があるから、其の代表者として魯文藍泉の二氏を舉げて私の知つて居る限りを述べて見よう。

（四）小說記者の生活狀態

假名垣魯文翁は、明治七年始めて橫濱每日新聞の雜報記者となり、翌年橫濱にて創刊の假名讀新聞の主筆となり、數ケ月後本社を東京に移したのであるが、其の資本主は東京麴町の書肆磯部屋の主人外兩三名であつたやうに記憶する。又題號を『假名讀』としたのは、其頃既に發行されて居る平假名繪入と讀賣新聞の頭字を併用したのである。私が岡丈紀（河原氏）の紹介で魯文翁の門に入つたのは明治九年即ち翁が假名讀新聞社に筆を執つて居る頃で、夫れから同十一年の末私は見習記

者として同社に入り、始めて師と共に机を並べ、後十五年にはいろは新聞に入り、十七年には翁と共に今日新聞の創業からその編輯に從事したので、つまり師翁と共に同じ新聞社で執筆したのは前後三回であつた。そこで私の口から恩師の學殖等に就ては發言し得る限りではないが、性質は淡白で、その門人を育てる事などは中々懇切であつた。唯一つ翁の性癖とでも云ふべきは餘り感情に走り過ぎる時には前後の見さかひもなく興奮する事であつた。是は翁自身も承知して居ると見えて、或る時私に左の如く話された事があつた。

・余（魯文）は戲號の下に善惡の印（徑五分ばかりの丸印で右半は善の白文左半は惡の朱文）を捺し來つたが之は善玉惡玉を合して我が性質を表したものである。元來余は感情に脆く怒り易くもあり又悲しみ易くもある。例へば人が不幸にして落魄するを見る時は自分の貧苦を嘗め來つたのに思ひ較べて及ぶ限り救助する事もあるが、若し其人が他日恩誼を忘れて反抗する事でもあれば、曩の好意に反して飽までも其人を膺懲せねば止まぬのである。要するに余は愛憎とも極端に走り易く、忽ち善となり忽ち惡となること掌を反すが如し、是れが則ち此の印章を用ふる所以である云々。

此の性癖も段々に年を取るに從つて薄らぎ、明治廿三年に文壇を退いて氣樂に浮世を送るやうになつてからは、全くの好々爺として一層人から慕はれるやうになつた。猶一つ翁の爲めに辯じて置たいのは、假名讀やいろは紙上に往々個人攻擊の記事あるを見て、一も二もなく魯文翁の筆に成るものとして翁を呼ぶに惡德記者を以てする人もあつたが、是れも前に述べた性質から一旦惡いと思ひ込めば其人を紙上で追窮し攻擊する事もあつたけれど、黃白の爲めに筆を左右する事は稀であつて、却て其の社中の門人輩（あらはに名を揭げるのは憚るが）が最初から收賄の目的を以て筆を弄し、翁が寃罪を被つた事も少ない。現に門人某の收賄が曝露して毆打された事もあり、他の一人は公けの制裁を受けその新聞社から放逐せられた事實もある。

翁は數十年戲作に從事して居たもの丶、草雙紙風の作はその長所ではなく世評も喧しくはなかつたが、その代り『安愚樂鍋』や『胡瓜圖解』の如き滑稽ものは當時の第一人者で、殊に新聞の記事では短文の雜報に妙を得て、かの假名讀の『猫々奇聞』いろはの『猫晒落誌』等が知識階級の間にも愛讀されたのも是れが爲めで、一口に評すれば翁は馬琴種彥流ではなくて三馬一九式の人であつた。翁最後の門人と云はる丶故齋藤綠雨氏も『日用帳』に左の通り記して居る。

机にむかひて翁の思ひを凝らしたりと見ゆる時、出で來んは必ず惡文なり。翁は所謂卽興に得たる人なりき、長き物語などに求めんには只だ達者と云ふに過ぎざりしも、十行二十行許りなる短き雜報には、實に企及すべからざる妙ありたり。殆ど一萬に達したりといふなる引札と共に、もと新聞紙の事なれば裂けて破れて、遷り行く世の風に散り〳〵、誰の手にも遺らぬは惜しからずや。

翁の嗜好としては取立てゝいふ程のものもないが、酒は深く嗜まず甘い物も多くは食せず、唯食道樂として濃厚な鰻、天麩羅、もゝんぢい屋の猪肉等が最も好物であつた。觀る物では芝居、聽く物では常磐津や淸元の淨瑠璃で、自身でも若い時には常磐津の稽古所へ通つた事もあつたと聞いて居る。芝居の事には最も明るく殊に河竹默阿彌とは舊友の關係上互に作物の上で援助し合つた事もあり、自分でも二三の脚本を作り（明治五六年頃橫濱の某劇場で上場せられた事があつた）俳優の相談相手にもなつた位で、當時に於ける劇通の一人であつた。藏書も一時は澤山あつたが讀書に耽つて居るのは稀で、晩年には自ら玩佛居士と號して古佛像や佛具を蒐集して樂んで居たが、之が爲めに骨董品に對する鑑識にも長ずるやうになつた。餘技としては俳句が第一で、之は初めは涼窓露

蔦に就て學び中ごろ香以山人に教へられた事もあり、後には老鼠堂永機と交はり江戸座かぶれのした句を吐く事もあつた。狂歌は三世千種庵諸持の門に入り斜月窓諸兄と號して居たが、諸持の主唱する文政調よりは可笑し味のある卽興的のものが得意であつた。又端唄の新作や都々逸なども作り、晩年には都々逸の選者となり其の選料を小遣取りにして居た事もあつた。

日常の生活振りを說くには先づ月々の收入高から調べてかゝらねばならぬから、私の覺えて居るだけを記す事とするが、最初魯文翁が假名讀に入つた時の俸給が四十圓、明治十三年いろはへ轉じた時が五十圓、同十七年今日新聞に入つた時が七十五圓であつた。こんな月收は其の金高から云へば今の腰辨にも劣つて居るが、明治十年頃の四十圓は中流の生活費としては裕かなもので、其他に序跋や引札の文を書くとか、他人の著書を校閱するとか、又は自身で內職的の著述をする事もあるから是等の潤筆料を合算すれば平均して月俸の倍額となつたのである。明治六年に福地櫻痴居士が東京日々新聞の社長となつた時、その俸給が百圓だと聞いて驚異の眼を光らせた人もあつた程だから、當時の物價に比して月收八十圓內外は厚い報酬だと云はねばならぬ。第二流小說家の俸給や畫家の畫料等に就ては後に述る事とするが、兎も角是だけの月收があれば生活費から交際費には不足

もなく、日に三度の常食もどちらかと云へば奢つた方であつた。それから何か臨時に金が欲しい事があれば書畫會を催して懐を暖めるのが文人社會の慣用手段で、私の聞いた丈けでも翁が書畫會風のものを催したのは前後六七回、其内明治二年山々亭有人(條野傳平氏)と組んで、淺草寺境内にある山東京傳の机塚修理を名として催さうとした一會のみは、惡摺などで攻撃せられる抔散々の不評で、終に中止となつたが、其他は大概收入金を剩し得たとの事である。此の机塚の時に配つた引札の文は左の通りであつた。

> 淺草寺の境内なる舊の人丸堂の片ほとりに碑あり机塚といふ、いにしへ山東京傳がいろは文字の初學びに靠かりし小机を終身用ひもて古して、其身と共に老朽ちたれば、最愛しき物に思ひて瘞めて塚を建てんと思ひ起せしかど果さず、歿後弟京山伯が志を嗣て建る所なりけるよし、碑陰に南畝か文章あり懐素が筆塚に倣へるなるべし、文化十四年の事にして、今を距る事五十有三年の星霜を經てければ、既に苔蒸しうち倒れて近頃半ば土中に埋みぬ、這まゝにして起しも建てずば終に遺跡の絶えん事を惜みて、同病は相憐む有人と魯文の兩子、志を合し營みて再建しつる縡の由を同志の人々に知らせんとて、一日雅筵を敷設けり、僕も亦そのかみの同じ品の痩蕪、

この道はしもしるの實になるべき縁あるべしとて、件のよしを書つけてよと、乞はるゝも又淺草寺の淺からぬ因みにこそと、點頭つゝそゞろ言を筆にまかせて舌に換るのみ。　萩原乙彦識

就中私の知つて居る處では明治十一年七月、翁が東兩國の中村樓で珍猫百覽會といふのを催した時には、來會者實に二千人、收納金二千四五百圓に及び、翁は之から剩し得た金で新富町の新富座の南手に佛骨庵といふ草庵を新築した事もあつた。亡友久保田彦作氏が此會の景況を記した一文があるから玆に轉載する。

本日（七月廿一日）會場中村樓の門口には、紙招牌へ珍猫百覽會云々と筆太に記載して縱覽の目標とし、右の方芝山に在來の樹木をかたどり、彼の猫塚の石猫を据付けたるは、後日淺草公園花屋敷植六の庭中に建つると（編者曰、この猫塚は今谷中天王寺墓地に在り）本日の開筵を併せたる目途にして、正面の玄關軒先の額面は、新小判を以て造りたる珍猫百覽會の五大字、額縁は緋鹿の子の首玉に眞鍮の鈴を裝飾す、打違への旗は白地へ赤色にて會主が猫面の遊印を染出し、數十の紅燈を掲げ、樓上には會主縱覽の賓客を迎へ、廣間の上座は清樂合奏者の一席とす、此前に卓を置き大花瓶には秋草を挿み香爐の香は馥郁として席中に薫ず、百覽會陳列場の一區は南の

廊下を隔てたる座敷數室にして、入口より數間の間左右に配列す、猫塚の碑銘は假に表装して同廣間の床に掲げ、會場縱覽の前後は此碑銘を第一部分とし、順次に東の方の壁を隔てたる一席を第二部分とし、爰には本日開筵の爲めに當日有名の諸文人より寄贈せられたる書畫の幅を掲ぐ、是より第三部分の入口に沿ひ右の方を書畫幅とし左の方を器物の陳列場とし、第四第五と分ち而して出口の歸路に就かしむ、列品殆ど六百餘種、出口の上に花簪の扁額を掲げ之を縱覽の婦女子に呈して餘興とす、午前八時三十分場中の陳列全く整ひ同九時より開場し午後八時閉場と定む。

本會の周旋補助は新聞各社を始め萩原乙彦、大蘇芳年、立齋廣重、武田谷齋、松林伯圓、三遊亭圓朝、武藏屋猫七の諸氏にして、清樂合奏者は鶴原堂鳥屋氏の周旋にて、音律整々たる合奏に衆客の心耳を澄まさしむ。詩文人の揮毫するや衆客擧つて唐紙扇面に其の筆跡を乞ふ、又清樂の洋洋たる間彼の開化講談松林伯圓、席の中央に進み恭しく祝詞を朗讀す、之につゞいて演説家の隊長堀龍太先生進んで猫々論を演説せり、喝采の聲は拍手と共に滿場に響き渡れり、會主の舊知已たる梅素玄魚、河竹其水、瀬川如皐の三翁は、共に會主の後見となりて此會の隆盛を補はれ、六二連には砂筵、高筵、染谷竺仙の諸氏、勝川春亭、五姓田芳松、寫眞家は二見朝隈、北庭筑波、

塙芳野、濱町の和田氏等二十八名、且新聞投書家には爲永春江、若菜貞爾、野崎左文、八木梅桂、結城光昭、風也坊、花廼舍由縁、松崎德造、花川戸岩床、膝小僧、鍬の屋一農、賞楠堂鶴甫、伊藤文二郎、西村賢八郎、中坂まとき、道隨賤生、芙蓉堂の諸先生にして孰れも祝文の玉章を贈られたり。新富座の俳優連には尾上菊五郎、市川小團次其他門弟二三名を引連れ、當日打出し後より縱覽に來られたり。此日最も遺憾なりしは午後九時頃、大傳馬船に數人の樂人孰れも烏帽子素袍にて、舳に猫塚供養と記したる紅燈を揭げ、棧橋に漕寄するとき、三絃鼓の調を正して、供養塚といふ新曲を奏す、此催し主は新富座狂言作者竹柴進三にして、彼の樂人は同座の囃子方の連中なりしが、時已に閉場後にして會員の外聞く者無かりしは惜むべし。

此の書畫會といふものは維新前までは——維新後も折々——盛んに文人社會で行はれたものであるが、現今の畫會とは稍や趣きが異なつて居るから、其の概略を云へば斯うである。先づ會主は會日會場、それに補助とか後見とかいふ名で書畫大家の名前を列記した摺物を製し、之に自筆の扇面などを添へ、自身又は門人等と手分けをして知己の人々に配り、當日の來會を請ふのである。而して之を受けた以上は當日出席せぬ人でも、返禮として金一分（廿五錢）を贈るのが慣例で、當日出

席する人は金二分（五十錢）以上の日錄を持參して會主に贈る事となつて居た、そこで二分の客には會主から辨當を出すだけであるが、二分以上の上客には別に膳札を配り之と引換へに刺身吸物に酒一本を添へたのを呈するのである、その來客も亦並んで箸を取る時唯だ辨當だけでは幅が利かぬといふ虛榮心から、二分以上を奮發する人が多いので、隨つて會主には割のよい收入となるのである、のみならず此會を祝する爲めに淸酒一駄などと書いた繪ビラと共に現金を贈つて來る顧客もあり、席上で揮毫する書家畫家も會主との交際上、多くは義務的に筆を執るものゆゑ、旨く當れば支出少くして收入多く、名を弘めると共に懷を肥やすといふ一擧兩得の策だから、之が流行したのも自然の勢ひで、其頃の扇面亭や扇明亭はこの書畫會の周旋が殆ど本業となつて居たのである。まして魯文翁は扇子を配つた事もなく戶別訪問をしたのでもなく、自家の假名讀や魯文珍報の紙上で吹聽したばかりで、此の盛會を見るに至つたのは、全く新聞廣告の利き目であるが、又一つには翁の名が弘まつて居たので、魯文とはどんな人物か之に接近して見たいといふ好奇心から、遠い地方より遙々上京出席した人も尠くなかつた。

新聞紙の社會に對する勢力……夫れは無論今ほど强大なものではなかつたにもせよ……も亦侮り

難いもので、社會から相當の信用を受けて居たから、隨つて記者其人も應分の待遇を蒙つて居た。最も一部の人からはナニ新聞屋がと屋の字を附けて、稍や輕侮の意味で冷遇された者もあつたが、それは新聞記者――殊に小新聞記者――中に道德上の教育を受けたのが少く、其の人格に乏しい人があつた爲めで、決して一體がさうであつたのではい。魯文翁の如きは新聞記者といふ地位を得てから、貴顯紳士からも愛せられ學者文人とも交遊して、自然と其の感化を受け性質も一變して、交際場裡にも中流以上の位置を占めて居たが、特に花柳社會に對する勢力？は偉大なもので眞に草鞋大王とも謂ふべく、新柳二橋の間で其名を呼ばずして單に先生で通つて居たのは柳北魯文の二氏のみであつた。

今度は高畠藍泉氏の事に移るが、氏は元幕府のお坊主で初名瓶三郎、高橋波藍に就て畫を學び、その緣故で藍泉と號したのだが、後に此號を以て通稱としたのである。初めは轉々堂主人の名を以て草雙紙類數種を作られたが、どういふ學歷があり又どうした動機で操觚者となつたのか私には其邊は不明である。唯だ聞くところでは若い時から稗史小說を好み、殊に初代種彥には私淑する所があつたと見えて田舍源氏は素より原本の源氏物語を耽讀し、又初代種彥の考證癖に倣うて古い事を詮索

研究することを好み、別して元祿時代の世態風俗等に精通して居たとの事である。明治七年頃東京日々新聞に入り、同社投資者の一人落合芳幾氏が別に平假名繪入新聞を興すに當つて、その創業の事に與り同新聞の主筆として編輯を主宰して居たが、同社を退いた後は一時讀賣新聞の印刷長として署名し、又十五年一月に柳亭種彦の號を襲ぎ、幾程もなく大阪の大東日報へ今の社會部長格で招聘せられて同地に赴いたが、此時の俸給が八十圓であつたと云ふ。私の見た處では、藍泉氏は痩ぎすな苦味走つた容貌で、性質は神經質の勝つた人らしく負けず嫌ひな剛慢なところもあつて、晩年淺草千束村に閑居の頃は、脊髓病に罹り仰臥しながら小說の原稿を書いて居たのは、生活上の爲めとは言ひながら其の我慢強い氣質が窺はれる。氏の小傳は別に載せる事とするが、記者生活を營んだ間は魯文同樣稍や豐な俸給を得、別に明治式合卷ともいふべき小說を盛んに書いて賣出させた人であるから、夫れ等から得る潤筆料を併せて優に百圓以上の月收は有つたのであらう。

當時の新聞小說記者をさして、一概に戲作者だと侮蔑の意を以て迎へる人もあるが、如何にも戲作者育ちの人が多かつたには相違ない。併し新聞記者となつてからは自身もその職責の輕からぬことを認識して時勢の推移といふ事には最も注意を拂つて居た。故に其の構想は京傳馬琴等が趣向の

上に出でず、其の筆致は種彦春水の模倣に過ぎなかつたかも知れぬが、新しい材料を捉へ新しい思想を以て讀者を善導しようといふのは一般の傾向で、單に勸善懲惡や佛家の因果應報ばかりを作物の目的としたのでは無かつた。けれども小說家にその人が乏しかつたのみではなく、當時の讀者も亦甚だ幼稚なものであつた。それは維新革命の騷ぎの爲めにあらゆる藝術は破壞せられて未だ全く復舊せぬ時であるから、人心荒び果てゝ小說を味はふほどの餘裕もなく、寧ろそれを玩味する程の素質ある讀者が少かつたのである。淺薄なる滑稽もの鄙稽なる人情本さては殺伐なる講談風の讀み本等が歡迎せられたのが第一の證據で、大多數の讀者は之を以て疲れた心を慰め是れ以上を感受する能力に乏しかつたかも知れぬ。現に其頃の一例として、新聞小說中の繼兒が繼母に虐待される處を讀んで、あまり可哀さうだから之を惠んで下さいと、若干金を其の本社へ持參した人もあつたなど、まるで噓のやうな事實もあつたから、こんな時代に臨んで假令一大文豪が出顯して汗水を流した處で、それは全く緣の下の力持に終つたかも知れぬ。兎に角當時の小說は讀者の程度に準じたもの、卽ち國民文藝思想の反映であつたのではあるまいか。されば當時の記者が戲作者育ちであらうとも、殆ど絕滅せんとする小說の命脈を繫ぎ止めて、今日あるを致さしめた功績は認めてやるのが

至當であるのに、昔の新聞小説に對しては戯作呼はりをする人が、現代の新聞に顯はるゝ非文藝的講談ものには何等の批評を下した事さへ聞かぬのは、不可思議千萬と云はねばならぬ。

（五）　新聞小説家の流派

新聞小説家の先輩としては先づ指を魯文、種彦、春水の三氏に折らねばならぬ。隨つて其の門下生から成立つた第二流の小説記者が多く——三氏に關係のない一本立の人々も數名あつたが——自然その仲間が假名垣派、柳亭派、爲永派の三つに分れる傾きがあつた。假名垣の門人としては、二世花笠文京（渡邊義方）彩霞園柳香（雜賀後廣岡豐太郎）胡蝶園わかな（若菜貞爾）蘭省亭花時（三浦義方）二世一筆庵可候（富田一郎）蟹垣左文（卽ち筆者の私）江東みどり（齋藤賢）等で、門人ではなかつたが此派に屬する人々には

岡丈紀（河原英吉）　伊東專三（橋塘）　久保田彦作（竹柴幸次）　清水米洲（市次郎）

柳亭派に屬するのは、

文亭梅彦（四方新次郎、狂言作者名竹柴瓢助）　二世柳下亭種員（有山新兵衛）　柳水亭種清（櫻

澤堂山）　柳淵亭藍江（倉田某）　柳條亭華彦（三品長三郎）　柳葉亭繁彦（中村邦彦）　柳塢亭寅彦（右田寅彦）　柳崖亭友彦（片山友三郎）　此花新二（田村某）

の諸氏で、又爲永派には、

狂文亭春江（知久泥堂？）　爲永榮次（本姓不明）　古川魁蕾子（精一）

其他爲永と名乘る作家が二三人あつた。此外既に一家を成して居た人で折々新聞へも寄稿した小說家には山々亭有人（後東籬園探菊、條野傳平）萬亭應賀（服部幸三郎）梅亭金鵞（瓜生政和）對梅宇乙彦（森悟一郎後萩原氏）二世笠亭仙果（篠田久次郎）等で、別に元報知新聞の記者であつた芳川春濤（俊雄）氏も明治十二年頃さきがけ新聞の主筆となり、岡本起泉（勘造）といふ人と共に新聞の小說も書き、草雙紙體の單行本をも著した事がある。

そこで私共を標準とする其頃の小說記者が、新聞社から受ける俸給がどの位であつたかと云ふに、概して十二三圓から最高二十四五圓までの間であつた。私が始めて假名讀へ入つた時の俸給が十五圓……是れが格外の高給だとあつて社中の人々から苦情が出て師翁も之には困つたさうだが、其頃私は工部八等技手（月俸二十圓）で品川の工作局（硝子製造所）に勤めて居たのを、その職を

辭して入社したのであるから、師翁も技倆の點は兎も角前給に對して是だけは給與せねば氣の毒だと辯解して、やつと他の社員を宥めたと、ずつと後になつて聞いた事がある。丁年に達したか達せぬかの一青年で、而かも文筆には何等の實驗もない私が此の高給?を貪つたかと思へば忸怩たらざるを得ない次第で、今更ながら師翁の好意を謝さねばならぬ。尤もその時分はまだ紙上へ續き物は載せなかつたが、二三年後に小說が流行り出した時雜報以外に之を綴り得る內勤記者の給料が先づ二十圓見當であつた。今から思へば夫れでよく命が繫がれたと思ふ程の薄給であるが、前にも言つた通り其頃は白米が一圓に一斗四五升といふ物價の安い時代である。借家でも五六圓出せば玄關付の立派な家が借りられるし、寄宿生活で炭油を籠めて月五圓といふのは奢り過ぎる程の下宿料であつた。殊に極つた月給以外他人の代作とか地方新聞の續き物を書くとか、又は一旦新聞に出た自作の小說を二度の勤めの單行本として書肆へ賣込むとか（此事に就ては猶後に記す）働けば働くだけの臨時收入があるから、小家族ならば優に一家の生計を支へる事が出來たのだ。

假名垣、柳亭、爲永の三派に別れたと云つても、それは唯流派で區別された迄で、現代の政黨のやうに三派が睨み合つて軋轢を生じるやうな事はなく、個人同士では親しい交際が結ばれてゐた。

殊に私は此の仲間中での年少者であつたから、一年でも多く經驗ある先輩の所見を聞くべく、務めて是等の人々を歷訪し、折には一緒に遊び廻つた事もあつた。又是は流派の爭ひではないが、此の記者連の間に暗々裡に行はれたのは作文上の競爭で、例へば出所を一にする材料——各社の探訪者が一の警視廳から聞出し之を各自の本社へ報ずるもの丶類——則ち現今の通信社から配つて來るやうな種子は、其元が同一だから之を紙上に掲げるには各社同文に陷るのを避ける爲め、其文の潤色には竊に骨を折つたもので、翌朝の新聞に出たその記事を見て、甲社のは誰の筆乙社のは誰の書いたのだらうと想像して之を批評する事もあり、小新聞ではないが其頃塚原靖氏（後の澁柿園）の書いた日々新聞の雜報などは殊に評判に上つて居た。つまり一般讀者に見せようとするよりは、少數の同業者に評せられんが爲めに筆を取つたやうな風であつた。

續き物にしても現代のやうに批評家があつて之を評した譯ではないが、門人の書いたものには其師は紙上へ出たのを見ていろ〳〵注意を與へ（魯文翁は門人の書いた小說を原稿の時に校閱するのは稀で、少しも干涉する事はなかつた）又同じ仲間同士で評し合つた事もあつた。その小說なるものは旣に言つた通りすべて草雙紙體の七五調で、外題も五字七字題が多く、一回は二十二三字詰め

五十行足らずの短いものが普通であつた。それから明治十二三年頃より一旦新聞に出た小說を再び單行本として賣出す事が流行し、盛んに之を發行した書肆は辻文、辻亀、鶴聲堂、滑稽堂及び春陽堂の前主人が櫻田本鄉町に開店した頃であつた。それは小說が完結すると其の筆者は一旦用ひた挿畫の古版木を社から貰ひ受け、その木版と共に新聞切拔きの原稿を賣るのであつて、書肆は之へ色摺の表紙、見通しの口繪を加へ、序文だけを木版に彫らせ、本文は活字にして之へ處々古版木の畫を挿み二册以上のものは袋入にして賣出すといふ順序であつた。此の體裁の小說本は四五年間は繼續し之を明治式合卷と稱へる人もあるやうだが、是れが後には石版畫ボール表紙の西洋綴となり、三變四變して博文館や春陽堂から出版する菊判やまと綴の小說本となつたのである。それでその頃の原稿料が古版木と共に四十回ぐらゐのもので十五六圓、長いもので二十圓乃至二十五圓で、繪入自由の渡邊文京氏の如きは新聞へ續き物を書出す始めから、版木ぐるみ原稿の二度賣をする目的でその挿畫の寸法をキチンと四六版一ぱいに嵌るやうに書かせるといふやうな利口な手段を取つて居た。それから是等の記者は地方新聞の續き物を引受けるといふのも亦內職の一つで、その原稿料は一回三十錢から五十錢、それに地方には畫工もなく彫刻師にも乏しいから自社の畫家に描かせ之を

彫刻した版木を添へて送るのが例で、その畫料が二十五錢乃至四十錢、木版の彫刻料が十二坪（一平方寸を一坪として）ぐらゐに人物二三人立ちのものが六十錢であつた（畫料と彫刻料とは歌川國松氏の談に據る）

（六）投書家の勢援

小新聞の創まつた頃今一つ忘れてはならぬのは投書家の勢援である。これは多少文章詩歌の心得ある者が散文體のもの、隨筆樣のもの、降つては端唄都々逸の類を作つて其社へ寄稿すると及第したものが寄書欄内へ掲げられる。そして段々此の投書で名を賣つた人は各社から優待せられ、どうか我社へも御寄稿を願ひますと賴まれるやうになり、その新聞も亦この投書を以て讀者を歡ばせる呼び物の一つに數へて居た。曾て私の交つた此の投書家連の名を思ひ出す儘に記して見れば、

中坂まとき（中川眞節）　高島屋塘雨（野田千秋）　南新二（谷村要助）　爲永春江（知久泥堂？）

前島和橋（九世川柳）　廣島風也坊（七世川柳）　山田籟生（孝之助別號風外）　幸堂得知（鈴木利平）　胡蝶園わかな（若菜貞爾）　假名井安全（神田材木屋の隱居名を忘る）　三世琴通舍

（杉山幸次郎）　秋琴亭緒依（津久井吉左衛門）　會田皆眞（瀧次郎）　浮川福平（失名）　鍬廼屋一農（中村一能）　會津屋杏村（黒部利兵衛）　永倉雪湖（勝清）　山下晴雨（芝居茶屋大和主人）　多湖只樂（横濱の人名を忘る）　賛々亭湖山（中澤三吉）　文廼屋（村松秀茂）　花川戸岩床（淺草理髪店主人）　春園梅桂（八木某）　膝小僧（磯谷某）　（玉林舍梅雅（失名）　雪廼家豐（海老原喜平）　呉陽舍桃州（關根某）　仲之町小せん（芳原藝妓）　等、等、等、で——私も初めはこの投書家の一人——後にこの投書家から新聞記者となつた人に塘雨、新一、和橋、得知、わかな、風外等の諸氏がある。私が明治十一年六月に此内の重立つた人々を訪ひ、蟹に關する作文詩歌を請ひ、それを蒐めて『蟹文集』と題する小册子を出版配布した事がある。それがたつた一册手許に殘つて居るから、其内の二三章を採録して當時の文體の一斑を示す事とする。

○　　　　中坂まとき

畢卓いへる事あり、右手持レ杯左手持ニ蟹螯一拍ニ浮酒船中一便足レ了ニ一世一矣と、旨い哉言や味い哉蟹や、我輩又汝を嗜むこと久し、門外蟹を呼ぶの聲を聞けば足に履を穿つの暇なく、直に飛一飛走一走して之を途上に要し、三々五々其數を盡して之を購ひ　晩酌の下物となすに又苟くも之を

喰はず、甲には酒を盛りて三杯を傾け、劍には楊枝を用ひて寸肉を餘さず、骨は清くして猶春靄を含むに似たり、沫は白くして還て疑ふ海霜を帶るかと、陸龜蒙が海蟹の七律を詠じ、日休が詠蟹の絕句を吟ず、杯はます／＼加はりて興はいよ／＼多し、蓋し皆是れ汝が美味の助くる所焉んぞ之を千賞し之を萬翫せざる可けんや、然るに我輩熟々汝の形容を見るに、身には堅牢の甲冑と一雙の利劍を擁し、一目下に人をして戰慄せしむる耳ならず、海龍王處も亦横行すと、豪邁の氣眞に驚くに堪へたり。然るに汝の腹内には肝要なる腸無しと世人呼んで無腸蟲と云ふ。噫汝は斯の如く其外貌を嚴肅にすれども、其内部に立入れば拙劣なること何ぞ甚だしき實に愧づ可きに非ずや。去れども江湖又汝に似たる者無きに非ず、其髯を八字にし、其衣裳を洋服にし、胸間に金時計を燦然たらしめ、足下には護謨靴をギチ／＼たらしむ、相貌は堂々として威風凜々、宛も賢明然たるは一見して文明開化の隊長たるを知るに足れり、されども其腹内に立入れば、一毫の廉恥心も無く半點の品行をも知らず、只利是れ貪るの甚だ驚くべき野卑狡猾の人物日今最も多しとす。却て汝が如き美味に匹敵すべき一能あるを見出さざる也。於レ茲我輩は云ふ、外貌の至嚴至肅にして腹内の拙劣なる者は豈特り汝のみを咎めんや。併し諸君は以蟹々々。

○　南新二

或る人の歌に「世の中は上に目がつく横に行く蘆間の蟹のあはれはかなき」此蟲や人の目より見れば横に行くやうなれども、足のつがひ横さまに付たれば蟹の心より考ふれば竪に行くと同じ事なる可し。若し向うさまに歩む時は足と足とからみ合ひて、恰も千手觀音が藤八拳を打ち給ふ如くならん。物各々其性を天より受け得たるなれば性騷がしき人は縫箔屋とすべからず、力弱き者は米搗にすべからず、其天授を克く守り身を全うするの工夫を爲す可し、是れ則ち身の程を知るなり、忘れても鉛を銀とし便器を米櫃とする事なかれ。チヤ蟹はそつち退けで理窟が横の方へ往つて仕舞つた。

○　狂文亭春江

抑々蟹の愛たきことゝ先づ書出して見た處が、老松の替唄には後段の文句に差支へ、何かにも淺學の机上には俄かに云ふべき事もなく、慷かに釘なる愚かには世話しい餘かに竊かに考へ、漸く僅かに執る筆も靜かに書いては埒が明かず、看官方には限かに笑はれ苦しい中かに淺はかにも、成る丈け豐かに賑やかに、猶更細かに和らかに他かに目先の替つた趣向と三つかに成稿る料簡も

坂かに車の跡尽り、十かに成つてもまだ脱ぬ和かに狂かに混合ても、偖穏かに草成兼るは古稀の老耄か我ながら、馬かに藥のないのに困り何處かに在るか尋ねてや見ん。

此の三氏は當時投書家の雄であつた。まとき、春江二氏の事はあとで書く事として、南新二氏は通稱谷村要助、號を布川と云ひ元は幕府のお坊主で、茶の湯の事に精通し、又俳道をも學び、殊に滑稽の文に長じ黄表紙風の著作もあり、狂文の狙ひ處は手柄岡持の筆致であつたらしく思はれる。戲號を南新二と呼んだのは南新堀二丁目に住つて居た故で、かの倉橋壽平が小石川春日町に住んで居た處から戀川春町と名乘つた故智に倣つたので、其他一時の變名で投書された事もあるが、後てはやまと新聞の記者となつて輕妙の筆を振はれて居た事は猶記憶に新なるものがあり、死去されたのは明治廿八年十二月廿九日で、享年六十一、寺は本所法恩寺地中法泉寺である。

さて是等の人々は紙上の交際が始まりで、後には互に往來して懇意になり　三々五々相集つて所謂文を以て友を會する催しが開かれた事もあり――築地の某處で八犬傳の輪講があつたのも其頃の事――又新聞社でも年一二度の祝宴には必ず重立つた投書家を招待して饗應したものだ。私が十二年の夏山田風外氏と共に發起人となつて、木挽町の眞陽亭（後の萬安）に投書家親睦會（會費三

十錢にて茶菓辨當を呈し入浴隨意）を開いた時は來會者六十餘名、席上書畫の揮毫や狂歌川柳の卽吟等もあつたが、其時從兄の馬場辰猪氏は今の子爵金子堅太郎氏同伴で出席し、辰猪氏は英佛に於ける小說の沿革、「ローマンス」と「ノヴエル」との組織に就て演說して呉られた事もある。又同十四年以後伊東橋塘氏が朋友皆懇會といふのを三四回催し之も每回盛會であつた。要するに當時は投書家連といふ一かたまりの團體が出來たやうなもので、是れが小新聞の後援ともなり又各自文筆の鍛錬にも心掛けて居た。併し其の硏究は專ら軟文學に屬し（まとき氏の如き漢學出は別として）硬い方では明月團欒として梢に懸りだの、美人を形容するに黃絹たる幼婦抔とやつて退ける人もあつたが、こんな誤りは餘り深くは咎められず、其代り御簾內の加藤節だの、吉原のかご町だのと誤る時は夫れこそ連中の物笑ひとなり、投書家たる資格にも疵の附く程であつた。

茲に掲げた寫眞は明治十一年に山田風外氏が開新社から發行して居た『風雅新聞』一月の初刷記念に添付した寄書家諸氏の小影で、その當時新聞雜誌に寫眞を貼付して賣出すといふのは最初の試みであつたから　各賣捌店（其頃は重に繪草紙屋）へ配つた同新聞は之を珍らしがつて一日の內に賣切れになつたと風外氏は語られた。サテ此の肖像に就て逐一其人を紹介すれば、

中心の五客は縦に上より、

成島柳北氏　號濹上漁史、朝野新聞社長にして傍ら花月新誌の主筆たり、曾て柳橋新誌、京猫一斑の戯著あり明治十七年十一月歿、享年四十八。

松の門三草子女史　女流歌人、井上文雄門人もと藝名を小三と名乗り左褄を取つた人で、私の見た頃は薄化粧に紫の被布を着た華美な姿であつた。後辻川長之助氏に嫁し大正三年八月廿三日八十三歳で歿した。

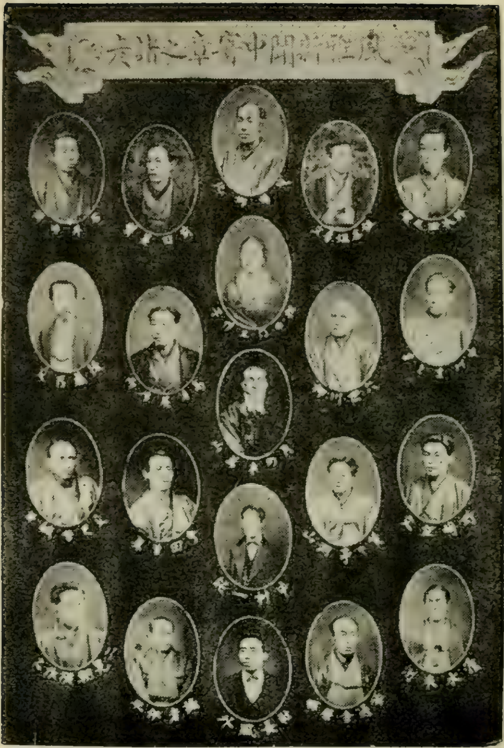
月の本爲山氏　姓關氏梅室門人始め梅の本と號し後月の本を襲ぐ、正風の宗匠として名聲高かつた、歿したのは此の撮影後間もない明治十一年一月十九日で享年七十六であつた。

中村一能氏　鍬廼屋一農と號す、小新聞投書家中の錚々たる者、當時は警視廳に勤めて居たが、數年前郷里岐阜縣長島町に退隱し、本年八十六歳の高齢で健在、號を猫翁と改め謠曲と狂歌を樂しみ靜に老を養うて居る。（追記、氏は本年一月廿六日病死されたとの訃音に接した）

山田風外氏　通稱幸之助別號籟生、風雅新聞（後風雅新誌と改む）鳳鳴新誌の社主、明治十五年に繪入朝野新聞を創刊し後地方の新聞を轉々して横濱に歸り『精華』といふ雜誌を發行して居た

が、大正十二年九月一日の大震災で慘死せられた。享年七十二。

上段の四客は横に右より、



風雅新聞寄章の諸彦

鈴木田正雄氏　讀賣新聞創刊當時よりの編輯局長、後ち退社して明治十四年には自ら鈴木田新聞を發行し、奧羽日々新聞より東京繪入新聞に轉じて客員となつて居たが、晩年振はず、王子の某庭園を預かりそこに退隱して居た事を聞いて居る。歿年未詳。

假名垣魯文氏　別號猫々道人また玩佛居士、かな讀新聞社長にして別に魯文珍報の發行主、その傳記は後章に讓つて玆に略す。明治廿七年十一月歿す、享年六十六。

前田夏繁氏　通稱健次郎、香雪、鶯園、金衣山人、小羅浮舍主人等の數號あり。歌人前田夏蔭翁の男で皇朝學に通じ又古筆の鑑定に長ず、明治八年初めて東京繪入新聞に入つて艶麗の筆を揮ひ後朝野、都の二新聞に入り別に二三小說の著作もあつた。晩年美術學校の教授となり又鑑定家として重きを成して居たが、大正五年十二月、七十五歲で歿した。

石井南橋氏　名は隆驥字は子龍通稱瀧治、筑後吉井町の人、明治初年出京して大藏省の小吏となり後團々珍聞、風雅鳳鳴兩新誌の客員として文名を知られ又狂詩の大家と稱せられた。明治二十年七月千葉町に客死し遺骸を鄕里に葬つた、享年五十七。

二段目右より、

中坂まこき氏　通稱中川眞節々々はまときと訓む、中坂とは飯田町中坂に住つて居た故である。當時投書家の巨擘、漢學の素養があつて小新聞には不似合の漢文くづしの硬い文章を投じ、且いつも小生惟へらくと書くのが筆癖であつたから惟へらく先生といふ綽號を取つて居た。初めは中

坂の自宅に小學程度の私塾を開いて居たが、後には根津神社の祠官となり、明治十六年十二月四十餘歳で遠逝した。

六世川柳氏　通稱水谷金藏、初號ゴマメ後和風亭、五世川柳の長男で佃島の漁家、明治十五年六月歿す享年六十九、向島三圍社内に「つまらぬといふは小さな智慧袋」といふ句碑がある。

高島屋塘雨氏　通稱野田千秋華睡庵又露園と號す。黑川眞頼氏に就て歌文を學び又筆跡に堪能であつた、明治の初年には神官の職を奉じ後ち某省の吏員となつた事もあつたが、明治九年假名讀新聞に入り別に『珍笑新誌』を發行し、十四年には朝野新聞に入つた事までは記憶するが其後の消息に接せず、聞く所では明治十九年頃死去されたとの事である。

後藤呂文氏　號藤園、元名古屋の醫家、出京して芝新堀に起廢病院を開設し專ら癩病患者を治療して居た。詩文を善くし、又聲曲に通じ、自ら藤園節を作り家元となつて之を弘めて居た。歿年月未詳、其の長子呂直氏父の名を繼いで呂文と改め之は私共の狂詩の友であつた。

三段目右より、

野崎左文　即ち筆者の私で、其頃は友人岡丈紀氏より琴亭文彦といふ號を貰つて二世と稱し、又

愛蟹漁史、呉園情史などの變名を用ひて居た。また柳北仙史から戯れに左文翁に贈るといふ狂詩を得てから、自も他も左文翁と呼んで居たが、是が廿歳前後の事であるから笑ふべしだ。

贅々亭湖山氏　通稱中澤三吉、靈岸島長崎町の酒問屋富士本の店員で、端唄都々逸の作に輕妙、後に都々逸の選者となつて居た。大正十二年の大震災後目黑に避難して居たが同年の末七十歳で歿した。

會田皆眞氏　通稱瀧次郎活東舍と號す、日本橋青物町の提燈問屋相模屋の主人で、明治の太申ともいふべき賣名家であつた。明治十三年には『親釜集』といふ雜誌を發行して自ら其の社長と稱し、又川柳に遊んで入船連の棟梁となつた事もあるが、根氣盡きて文壇から退き、大正四五年頃七十餘歳で死亡したと聞いた。

交更舍鹹齋氏　姓川村氏、京橋南傳馬町の漬物屋の主人で雜俳家であつたが委しい事を知らず。

四段目右より、

淸水米洲氏　通稱市次郎、芝愛宕下町の書肆の主人で、假名讀の創刊ごろは其の投資者の一人であつたとか。明治十七年頃は私と共に今日新聞の記者となり、其頃別に通俗徳川十五代史といふ

ものを發行して居た事もあるが其後の事を知らぬ。

●●●●●●琴通舍康樂氏　通稱杉山孝次郎、始めは一中節の三味線彈で菅野序孝と名乘つて居たが、病の爲めに聾となり、狂歌師二世琴通舍雅海の門に入つて寸雅の舍如康と呼び、後ち其號を讓られて判者に列し三世琴通舍康樂と號したのであつた。此の撮影ごろは風雅新聞の印刷長として署名して居たやうに記憶するが、明治十九年の七月流行の惡疫に罹つて死亡した、享年五十六。

●●●●岡野伊平氏　蓬室と號す、井上文雄門下歌人で『枕詞集覽』其他歌文に關する二三の著書もあつた、其頃は風雅新聞の編輯を掌り又有喜世新聞の記者をも兼ねて居た。明治十四年に狂歌師淺草庵の號を繼いで五世淺草庵維平と號して居たが、明治十九年六月六十一歲で死去した。

●●●●二見朝隈氏　通稱を知らず、北庭筑波（伊井氏今の新派俳優容峰の父）に就て寫眞術を修め師の表德に倣うて二見朝隈と稱し（同じ頃塙芳野といふ女流寫眞師もあつた）銀座二丁目に開業して居た、文筆のたしなみは無かつたが其頃の新聞記者や文人と交際し是れ等大家寫眞の種板を多く貯へて居た、歿年月不明。

此の二十一人の中生存者は在岐阜の中村一能氏と私とのたつた二人である。又此の寫眞の出た翌年

ごろ私が開新社友諸氏の花柳界に於ける秘密を發いて其人々を騷がせた一篇の狂詩がある。罪を重ねるやうだが詩中雅號の下へ新たに通稱を書き加へて左に再録する事とした。

逆歩猫敵道人瑤韻試素齒拔千開新社友諸先生　愛蟠子

回顧去今七年昔。宴會始與顏君（山田風外）識。其後交際段々深。道樂傳授自君得。座上藝事最所長。常演茶番浮酒席。槎盆兄（貴關梅痴）亦色男。鼻高肌白仕打黑。踊善雨夜拳善柳。自稱新橋一通客。六々童子（山田鐵面）粹又粹。歌吹海中多經歷。近頃私愛鈴與辰。只擇藝妓樓不擇。玩球（中島中洲）瀟洒美少年。妓有言寄固不諾。借問君色居那邊。想非橋南必在北。蝶生（三木愛花）恐是眞猫筋。未見娛愉快實逆韶光。凡痴（志筑韻光）極洒落。常令雛妓涎爲滴。頃有姉妹戀着君。好男畢竟多艷德。招妍陰史（失名）亦通人。評判先生買娼癖。堪羨馴染處々在。芳原品川隔夜泊。恕堂氏（大澤綠陰）似末廣家。妓輩見顏心竊懌。端唄長唄共所善。一絃琴調無匹敵。淡君（太田淡洲）此頃愛阿松。招而不來只沈默。苗子（早苗直方）踊越後獅子。逆立曲藝上手極。湘兄（三角湘江）舞阿葛籠馬。

扇遺振事法則適。聞櫻蔭子（中川眞節）物堅質。視世女子爲讐敵。待合船宿固所厭。妓樓之遊亦擯斥。有時巧踊棚達磨。看者叩手笑啞々。塘雨兄（野口千秋）極口前旨。一言忽瞽別嬪擯。殊感先生老益盛。陪筵吾豈肩身窄。名代蕩客田象寺（田島任天）北廓馴染悉上璧。下谷鑼猫有趣否。湯島當込或撞着。和尚元來道樂人。忽擒忽縦心頻易。權兵之踊人抱腹。新內之節妓飛魄。竹天子（總生寛）常雖眞面。醉出匿藝獨自樂。此人亦是北廓通。屢遊小店別有譯。呼爲豪傑固當然。家不缺二三權的。人知魯翁（猫々道人）素色師。情海載筆到處泊。湖月近邊繁々通。可察妻君閨房寂。擊猫誅鯰是得意。一篇文有千金直。遷上漁史（成島柳北）粹中王。世間通人皆下額。近爲養生絶和酒。先生一體口贅澤。新柳名妓悉知己。年中所費玉幾百。器用儲金器用遺。花柳之遊年功積。想有折花偸香罪。請君白狀勿敢匿。南橋散史（石井太奇）飮中仙。曾以振事被人識。此翁藤八至極珍。一拳勝得後忽息。演一谷陣屋段時。一人兼勤三人職。熊谷怒肩張上聲。藤方泣出相模塞。開

新社友皆黑人。見來藝道誠面白。文章詩歌固手物。助社主勤一廉役。
勿道諸君醉狂人。禮讓不復紊品格。此社評判追々盛。世間無敢言難癖。
無猫無鯰皆喝采。新紙貢力增千百。

之に對して柳北仙史からも、休立我爲粹中王。王様位尊不敢當。云々と一矢酬いるの狂作を贈られた事もあるが、今此の棚卸しを再びするのを見て地下で苦笑する人々が多いかも知れぬ。

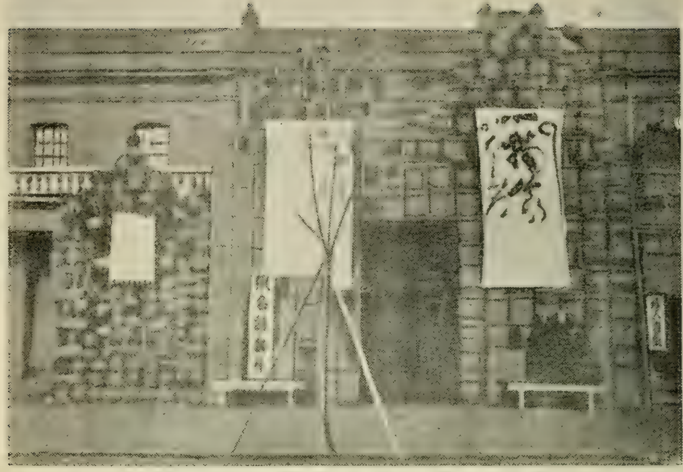
（七）小新聞の經營

話が前後するやうであるが、明治初年に日刊の新聞紙を發行するのは證據金を納めるでもなく、現時のやうに多額の通信料や外交費を要するでもなく、記者其人を得さへすれば之を發行するのは甚だ容易であつた。私は新聞の營業事務には與らなかつたので委しくは知らぬが、小新聞に至つては僅々四五千圓の資金があれば創める事が出來たやうである。先づ創業費から云へば本社であるが是れは家賃の十五六圓も出せば銀座の二等煉瓦家屋が借入れられる。器械器具と云つた處で八頁掛けの印刷機二臺と其の附屬品、活字は殆ど四號五號七號の三種に限られて居たから、一番多く用ひ

られる五號活字にした處が六七萬個もあれば間に合ふのであるが、夫も自社に設備の無い所では他の印刷所と特約して刷らせて居た處もあり、備品としては編輯局に粗末な天神机六七脚（階下の會計部では椅子テーブルを用ひて居た）時計、寒暖計、火鉢、煙草盆等に止まり、必要なものは表の看板（是れも多くはペンキ塗）と日々の新聞を貼出す額縁ぐらゐのものであつた。今の自動車自轉車の代りとしては人力車があるばかりだが、是れも本社に自用車を備へたのは稀で、多くは帳場の宿車を用ひ、それも之に乘るものは主筆とか會計庶務の重立つた人々で、探訪者などは皆テク／＼と歩行いたものだ。それから經常費であるが俸給では主筆の五六十圓と云ふのが最高で、あとは二十圓、十五圓、十圓の記者や事務員が十餘名、探訪員の給料が五圓乃至八圓といふのであるから總計ざつと三百圓（植字印刷の職工賃は除く）毎日一個の挿畫があるとしても畫料彫刻料とも一ケ月三十圓、今のやうに高い原稿料を拂つて小說を買ふのでないから、社外からの寄稿に對する報酬も僅かな金額で濟み、第一に金のかゝらなかつたのは通信料で、外報はロイテル電報をメイル新聞から一日後れで飜譯して出すから一文入らず、内國の電報も亦多くは其筋へ達した官報の轉載で濟ませ、偶々地方に大事件があつた時其の一回の電報通信に三十圓かゝつたと誇つた時代であるから他

は推て知るべしである。西南戰爭の時にも記者を派遣したのは讀賣新聞から饗庭篁村氏を出したばかり——夫れも京都まで——で、第一內地旅費といふ科目が豫算中にあつたか否や疑はしい程である。それから一番金高の上るのは用紙代であるが、其頃一連何程の價格であつたかを知らぬ。併しいろは新聞を一枚一錢で賣つて居た時その紙代が六厘かゝると聞いた事がある。月極めの定價二十錢、一ケ月廿五日發行として此の一枚宛て八厘、此內から六厘の紙代を差引けば僅か二厘の利益に當る譯で、是ではとても算盤は持てぬやうであるが、別に廣告部の收入がある事を忘れてはならぬ。其頃の廣告料は一行十錢以內であつたらうが夫れでも一ケ月間には數百圓に上り是で社員の俸給手當等は償ひ得るのであるから、發行紙數が殖えれば殖える程その利益は增大したに相違ない。其頃印刷業に經驗ある人は日刊新聞紙ならば一萬、月刊雜誌ならば千部以上を發行せねば儲けにはならぬと語つた事がある。

玆でその當時の小新聞の有樣を述べて見よう。私の勤めて居た假名讀新聞は明治十年に橫濱から東京々橋彌左衛門町へ移轉し翌年更に出雲町へ本社を移したのであるが、玆に揭げた寫眞通り移轉祝ひとして諸方から贈られた酒樽、炭俵、蒸籠等を山の如く社前に積上げ、紅燈を吊し繪ビラを貼



假名讀新聞社前の積物

出して人に見せて居た。新聞社ともあらうものが料理屋待合の開業同様の積物をして景氣を添へるなどは今から見れば不見識な事であるが、當時は誰も怪しまぬのみか却て其の趣向を賞揚した程である。左に中坂まとき氏の筆に成る轉社の景況といふ一文を掲げやう。

詩曰。善戲謔兮不爲虐。太史公書有滑稽列傳。皆取干益於世者也。とは柳子厚が毛穎傳を讀むの文ならずや、假名讀の魯文翁に於ける魯文翁の猫に於ける亦然り、其文を見れば滑稽戲謔、其說を見れば奇々猫々茶々羅萬八、鬼も爲めに腹の皮を捻り神も亦お臍でお煮花、而して其の寓意に至つて

は蓋し取于益於世もの、太史公も必ず水盤大の判を捺して保證せんこと必せり、されば天地間の動物中横目竪鼻の人間社會、亞細亞東部の日本人種たる者、誰か假名讀を讀んで一たびは其の滑稽戲謔に顎の掛がねを外し、一たびは其の寓意に感じて反省せざる者あらんや。是に於てお得意は刻一刻と殖え日一日より増す、初め横濱に二葉を生じ直に東京に移し植しより、未だ一周年に滿たざるに忽ち枝を垂れ葉を重ね、終に堂々（オツト柳北先生既に言はれたり）于茲明治十一年二月一日を以て天の時と地の望に乘じ、出雲町四番地の大煉瓦室へ整々然として轉社せり、其の景況の如き豈に鈍筆の盡し得る所ならんや、卽ち左にひツかく所は九猫の一毛にも足らざる也。本舞臺三間の間（オツト表間口五間）總て元祿中に正氣を發したる忠臣藏の景況を模し得て、山道だんだら筋の提燈數百張、鬼灯提燈も亦凡そ一萬許り、團十郎、菊五郎、勘彌、河竹諸氏の贈れるいろは炭四十七俵は、竹田出雲町假名で本社御中と記したる趣向最も奇絶といふべきか、眼睛を丸くして再び一轉眼すれば、猫鰹節百樽累々として雲を凌ぎ宛も人扁の開店かと怪しまるゝ許り積重ねたるは、知らずニヤン人の贈物ぞ、且見れば金春の猫十三名緋縮緬一反をわがねてのしの形と爲したるは、他日魯翁が老を養ふの下衣と爲すの説あり、豪も亦豪ならずや、

又見る聲弄（蒸籠）百荷重疊として半天に聳ゆるを、是れ亦其名も著るしき日本橋大工町に錦花猫ありと知られたる、金毛九尾の叶屋歌吉なり、此他横濱猫連が猫の見立の扇合せ數十總て本社の社頭に陳列したる眼眩し瞳惑ふ、道路の説に京橋松田の開店以來此の如き宏大なる店開きを見ずと、然して同業社中の贈物は日報の猫節一連鈴付きの猫の首輪にさしたる趣向を始めとして、奇を戰はし妙を競ひ、智を以て智を爭ひ豪を以て豪に對す、其數枚擧に遑あらず、朝野、日就、報知、近事、風雅、績文社、七寶社、其他何々、山の如く岳の如く丘の如く陵の如し。（下略）

出雲町へ移轉してからの假名讀新聞社は、間口が三間ばかり奥行が五六間、階下左方の一室が庶務會計廣告掛の事務室――人員僅に四名――其の右方の入口に土間があつて土間から直に二階に通ずる階段があつた。階下の奥もすべて土間で茲が印刷工場に充てられて居た。階上の西側即ち道路に面した方に十二疊ばかりの疊敷の一室があつて茲が編輯局、其奥の板敷の處が植字場であつた。植字場とはいへケースが二列ばかり並んで其間に五分芯のランプが四個ばかり吊下げてあるばかりで頗る簡單であつた。是れは前にも述べた如く其の活字の種類が五號、四號、ルビの三種に限られ且新聞一枚の字數も一萬字には足りなかつたゆゑ、多數の活字を貯へて置く必要が無かつたのであ

る。併し毎日多少文字の足りない分があるから是れは大組前に小僧を築地活版所へ走らせて補充するのが例であつた。編輯局には机が五六脚（銘々の座蒲團は自辨）火鉢、煙草盆類、木製の紙屑箱二個、硯箱、算盤（行數を計算するに用ふ）等で、私は最初入社前には定めて參考書は澤山あらうから編輯の餘暇その本を讀んで學問をしようと樂しんだのは大當て違ひで、古本箱一個の中には華族名鑑、官員錄、花柳案內、吉原細見、東京市內の商家名鑑、郡町村一覽等に止まり、字彙類では字音假名遣、小玉篇、幼學新書、雜字類篇ぐらゐなもので、後日魯文翁が所藏の圓機活法を擔ぎ込んだ時稍心強く感じた程である。その室の入口に接した板間の片隅に大火鉢と藥罐、土瓶、茶碗類があつて、茲が湯呑所に宛てられ辨當殼や蕎麥屋の蒸籠、丼が竹の皮、杉箸の折れ抔と共に散亂して居る。そして銘々の上草履は茲で脫ぎ捨てるので、食器は草履の塵に塗れるといふ始末であつた。故關根默庵氏も、

私が銀座へよく行くやうに成つたのは、出雲町に假名讀新聞があつた頃で、この新聞の社長をして居た假名垣魯文さんを尋ねた頃でした。當時の新聞社の模樣などは今から見ればまるで噓のやうで、詳しく話したら隨分面白い事だらうと思ふが、實はまだ其頃は新聞社の事がよく分らなか

つたのだから駄目です。なんでも此の假名讀新聞社は入口の扉をあけると階子段があつて、これを昇ると直ぐ編輯局のやうに覺て居ます。然し編輯局といつてもほんの二人か三人の人で、是等の人が殆ど終日雜談に耽つて居るやうな有樣でした。そして唯探訪者の持つて來るものへ少し朱を入れて其儘籠へ入れて階下へおろすと、それを印刷係が直ぐ機械へかけるといふ次第で、今から思へば誠に微々たるものでした。この編輯局の壁一重隣が社長室である。此の社長室へ納まつて居る假名垣先生も亦こつ〳〵と何か書いて居るのです。時に依ると此處へ馴染の藝者などが話し込みに來て、遂にはお酒盛が始まるやうな事がありました。折々此處でお近付きになつた雄辯家の藝者は後になつて知つたのですが、若菜家の島次姐さんといつて、當時新聞の挿畫を描いて居た芳宗畫伯の姉さんだつたさうです。其の當時と思ひますが、新聞で載せたものを芝居で演るといふことは此の假名垣先生に依つて始まつたものです。今でこそ新聞の小説を劇にして舞臺へ上せるといふ事は珍らしくも有ませんが、その當時では殆どそんな事は無かつたものです。それが假名垣先生に依て初めて舞臺へかける事になりました。それは明治八年に芝神明の矢場女を錦織熊吉といふ巡査が殺した事件がありまして、これを假名垣さんが二三日續けて新聞へ載せました。

さうして之を大阪の今の右團次の父の齋入のところへ送つてやつてそれを大阪の作者の勝能進が脚色して舞臺へかけ、大當りを取りました。これが大阪に於ける散髪物、今で云ふ現代劇の始めでした。尤も東京では明治六年に新富座で「東京日々新聞」と名題して先代坂東彦三郎が鳥越甚内といふ士族が旅商人を殺すといふ筋の二番目ものをやりましたが、これは別に新聞に載つたといふ譯のものでなくたゞ當時東京日々といふ新聞が出來たので夫れを當込んで名題に用ひただけの事でした、云々。

と記されて居るが、右の内壁一重隣りが社長室とあるのは默庵氏の覺え違ひで、あとにも先にも階上はたつた大廣間の一室で、こゝに魯文翁も雜居して居たのです。さうして此の編輯局には魯文翁の外記者が二三人多い時が四五人（校正係とも）外に探訪者が五六人だが、この探訪者には詰所がなく、編輯局の片隅や又は板間で立ちながら筆を執る者もあつた。又記者の四五人といふのは紙面の狹い割合には多いと思ふ人もあらうが、此の記者先生に中々精勤者が少く、日曜日以外――其頃は月曜が休刊日で實際記者の骨休めは日曜日であつた――一ケ月中に五日も七日も休む人がある、それも豫め缺勤屆を出すのでもなくだんまりのスツポカシが多いゆゑ大いに番狂はせを生じるの

は度々で、運の悪い廻り合せになると全紙面を殆ど一人で受持たねばならぬ事もある。

前に述べた如き間取りで固より應接所の設けもないから、外來者即ち社友、投書家は勿論、魯文翁の懇意な文人、美術家、商人、藝人さては妓樓の亭主、待合のお神、藝妓幇間までが編輯室内へ押掛け來り、中には鮓、餅菓子などを持參して大聲で長話をする人もある。翁は少しも之を厭ふ氣色もなく其の談話の受け答をしながら、眼は原稿紙の上に注がれ筆持つ手は器械的に動いて居るが私共にはそれが耳障りとなつて迷惑を感じた事は少くない。或日某女將が編輯局へ來て祝儀包へ入れた小金を差出し、是れを源さんにあげて何か食させて下さいといふので、社員中に源といふ人は無いと答ふれば、それでもアノ源さんが一番忙しさうだからとの一言、何の事かとよく〳〵考へればそれは吾々が原稿を書き了ると原稿々々と高く呼ぶのを、給仕が聽いて駈け來りその原稿を植字場へ持つて行くのであるが、女將はこれを源公々々と其人の名を呼ぶのだと心得て、丁寧に源さんと云つたのが誤りの元と解つて一同大笑ひをした事もある。

普通の探訪者は受持の諸官省、警察署、區役所等を一人で四五ケ所づゝ廻つて、聞き得た種子を筆記し之を編輯局へ差出せば、記者は朱を入れて其儘原稿とする事もあり、稍や込入つた事件は原

稿紙へ書直し潤色を加へて植字に廻すのであるが、併し夫ればかりでは各社同一の記事で埋まる譯ゆゑ、特別の種子を得る爲に各小新聞では別に艶種探訪者なる者を置いて居た。此の探訪者は重に花柳界、劇場其他の盛り場に入り込んで、穴を搜し祕密を聞込んで來るのであるが、又記者自身が實地探偵を名として足を風流場裡に踏入れる事もあれど、之は遊興費を社で支辨するのではなく、自腹を切つての働きゆゑ長くは續かず、特別種の蒐集には各社とも苦心を重ねる風であつた。

其頃の配達人も亦一風違つた服裝であつた。其社の徽章などを染出した印半纒に腹掛、股引、草鞋履きといふ出立ちで饅頭笠を冠り、新聞名を朱字で顯した挾み箱やうのものを肩にし、棒の先へ鈴を詰ひ付け步行くたびにチリン〳〵と鳴らして、何々新聞と呼びながら得意先へ配達すると共に、途中望みの者があれば一枚賣もするのであつた。此の配達人の賃金が一ケ月四五圓とは安いものだが、其の時分には得意先から盆暮祭日などには二十錢程度の祝儀を呉れる處が多く、風雪の日などは五錢十錢の心付けを受ける事もあつた。私の見た一奇人は小宮山？某といふ人で、晝間は假名讀の編輯局で新聞の原稿を書き、之を了ると印半纒に着換て自身配達に出掛けるといふのであつたが、此人は不思議に得意を殖やす事に妙を得て居たので、配達人の模範として後には其の取締に任ぜら

れて居た。又これは其社から出すのではないが、別に新聞の賣子といふのがあつて、日々の新聞を五十枚百枚と割引で買取り、市中を廻つて讀賣をするのであるが、一家の祕密に關する記事でもあれば其家の近傍を徘徊して「是は御近邊で評判の高い何々」と其の記事の概略を聲高らかに呼びあるくゆゑ、其家でも外聞上その新聞を買取つて中止させんとする。此の弱味に附け込んで一時に何十枚と押賣をするといふ惡癖が行はれたが、明治十年ごろ警視廳令でこの讀賣を禁止したので、賣子の惡弊は其跡を絶つに至つた。

（八）新聞挿畫の沿革

小新聞の挿畫を書き始めたのは落合芳幾氏である事は前にも述べたが、引續いて筆を執つたのは新井年雪（芳年の門人後芳宗と改む）歌川國松等であつた。芳幾氏の作をその下繪で見るといつも貼紙をして改描した痕跡を存し、又線書きも肉太で別に綺麗な繪だとの感じも起らぬが、一旦剞劂師の手を經て刷上つた處を見れば、殆ど別人の筆かと思はれる程優美なものに出來上り、且その畫面に艷氣を含んで居るやうに見えた。元來繪入新聞の續き物には戀愛關係の物語が多く、後年高畠

藍泉氏が退き二世爲永春水翁が之に代つて專ら續き物を書くやうに成てからは一層人情本的の文體となつたので、其生めいた文と相俟つて芳幾氏の挿畫は益々艶を增したやうに思はれた。唯だ竊かに此の大家に不似合だと思つたのは、故人の粉本ならまだしも、現在者たる芳年永濯兩氏の描いた人物の姿勢などをそつくり其儘模寫して憚らなかつた一事である……が、併し一たび芳幾氏の手にかゝると原圖の拮屈なる筆致も忽ち軟化して、如何にも優艶な風に變つたは不思議であつた。されば新聞の挿畫といへば芳幾氏に限るやうに持て囃され、其頃發行の芳譚雜誌、繪入人情雜誌、歌舞伎新報等の繪も皆此人の筆であつた。今一つ氏が得意であつたのは俳優の似顏繪で、其頃の役者錦繪は專ら豐原國周が書いて居たのを、氏は別に自身の工夫を以て似顏を書き始め夫れがよく——就中團十郞、左團次、仲藏等——似て居るとの評判であつた。（卷頭に掲げた芳幾氏筆跡中の丸印は繪入新聞兩文社の社印である）

猩々曉齋氏は魯文翁とは安政の大地震以來の舊知己で、魯翁の戯作本のさし繪は大概此人が書いて居る。それ等の關係から假名讀新聞紙上や魯文珍報等へ氏の狂畫が出るやうになつたが、一種奇拔な筆趣ゆゑ續き物のさし畫には不向で、書くものは諷刺的の漫畫のみであつたが、之が恐らく今の

新聞に出るパック風狂畫の嚆矢であつたかも知れぬ。或時同氏が假名讀社へ來て編輯局の白壁へ戯れに醉筆を揮つた巨擘の圖が新聞廢刊後數年間保存されて居た事もあつた。さて是は新聞挿畫には關係のない餘談ながら、同氏の逸話の一つとして現在私が見た儘のお話をすれば、或日曉齋氏が魯文翁の佛骨庵を訪れた時、氏は名うての酒豪ゆゑ魯文翁も酒肴を出して持て成して居る處へ丁度私も行き合せた。其處へまた信州あたりの製絲家だといふ人が尋ねて來て携帶した立派な畫帖を取出し、是は有名な文人の揮毫を請ひたいのであるが其の手始めに先づ先生の一筆が願ひたいと魯文翁の前へ差出した。翁は之れを見て幸ひ茲に曉齋先生が居られるから早速願つたらよからうと勸めたが、其人はまだ曉齋の名も知らず且一見した處であまり風采の上らぬ大坊主であるから、其の技倆を危ぶんでか聊か躊躇氣味に見えたのを、微醺を帶びた曉齋氏はひつたくるやうに其の畫帖を手許へ引寄せ、横さまに長く展べて、傍らの手習筆を盃洗の水で洗ひ復た墨を含ませると見る間に、畫帖の七八葉分へ蜿蜒たる横線を黑々と引いて仕舞つた。其時の依賴者の迷惑さうな顔付は今も眼前に見えるやうだが、曉齋先生は委細構はず二三杯盃を重ねながら、サア是からだ見て居なさいと今度は小さな水筆に持替へて、ウネ〳〵とした黑線の上へ數疋の蛙が種々の姿で歩いて居る

處を畫き、最後に黒線の前後に頭と尻尾を書き加へると是が長蛇の形となつた。卽ち數疋の蛙が春中の上で行列して居るのを蛇が見返つて居る圖と成つた。此に至つて依賴主も始めて其の手腕に敬服し、數囘に涉つて數名の畫家に賴むよりは圖らず一時によい物が出來たと大歡びで持歸つた。氏にはこんな逸話は澤山あつて亂暴なのは或る書畫會席上で醉狂の餘り立ち小便で柳を畫いて一座を驚かした事もあり、其他『曉齋畫談』の梅亭金鵞翁の筆記を見ると略ぼ同氏の性格が窺はれる。又曉齋氏の酒好きであつた事は故竹の屋主人（篁村氏）が、

予根岸にありし頃同じ里に寓居の故曉齋翁を訪ひしに「ヤアよくこそコレ早くお酒を出しな」と後の方を向きて命じられたり、予驚きて見らるゝ如く曠着にて只今外へ出がけなり、御酒は又の夜ゆる〳〵と賜はらんと斷れば、翁聲を低め「ナニ御迷惑は掛けません酒の出るまで居て下さい。此頃喧しくてお客でなければ出しませんから」と云ひつゝ頭を撫でられぬ、予も酒の囮となるは始めてなりと笑ひたり。

と語られた通り、酒が無ければ一日も立行かず、その酒氣を帶びた時の畫が却て非凡の出來であつたが、終に此酒が元となり明治廿二年四月に五十九歲で白玉樓中の人となつた。

芳宗、國松等に次いで、新聞の繪を書いたのは仙齋年信（通稱山崎信次郎）であつた。此人は芳年門下の秀才で畫道の研究にも頗る熱心であつた。同氏の机の抽斗や文庫中には新古繪畫の粉本また は寫生帖が一ぱいに詰つて居る外に硝子寫しの寫眞が百枚も二百枚も貯へてあつたが、是れは自身度々淺草公園内の寫眞屋に赴きシャツ一枚となつて種々の姿勢を撮らせたもので、下繪に取掛る時は必ずこの寫眞を取出し注文に適する姿のものを寫生するのが例であつた。夫れ故にやいつも同氏の描く人物には肥滿なのが無くて皆自身同樣瘦軀の人ばかりであつた。惜い事には酒の爲めに屢々身を誤り又芳年氏の許諾を經ずして或る粉本を持去つたとか云ふ罪で、師匠から破門せられて大阪の魁新聞を經て土佐に赴き、一年ばかり土陽新聞の挿畫を擔當して居たが、田舍では繪畫の研究が出來ぬとあつて都戀しくなり、復た東京へ歸つて來たが其時の道中は大阪へ着した時懷中剩す所僅かに五十錢、夫れから汽車を横目で見ながら東海道をテク〳〵歩いての上京中途中で帽子を賣り蝙蝠傘を賣り單衣を賣り、或夜は辻堂に寢たりして、ヤツと東京に着した時身に付いて居るものはシャツとヅボン下ばかりであつた。殊に一番困つた事はと本人自身の話に據れば、靜岡縣に入つた時或る川に出水後假橋が架つて居て橋錢一錢を徵せられるのだが、その持合せが無い爲に一二里ほ

どブラ〳〵と元來し道へ立戻り、夜更けて橋番の寢込んだ頃を見すまして其橋を驅拔けたとの事である。こんなに貧苦に迫りながら少しでも金が手に入ると何事を措いても直に夫れで參考書を買込むといふ風で、其後私と京橋南紺屋町の下宿屋に同棲して居た頃私が地方新聞社から送つて來た續き物潤筆料の郵便爲替を同氏の外出の序に受取つて來て呉れよと賴んでやると、やがて十冊ばかりの繪本を携へ歸りこれは誰の風俗畫、これは誰の花鳥畫譜みんなで八圓とは餘り安いから買つて來たといふ。シテ其金はと問返せば、イヤ待ち給へオヽそれは君の潤筆料を暫時流用したのだと平氣な處などは、頗る仙人風を帶びて居て突飛な擧動があつたに拘はらず少しも憎氣のない人であつた。又同じ頃私が製圖上の參考として持つて居た西洋の遠近法（Perspective Drawins）をその原書に就て圖解の說明をした時は非常に歡んで、たうとう原書中の圖を悉く寫し取り、夫れから後は屋臺又は背景などを描く時は、此遠近法の書き方に隨ひ下繪を朱線だらけにして苦しんで居た事もあつた。そして其頃はいろは新聞へ魯文翁が高野長英の續き物を書いて居て其の揷畫の筆を執つて居たが、翌年ごろ京都の日之出新聞へ轉じてから師宣とか春章とかいふ古い處の筆意を學び、畫風は一變したものゝ却て自家の本領を失ひ、評判前日の如くならずして、十九年ごろ同地で歿したが、其の

門人には曾て萬朝報の畫家であつた藤原信一氏や二世田口年信氏などがある。
年信氏に次でいろは新聞の繪をかいたのは同じ芳年門下の稻野年恒（名は孝之加賀の人）で、此人は後に大阪朝日から大阪毎日新聞に轉じ、其頃鈴木松年翁に就て本畫を學び、又繪畫の研究として洋行した事もあつて關西の畫壇を賑はせた一人であつたが、明治四十五年五月五十歳で病歿した。
又月岡芳年氏の繪を載せ始めたのもいろは新聞であつたやうに記憶するが、それは只臨時ものとしてほんの數回載せたのに過なかつた。而して芳年氏の本舞臺はその翌年ごろ星亨氏主宰の下に三十間堀？で發行した自由燈であつて、芳年氏はおれの繪で一番此新聞を賣つて見せるといふ意氣込であつた丈けに、凡てが繪畫本位でその小説は寧ろ挿畫の添へ物でもあるかのやうに感じられた。故に其の版木の寸法にも制限がなく、折には三段拔き以上の極めて大きな繪を出す事もあり、人物を下段に顯し之と對照すべき月や遠山などを別に離して遥かの上段に掲げたり、又附け立ての背景を廢して思ふさま餘白を殘し、故らに餘韻を生ぜしむるやうに工夫したこともあつて、畫面に變化が多く隨つて著しく人目を惹いて評判も高くなつた。そこで是迄は一段か一段半の長方形に限られて居た他新聞の挿畫も追々芳年風にかぶれて版木が一體に大きくなり、且その繪組にも奇拔なも

のが出來るやうになり、芳年氏が出てから新聞挿畫が一變したといふのは事實である。併しながら今から思ふと、有名な芳年氏もまだ當時は全く生硬の域を脱し兼て、例の强い筆癖で人物は恰も木彫人形の如く、其の衣紋は紙衣か糊ごはい洗濯物でも着て居るやうで少しも嫋かな處がなく、又寫實を專らとしながら人物の姿勢にも隨分無理な點があつたのを往々見受る事があつた。されば其頃滑稽堂から發行された月百姿の錦繪にもこの缺點は顯はれて居たが、要するに同じ國芳門下でも芳年氏は剛猛な武者繪風のものに長じ、芳幾氏は優艶な美人畫が得意であつた。そして其頃此勢ひよき芳年氏の筆癖を能く傳へたのは繪入自由の新井芳宗氏であつた。

芳年氏と相並んで一方の頭目と仰がれたのは鮮齋永濯氏である。氏は通稱小林秀次郎、名は德宣、幼時狩野永悳の門に入り弱冠にして大老井伊家のお抱へ畫師となつた事もあるが、夫れより後諸名家の筆法を學んで一機軸を出すに至つたのである。同氏が始めて新聞挿畫の筆を執つたのは私も創業に與つて居た繪入朝野で、その創刊の準備中挿畫は誰に賴まうかとの問題が起つた時一つは歌川國松氏に、今一つは是非とも永濯氏の筆を煩はしたいとの社中の希望であつた、其折此使に當つたのが私で、小梅の宅を訪ひ懇々と依賴した處が、こちらの指名する彫刻師に彫らせるならば書いて

見ようとの承諾を得て其後下繪や畫料を携へて屢々永濯氏を訪問した事があつたが、其の都度取次に出られたのが今の小林永興氏であつた事を、十數年後に至つて永興氏から聞かされ、アヽさうであつたかと坐ろに昔懷かしく思つた事があつた。茲で又金錢問題を持出せば、其頃の挿畫の畫料が芳年永濯の一流どころで一枚一圓、第二流になると三四十錢で五十錢といふのが最高の相場であつた。昨年京都から久し振りに上京して拙宅を訪れた歌川國松氏の直話に據ると、同氏が明治十三年ごろ有喜世新聞の挿畫を一日二個づゝ書いて居た時の報酬が月給制度で一ヶ月十二圓であつたとの事だ、又同氏の話にやはり同じ有喜世新聞の表紙畫として、地球圖の中に諸册二尊が立つて居るところの繪を永濯氏に賴む事となり、其使を命じられたのが國松氏であつたが、社主の寺家村氏が是れでよからうと包んで出した目錄が金二百疋（五十錢）それは餘り少なからうと再三押問答をしても聞入れぬので、たうとう國松氏が自腹を切り一圓にして持つて行つたとの事である。

永濯氏の筆は本畫から出た丈あつて品も備はり且丁寧で、人物の容貌などは如何にも其人らしく、殊に背景の樹木や山水は浮世繪派の及ばぬ處があつて、一點も投やりに描いた處がなく、腕はたしかに一段上だつたに拘はらず、芳年氏の如き奇拔な風もなく又芳幾氏の如き艶麗な赴きに乏しかつ

た爲めに、俗受けを專らとする新聞の挿畫としては氣の毒ながら評判に上らず、芳年氏の爲めに稍や壓倒せられた氣味があつた。併し私の敬服したのは他の畫家中には記者の下繪に對して人物の甲乙の位置を轉倒したり、或は全く其の姿勢を變へたりして、下繪とは殆ど別物の圖様に書き上げる人が多かつたのに、獨り永濯氏のみは魯文翁や私の下繪通りに筆を着けて少しも其赴きを變へなかつた一事で、是れは氏の筆力が自在であつた證據だと思はれる。只一度私が生來左利きの爲めツイ間違へて左の手で楊枝を使つて居る人物を書いた時「これは左利きになつて居りますから楊枝を右の手に持換へさせました」との斷り書を添へて其繪を送られた事があつた。

尾形月耕氏（通稱田井正之助）が新聞の繪を書き始めたのも亦同じ繪入朝野の紙上であつた。同氏は師に就かず自流で敲き上げた人で、最初は菊池容齋の『前顯故實』ぐらゐが手本であつたが後には諸家の流を取入れて一家を成した人である。明治十四年頃には京橋彌左衛門町に住居し重に七寶燒の下圖や陶器畫を描いて居たのを、山田風外氏と私とが見て其筆の凡ならぬのに感じ、終に勸めて繪入朝野の繪を書いて貰ふ事になつたが、同時に其頃飜刻物の八犬傳や新作の單行本などへ追追筆を取るやうになり、後には美術の大家とまでなつたのである。

されば明治初年の新聞さし繪の畫家といへば、前記の落合芳幾、月岡芳年、小林永濯、山崎年信、新井芳宗、歌川國松、稻野年恒、橋本周延、歌川國峰、筒井年峰、後藤芳景の諸氏に止まり、後年名を揚げた右田年英、水野年方、富岡永洗、武内桂舟、梶田半古の諸氏は揷畫の沿革から云へば第二期に屬すべき人々で、久保田米僊氏が國民新聞を畫き始めたのも亦此の後期の時代である。

(九) 其他の思ひ出

前に書き洩らした事柄を思ひ出す儘斷片的に記して見れば、紙上へ劇評を載せ始めたのは假名讀が嚆矢で、繪入、有喜世、さきがけ等が之に次いで始めたやうに覺えて居る。尤もそれは單に一口評に過ぎず又書卸しの狂言になると十數日その略筋を連載した事もあつた。其頃富田砂筵、高須高筵など云ふ見功者が六二連といふ見連を組織し、替り目毎に總見物をして之を批評し、又昔の八文字屋に倣つて黑表紙横綴活版摺の評判記を出版して居たが、私も此の連中に加はつて二三度見物した事もあつた。それから新富座で赤松滿祐を演じた時だつたと思ふが、同社主の守田勘彌氏が興行上の商略から重立つた各新聞記者を築地の割烹店壽美屋へ招いて馳走したのが例となつて、爾來各座

とも之に倣ひ三日目の出揃ひ頃各記者の見物を請ひ、はねてから座附きの茶屋で饗應する事が行はれ、これが段々嵩じて川上音次郎が旗揚げの時には劇評記者へ金時計一個づゝ贈つた事などもあり。又是れと反對に伊東橋塘氏が大阪上りの俳優を酷評した爲め、新場小安の子分から散々に毆打せられ筆持つ右の指を二三本挫かれたといふ騷ぎもあつた。此の新聞紙上の劇評は今日まで引續いて行はれ各社夫れ〴〵專門の記者が居られるやうになつたが、最初の内は初めて芝居を見て初めて之を評する大膽な人もあつて、隨分珍無類な評判が紙上に顯はれた事もあり。それが明治廿二三年頃の歌舞伎座からの招待の時、わづか十二三社から見に來た記者先生の人員が實に六十五人。終にこの先生達に六十五大通の尊稱を奉つた事もあつた。

明治十年前後の文藝雜誌としては成島柳北仙史の『花月新誌』山田風外氏の『風雅新誌』等が世評に上り、服部撫松氏が東京新繁昌記體の一流の漢文を以て綴つた『東京新誌』も亦能く賣れた方であつた。又同十年三月に初號を神田雉子町の團々社から發行した『團々珍聞』――毎週發兌――は野村文夫氏の經營に係り記者には梅亭金鵞の瓜生政和氏、粹多道士の田島象二等あり、ポンチ風の狂畫は洋行歸りの本多某が之を描き、諷刺的の狂文や狂詩、狂歌、俳句、川柳、都々逸等を滿載

した滑稽雜誌で、これが大に行はれたのを見て、洒落氣分遊戲氣分のおどけた雜誌が續々發行せられ、團々の姉妹雜誌ともいふべき『驥尾團子』を始めとして魯文翁の『魯文珍報』粹多道士の『同樂相談』槎盆居士の『鳳鳴新誌』笠亭仙果氏の『月とスッポンち』野田塘雨氏の『珍笑新誌』總生寬氏の『滑稽演說集』會田皆眞氏の『親釜集』琴通舍康樂氏の『興歌叢誌』など、體裁は一樣ではないが、皆肩の凝らぬ軟文に屬するもので其數十數種に上つた時代があつた。

大阪の事は深く知らぬが、私がまだ籍を新聞社に置かぬ一投書家のころ（明治九年？）下阪した時には小新聞といへば只だ浪花新聞の一つで——大新聞では西川甫氏經營の大阪日報がやつと發行された頃——社主の赤荻文平氏や河津樂水とかいふ人に逢つた事がある。次に下阪したのが同十三年、此時は朝日新聞が隆々たる勢ひを示して居た時で、同社員の關隧軒（德）氏と初めて會見した。又此時には津田貞氏（同鄕の高知縣人で私の叔父と親交のあつた人）が魁新聞發刊準備の眞ッ最中で、丁度東京から若菜貞爾、山崎年信二氏も招聘に應じて來阪中で、若菜氏の紹介で今の宇田川文海翁や其他の諸氏と一夕の會合を催したやうに記憶する。此の宇田川翁は當時關西に於ける新聞小說家の泰斗で、現今八十歲近くの高齡で健在であるが、元下總結城の人、幼年出家して江戸湯島

切通麟祥院の所化となり讀經の暇稗史雜書を涉獵して居たが、一夜强盜闖入し白刃を以て下顋に斫付け重傷を負はせた。翁は之が爲めに癈疾となり復た經文を讀む事が出來なくなつたので、髮を蓄へて文壇に遊び明治八年の末大阪に浪花新聞の發行せらるゝに當つて招かれて同社の編輯員となり、次で大阪新報、魁新聞を經て大阪朝日に入り數年間艶筆を振はれて居た。翁は除々庵主人といひ又半痴と號したので、此半の一字を貰つて門人となつたのに岡野半牧、槇野半醉、瀨戸半眠の諸氏がある。當時關西には操觚者其人に乏しかつたから翁ひとり其名を擅まゝにし、殊に新聞の續き物は翁の筆に限るやうに持て囃されて名聲嘖々、他社の分を加へて一日四五種の續き物を受持つのは珍らしくなかつた。それでは如何にも健筆家のやうに聞えるが、實は自社のものは自ら脚色し自ら筆を下すにしても他社の分は別に代作者があつて大體の骨組を作つたのを文海翁が潤色して送るのであつた。是れは唯翁ひとりではなく關西に於ける小說家の間には多く此の方法が行はれ、一作者の下には必ず一兩人の小說下拵へ役が附いて居た。

東京の新聞小說も明治十六七年頃から追々新氣運に向ひ、繪入自由の宮崎夢柳氏や、自由燈の小室案外堂氏などの筆に成る、自由民權思想鼓吹の目的で、佛國革命史などを骨子とした過激な歷史

的小說が紙上に連載せられ、又阪崎紫蘭氏の『汗血千里駒』などいふ傳記小說が行はれるやうになつた。それから明治十八年に至り坪內逍遙先生が『小說神髓』を著し稗官者流の舊夢を打破してより以來、茲に小說界の革新を來して露伴、紅葉の兩大家を始め新々作家が追々と擡頭し來つて、新聞の續き物も全く一變したのである。

今日新聞と浪華新聞

明治十七年九月の或日、我が師假名垣魯文翁から急使が來て卽刻自宅まで來て貰ひたいとの事であつた。是より先私が曾ていろは新聞に師翁と共に筆を把つて居た頃親友の山田風外氏が繪入朝野新聞を朝野社に讓り渡し改めて第一號以下をその別局から發行する事になつたが、適當な記者がないから、私に入社して吳まいかとの相談を持込まれた。で此事を魯翁に話した處が今出て行かれては困るとの返答であつたが、風外氏からは差當り續き物を書く記者がなく又新聞の編輯に經驗のある人も居ないのに發行日が四五日間に迫つて居るゆゑ、魯文翁へは成島先生よりあとで話を付けて貰ふ事として、是非とも入社して吳れよと迫られたので、終に意を決して同社へ轉ずる事を承諾した。然るに十分の諒解を得ずして『いろは』を辭した一擧がいたく師翁の機嫌を損じ、師を捨てゝ他に奔るやうな恩誼を知らぬ者は破門するといふ激烈なる一書を送り、又朝野本社へも左文を直ちに退社せしめよといふ强迫めいた書を投ぜられたので、柳北先生も困りながら私の爲めに仲裁の勞を取られ、又岡丈紀、三世琴通舍の兩氏も其仲に入り、私からは一通の詫び證文（市島春城君所藏の古書畫類の中に假名垣魯文宛野崎左文の詫び證文があると早稻田文學に書かれた事があるが、これが此時の證文である）を出してあやまつたので漸く師翁の怒りも解け、師弟の緣を繫ぎ止めて其

盡繪入朝野に腰を据ゑて居た。併し此の衝突があつて以來自然と假名垣家の敷居が高く無沙汰がちに過ごして居たが、二年越しに師からの手紙を受取つたので、何事であらうと案じながら俥を飛ばして新富町の翁の家を訪れた。

其時の話は斯うであつた――元報知新聞の社主小西義敬氏が銀行事業に失敗し沈淪して居るのを氣の毒に思ひその友人益田克德、高梨哲四郎、角田眞平の諸氏が資金を持寄り、小西氏を助ける目的で一の小新聞を發行する事となつた。そこで小西氏を社長とし自分(魯翁)は編輯一切を擔當する事になつたが、自分も追々年を取つて昔の元氣が衰へたから足下等二三人の若手の人に助力して貰ひたい、特に足下を招いたのは先年行掛り上他社へ手放した事があるから其の埋合せとして今度は我が手許に復歸して働いて貰ひたい爲めだとの事であつた。そこで私は立どころに快諾したが、當時は小新聞にも讀賣、東京繪入、改進、繪入自由、自由燈、繪入朝野等の數種が互に競爭して居た頃だから、第一に豐かな資本を擁し且何か一の特徴を備へた新聞でなければ發展する見込みがないが其邊のお考へはと反問すると、翁の曰く資本には先づ心配はない、又今度發行しようとするのは益田氏の提案で、其日の事を其日に報道する夕刊の新聞で、題名を「今日新聞」社名を每夕社と

呼ぶ事になつて居る。歐米には夕刊新聞は澤山あるとの事だが、我邦では新しい試みゆゑ乾度世人に歡迎せられて賣れる事は受合ひだと翁は頗る乘り氣であつた。成程海外には夕刻發行する新聞の多い事は私も既に聞及んで居たが、それは通信や交通機關の備はつた國に於て出來る事で、植字にしてもアルハベツト廿六字と數千の漢字へルビを振るのとでは、其遲速は較べ物になるまいと聊か惑ふ所があつたが、既に入社を承諾した以上は所謂騎虎の勢ひで、宜しいやつて見ませうと茲で翁との打合せが纏まり、翌日は翁と共に小西氏と柳橋の某亭で會合した。其時小西氏は自分は印刷の方は乾度間に合せて見せるから、編輯を遲くも午後一時迄に締切る事を兩君で實行して呉れよとの事であつた。そこで諸般の準備に取掛り記者には永井碌(小石)清水市次郎(米洲)砂川某氏等(大坂の某會場で松木正守を刺し、大岡育造氏の辯護で無罪となつた櫻間要三郎といふ人も編輯の一員)を聘し、畫は尾形月耕、落合芳幾の兩氏(芳幾氏は東京繪入の外他の新聞へは筆を取らぬのを魯文翁との交誼上無落欵で描く事を承諾されたが後には歌川國峰氏が之に代つた)を煩はす事とし、魯翁が主筆、私が助役、翁の長男熊太郎が探訪長、今いふ營業部長としては投資者を代表して丘襄二氏が其任に就き同年九月廿五日初號を京橋彌左衛門町の本社から發行した。(後に印刷を報知社に賴

む都合上本社を兩國村松町に移した）それから廣告の一手段として同年千歳座かで團十郎、芝翫、左團次の一座が村井長庵の狂言を演じた時、毎夕社から狂言作者河竹默阿彌氏へ引幕を贈り、同氏に頼んでその狂言中千太郎と小夜衣との道行の場へ、丸に今日と染拔いた半纏姿の新聞賣子——いづもれ子役——十數人が出て、是れは今度發行になりました其日の事を其日に知らせる今日新聞云云と舞臺で效能を述べるといふ一くさりを書き加へて貰ひ、今日新聞々々々々と呼びながら鈴を鳴らしながら兩花道へ引込む時、其日の新聞百枚あまりを見物に撒いて行かせた事もあつた。芝居が新聞紙を利用すると反對に、新聞が芝居を利用しのたは是れが始めてであつたかも知れぬ。

其日の事件を其夕に報道するのは新聞中の新聞であるから、大に世上の喝采を得るのであらうとの當初の期待は、殆ど理想に過ぎずして實際は中々困難な事業であつた。その第一は種子の蒐集で、警察種と稱する市井の出來事は概して午前中に少くして午後に多く、夜中に起る事件は强竊盜とか出火などの類である。尤も人殺しとか情死とかいふものも重に夜中に生じるのであるが、翌日の午前中にはまだ警察でもその原因とか周圍の關係などの取調べが濟まず單に場所と人名とを知り得るくらゐのものだから、其の詳報を揭ぐる所の翌朝發行の他新聞と較べると僅かに端緒を報じるに止

まり、甚だ不十分な記事で紙面を埋めねばならぬ事を餘儀なくされた。第二は交通機關に乏しい事で、當時は淺草雷門から品川までやつと鐵道馬車が通つて居た時代で、今の如く自轉車も廣く用ひられず、電話なども皆無であつた。であるから縱令その端緒を聞出したにしても探訪者が實地に就て調査しようとするには時間が許さなかつた。折には二人曳きの俥を飛ばした事もあつたが、每日每日幾かの出來事に悉く此の手段を取る事は社の經濟も之を許さぬといふ事情もあつた。第三は印刷機械の不備で、無論今の輪轉機などは夢にも見ることを得なかつた、只不完全――それでも當時では最新式――なロールでゴト／＼と印刷するのであるから、一萬枚刷上げるのには十時間以上もかゝるのであつた、そこで編輯部からは營業部に向つて印刷を敏速にせよと促し、營業部からは逆捻ぢに編輯を手早くせよと迫るのであつた。是れが爲め私は最初の一年間は編輯局に泊り込みで早朝から筆を執り他の記者も亦早出で働いて居たが、獨り魯翁のみは從來の習慣上其日出社してからで無くては其日の續き物の筆は取らぬので、植字方から續き物の原稿は前日に渡して貰ひたいとの請求が度々あり、其の都度翁はヨシ／＼と答へながら終に之を實行するには至らなかつた。今一つ苦心したのは挿畫の事で、續き物の繪は前日から彫らせて置く事も出來るが、其日の出來事

に木版畫を加へて大に敏捷な所を誇りたいといふのが自分の慾望であつた、ところで翌朝配達する新聞でさへ版木の彫刻が間に合ひ兼るのに、其日に配る新聞へ其日の事を繪入にして出すのは到底不可能であるが、併し豫定の行動がわかつて居るもの、例へば行幸啓とか開業式とか又は市井の年中行事等は、想像で下繪を付け前以て版木を彫らせる事も出來たから、今一歩進んで所謂喧嘩、人殺し、强盜、追剝、自殺、情死の類にも繪を入れたいといふ考へから、豫め其の部門を分つてさまざまの繪組をつけた版木を數個彫刻させて之を貯へ、其の出來事に應ずる繪組のものを貯藏中より選み出して之に當嵌めやうといふのが私の工夫であつた。一例を擧げれば情死門では（一）商人體の男が娘と並んで堤の柳蔭に佇む處（二）職人風の男が蒲團の上で娼妓と相對し憂ひに沈んで居る處（三）士族らしい男女が前に短刀を置き合掌して居る處の類を彫らせて置くのであるが、サア情死がありましたと探訪者が差出す原稿を見れば、男は坊主女は尼、而かも夫れがモルヒネ情死とあつては仕入れの版木は一つも用を爲さず、偶々無理にも用ひられるのは十分の一にも過ぎずして殘りの九割は皆廢物になつたと云ふ大失敗をやつた事がある。現時では朝刊夕刊の二度づゝ配達する新聞が多く、夕刊には朝の出來事の實況がチャンと寫眞版で出るほどの素早さであるが、之を四

十年前の今日新聞に較べると殆ど今昔の感に堪へぬのである。それから猶吾々の豫想を裏切つたのは配達の遲れがちな事で、各賣捌所へは俥で新聞を屆けるにしても、本社直配達に屬する分は午後の五時半頃までに配達人を招集し、此の人々が各自受持の區域内へ徒歩で配達するのであるが、夏はまだしも冬の五時半はモウ暗い夜に入つて居る、それが遠い郡部などへ行き着く頃には早い家では門の戸を締めて寢て居る時分ゆゑ、據ろなく門の受函へ新聞を挿込で置くのだから、折角の夕刊も其家では翌朝配達の他新聞と同時に見られる結果となる。又近い市内へ配達するものでも商家などでは朝と違つて夕刻は忙しいので直ちに手に把つて讀まれる事は少なかつた。元來當時の小新聞の讀者は記事の早いのよりは寧ろ興味本意で、何でも面白い事が讀みたいといふ傾向であつたから、報道は早いにしても唯其の端緒のみを掲げる短い記事では讀者は滿足しなかつた。たつた一度兩國で大角力があつた時その勝負附――中入前の勝負しか載せる事は出來なかつたが、――を載せた時は始めて夕刊の效果が顯はれ讀者にも歡ばれたが、是は角力の勸進元から勝負附の賣子の營業を妨げるものだとの故障が出て終に中止するに至つた。こんな風で、各機關の不備やら資金の不足等――吾々の力の足りなかつたのも其の一原因――で豫想通りの好結果を得ず、つまり計畫は宜し

かつたにもせよまだ時勢に副はぬといふ結論に到着した。それでもたいした損失は蒙らず日々八九千枚を發行して三年間營業を繼續した。（後に持主が變つて都新聞と改題し普通の朝刊に改まつた）
翌十八年の夏、或日魯翁は私共に向つて、此程向島の永機宗匠の紹介で一少年を入門させる事とした、まだ年は若いが熱心な文學志望の者で前途の見込みもあるから、見習記者として此社に入れる事を只今社長へも話して置いた、近日連れて來るから引立てゝやつて下さいとの事で、それから四五日間の後魯翁は果してその少年を同伴して吾々に引合せたが、年齢は十七八歳で長面痩軀、頭蓋骨は人並より大きくして見るから才子らしく、始終ハンケチで口邊を蔽ひ、常に沈默がちで偶々話をするにしても要領の外多くを語らず、その擧動も沈着で、大家に育つた內氣のお坊チヤンといふ風であつた。聞けば名は齋藤賢、雅號を江東みどりと呼び嘗て慰み半分戲作めいたものを書いた事もあるとの答であつた。是れが後の綠雨醒客またの名正直正太夫が新聞記者としての初目見えであつた。魯翁の門に入つた事は綠雨氏自身も『日用帳』に左の通り記して居る。

　歲十七八の頃なれば猶學校に通ひたりしと覺ゆ、われは永機翁の紹介によりて魯文翁に面したり、駒牽猿に擬したる印一つ贈られしを用ひこそせざれ今も藏せりいかなる事を書きしか忘れた

れど、携へ行きしわが一文に名を眞猿と署し、芳譚と稱する雜誌に出されたり。是れは後に聞いたのであるが、綠雨氏の父君は名を利光といひ伊勢津の藤堂家老侯のお抱醫で、藩主と共に東京に出て本所綠町に住し氏は其の長男である。その家へは私も五六度訪問したが綠町三丁目南側の長屋門のある舊式家屋であつたが、醫者の玄關といふ諺に反して藥取りの來て居た事は一度も無かつた。されば父君は藤堂家より俸給を得て居たので、一般患者を診療する開業醫では無かつたかも知れぬ。綠雨氏が父母と共に上京したのは明治十年で、その頃は今の文學博士上田萬年氏と共に江東小學校に通學し後中學校に入りしも中途で退校し、明治法律學校に入つて法律を學んだ事もあつたが之れ亦業を卒へずして廢學した。父君は文學のたしなみがあつて和歌俳句を好み、俳句は藤堂家へ出入する永機宗匠に就て學んで居たから、綠雨氏も亦その遺傳で文藝に趣味を持ち一時其角堂の門に遊び、また其の紹介で魯文翁を便つて來たのであつたと。

綠雨氏の入社當時は官吏の來往轉免とか地方新聞の拔萃とか、芝居寄席の案內、緣日表などといふ記者としては初步の記事を受持ち又校正の一部をも手傳つて居たが字音の假名遣ひには少からず苦心の體であつた。そこで夫れは四聲によつて別れる事を話した處が詩學には深く通じて居なかつ

た氏が、急に詩韻含英を購ひ來り一東の韻はコウ、ソウ、トウと發音するといふ風に重なる韻字を諳誦してかゝつたので、覺えも早くして先任の校正者より間違ひが少いやうになつた。又日々の緣日案内を掲げるにも毎月末に翌日中のこと、例へば五十の日は何の稲荷、寅の日は何の毘沙門といふが如き一覧表を自分で作り、此表から其日々々の緣日を書拔くといふ風に萬事綿密で注意が深かつた、それから數月後には記者としての豫備學卒業のかたちで、艶種の筆を執るやうになつたが、書く事が急所を衝くといふ筆廻りで魯文翁も之を讀んでその手腕を認めて居た。併し少年時代にあまり其作を讚め立てると慢心することがあるからとて面と向つて賞揚する事を避けて居た。其頃魯翁はよくいろ／＼な寫本を社へ携へて來て編輯の暇に吾々に謄寫させるのが例で、現に私も此の役目を命ぜられた事があつたが、或日魯翁は齋藤さんこれを寫して下さい――其書は黄表紙の評判記『花の折紙』であつたと思ふ――と差出した時にはひどく面喰つて、私は字が下手だからと辭退したのをたうとう押付けられ、十數日間の後に出來上つたものを見ると苦心慘憺たる痕跡歴々、中々珍なものであつた。元來氏は筆跡の拙い方でいつも眞筆の先の切れたのを用ひ碁盤目の原稿紙の上で習字をしたのに過ぎないのだから、普通の手紙でも皆原稿體の肩下りの細字ばかりで書いて居た

つて居たならば齋藤緑雨の手寫として得難い珍籍となつたであらうに。假名垣家にも傳はらず行方不明となつたのは惜い事である。

緑雨氏の技倆を認め其才を愛したのは師の魯文翁よりも社長の小西義敬氏の方が深かつた。小西氏は舊幕時代の淺草の名主の一人で、昔は財産も豐な上に中々の勢力家であつたとの事である。そして當時の風習上靑二歳では幅が利かぬとあつて、若い時から月代の跡を灰汁で磨いてテラ〳〵と光らせて居たので、散髪後も赤禿の跡があり〳〵と殘つて居た。その反歯であつたのは笛を習つた爲めで、笛は素人放れのした上手だとの評判であつたが私は一度も聞いた事は無かつた。所謂生ッ粹の江戸ッ子而もそれが通人肌で、能樂と芝居に精通し俳優では團十郎、宗十郎を贔屓にし又遊藝人にも知己が多かつた。報知社々長時代には芝居は大小各座とも看ざる事なく又花柳界に豪遊して大分驕奢を極めたさうだが、今日新聞の社長となつてからは銀行事業の失敗後だから既に榮華の夢から醒めて餘程質素な生活振となつて居た。けれども猶金の餘光で昔の大盡の名殘を留め劇界や花街では社長さま〳〵と款待せられ、自分でも是れが嬉しさに人を誘うて度々柳橋吉原へ足を向け通

人の遊び振りを誇つて居たが、多くの場合其の同伴者は綠雨氏であつた。私も二三度は同行したが綠雨氏の酒樓に於ける態度は酒を呑んで騷ぐのでもなく肴を荒すのでもなく、キチンと坐つてニヤニヤと笑ひながら例のハンケチで口を蔽ひ老妓等との對話ぶりを傍聽するといふ全くウブな坊チヤン風で、今から思ふと後年落した『かくれんぼ』の主人公山村俊雄そつくりであつた。それが二三年後にはガラリと變つて大分遊びが巧者になり、或夜などは新橋板新道の藝者屋吉田屋？の長火鉢の側に脂下つて居たのを胡蝶園氏と私とが發見して其後屢々同氏を揶揄した事もあつた。つまり小西氏の誘引が最初の導火となつて一時は遊びの熱も高まり、多くもあらぬ父君の遺産をも煙にした樣子で後には大分窮迫して自宅からの通ふ俥も廢し、服裝なども見違へる程粗末になつて居たが、無いが異見の總仕舞ひで此の道樂も長くは續かなかつた。要するに世間知らずの氏は小西氏の爲めに活社會へ突き出されて一足飛びに紳士的の境遇に入り、又小西氏の感化を受けて江戸趣味に引込まれ、窮した時でも猶足袋と下駄とは新しいものを用ひ、帶は必ず角帶を締めるといふ風で、音曲でも義太夫が嫌ひで哥澤、淸元、常磐津に興味を持ち、食物も江戸料理のうまい物屋をあさつて自ら食道樂を以て任じ、蕎麥が好きだが饂飩は病人の食ふものだと斥けて居た抔は其の一例である。

此間に氏は天稟の鋭い觀察力を以て社會の裏面を洞察し、之れらから材料を得て後の寫實小說ともなり又皮肉な批評ともなつたであらう。されば後年文豪として名を成したのは天才に據るのは勿論だが、書籍の上より得たる知識よりも實地の觀察が多く役に立つたのではあるまいか、シテ見ると小西氏のお蔭を蒙つたのも亦少くないと言はねばならぬ。

今日新聞に初めて續き物を書いたのは明治十九年一月、住所に因んで江東みどりと號し『善惡押繪羽子板』といふのであつたと、綠雨氏自身は語つて居るが、私はそれはどんな趣向でまた何同ぐらゐ續いたものか今思ひ出す事を得ない。併し其前の四五日間の雜報體の續き物に或る待合の事を書いたのは、座敷の形容から其の營業ぶりをも細微に穿つた上に、七五調を離れた一種の文體で魯翁も大層これを讃めて居た、今から思ふと之が『小說神髓』などから刺戟せられて、趣向に重きを置かずして人事の自然を描寫せんとする氏が最初の試みであつたかも知れぬ。

私は明治廿三年『國會』新聞に居た頃再び綠雨氏と一緒になつたが、其頃氏は本所の某所で自炊生活を營んで居て、此時今の小杉天外氏も同棲して居られたやうに記憶する。夫れから數年後松下某が京橋八官町から『時論日報』を發行した時、私は復た綠雨氏と同社し、綠雨氏が編輯部長で小

杉天外、後藤宙外、伊原青々園の諸氏が小説や軟派の記事を受持つて居られた。（此の日刊新聞は僅か半月あまりで斃れた）其後氏は讀賣新聞、萬朝報等に轉じ、萬朝退社後は宿痾の療養かた〴〵鵠沼、小田原等に轉地し、卅五年頃歸京して淺草須賀町、須賀町から駒込千駄木、千駄木から本所横網町に移轉し卅七年四月十三日同所に於て終に不歸の客となつたのであるが、其頃頗る面白い一挿話がある。夫れは同家に通夜をして居た親戚及び吾々友人の外は誰も知らぬ事ゆゑ茲にお話しすれば、綠雨氏の死去した翌々日の早朝服裝卑しからぬ年頃卅四五歲の一婦人が入り來つて挨拶もそこそこに靈前に至つて合掌し、さて涙ながら語り出るやう妾は綠雨の叔母に當るなにがしといふ者であるが、新聞廣告にて甥の死去した事を知り、嘸皆樣の御厄介になつた事と推察し葬式の入費として若干の金子を懷にして只今駈付けましたといふ、その樣僞りとも思はれないが、氏に叔母のある事は親戚の人々も初耳にて且叔母といふ人が甥より年若なるも訝しく、是は何かの間違ひであらうと精しく訊せば、此の婦人は橫濱植木會社の德田某の妻君で其甥に齋藤賢三といふ此年廿八歲の青年があるが、此男綠雨氏の本名に三の字一字多いだけの似寄つた處を惡用して、綠雨といひ、正直正太夫といふは我事なりと地方遊歷の時田舍人を胡麻化すのみか、現在の叔母までも此手を以て

誑かし、時折本もの丶緑雨の著書を叔母の許へ贈る事もあつたので、偖は賢三こそ今世に名高い文豪であつたかと我甥をえらい者にして尊敬するに至つたが、其えらい甥は兩三年前大阪へ往つたぎり便りがなく、どうして居るかと案じてゐる矢先・此の訃音に接したゆゑ驚きながら馳付けた次第だとわかり、始めて事の間違ひなる事を知り笑ふにも笑はれず。こちらは氣の毒先方は極りわるく立別れた。本人の緑雨氏も生前「文の友」と題する雜誌に本家本元元祖正太夫と稱する人の現はれ來りしには、われも頗る恐縮したり、昨年鐵鞋子の上州高崎を過りて、東都正直正太夫と書ける料理屋の引札を獲しと語られしが、これは賣藥屋の廣告小說に春の舍主人など記したると同樣の手段ならんか」と『日用帳』に書いて居るが、死後似せ緑雨が又ひとり顯はれ出た事は冥土へのよい土產話であつたらう。

是れも十八年四月の事であるが、私が今日新聞紙上で明治の十傑即ち政治家、法律家、軍師、醫師、學術家、商法家、著述家、新聞記者、畫家、宗教家等を現在の人に指名する事を賞金付きで投票を募つた事がある。その政治家には伊藤博文侯、法律家には鳩山和夫氏、軍師には榎本武揚氏、醫師には佐藤進氏、著述家には福澤諭吉氏、畫家には守住貫魚氏、其他は忘れたが大多數を以て新

聞記者に指名されたのは櫻痴居士福地源一郎氏であつた。そこで此の十傑の肖像を石版摺の附錄とし各自の小傳を紙上に掲げる必要上から或る朝魯文翁と小西氏との紹介狀を以て居士を下谷茅町の自邸に訪問した。居士は明治初年には淺草馬道寢釋迦堂の魯翁宅の附近に住ひ、夢の舍又は福地鬼外と號して戲作に從事した事もあつて、魯翁とは年來の舊友であつた爲めに、翁の紹介のお蔭で午前中は面會謝絕といふ掟を破つて快よく私を引見された。尤も其の以前每年新聞社の懇親會が開かれた時私も二三度出席して居士其他の大家の顏は見知つて居たが、此の先生達の御高話を末席で謹聽するのみで中々盃を交換するまでには至らなかつたから、居士と膝を突合せて話をするのは此時が始めてゞあつた。さて來意を陳べて閱歷のお話を承りそれを私が書取つて參りたいと云ふと居士は笑つて我輩の履歷は半日や一日で述べ盡されるものでは無い、幸ひ三四日は夜分閑だから自分で書いて送つてやらうと約せられ、それから新聞記者としての責任論など聽いて辭し去つた翌々日、約に違はず自筆の自傳を送り越されたが、其の用紙は美濃十二行罫紙で紙數十六枚、處々塗抹したところもあつて如何にも一二夜で書き流したものらしく見えたが、其割には字體も鮮明で、今更ながら居士の健筆なのに驚かされた。其の自傳の前半は、

福地源一郎（又名世萬字尙甫）は天保十二年三月廿三日を以て長崎木石灰町に生る福地苟庵の末子なり幼名を八十吉と云へり、翁は原長府の藩士なり壯年の頃故あつて鄕を去り京阪江戸の間に遊學し頗る經史百家の書に博かりしかども靑雲の志を達すること能はず、由て醫業を學び長崎に來りて其業を修めたり、福地嘉昌翁時に長崎に居を移し醫を業としたり一見その奇才を賞し遂に養ひて嗣とし妻するに其女を以てす（卽ち源一郎の母なり）苟庵翁數子を擧げたれども皆女子なりしに晩年に至つて始めて男子を得たり八十吉と名づけて之を鍾愛したりと雖も家庭の教育最も嚴なり、五歳の時より讀書習字を授け七歳にて外師長川東洲翁に就て學ばしめたり、東洲翁も亦之を教ふる他と異り斯く內外の教育を得たるが爲めに奇童などと云はれたりき、十歳にして初めて鄕の童子試みを受け十三歳にして試業を受け倶に甲科に擧げられ、其後鄕試を受くる每に甲科を得ざること無し蓋し長崎の地たる當時文事は豐なりと雖も概ね書畫詩賦の末技に止まり眞に漢學を修むる者は太だ罕なるに由るなり。

此時に當りて外國に事あり長崎は其衝に當るの地なりき、露國英國等の使節も渡來し條約も結ばれ加ふるに海軍傳授の擧もありければ、苟庵翁は源一郎をして蘭學を學ばしめたり（時に安政

二年源一郎十五歳）乃ち和蘭陀大通辭名村八右衛門翁に就て初めて蘭學を修めたり、名村翁尤も蘭學に通じ書生を敎ふるに極めて嚴なり一時みな此人に就て蘭學を修業したり、名村翁の嫡子五八郎氏は幕府に徵されて江戸に仕へたれば翁に嗣子なし女子あるのみ依て翌年源一郎を養ひて嗣としたり、源一郎既に名村氏の嗣と成りて大和蘭陀稽古通辯と相成りたるが生來その家庭の敎育は長崎地役人の風に同じからざる上に源一郎年少氣を背ひ才に誇り動もすれば同僚を凌ぎ少しも屈せざるを以て大に同僚の爲に忌まれ遂に物議を起したり、於是乎退役を願はしめたり、加之名村氏家內の折合も惡しく將來その妻たるべき女子にも嫌はれたれば名村翁は深く源一郎の才を愛したれども內外不折合の爲めに是非なく離緣となりて養家を放逐せられたり是れ安政四年の事なり、然れども源一郎の洋學は實に名村翁の賜なりと云はざる可からず。

源一郎は長崎士人の氣風に合はず又長崎に居て他役人たるを甘んぜず東遊して青雲を攀づるの志ありけるに、矢田堀景造、榎本釜次郎の諸君時に海軍傳習として長崎に來り源一郎に勸むるに東行を以てせられたれば、源一郎は安政四年の冬矢田堀氏に隨從して江戸に來れり、時に外國奉行に水野筑後守といふ人あり幕府にて有名の政治家なり曾て長崎奉行となり源一郎の父と知己

なり、源一郎は矢田堀の塾に在る數月水野氏の食客となり又數月の後森山多吉郎翁の塾生となりて英語を學びたり（此森山翁は長崎出身の通辯にて江戸に徵され時に外國奉行支配調役格通辯御用頭取にて外國談判通辯を專任したり）源一郎は此時漢學及蘭學英學を修めんとて諸方の名家を師として學びたれども兎角に新奇の見解を下したるを以て容れられず之を容れたるは水野と森山との兩氏あるのみ、時に某の儒官は源一郎に學問吟味を受けて立身の階梯にせよと勸めたれども既て漢學者流の迂遠を悟りたれば隨はず、居ること一年安政六年（時に十九）五月橫濱開港各國公使江戸在留の時に際し幕府は通辯官を求めたり、源一郎乃ち外國奉行支配の通辯御用雇となり十人扶持を下されて橫濱江戸の間に往來せり、翌萬延元年四月外國奉行支配同心格通辯御用（三十俵二人扶持）に召出されて初めて幕府の御家人となる其翌文久元年九月同支配定役格（五十俵三人扶持外に十人扶持）に進む、此歲の冬幕府は江戸大阪兩都兵庫新潟の兩港を條約面の通りに開くの期は正に近きにあるを以て其の延期を條約各國に談判せしむる爲めに使節を出す事に議決し御勘定奉行竹内下野守、松平石見守御目付京極能登守を公使に任じ、外國奉行支配組頭柴田貞太郎以下數十人の役人を隨從せしめ英國軍艦に搭じて西洋に赴かしめたり、源一郎も通辯官とし

て其列に加はり佛蘭西、英吉利、阿蘭、露西亞、孛漏生、葡萄牙の六ケ國を巡り文久三年の春を以て佛國軍艦に搭じて歸朝したり、此歲（文久三年）英國生麥償金の談判あり鎖港の談判あり將軍上洛の擧ありて國事多端なり、源一郎（時に二十三歲）は西洋は見物したり竊に時事を論ずるを好みたれども身分卑しければ公けには一言も云ふ事は相成らずして五月に至り水野筑後守、淺野伊賀守、井上信濃守、向山榮五郎の諸員は閣老小笠原圖書頭を推し軍艦に乘ずるに兵士を以てし將軍を迎ふるを名として江戸を發し大阪より上陸し兵を率ゐて將に京都に入らんとす、朝命ありて之を淀に止めらる數日にして將軍家茂公は大阪に來り小笠原以下を禁錮したり。此時源一郎は水野に從ひて此行に列したりしが水野の厚意に由りて其禍に罹るを免れ獨り大阪に止まること數月にして江戸に歸りたり。

翌元治元年六月外國奉行支配調役並格通辯御用頭取（百俵十五人扶持）に進み席以上の士分に列したり然れども其の卑官たるに於ては同前なり、此歲外國奉行柴田日向守は幕命を奉じて英佛兩國に赴き横須賀造船所を取立つる爲めに佛國にて敎師士官を雇入れ佛英にて其の機械物品を買入るゝ事を命ぜられたり、源一郎は柴田に隨從して再び歐洲に赴き止まること數ケ月、翌年を以

て歸朝したり此時始めて佛語を學ぶ事を始めたり。翌慶應元年十月外國奉行支配調役格通辯御用頭取に進む（百五十俵三人扶持）御目見え以上の士分に列したれども畢竟格式と俸給の上りたる丈けにて中々議論などの出來る身分にあらず此時に當り長州の事ありて時勢は尤も切迫したり、源一郎は其前より鎖攘論の盛んなる中にて憚らず開國論を吐き西洋の事情など說きたるを以て大に鎖國家（幕府の士人等）の爲めに惡まれ危難に罹らんとせし事數度あり其上に功名心も盛んなりしかば何か一事を仕出さんとは思ひたれども家に老母あるを以て（父は此時既に死去したり）亡命することも成らざりき、斯て時事に付きて幕府の政治は凡庸輩の手に出でたるを見て益々不平に堪へず然ればとて議論は出來ず其邊よりして風流を喜び遊蕩を盡し自ら江左第一風流才子と稱し花柳の間に往來せしを幕府も敢て之を咎めざりき、既にして少しく悔い慶應二年下谷二長町に私塾を開き英佛語の敎授を官務の間に成したり、凡そ源一郎が長崎を去りて江戶に來りてより此時までに前後九年なれども性來讀書を好まず勉強も嫌ひなれば實は學問も出來ざりき其中にて僅に書を讀みたるは十八歲の書生の頃と前後兩度の歐行中と慶應二年の夏より秋までにてありき其餘は花柳の修行のみなれば花柳の實驗學術は其奧を窮めたれども肝心の學問の出來さるは甚だ

以て殘念の次第なり。

慶應三年十月大阪に赴きたり是れは大阪開市の御用向なり（時に二十七）此時恰も將軍慶喜公は大政を返上して十一月に大阪に下り給ひたれば上下の騷動一方ならず大阪城内は湯を沸すが如し、十二月末に至りて愈々將軍兵を率ゐて上洛し薩州の士輩を征伐すと議定し奏問狀を齎して先陣を出發せしめたるに鳥羽に拒まれて伏見の戰爭と相成る此時にも軍議に付源一郎は密に建議したる事もありたれども固より行はれず、凡そ慶應元年に歐洲より歸朝してより此時まで三年の間に或は外交の事或は內政の事に付建白書を出したるは前後十餘通に至りたれども其爲めに不首尾はありつれども一度も行はれたる事なし依て一生の間決して建白書は出すまじと覺悟したり。

慶應四年（即ち明治元年）正月源一郎は大阪に在り戰爭中なれば本務を休めて城內に籠りて頻りに戰略軍議など無用の辯を費したり、七日の曉に至りて初めて慶喜公は昨夜當城御立退きと聞きて奉行の詰所を見れば流石に奉行だけありて既に早く逃げて一人も居らず其の屬官十餘人を大阪城に居殘りに置きたり、依て源一郎は西氏諸人と共に書類等を一切取纏めて城を出で船を雇て安治川の陸地に其夜は一泊し翌八日の夜に船を出して神戶に赴きたり神戶は開港場なり兵庫奉

行柴田日向守は外國奉行をも兼任したれば其の指揮に由りて進退すべし此の場合に周章ては武士の恥辱なりとて九日の正午に神戸に着したるに柴田初め幕吏は皆負擔して逃げ支度最中なり江戸に歸る爲めに英國の蒸汽船を雇ひたりと云へり、然る上はとて源一郎は右の英船に乘り柴田等と共に難なく正月十一日を以て江戸に歸着したり。

慶喜公の江戸城に歸り給へるに當り幕府の群臣思ひ思ひに意見を述べて和戰の論議紛々たり、源一郎も此時罷り出て末席より戰論を述べたれども誰も聞入はなし既にして降伏と事定まり不服の連中は諸處に脱走し或は上野にも籠りたり、此時に當り新聞紙の刊行初めて世に行はれたり源一郎は此時なりと思ひて『江湖新聞』と題せる小册新聞紙を編輯して世に出したるに頗る評判よかりしが其年五月上野戰爭の後數日鎭守府の手に召捕へられ糺問所の獄に繫がれたり官軍に害あるの議論を草し人心を煽動したるの罪なり辯論尤も勉めたるに幸ひにして翌月を以て放免せられたり、七月に至り朝廷より徵されたれども源一郎は病を以て之を辭したり、既にして德川の舊臣は駿河に引移るべしと命ぜられたり源一郎は家族を橫濱に留め同志の朋友と共に靜岡に赴きたり居ること一ヶ月東京なる靜岡の役人より源一郎は曩に徵されたるも病と稱して靜岡に在るは不屆

なり急に歸京すべしと其筋よりの御沙汰なりとて急に歸るべしと申來る靜岡の役人も急に出發すべしと命ず去りとて旅費はなし出京出來不申と言ひ張りたるに靜岡藩は旅費を給し源一郎を追拂ひたり、源一郎は十一月を以て東京に來り自ら出頭して病氣の故を以て徵を辭する趣を述べたるに政府にては卽座に之を許され御用無しと申渡されたり。

旣にして靜岡藩よりも暇を申受けたれば源一郎は淺草に寓居を卜し夢の舍の主人と別號し或は戯作に或は飜譯を業として筆硯に生活の計を營み復た世事を顧みるの意なりき是も明治二年の事なり（時に二十九）此時松本順氏も放たれて東京に歸り共に花柳を談じたるに或日松本は源一郎に謀りて曰く、余は今より病院を建てゝ醫業を盛んに營むべし卿は如何と、福地曰く余も亦學校を興して英佛語學の世話すべしとて相約したり、松本は早稻田に病院を建て福地は湯島天神下に日新舍と名づけたる語學校を興したり（後に榊原某が之を引受けて共慣義塾と改めたり）生徒の集まる前後數百人に及べり、時に貴顯の士或は福地に面會すべしと招かるゝ事もありしかども謝して交りを望まざりき。明治三年の冬に至り澁澤榮一君の紹介を得て初めて伊藤參議（時に大藏少輔）に謁したり福地は深く伊藤公の大器に服し公も亦福地を識られたれば福地は其年の十二月を

以て初めて大藏省御雇（月給二百五十圓）と相成り芳川顯正、吉田次郎と共に、伊藤公に隨從して米國に赴きたり此行は專ら米國の會計法を取調べ、殊に國立銀行、公債招募、金銀貨幣の制度方法を實際に見聞して其の利害を討究する爲めなりければ滯在は僅に五ヶ月なりしと雖も其益を得たる事は莫大なりき。

明治四年六月を以て伊藤公と共に歸朝したり然るに銀行設立法案に付公の意見は某氏と相合はず伊藤公は造幣事務監督の爲に大阪に赴かれ福地も之に從ひて大阪に在り、其後伊藤公は東京に歸りて工部大輔に轉任せらる、時に政府は歐米各國に使節派遣の議ありて正使には岩倉公、副使には木戸、大久保、伊藤、山口の四公之を命ぜられ十餘名の書記官これに隨ひ其外各省より理事官を派出せられて同行は百餘名に至りぬ、伊藤公は福地に薦めて一等書記官に任ずるの命を大阪に傳へられて歸京を命ぜらる、福地は歸京して大藏省の模樣を聞くに銀行創立の趣向は幾ど伊藤公の議の如く行はるゝに付福地は止まりて其事務を擔當する方然るべしとの說もありしが政府に於て使節に隨從すべしと決せられたれば卽ち四年十二月を以て使節に從ひて先づ米國に赴きたり明治五年米國にて條約調印の議あり其爲めに大久保伊藤の兩公は一應歸朝して全權を得て再び米

國に來り給へるが條約も先づ見合せと相成りて其夏に英國に渡りて歳を越し六年の春を以て佛國に渡られたり、實は此時使節の御供も面白からず然るに土耳古、埃及には立會裁判を實行すると聞く間誰か實地を見せに遣はすべし福地を遣はす方然るべしとありて右の御用を命ぜられたり、於是福地は此年の三月を以て使節に別を告げ伊太利、希臘、土耳古、小亞細亞、埃及を歷遊し（島地默雷上人と同行なり）孟買に至り印度の大陸を過ぎ甲喀他に出で新嘉坡、香港を經て七月上旬に歸朝したり。

是より先福地が使節に從ひて歐米に赴くの時に當りて政府は國立銀行を設立せしめ金札引換公債を發行して徐々に不換紙幣を回收して正貨通用に復するの國是を定め大藏省に紙幣寮（今の印刷局と銀行局を兼たるもの）を置き之を管轄するの議を定めたれば國立銀行條例等は實に福地が擔當して明治四年に立案したるものなり、依て大藏大輔井上公（當時大藏卿大久保公は副使として歐米に赴かるゝに付井上公は大藏の全權を握れり）福地をして其任に當らしめんと思はれたる處福地が歐米行に付芳川顯正君代つて紙幣頭に任ぜられて之を擔當したり、斯る仔細もあれば福地は歸京の上にて再び大藏省に入りて財政に與らんと期して歸朝したるは明治六年七月なり、時

に井上大輔、澁澤三等出仕（榮一君）財政の目的政府の所見と相合はざるを以て其歳の五月に有名の辭表を上つりて辭職したり、福地は其後に歸り來り大隈參議の代りて財政を取りたるを見て志を大藏省に斷ちたり然れども大隈參議は深く福地の用ふべきを知り所見の合はざるに拘はらず歸朝後特別の待遇を與へられたり、福地は歸朝後其の報告書を外務卿に差出して別に轉任もせずして使節の歸朝を待ち居たり使節の歸朝後に恰も征韓論ありて內閣の更迭を招き副島、後藤板垣の諸公は冠を挂けられたり、引續き翌七年に至りては佐賀の役あり臺灣の役ありて時事皆福地の豫想外に出たり、時に木戸公は兎角その意見の當路者と異るを以て退隱の志ありければ福地も亦其志を起し明治七年三月を以て其職を辭したるに伊藤公は元來故舊に厚き人なれば福地が退きたるは氣の毒なり榮譽の地を與ふべしとありて人を以て說かしめられたれども福地は感謝して其志を變ぜず遂に其職を辭し夫れよりして世を面白からず思ひ風流のみを事として其財を失ひたり。

此時に當り新聞紙漸く再び世に行はれ（明治五年以來）新聞雜誌、日新眞事誌、東京日々新聞、郵便報知新聞、公文通誌（後の朝野新聞）橫濱每日新聞など其尤たるものなり、福地は大に喜び

て思へらく是れ我志を伸すに足るの業なりとて時々諸新聞に投書して時事を論じたり、其中にて東京日々新聞を創立したる條野傳平、廣岡幸助、落合幾次郎、西田傳助の諸人は曾て福地が江湖新聞を書きたる時にも事業を共にせし輩なれば舊情より此紙に志を篤くし、遂に諸氏と約し明治七年十二月よりして日報の社長に爲りたり、此時新聞紙の業は未だ幼稚なりければ執筆者も皆凡庸者流のみ其中にて錚々たるは僅に岸田吟香等の數人あるのみ其餘は概ね戲作者一般の人物なれば世上に於て更に新聞記者を尊重せず甚だしきは見て以て寒生の賤業なりと卑しめたり、然るに福地が其名を紙上に掲げたるを見て世人は大に驚き親友は交々之を諫めたれども福地は斷然聽かず社長となりてより日々新聞の紙面を改良し社説を書きて時務を論じ岸田吟香をして雜報を書かしめ忽ち世上の耳目を一洗して新聞紙の貴重なるを覺らしめたり、是れよりして報知には栗本鋤雲、藤田茂吉あり朝野には成島柳北、末廣重恭あり横濱毎日には沼間守一、肥塚龍ありて諸員紛々として各紙各地に出で今日の如くに新聞紙の地位を貴重ならしめたるは實に福地が其の嚆矢たるに由ると云はざる可からず。

福地の學問は元來これを英米に得たれば民權論、自由說、立憲政體議は其の平素に確持する所た

り然れども内外にありて多年政治界の閲歴に富みたるを以て深く急激の進歩を恐れたるが故にその日々新聞を主管する初めより秩序ある進歩を望みて夙に漸進主義を主唱したり、百方より攻撃せられたれども少しも屈せず飽まで其の主義を紙上に發揚して不羈不偏の思想を述ぶるを事としたり。明治八年に至りて初めて地方官會議を開かれ木戸參議その議長を承られたりこの會議は其の前年に有名なる大阪集會の結果にて大審院と共に立憲政體の聖詔（八年四月十四日）に由りて出たる會議なれば之が議長たるに德望と威權を兼備したるは恐らく木戸公の右に出る人は無かりしなり、此時福地は木戸公の内諭もありて太政官四等出仕に補せられ地方官會議の書記官となりたり（世間にては此時福地が木戸公の說を容れ地方官を凌ぎたりなど云へるは虛說なり）右の會議畢りて後に福地は直に辭表を出し其職を罷めて原の如く日報社に社長たり。（以下略す）

この自傳は明治十八年の春伊藤參議が特派全權大使となりて清國に赴いた時之に隨行して北京天津を歷遊した事で筆を止めて居るが、此の傳記の終りに

世間にて福地を才子と思ひ大に畏れども其實は才子に非ずして不才子の方なり、敏捷と云ふよりも寧ろ遲鈍の方なり○權謀術數に富むといふも實は至て不得手なり性質淡泊にして隱微は嫌ひな

り但し勘辨強き男なり〇學問は迚も學者の地位に立つこと能はず漢學も一ト通りなり英學も同斷なり文章なども三十歳頃までは詩文も少々出來たれども今は一切之を廢したり唯文は達意を旨とせり今日の流行文章は實は福地が書き始めたるものと云ふべし、其の文章は之を西洋文より得來れるなり〇或る小傳には福地は後漢書が大好きと見えたれども實は大嫌ひなり、支那の史類にては五代史が好きなり英文の史類にてはギツボンの羅馬衰亡史を讀むを好めり、一體の文はマコーレーを見本とすると云ふ怪しきものなり〇樂しみは讀書と談話なり談話は相手を嫌はず何の話にても面白し、書も其通りなり故に學問は博く雜駁なり其中にて稍や心を委ねたるは經濟學と外交學なるべし、談話の最も好物は子供の時の話なり竹馬の友に遇へばつまらぬ子供の時の話に時の移るを知らず故に一日交りを結びたる上は人と中違ひをなしたる事なし〇怒る事は最も稀なり腹が立てばチツと我慢して居れば其儘直るなり蓋し年少の時には敏捷にて記憶もよく喜怒の甚だしき男なりしが三十歳頃より凡て其の性質を一變したるは艱難の經歷を得たるが故なるべし〇議論には是非利害を明断しながら一身を處する上に於て常に誤る所あるは福地の短所なり是れ所謂人情にからまるが故なり、現に今日の廟堂貴顯は其の知己なれば何分これに背くに忍びず僕は情誼

の爲めに自說を枉ぐる事もありと云へり○薰陶はその長ずる所にや日報社にて福地の薰陶を得て立身したる人々多く末松謙澄、久保田貫一、池上三郎、海内果（死）など皆その人なり○書も甚だ學びたるに非ず長崎にて幼年の頃手習ひしたる迄なり但し父が書を善くしたる故に或は遺傳にや○平家を語ることは名人なり聞いて面白くない丈けの事なり。

と附記して居らるゝのは飾りなくその心事を打明けたもので、居士の蘊蓄、抱負、嗜好等を知る上に於て興味ある告白である。其後私は十八年以後に於ける居士の傳記を補綴せん事を思ひ立ち少しばかり書き始めた儘例の疎懶の癖で終に中止して仕舞つた、それから數年の後卽ち居士が日報社長の印綬を讓つて新聞界から退隱し、歌舞伎座の作者となつて築地二丁目に居られた頃久し振に訪問して、先年自傳を贈られた事を謝し且その傳記を補綴しかゝつた事をも話した時、居士は微笑して成程そんな事もあつたやうに覺えるが、自分は既に得意の時代を去つて今は失意の境遇に沈んで居るから我輩の傳記は明治十八年までを以て罷めて置いて貰ひたい、併し老後の思ひ出として心中に畫策して居る事もあるから其の發展までは身の上話も中止だと答へられた事がある、されば居士も何事か期する所があつたらしいのに其志を果さずして逝かれたのは甚だ殘念な事である（居士は

明治卅九年一月四日歿、享年六十六）

坪内逍遙先生が『小説神髓』を公けにされたのも亦十八年の事であつた。同書は綠雨氏から借りて私共も每夕社で通讀し、引續いて發行された『書生氣質』も綠雨氏は出版の都度之を懷にして出社し吾々にも見せて居た。そこで此『小說神髓』に於て著者が從來の勸懲主義を排斥し、小說は須らく心理的なるべしと疾呼された聲が當時の新聞小說家――卽ち舊派とでも名づくべき人々――の耳にどう響いたかといふ點は深く研究すべき問題であるが、單に私一個の觀察ではそれは空谷の跫音には相違なかつたが、舊派の人々が悉く其聲に目覺めて其の指導に從ひ步一步新しい道へ踏出したといふ程の影響は與へなかつたやうである。例せば魯文翁の如きはそれは理論に過ぎずしてまだ現代の讀者には歡ばれぬであらう、何となれば日本の小說は其の仕組を第一とし看る人に感興を與へるのが主眼だから、趣向の上に多少架空の細工を交へるのが當然で寧ろ是れが作者の働きといふべきである、尤もこの文明の世に神佛の奇瑞を說いたり妖怪變化を出すやうな事は避くべきであるが其の事柄を誇張し成るべく抽象的に書き顯はすのでなければ小說たるの價値はない、神髓の著者が只管人事自然の狀態を描寫するのが小說の主腦だといはれたのは所謂舶來の說であらうが日

本には日本の風がある、神髓の說は人の姿を寫眞に撮れといふやうなもので、寫眞は其人そつくり寫すのであるが眼で觀ての面白さは錦繪の絢爛たるに及ばぬではないか、小說は卽ち寫眞以上に潤色した錦繪で無ければならぬから、そこに多少の繪空事を附けるのが取りも直さず作者の技巧であるといふやうな議論であつた。とはいふものゝ事實に於て『小說神髓』は明治の新紀元を劃したもので、此頃より京傳馬琴の舊套を襲ふ者漸く減じ、文體も亦言文一致が行はれて一二年を出でずして小說界が全く一變したのである。

私は明治十九年に今日新聞を去つて大阪で發行する浪華新聞（明治九年頃の浪花新聞は花の字この浪華新聞は華の字を用ひて居た）に聘せられ坂崎紫瀾氏と共に同地に赴いた。私が新聞の創業に與つたのは前記の今日新聞とこの浪華新聞であつたが、此の新聞は大阪の辯護士岡崎高厚氏の經營で、紫瀾氏が主筆、私が雜報主任として乘込み本社を道修町に置き、其頃東京の萬朝報が桃色の用紙を使つて居たのに倣ひ薄綠色の用紙で刷り出したのであつた。其頃は俳優や藝人に限らず東京下りといふのが幅の利いた時代ゆゑ新聞記者にしてもその前年には種彥氏の高畠藍泉氏が大阪に來て文壇を賑はせ（此時は旣に歸京後）胡蝶園わかな氏は大阪朝日に在り、巖谷漣山人も京都日の出

新聞に筆を執つて居られ、畫家にも歌川國松、稻野年恒の二氏が來て居て、此の東京下りが物珍らしく且紙上へ嵯峨の屋おむろ氏の言文一致體の續き物を載せたので評判よく、最初の内は各商店の店頭に到る處綠色の新聞がチラ付いて居る程の賣れ行きであつたが、後には朝日新聞の爲めに壓倒せられ紫瀾氏と私とは翌年退社しその跡へ小宮山桂介氏が主筆として入社し發行を續けて居たのを廿一年ごろ神戸の豪商某が之を買收し、大阪日報とを併せて大阪每日新聞と改稱したのであつて、今の大阪每日新聞が則ちそれである。

坂崎紫瀾氏は通稱斌、高知縣の出身で、私は知らぬが氏の生家は高知の私の實家と僅に一町を隔てた處であつたと母から聞いた事があつた、元は司法官で長野縣下の某裁判所の判事を勤めて居たが其職を抛つて土陽新聞に入り筆に口に自由民權論を主張し、又坂本龍馬の傳を書いた小說『汗血千里駒』を著して名を文壇に轟かし、其後上京して繪入自由新聞社に入り口語體の論說を書いて又評判を取り、浪華新聞に入社以前には高輪の後藤伯邸內に寓居して同伯の傳記編纂に從事し、大阪より歸京後は後藤伯の大同團結にも關係して『政論』の記者となり、『國會』新聞では復た私と編輯局で机を並べ其頃は文藝に關する記事を受持つて居た、それから暫く消息が絶え明治三十六年ごろは

日本橋本白銀町の東京雑誌社から「東京」といふ雑誌を發行されて居たが、大正二年二月十七日牛込新小川町の自宅に於て享年六十一歳で逝かれた、氏は熱心な女權擴張論者で女子教育の事に就ては研究を怠らず、常に女學生を我家に養ひ晩年には朝鮮の女生徒數名を家に置いて自ら監督して居た事もあつた。

明治初期に於ける戲作者

前項に於て明治初期の小新聞記者に戯作者が多かつた事を述べたから、それに因んで私が曾て明治文化研究會に於て此の演題を以て講話をした筆記錄を、更に處々書き改めて茲に掲げその後談に充てる事とした。但し似寄つた問題ゆゑ往々前說と重複する所があるのは宜しく諒とせられん事を請うて置く。

今夕は幹事諸君から明治初期に於ける戯作者の狀態等に就て講話をせよとの御註文を受けましたから、不肖を顧みず暫時御淸聽をけがしますが、一體戯作者といふ名稱はいつの頃から起つたものでせうか。私はこれは安永天明頃に盛んに發行された黃表紙とか洒落本とかいふ滑稽がかつた讀み物の類を、他のまじめな著述物から區別して戯作と呼んだのが始まりで、戯作の著者だから其儘戯作者と呼んだのであるが、夫れが洒落や滑稽から遠ざかつて所謂勸懲主義の讀み本草雙紙が出るやうになつても其の著者がやはり元の戯作者であるから、因襲に由て依然之を戯作者と呼び來つたので有ませう。然るに言葉の泉や其他の字彙にはこの戯作といふ文字を「たはむれに著作する事」と解釋してあるのは甚だ不十分な說明で、私は寧ろ戯作とは今云ふ小說、戯作者とは小說家の事だと解釋するのが適當であらうと思ひます。

さて此の戲作者が當時の社會に於ける地位はどんなものであつたかを考へて見ると、夫れは太だ低級なもので、既に戲作者といふ名稱から見ても之を貶し之を卑しめたやうな意味が含まれて居る又作者自身もその位置の低いのに甘んじ謙遜か卑下かは知らぬが、自ら無學を標榜して自家の短處を臆面もなく吹聽して居る人が多い。獨り曲亭馬琴のみは向上心が強くこの戲作者と云はれるのを厭うて自重した風があつたが、其他は似たり寄つたりで、山東京傳は自畫像に題して「櫻木にのぼる姿は山王の猿に三本たらぬけ作者」と詠じ、式亭三馬は「詩は知らず歌はもとよりしらぬ火のつくすたはけは戲作者の德」と歌つて居るなど自ら輕んじ自ら卑しむるのも亦甚だしい……が、併しそれは時勢の然らしむる所で何とも致し方がない。當時學者と云へば漢學者に限つたやうな時代であるから獨り戲作者のみならず狂言作者然り、狂歌師然り、俳諧師然り、浮世繪師亦然りで、夫れが順押しに化政度となり、天保嘉永となり、其人は變つても戲作者たる價値には何等の變化もなくする／＼と明治の新時代に入つたのであります。

そこで明治初期卽ち元年から十五年までを假に一期として、此間に戲作者畠に育つたどんな人々が維新前から流れ込んで來たかと云へば

假名垣魯文	野崎氏、明治廿七年歿、年六十六
二世 爲永春水	染崎氏、明治十九年歿、年六十四
山々亭有人	條野氏、明治卅五年歿、年七十二
三世 柳亭種彦	高畠氏、明治十八年歿、年四十八
萬亭應賀	服部氏、明治廿三年歿、年七十二
梅亭金鵞	瓜生氏、明治廿六年歿、年七十三
文亭梅彦	四方氏、明治廿九年歿、年七十五
二世 梅暮里谷峨	萩原氏、明治十九年歿、年六十七
爲永春江	知久氏？明治廿九年歿、年七十九
二世 岳亭仙果	篠田氏、明治十七年歿、年四十八
三世 紙鳶堂風來	河原氏、明治廿二三年頃歿、年五十餘
柳水亭種清	櫻澤氏、明治四十年歿、年八十七
山閑人交來	武田氏、明治十五年歿、年五十六

二世岳亭定岡　岡部氏、明治二十年頃歿、享年未詳
四十世返舎一九　三浦氏、明治十四年歿、享年未詳
三世鳥亭焉馬　木元氏、明治十八年頃歿、享年未詳
瓢々亭泉成　大久保氏？明治十九年歿、年五十餘
三世森羅亭萬象　樋口氏、明治初年歿すと云ふ、享年未詳

先づざつとこんなものでせうが、まだ明治の初年には

二世柳亭種彦　高橋氏（初代笠亭仙果）明治元年歿、年六十三
平亭銀鶏　畑氏、明治三年歿、年八十一

があり、又これは戯作の專門家ではないが其の後援者ともいふべき

達磨屋五一　岩本氏、明治元年歿、年五十二
香以山人　細木氏、明治三年歿、年四十九

等も足を明治へ跨いで居ります。多士濟々とまでは行かぬが戯作者としては可なりの人數が明治初期には生存して居たのです。

一體此の人々はどれだけの素養があつて常にどんな抱負どんな希望を持つて居たのか、又その生活振はどんなであつたかと云ふのが今夕の主題でありますが、夫れは銘々個々の考へもあり生活狀態も各自に異つて居たのだから、一概に斷定する事は出來ませんが、私は只一時この仲間に交はつて見聞した事即ち纔かにその一斑をお話しするのに過ぎないのであります。

明治維新の當時はあらゆる事物の革新改造に忙はしく、文學上に取つても亦實に混沌たる時代であつた。私は明治二三年間は學校に寄宿して居た頃で年齡もやつと十二三歲（玆に掲げた寫眞の後列左端が私で、前列右より一が舍兄の松井捷悟、中央が栗塚省吾氏・左端が今の男爵古市公威氏、後列右端が京都の人西某氏である）固より確乎とした前途の志望もなくうか〳〵と其日を送つて居たのですから、世上の形勢等に就て何等の注意を拂つた事もない。只其頃から小說類が好きで殊に滑稽の作に趣味を有し貸本屋の定得意となつて、課業の復習よりはこの貸本を讀む爲に夜を更かした事もあつたが、其頃は戲作としての新版物は稀であつて僅かに草雙紙の數種、夫れも維新前から持越しの『白縫譚』や『八犬傳犬の草紙』等の續編が途切れ〳〵に發行されて居たのを幽かに記憶して居る。今から思へば明治七八年頃までは戲作者に取つての饑饉年で、地本問屋からの註文もな

く、偶々合卷物の類が出版された處でその讀者の大部分を占める舊幕臣や御殿女中などは生活問題に迫られて身の振り方に惑うて居る混亂時代であるから中々慰安として小說でも讀まうと云ふ心に餘裕がなく、町家の婦女子も共通りで賣れ行も頗る鈍つて居たものと思はれる。イヤ是れは唯戲作者

著者の學生時代（明治三年）

のみでは無く所謂江戶趣味の破壞と共にそれに基く所の總ての藝術は根柢から覆へされたのであつた。唯一つ演劇のみは餘り多く此の影響を蒙らず猿若町の三座とも引續いて興行し、大入とまでは行かずとも相應の客を呼んで居た。明治二三年ごろには中村座には大谷廣次（後の友右衞門）尾上菊五郎、坂東三津五郎が居り、市村座には河原崎權之助（後の團十郎）尾上菊次郎、市川九藏等が座附で、守田座は芝翫、訥升、左團次といふ一座で、菊五郎が中村座から二番目だけをスケに出て居た。私が始めて芝居を見たのは守田座で「慶

安太平記』が書卸され、左團次が丸橋忠彌の初役で當てた時であつたが子供心にも頗る面白く感じて此の芝居は二度まで見物したので、今でも一座の立者は固より鴈八（後の鶴藏）喜知六、鷺助（後の傳五郎）八藏なんどいふ相中の面影までが髣髴として目先にチラつき、其の場面でも忠彌捕物の場で最初見た時は目潰しの石を投げるのがタツタ一度であつたのを、後には之を目まぐるしいやうに投げる事に改めたり、作左衛門の娘の首を後には多賀之丞の本首で見せるやうにした事などを朧氣ながら記憶して居る。曾て故幸堂得知翁が十餘歳の頃見物した芝居の評を書いたとかで大に攻撃せられた事があつたが、強く感じた事はいつまでも腦裡に染み込んで忘れぬといふ自分の實驗から見て、得知翁の幼い時に感じた事もやはり其通りであつたらうと私は同情を禁じ得ない。

ツイ餘談に渉りましたから話元へ戻るとして、私は其後學資が續かぬので中途で退學し、鐵道寮や工部省の小役人となつて居たが、曾て通讀した『滑稽富士詣』でその作者假名垣魯文の名を識りそれが現存者で又同僚河原英吉氏（後の三世風來）の舊知である事を聞き、その人を敬慕のあまり河原氏の紹介で魯文翁の門に入つたのが明治九年であつた。併しその門人になつたからとて直に官職を辭したのではなく、折々師の門を叩いて談話を聞き又是れまでは單に娛樂一方に讀んで居た稗

史類を職業的……言ひ換れば稍研究的……に讀み直して居たのに過ぎず、又其頃より小新聞に投書する事が流行して居たので私も亦この投書家の群に入つて、今から思へば愚にもつかぬ文を綴つて『假名讀』其他の新聞に投稿し、それが紙上て掲載されると宛も鬼の首でも取つたやうな喜びで友人達へ見せ廻つて誇つて居たのです。つまり私が戲作者生活に入り他の戲作者と交際し始めたのは明治十年以後、それも魯文翁の外は僅々四五名に過ぎなかつたゆゑ、玆には魯文翁を代表者としてお話を進めます。

其頃の戲作者を振返つて見ると、學問は一體に淺博で迚も馬琴の四半分も古籍を涉獵した人は無かつたやうです。私の口から師翁を評するのは禮誼に悖るかも知れませんが魯翁もやはり三馬の「詩は知らず歌はもとより」のお仲間で、自著の序文などでは臆面もなく自家の淺學を披露し、且戲作者を說明して愚を賣つて口を糊するものだと述べ、そして常に馬琴の博識ぶるのを嘲つて居ました。その學問と云へば漢籍は四書が關の山、國文も『枕の草子』『徒然草』ぐらゐに止まつて居たやうですが、其代り稗史類には多く目を通し室町時代の草子物語の事が話題に上つた事もあり、西鶴ものはどうであつたか知らぬが、近松以後の淨瑠璃ものは通讀して居たらしく、別に演劇に就

ては一隻眼を有しその藏書中にも芝居に關するものが一番多かつた。又自作小說の文中に漢土の故事などを引く場合には『蒙求』『古文眞寶』ぐらゐが參考書で、冒頭などに形容がゝつた文句を連ねる場合は『圓機活法』から對句をさがし出して之を引用するのが例であつた。それから翁が小說に對する理想は元來戲作は學者君子に讀ませるものでなく、童蒙婦女子の慰みに供するものであるから、讀者の理解し得る知識を程度として成可く通俗的に書く事が大切で、早く云へば小說は字で書いた芝居と同じ事で無ければならぬ。只世間の出來事を其儘寫すのでは面白くないから之に多少の趣向を加へ潤色を施して之を美化せねばならぬのであるから、人物の性格にしても芝居でする善人は白面、惡人は赤面といふが如く、あたまから讀者に解り易いやうに書き顯さねばならぬといふやうな持論であつた。

爲永春水翁の生活ぶりは精しくは知らず、三世柳亭種彦氏は初代種彦に私淑して居た人だけに『源氏物語』は熟讀し、又自ら元祿時代の硏究家を以て任じて居たので、西鶴ものゝ元祿文學にも通曉し、別に一事は畫家を以て世渡りをして居た人ゆゑ繪畫類の鑑定に長じ、明治十四五年頃は當時の好事家たる岸田吟香、關根只誠、柏木探古、假名垣魯文、竹内久一、大久保紫香、五姓田芳柳

等の諸氏と共に探古小集と名づけて持寄品の品評會を催して居られた事もあつた。要するに魯、春、種三氏の學問の深さは似たり寄つたりで草雙紙の作では春水翁が年功だけに一段抽んでて居たやうで、そして此人々の內に洋書を讀み得るのは先づ皆無の姿であつた。

イヤ洋書の讀める人は私の知る所ではタツタ一人あつたそれは前にも記した三世風來の河原英吉氏で、此人は魯文翁と同じ畠の戲作者育ちで多少漢學の素養もあり董其昌流の筆蹟も麗しかつたが中年から英書を學びやつと英人と會話が出來るやうになつた頃鐵道寮の技手となり、私も同じく技術見習生であつたので、一緒に外國技師に附いて測量に出掛け、又製圖などに從事して居たが、或る年河原氏と私とが外國の技師長に從ひ丹波の龜岡へ石材の見分に出掛けた時、山中で數名の西國の遍路に出逢ひ、アレは何ぞと技師長に聞かれて私は巡禮といふ英語を知らず答へに躊躇して居るのを見て、河原氏は委細構はず They are Bibles とやつて除けた、「彼等は聖書である」とは甚だ難解な説明であるが、それでも技師長には解つたかして其時は夫れで濟んだが、此事は後々までも一ツ話として殘り私などは河原氏をバイブル先生と呼んで居た。當時(明治五六年頃)に在つてはパーレーの萬國史一冊を讀過した者は一廉の英學者と見做され、外國人を雇傭する官廳では通辯役とし

て採用せられる抔一體に英學の幼稚な時代であつたから、今でこそ笑ふやうなもの丶世間には河原氏以外に幾多のバイブル先生があつたから、若し同氏以外の戯作者に英語を解し得る者があつたとしても、矢張り此位の低い程度のものであつたらうと想像される。

今度は收入の點に移りますが、昔から名高い戯作者と雖もその潤筆料だけでは一家の生計を支へて行く事が出來なかつたやうである。多作家の馬琴すら片商賣に神女湯其他家傳の丸藥を鬻ぎ、京傳は煙草入を商ひ、三馬は江戸の水本舗の看板を掲げ、種彦は旗本の家祿がありながら猶柳亭好みの煙管煙草入を賣出させた抔は皆暮し向の補足にしたのであつて、近くは魯文翁は牛の煉藥黑牡丹を鬻ぎ、二世春水翁は一時古本屋を營んだ事があり、三世種彦氏は畫を描いて大道で賣つて居た抔が其の實例で、維新前後の戯作者に至つては迚も筆一本では顎の下は養ひ難く、一身も落付かずして流離困憊甚だみじめな生活を續けて居たのであらう。

全體戯作者の潤筆料はどんな相場であつたらうか。これは魯文翁の自記に據ると安政頃の切付本（枚數五十丁、內さし畫十丁）一冊の作料が金貳分、引札ちらしの案文が貳朱の規定であつたと陳べて居る。猶魯翁は同二年十月二日に一冊の讀切本を脫稿し其草稿を通二丁目の書肆糸屋庄兵衛

方へ妻よしをして持たせ遣り、定めの作料金貳分を受取り來り、內壹分を地代の滯りに拂ひ殘り壹分にて米を買ひ、妻は井戸端で米を洗ひ自分は蒲團を被つて書見中、突如としてかの安政の大地震が起り魯翁は梯子の下で壁土に埋められた事も記して居る。今此の字數を計算して見ると讀切本一枚約三十字詰め二十二行として本文四十枚の字數が二萬六千四百字（序文は別）之を現時の四百字の原稿紙に引直せば六十六枚で、一枚當りの潤筆料が七厘六毛となる。いかに物價の安かつた時とは云へ全然お話にもならぬ程の低廉なものである。魯翁はまた此の地震後一筆庵英壽との合作で『安政見聞誌』三冊を著し、此時書肆三河屋鐵五郎から受取つた作料が英壽と折半して一人五兩足らずであつたと云ふ。是れは際物だけに幾分か潤格は高かつたものと見られるが、尤もこれは單に筆料のみではなく過半は實地調査の費用に充てられたとするのが當然ゆゑ、普通潤筆料の標準とする事は出來ぬのである。而して此の潤筆料も追々相場が上つて幕末（慶應）には合卷物一部（上中下三冊）の作料が參兩乃至五兩の間であつたとの事である。

又是れは魯文翁から直接聞いたのではないが、明治三年に魯翁が『西洋道中膝栗毛』の初編を著した時の作料が一編十兩であつたと云ふ、併し年を逐ひ編を重ねるに隨つてその作料は段々騰貴し

たのであらうが、維新前に比較して一部十兩の作料は或はレコード破りであつたかも知れぬ。尤も當時は合巻物でも讀み本でも一時に十數編を賣出すといふ事はなく、猶舊例を守つて多くの場合春秋二季に僅々一二編づゝ賣出すのが慣習であつたから、一人の戯作者が一ケ年に數種數部の新作物を著す事はなく……イヤ著したいにも之を引受ける書肆がないので……維新後に於ける新著の出版は太だ寥々たるもので、稍や世評に上つた『西洋道中膝栗毛』ですら第十五編の大尾を出版する迄に七ケ年を費して居る。随つて戯作者がその作物から得る所の收入はやはり微々たるものであつた。夫れならば戯作者は皆餓死して了ふ道理であるが然うでもなく、平生貧乏な割合には案外暢氣なもので、花柳界の視察を名として吉原品川へ浮かれ込み、芝居も見物し得られるだけの餘裕があつたのは果してどういふ譯かと云へば、是れは全く一二の後援者があつたのに外ならぬ。他の者は偖措き魯文翁のみに就て言へば、翁の後援者としては最初に評定所の留役榎本總助があり、中ごろは金座役人の高野某（號醉櫻軒）大傳馬町の豪商勝田某（號春の屋幾久）があり、最後に今紀文と稱せられた津藤の香以山人があつた。是れは十八大通の一人たる文魚と京傳との間柄の如く、香以山人は自分の取巻として常に戯作者、狂言作者、狂歌師、俳諧師、浮世繪師等を遊山や遊興の席に伴

ひ、義捐的に平生の生活費をも貢ぎ時には仕着せや煙草入其他の物品を惠與する事もあつた。而してこの恩惠に浴した者には魯文を始め山々亭有人、河竹新七、瀬川如皐、梅素玄魚、落合芳幾、梅廼屋鶴子、彌生庵雛群、其角堂永機、等、等、等があつた。殊に魯翁は兼吉と呼ばれた小僧の時からの相識であつた爲めに一層香以に愛せられて其の保護を受けたのが多かつたが、其代り取卷といふ悲しさには吉原の大籬で遊ぶにしても香以と對等の△おいらんを買ふ事は出來ずいつも番新を相方として居た處がまた京傳の場合とよく似て居る。

苟くも操觚者を以て任ずる者が惡く言へば幇間同樣金滿家の襟に着いてその鼻息を窺ひ、その恩澤を蒙るのを以て一身上の晴かのやうに心得て居たのは卑屈千萬な話ではあるが、當時の社會狀態から考へて見ると戲作者などは世間から位置の高い神聖な職業とは認められず殆ど藝人抔と同等視せられ、戲作者自身も亦我身を輕んじ愚を賣つて口を糊する者だぐらゐに心得、報酬の點から云つても講談師や落語家よりも少い收入に甘んじて居たのだから、中々人格を保つ程の餘力もなく生活上已むを得ず富豪の膝下に屈伏した次第で、此邊の事情を察すると誠に憐れむべく悲しむべきものがある。其の反證としてはまるで後援者が無かつた他の戲作者中には維新當時は窮迫殆ど其極に達

し弱さへ啜り得なかつた者があつたといふから、兎も角も戯作者たる職を失はず辛うじて命脈を繋ぎ得たのは全くこの後援者のお蔭だと言はねばならぬ。

魯文翁が後援者に依てかつ／＼世を渡つて居たのも亦維新前の事で、香以山人は零落して慶應の始め下總寒川へ退隱したので、魯翁は忽ち盲が杖を失うたと同然また元の素寒貧となつて淺草馬道寢釋迦堂附近の棟割長屋にくすぶつて居る事となつた。そこで何か臨時の收得を計るつもりで明治二年には山々亭有人氏と共に山東京傳の机塚修繕を名として花會やうのものを催さんとの目論見であつたが、惡摺などで其の計略を發かれ散々に攻撃せられたので是れも終に中止するに至つた。翌三年以後は前にも述べた『西洋道中膝栗毛』外五六の戯作物を著したが是れとて僅々數ケ月の暮し向を支へるに過ぎずして煩悶の結果、迚も筆だけでは飯が食へぬものと諦めたものと見えて明治七年には山東直砥氏の口入れで神奈川縣廳の雇を拜命して二十圓の月給に有付き不十分ながらも始めて生活の安定を得たとの事である。此時に興味ある一挿話がある。それは時の神奈川縣令大江卓氏は民情を視察するには能く下情に通じたる者をして縣下を巡回視察せしめるに限るといふ立論から魯文翁をこの役目に充てたのであつた。此時魯翁は野崎文藏の通稱を廢し假名垣魯文の戯號を其儘

本名として居たのであつたが、先づ教育の普及を計らん爲め翁は縣下を巡回し時には村民を集めて訓示演說をする事もあつた。そこで或る日或る驛で一場の演說を濟ました後旅店に投宿し、湯殿に至つて汗を流して居る折同じ湯殿に居た客がひとりの連に向ひ「ナンと今日巡回して來た役人は珍らしい名前ではないか」と云へば連の人は答へて「アレを知らぬかアレは名高い戲作者だヨ」といふ「ムヽさうか夫れで俺も思ひ出したが、併しそんな戲作をする人が教育の說諭も可笑しい話だ、若し其人に子供を托して教育でもさせたなら、大事な息子をあたら放蕩者に仕上げるだらう」と言ひ終つて始めて魯翁のそこに居るのに心付き、是れは失敗したといふ風で跡をも見ずに逃出したが其言うた人よりは片聞きをした魯文の方が赤面し、成程これは適評だと大に我身を省みる所があつたと、是れは魯文翁自らの物語であつた。

比較的多作家にして且相應に名前も弘まつて居た魯文ですら猶此の如く戲作者としての生存に苦しんで居た。況や著作の數も少なく名前さへ埋もれて居た他の戲作者の生活狀態はどんなであつたらうか、夫れは言ふ迄もなく甚だ哀れはかない有様であつたのに相違ない。然るに時節到來して玆に戲作者が一方に活路を求めて發展するに至つたのは實に明治七八年以後の小新聞の發行である。

御承知の通り當時の新聞には大新聞小新聞の區別があつた。政論を專らとする大新聞には修養ある政治家法律家等それ〳〵適當な記者があつたが、サテ小新聞に至つては其書く事が多く中流以下の家庭向で主として俗談平話的に社會の出來事を報道するのであるから堅くるしい學者の筆では間に合はず、どうしても軟文に馴れた人でなければ之に適しなかつた。況や其の讀者がやはり合卷草雙紙の讀者と同じ程度の人々であるから、戯作者に取つては誠にお誂へ向の新職業で我も〳〵と此小新聞記者に鞍替へした人が多かつた。

不安極まる戯作者から新聞記者になつて見ると其の仕事は馴れた文筆業であり、收入の點から云つても月々定まつた俸給の外種々の臨時收入もあつて始めて生活難を免れ得たのである。茲でも又魯文翁を引合ひに出すのであるが、翁が明治八年假名讀新聞の主筆となつた時の俸給が四十圓、同十一年いろは新聞に轉じた時が五十圓であつた。其頃の四五十圓は五六倍として今の約參百圓に相當するが此外に臨時著作の原稿料や引札類の潤筆料（その頃料理屋待合等の引札は魯文の筆に限るやうな流行で、その作料は一枚貳圓見當であつた）又は他人の著作へ單に校閲として署名したばかりで若干の名前料が取れる事があり、自家新聞紙上での紹介其頃に云ふ提燈持の謝禮として若干の

包み金を受ける事もあり、是れ等の雜收入を合算すれば優に俸給の倍額に上つたのである。明治十年ごろ（西南戰爭の鎭定後物價は稍や騰貴したが）は白米が一圓に一斗四五升、酒一升が三十錢以下、湯錢が八厘、理髪料が十錢以下、雲井煙草が十二錢、盛蕎麥が八厘、黄田川の牛鍋が一人前八錢、天金の天麩羅が十二錢、人力車賃が一里八錢それも歸り車であれば新橋から雷門まで六錢で乘られた時代であるから、百圓といふ月收があれば中流以上の生活は樂々と營み得られたのである況や慰安としての觀劇は多くの場合が招待、茶屋遊びも御馳走に預かる事が多いゆゑ、之を魯翁が安政頃本文四十枚の切付け本を金貳分で書いて居た時と比較すれば物價の相違はあつたにしても、翁は夜店商人が俄に成金になつたやうな心持であつたかも知れぬ。その生計が豊になつたと共に翁は明治十三年新富町新富座南寄りの地に佛骨庵といふ草庵を新築し、妻君と長男熊太郎との三人暮しで少女ひとりを召使ひ、翁自身は古佛像や骨董品を蒐集して樂しんでゐたくらゐで、一家の經濟上にも餘程の餘裕があつたやうに見受けられた。それから後は新富町河岸の土藏付家屋に移轉し、いろは新聞に勤めて居た頃が翁の一生を通じて最も得意の時代であつた。

春水種彦兩氏は其頃果して何程の俸給を得て居たのかは不明であるが、魯文翁と同樣四五十圓の

間と見て間違ひなからうと思ふ。――明治十五年に種彦氏が大阪の大東日報へ聘せられた時の俸給が八十圓であつたといふ――殊に種彦氏は一旦新聞や雜誌へ出た續き物や創作の小說を草雙紙體木版畫入本文は活版摺の單行本として發行するのを創始された人ゆゑ、之から得る所の作料もあり又魯翁と同樣の臨時收入もあり、その暮し向は魯文翁と同程度と見做しても宜しからう。――晚年は頗る零落せられたが――其頃種彦氏は京橋彌左衞門町の二等煉瓦家屋に住ひ、日當りのよい二階へ上つて見るとそこに書室と客間があつて書畫類や骨董品がその隅々に亂雜に置かれてあつた。而して私の訪問したのは僅か四五回であつたが其の都度いつも意氣な來客があつたのを見ると氏は風流場裡の交際家であつたと見える。

次に吾々第二流どころの生活振をお話しすれば戲作者の門人から小新聞の記者となり、續き物の一つも受持つやうになつた者の俸給が十五圓乃至二十五圓――平均して二十圓――であつた。別に地方新聞の續き物でも書けば是れが一回三十錢から五十錢、平均して一ケ月十二圓ぐらゐの收入となり、又世間に事變でもあれば新聞の記事を種にして際物の小冊子を作つたり、馬琴京傳などの稗史の飜刻物を校訂したり、他人の代作を引受けたりすれば之が相當の臨時收入となつて、月俸を倂

せて一ケ月四五十圓の實入りはある。其頃の下宿料は三圓五十錢から五圓止りであつたから獨身者ならば殘り四十五圓が小遣ひである、私は之に多少の財産を添へて悉く遊蕩に遣ひ捨てたのであるから殘るものは借金だけであつたが、心掛けのよい人は此内を貯蓄して小意氣な家屋を買取つた人もあつたのです。

サテ當時の戲作者が一躍して小新聞記者となつた時、新聞記者たる責任を自覺し社會の木鐸、文明の先導者たる使命を全うし、又その小說の筆を執るに當つてこれを純文學の價値あるものに仕上て自分の地位を高めんとの希望を以て之に向つたかといふに、殘念ながらそんな立派な抱負はなく、唯單に筆を執る職掌の戲作者が生活上同じ筆を執る新聞記者に轉職したといふ丈けに止まり、畢竟名は新聞記者でも其實質は依然たる元の戲作者であつて、つまり明治の戲作中には一人だも馬琴だけの心懸けある者を見出す事が出來なかつた。勿論之れは小新聞記者自身ばかりの罪ではなく世間でも新聞屋さん抔と稱へてやはり昔日の戲作者に對するぐらゐの心持で待遇し左のみ尊敬の意は拂つて居なかつたのである。それが一年たち二年たち人からも敎へられながら其の責任の輕からぬのを覺つたには相違ないが、古い天窓の先輩は泰西の文學を咀嚼するだけの準備に乏しく、唯文

明の皮相のみを受賣するぐらゐに止まつて世と共に推移ることを知らず、小説の脚色にしても勸善懲惡の舊套を脱する事を得なかつたのである。年の若い後進者には幾分か新しい學問をした人があつたらうが、是れも亦その素養が不十分であり、さればとて急に秩序立つた學問をする暇がなく、是れではならぬと氣が付きながらも目前の偸安に馴れて將來の希望を實顯させる丈けの奮闘力もなく、惡く言へば薄志弱行で自然の成行にまかせ　唯順從りに押されて行くうち何時の間にか後から詰掛けて來た新人の爲めに突落され、斯くして明治二十年後に戯作者は全然世間から葬り去られて、茲に時勢の風潮に伴ふ新陳代謝が完全に行はれたのでありませう。併し斯うは申すもの丶所謂混沌時代に在つて生活の苦しい中から曲りなりにも軟文學の命脈を繋ぎ止め、之を新人の手に受渡しを了た迄の功勞は認めてやつて貰ひたいもので、一面時勢の背景から觀れば今の文士と呼ばる丶人々にしても是れが明治の初年であつたら矢張り同じ境遇にさまようて居たかも知れぬからであります。

終りに臨んで一言申し添へたいのは此の講話に就いては何等參考とすべき文献の持合せが無く唯幽かな記憶を辿つてお話しゝたのであるからその物足らぬ處は呉々も御宥恕を願ふのであります。

稗史年代記の一部

故魯文翁舊著の稿本に『稗史年代記』といふのがある。冒頭に「序に出まするは芳譚雜誌でおなじみの」云々とあるのを見ればこれは一度芳譚雜誌へ連載された草稿を更に校訂して一冊としたものらしく、魯翁自筆の書入れや、骨董舍、豐山等の藏書印も捺してある。其の内容は式亭三馬の臆說年代記を經としてこれに註釋を加へて小說の沿革を敍述したもので、後段に至つて翁が嘉永二年名弘めの『名聞面赤本』といふ小冊の摺物を配つた時、祝ひの狂歌俳句等を贈られた曲亭馬琴以下當時の戲作者四十一名の小傳をも載せて居る。前章に於て明治初年の戲作者に就て一言した因みもあれば其の參考として茲に稗史年代記後半全部を採錄する事とした。但その小傳中〔追補〕とあるは編者の私が後で書き加へたのである。

且說前齣に記せし同時代には數名の作者も見えたれども其作二三に過ぎず、或は世に行はれずしてかき消す如く成りし名目は一々擧げも盡さず、少しく記憶せし事も今はとて思ひ出さず、爰に此記を綴らんと思ひ立ちし日久しく手文庫に打込み置し古き反故ども搔搜りしに、其内より一箇の薄册を取り出しぬ、こは魯生が十九といへる春嘉永元戊申年、故花笠文京の門に遊び假初に戲作の筆採りし頃和堂珍海と號せし戲名を花笠魯介文京の門人に成りたりとて英魯文（一號鈍亭）と改めた

る折、改號披露の摺物を製せんとて文京に謀り、當時名高き作者畫工及び狂歌俳諧に聞えし人々の詠吟を乞はんとて、同年初夏の頃より諸家を訪ひ狂歌發句の別ちなく乞ひ集めて、翌二年己酉の早春之を年玉代りに配りたる薄册、紙魚の巣となりて破れ損じたるを是れ幸ひの便宜なりと此の摺册に依て忘れたるをも思ひ出たり、其時世に雷名の曲亭翁に一度見えて贊成の一首を乞はんものをと、嘉永元年の七月頃文京に屬きて四谷信濃殿町なる著作堂に推參せり、此時曲亭翁は老眼衰耗して瞽者の如くなりし頃とて固辭せられしを、文京魯生が爲めに強て乞ひ即時に翁の一首を得たり、此狂詠の代筆は翁が亡男瀧澤宗伯琴嶺居士の未亡人と聞えし年齡五十に餘りぬる老女なりき、斯てより〳〵諸大家の言の葉を摘みとり表題の繪は溪齋英泉に賴み版下の筆耕は田端松軒に托して剞劂師の手にゆだねしが、此の摺册製本に至らぬ前同年(即ち嘉永元)十一月六日に曲亭翁は身まかれりと後に文京の話に聞きぬ。明れば同二年己酉の春彼の薄册刻成り製本出來あがりしを取敢ず花笠が手にて諸子の許に配達せりとぞ、此事今を距る三十六年前の幼稚業にて帖中詠吟の人物に魯生を加へて總て四十二名、其内開明の今日に現存し健康にして未だ筆を斷たざる人狂言作者に河竹新七(默阿彌)老人と二世爲永春水翁(目今繪入新聞記者染崎延房氏)と魯生との三個のみ、三十九名

皆故人となりしは嗚呼夢なれや夢なれや。

附云、魯生が昔年摺冊の狂歌俳句を附與せられたる諸大家の詠吟にその小傳を附錄して左に掲載し、之に依て元祿より嘉永までの戲作者の概略を盡さんとす。世の稗史通一讀ありて記者が倉卒の粗漏杜撰を補正し給はらば幸甚。

幼き頃寺子（今云ふ小學生徒）業に習ひ卒たるいろは歌名題などの清書を成長て後こは汝が昔日書きたりし文字なりとて見せらるゝ身は如何に恥かゝやかしき心地やすらん。此事は曲亭翁も物の本に記されたるが魯生は素より物書き文學ぶ暇なき町家の丁稚小僧にして、年九歳より知命を過ぎし今日まで汲々として雅俗の庇間に潛みし身なれば長夜の夢未だ覺めず、前にも云へる青年の頃假初に戲作者の群に入りし戲號披露の印本の革庫に殘れるを搜り出しつ、其の全帖を此處に寫し諸子が詠吟を掲げる序更にその小傳を諳記傍聞の儘傍らに註せるを世に恥ぢず、是れやめくら蛇物に怖ぢずの諺にや似たらんか。

題號　**名聞面赤本**　全

英魯文作
溪齋英泉畫

夫れ夫子は童謠をすてず斑固巷説をとる、それから思ひ机に寄り、下手の描きし人丸ならで天窓かく山濺くり、稗史を戯作の手習始めに筆掛の初登山にのぼり、難波津の梅の花笠大人に寺入して、先讀習ふ實語教人貴たるが故にたんと不書と、京傳翁が秀句を思ひ兼て書抜く故事來歴、神釋無常口說の文句彼の丸本を六韜三略、たしなき智慧を絞りてもくゝり枕は碎くによしなく、何でも四文の切抜文作まだ口嘴も黄表紙の、筋と畫組は生捕るとも芝居不知の野暮鶯、訛も多き作者ぶりはをこがま識者の笑ひをとれり、昔々あつた土佐繪の古風を慕ひ、金平本を始めとして世に流れたる桃太郎、人並に毛の三本足らぬ猿蟹合戰舌切雀の舌たるき、作意ながらも版本からお宿はどこぢやとお尋ねありて、一番誂へたまひなば夫こそ枯木に花咲爺、鯛の味噌ずのなまぐさ鍋四方のあかの他人ともなしたまはず、其評判を待かね山の郭公何と童蒙衆合點かと、ひたすら願ふ商ひ口今年戯作に仲間入して、古き作者と諸共に同じく肩を並べんとは、大木の切口太い根ぢやふてらこい。

嘉永二己酉春　　赤本の口調に准ひて　　英　魯文

門人魯文なる者嘗て別號して和堂珍海とよび數種の稗史を編めり

通用の能きこそ人の寶なれ錢と言はずに筆を採るべし　花笠文京

魯曰、文京は醫家東條龍溪の長男にして近年有名の儒士東條琴臺の舍兄たり、壯年の頃劇を好み遂に四代目鶴屋南北の門に入り狂言作者となりて花笠魯介と號す。然れどもなまなかに學問ありて却てその見識本業を妨げ、舞臺の脚色妙ならずと自ら覺りて劇場を去り、戯作者となりて他人の代作を業とし、西遊して歸府の後淺草茅町今の須原屋書肆の向ひ裏家に栖みて一號を代作屋大朔とよべり、狂言作者の頃李園春色臺、三芝居士等の數號あり、晩年老寄して深川佃地の寓居に歿す、時に安政七（改元萬延元）庚申年三月三日齡七十六、門人魯文京鶴等棺を舁ぎて茶毘所に送り其の遺骨を魯文が墓所谷中永久禪寺に埋葬し纔に標碑を殘せしが、上野戰爭の刻み砲丸飛び來りて其の小碑粉碎せり、依て這般魯文等二世文京と計りて同地天王寺猫塚の傍らに碑銘再建近日にあり。法號齡峰魯鈍信士。

はる雨に今宵夜とともに語らばや　立亭京樂

雙六やあがりは京のなか間入り　量亭京兆

初午や寺友だちのをさな同士　玩玉亭京英

魯曰、京樂は芝三島町今の石龍子が隣家なる增上寺の用人富永某の長男俗稱仙藏、名は手喬字は伯孝、近年歿すと聞けり。京兆は武州八王寺近村の舊里長某氏の男なる由。京英は名は梅薫字は圓玉、芝山内に住する釋大英といふ增上寺の僧侶と聞きしが、京兆京英には一度も面會せず獨り京樂のみ知己たり、此等の人々は皆魯生が兄弟子なりしが宿縁薄くして交り親しからず、然れども孰れも筆才ありし者なりき。

精出せと清書見せたりはなの兄　　柳川重信

魯曰、こは二代目重信にて曲亭翁が八犬傳第九輯以下の挿畫に名あれど其の姓氏住所歿年を詳かにせず。〔追補〕この重信は初號重山又雪蕉、通稱谷城季三太字は子義、初代重信の高弟にして師の歿後其名を襲ぎて二世となれり、曲亭翁が著作俠客傳第二輯の挿畫を作るに當つて師の重信病革まりし爲め重山代りて之を畫き又八犬傳終卷のさし畫を描きたるは前章の如し。

分入ればいよ／＼深く迷ふ哉途ある花の山を尋ねて　　葵園北溪

魯曰、北溪は始め狩野養生院門人にて後に前北齋爲一の弟子となり摺物の繪に名あり。四谷鮫ケ橋のほとりに住みて其店に魚を鬻げり依て世人は魚屋北溪と呼べり、嘉永二三年頃歿せりと、余が香以

山人の許にて屢々逢ひし折は七十近き老人なりき墓所法名共に詳かならず。〔追補〕北溪通稱岩窪金右衛門字は辰行、拱齋又葵園の別號あり。讀み本のさし繪狂歌の摺物等を多く描き、就中石川雅望著す所の北里十二時の畫最も評よし、嘉永三年七十一歳を以て歿すと云ふ青山立法寺に墓あり。

説わくる高座は鼻の高みくら耳を貫く君が雷名　　小文車

魯曰、その父は大阪者にて素人義太夫に名ありし梅龍といひし者なり、後江戸に來り始め梅壽後土佐太夫と號し寄席へ出し事あり、小文車は其悴にて元祖一龍齋文車の養子となりし講談師なり、歿年不知。

繪雙紙に花ある梅の作者とは其みもさこそ粋な營み　　梅園主人

魯曰、此人は我は知らず文京が親しき友にてかの六樹園宿屋飯盛翁の男塵外樓石川清澄の息にて中村梅太郎、號を梅多樓善福と呼び其頃は四谷傳馬町に住せし由、歿年墓所法號等詳かならず。

魯文をさなかりし時草雙紙の終りの圖の机にかゝりし作者の眞似して遊びたりしに今又作者たらんことをのぞむ

砂文字や野良をつくしの筆はじめ　　星窓梶葉

魯曰、梶葉は余が亡父なり其先は相州高座郡萩園村に生れ俗稱野崎佐吉、中年江戸に出て京橋鎗屋町に魚店を開き三男一女を擧く、魯文は其の長男に生る。梶葉故郷に在りし日俳諧を大磯なる鴫立庵葛山に學び傍ら自流の畫をなせり。嘉永元戊申年九月二十三日生年六十五病みて歿す。谷中永久禪寺に葬し法號を祥雲孝道信士といへり。砂文字云々の句は現存の日詠み置けるなり。

善惡をかきわけて菊の根分かな　　夏堂守一

魯曰、守一は俗稱を野村新藏といひ舊幕治世市井の十人衆と稱せし豪家三村氏（家號鳥羽屋家は三十間堀五丁目に在り）の家守にて傍ら小間物を業とし始め新橋加賀町に住し後芝口二丁目に移轉せり。此人俳諧狂歌の筵に連り發句は信濃の一茶坊が風調に倣ひおどけたる體を好み頗る奇句あり、加賀町に栖みし頃鶴穂庵と號し夏堂米羅坊の別號あり。晩年冬英と別號し判者に列す性得粋なる人物にて音曲も亦美聲なりしが其の歿年を知らず。余が花笠へ入門の紹介はこの守一の周旋に依れり。

我旧へもひと鍬入れよ作をとこ　　並木五瓶

魯曰、狂言作者篠田惣六後改めて金次、遂に師名を嗣ぎて三世並木五瓶といふ。安政三丙辰年七月十四日歿す年七十六、深川靈岸寺中正覺院に葬る、法名得法直覺信士、今の篠田金次が父なり。

當年予と共に同意の作あり

駈ぬけて廻りくらせん花の山　　藤本斗文

魯曰、斗文俗稱吉兵衞、鬻吳服をもて業とす。其の餘暇狂言の作を好み五代目鶴屋南北が弟子となり絞吉平と號し劇場の作者仲間に入り、一度姥尉輔と改め藤本斗文が遺命に依て藤本吉兵衞と名乗り、俳名を斗文と呼び立作りに登庸し、幾程もなく三代目櫻田治助が勸めに依て三世瀨川如皐となり淺草馬道に住せり。明治十四年六月廿八日行年七十五歳にて病みて歿す。法名徹壽淨肝信士、本所牛島弘福寺に墓碑あり。

とはいふもの丶お前ではなしといふ句に、

世の中は三日見ぬ間の作者かな　　西澤一鳳軒

魯曰、一鳳軒は大阪の書肆正本屋九右衞門（西澤氏）の長男にて父の雅名を繼ぎ一鳳と號し狂言作者となり、父義太夫節本に朝顏日記の作あり、當時江戶に在留せしが花笠文京とは浪花の地よりの舊知己なりしかば茲に此吟あり、歸阪の後嘉永五年年十二月廿二日行年五十一歲を以て歿すと云ふ。

〔追補〕墓は大阪下寺町大蓮寺に在り。

河竹新七

たが筆ぞ空に聲ありいかのぼり

現在の默阿彌老人（目下狂言作者の巨擘其水翁）初號柴晉助後勝諺藏、その略歴は余が魯文珍報技藝小傳の中に見えたれば玆に贅せず。後改めて二代目河竹新七と云ふ〔追補〕新七通稱吉村芳三郎後ち實家を相續して越前屋勘兵衞と名乘りしが、晩年劇界を退き明治廿六年一月二十二日七十八歳を以て遠逝し、淺草北淸島町源通寺に葬る。法號釋默阿居士。

鶴屋南北

紀の海音といふ名家もあれば末賴もし

珍らしく海に音ある漁りに魚の趣向のたねは盡きせじ

魯曰、狂言作者中興の名人四代目南北が孫にて初名孫太郎後五代目南北と改む。故人如皐現存の河竹等は此人の門より出づ。嘉永五子年正月二十一日歿す年五十七、深川心行寺に葬す。

平亭銀鶏

美人を購ふを手活の花といへども花笠先生の門人を取立つるは花の苗を植るが如し

自から振ある枝をたわめては花の器に挿すぞ樂しき

魯曰、銀鷄は天明年間の狂歌師奇々羅金鷄の子にして醫家の出、通稱を畑數馬といひ文旨山人と號す。其子に鐵鷄といふあり又その孫を銅鷄と號せりとぞ。余も昔年は面識ありしが其後隔絶して歿

年月を知らず。此叟は文人と戯作者との庇間に在りて書畫會には名高かりき。〔追補〕名人忌辰録に銀鷄は嘉永元甲年五月廿日歳四十九を以て上野に於て歿す高尾村長覺寺に葬る、とあるは甚だしき誤りにて銀鷄は明治三年三月廿三日八十一の高齢を以て歿し上毛七日市永心寺に葬れり。法號壽徳院梅岳銀鷄居士、その墓石と辭世の狂歌を刻したる碑今猶同寺に存せり。

うぐひすやわけて親しき梅の宿　　八代目三升

魯曰、俳優八代目團十郎、幼名新之助又鰕藏、俳號夜雨庵一に團栗と號す、嘉永七甲寅年八月六日浪花に於て自刃す、行年三十二、同地天王寺村坂松山一心寺に葬す、法名浄筵信士。

剛者と呼ばれんまでは夜の目寢ぬ作者も武者の心なるべし　　六朶園

魯曰、六朶園は六樹園の息塵外樓清澄の門に遊びて狂歌に名あり（かの人口に膾炙する、日の本は岩戸神樂の昔より女ならでは夜の明けぬ國、といへる狂歌は此人の詠なりと云ふ）歿年墓所を知らず〔追補〕六朶園は初め栴檀二葉といひ壽松軒と號す、通稱中村文四郎名は雅重字は子松、芝宇田川町に住し後新吉原の妓樓大黒屋の家長たり、安政五戊午年八月四日歿す享年未詳。

ひろごれる薫りや梅のつくり枝　　凉窓露萬

魯曰、露周通稱宮本茂左衛門京極家の藩士にして俳諧を好み、初め在轉の名を嗣ぎ隱居して判者となり改名披露發句集を出版す、其の序言は余が十八歳の時初めて拙文を綴りしなり、その署名に二九のわらべ應一とあり、此の俳號は幼年のころ香以山人（山城河岸津藤）より附與せられしなり、露周翁の歿年を知らず。

兩の手に桃とさくらを持添へて花の大枝さけるかた腕　　一筆庵

魯曰、畫名溪齋英泉、作號一筆庵可候、元來水野壹岐守侯の藩士にて後町家に下り畫作を以て營業とす、通稱池田屋善次郎諱は義信、壯年畫を菊川英山に學び又一度三代目並木五瓶が未だ篠田金次といひし頃その弟子となり、狂言作者の徒に入りて千代田才市と呼びたりとぞ、余が此作名披露の刷帖の表紙畫と兩の手云々の狂歌は嘉永戊申年五月頃認めて文京が許に送り越したるが、同年八月廿六日病みて歿す、生年五十九、その墓所（或は云ふ四谷福壽院なりと）法名を知らず。

問はずして道は知るとも共々に筆持添へて文字ををしへ子　　松亭金水

魯曰、金水通稱中村源八郎名は經年、舊幕の御家人にて本郷附木店組屋敷に住せり、其はじめ谷金川の門に入りて版下の傭書を認め、其頃元祖爲永春水が作の人情本を淨書して彼の顰に倣ひ中本を

作り後讀本隨筆の著述あり、故に金水の戯名は金川春水の冠と履字を採りて然か呼べるなりと、然ども此人の著述人情本の作意と雖も自ら教訓の意を含蓄して貝原の假名文に髣髴たり、一號積翠道人、文久二戌年十二月十二日歿す年六十六、牛込榎町大法寺に葬る、現今門人梅亭金鵞（本名瓜生政和氏）猶壯健にして滑稽の快筆を團々珍聞紙上に揮へり。〔追補〕金鵞翁は明治廿六年六月三十日歿す年七十二、淺草稱念寺に葬る。

ふみならふ春よ作者のさん番叟　萬亭應賀

魯曰、應賀通稱服部長三郎、先年下谷御徒町に住し弘化の初めより合卷の戯作あり、就中釋迦八相倭文庫の草雙紙大に行はれて數十編出版せしより應賀の作名世に聞えたり、余が前齣の記に三十九名皆故人と云ひたりしが應賀翁は今猶存命にて折節に著述ありとぞ。〔追補〕應賀は明治廿三年八月三十日歿す年七十二、入谷村良感寺に葬る法號白蓮院往雲上生居士、猶廿三年中の魯文翁日記の内に、應賀は下谷金杉上町七十三番地西側裏店の陋屋に於て歿せり其時老妻ひさ六十八歲、末子十五歲、一女かねは下谷萬年町櫻香油店横町人力車夫太田萬吉の妻たり云々と記せり。

芳ばしく其名は四方に薫れかし作といふものも花の兄　小三馬

魯曰、式亭三馬翁の男幼名虎之助名は德基、家父の遺業を嗣ぎて本町二丁目に江戸の水、延壽丹等の藥舖を營み傍ら草雙紙の戯作あり、歿年墓所を知らず追て記すべし〔追補〕嘉永六丑年正月十一日歿す年四十二、深川雲光院地中長源寺に葬る。

内は四角外をば丸く世の中を通用のよき人はこの人

十返舍一九

魯曰、俗名勘助何人の子たるを知らず江戸出生の人、壯年新吉原江戸町一丁目の妓樓大文字屋市兵衞の養子となり狂歌の名を文字樓加保茶浦成と呼び、後養家の名を嗣ぎて三世加保茶元成と改め淺草庵三世春村の門に入りて俳諧歌を詠じ、又式亭の弟子となりて作名を三亭春馬と號し多氣競の中本を著せり、事故ありて養家を離別し淺草山谷町に移りて舟宿を業とす、其初め九返舍一八と號し後二代目十返舍一九と改め、又花笠文京往事浪花に在りし頃三世八文字屋自笑たりし因縁にて文京に乞ひて四世自笑となれり、後世漫に故人の高名を襲ふ者間々此の等類あり風雅の道には爪彈きすべき僻事なりかし、此の一九嘉永二三年歿せりと聞きしも其の法號墓地を知らず。〔追補〕一九は通稱磯部勘助後源兵衞、文字樓、花街樓、柿園等の別號あり、自ら二世一九と稱すれども二世は下野花輪の人糸井鳳輔が嗣ぎたれば三世とするが正當ならん、此人元成、一九、自笑等の號を襲ぎし外

晩年には落栗庵二世元の木阿彌と號し狂歌の判者たりし事あり、嘉永四年十二月十八日歿す享年未詳、淺草今戸慶養寺に葬る法名大用機信居士。

　鶯に先づほめさせんつくり枝も目立つ若木の梅が倭文　　星屋春兄

魯曰、新橋山城河岸なる有名の通客津藤大盡の子息にて姓細木氏幼名子之助後父家の酒店を繼承して藤次郎父機藏と呼べり、狂歌は本町側に遊び初號星の屋春兄後何の屋鶴枝俳名を李蠖といひしも香以山人の名最も著はる、此人狂歌發句に新調多く狂文の才筆一家の體あり、其傳は歌舞伎新報別欄中に余が拙筆をもて略ぼ一世の盛衰を記せしを看るべし〔追補〕明治三年八月二日歿す年四十九、駒込願行寺に葬る、號法梅譽香以居士。

　さくら咲く山路を行かば導へなん登るも早き花の近道　　立川焉馬

魯曰、八丁堀南組舊幕府與力山崎助左衛門の長男通稱常次郎、放逸にして家督を舍弟助三郎に讓り隱居して深川古石場に移住し二代目立川焉馬と號し又松壽樓永年、伯樂舍、蓬萊山人等の別號あり、其家を七國樓（武相甲豆駿房總の七州を見渡すの意）と呼び狂歌戲作の道に遊び、元祖焉馬が廢れたる昔噺を再興せしを名とし、文政十一子年八月焉馬の名を嗣ぎし以來落語家の家元と自稱して同

業の輩を悉く我門に入らしむ、後弘化三年十二月近松門左衛門と名乗りて劇場狂言作者に加盟せし事あり、其妻みよは舞踊の師匠にて又梅子と號し和歌を詠じ書をもなせり、焉馬常に相撲を好みて其徒に交はり吉田追風より行司の免許を得て一度土俵に出し事あり、晩年越前堀に移轉し其家にて、文久二壬戌年七月廿三日病死す齢七十一、法名松樹院縁譽淨月居士、小石川極樂水淨土宗大雲寺に葬る。

おもしろき作の趣向のたね本もいまに筆柄にぎるこの人　　朝櫻樓國芳

魯曰、國芳俗稱井草孫三郎一勇齋と號す、父は柳屋といふ染物業なりしが國芳は畫に志し元祖豐國の門に入りて研鑽怠らず後一家の風をなす、一たび墨陀牛島に栖みて朝櫻樓と號し又其の畫く所の水滸傳いたく世に行はれしより水滸亭と假名す、久しく玄冶店に卜居せしが文久辛酉年三月四日其家にて歿す、齢六十五、法號深修院法山國芳信士、淺草八軒町大仙寺に墓碑あり。國芳翁の歿畫の肖像は門人朝霞樓芳幾氏の筆にて其の上欄に手向けの句あり、此の刷繪連中へ配りし後繪草紙店に掲げて鬻げり。

樓號も手向るによし朝ざくら　　（山々亭）有人

すり合す袖にも霜の別れかな　（假名垣）魯文

摘溜めた袖にしをるゝ土筆哉　（梅素亭）玄魚

手入れして頓て見事に咲かせなん作り覺えし梅のはな笠　墨川亭雪麿

魯曰、越後高田の藩主榊原侯の家士にして通稱田中善三郎名は親敬、畫を墨亭月麿に學びて雪麿と號し、戲作は獨立にて草雙紙數種を編めり、歿年を知らず。〔追補〕雪麿は安政三辰年十二月五日歿す享年六十、白金臺町妙圓寺に葬る。

幾人もほしさよ梅の作をとこ　寶田千町

魯曰、狂言作者寶田壽助（二代目壽萊）の門人なり、又戲作者の徒に入りて千町と號し讀本草雙紙の版下を淨書するを業とし谷金川と呼べり、俗稱中川金兵衛その歿年を知らず。

片歌の中にといへる前文ありて

墨附があるでひと村作りとり　文亭綾次

玉に疵あるほりものゝ灸　爲永春水

魯曰、綾次は横山町一丁目の藥舖大坂屋某にて建部綾足が門に入り專ら片歌を唱へ、元祖爲永春水

と交りて彼の人情本に序跋を記せし事あり、春水は即ち二代目にして元來對州の舊領宗家の士、俗稱染崎久兵衛名は延房、壯年初代爲永の門に入りて春笑と號し後師名を嗣ぎて二代春水と改む、現今東京繪入新聞の記者染崎延房即ち其人なり、別號戲墨堂。〔追補〕綾次通稱宮崎又兵衛名は桂素別號秋光庵、綾足の外孫に當ると云ふ、明治十一年四月五日歿す淺草本念寺に葬る。春水は明治十九年九月廿七日歿す享年六十四、下谷豐住町養玉院に葬る、法號慈門院理蓮□□居士

赤本のあかきは嘘の常なれど面白くこそ吐かまほしけれ　　笠亭仙果

魯曰、仙果本姓大宅名は廣道字は子田、轍齋狗々山人等の別號あり、通稱高橋彌太郎（幼名龜三郎）尾張熱田太神宮社領の里正の子にして幼稚より文學の嗜みあり、壯年の頃江戸の初代種彦が作風を慕ひ書を寄せて其門に入り、故里に在て草雙紙を作りその稿本を師の柳亭翁に校閲を乞ひ其の周旋に因て仙鶴堂つる屋喜右衛門が藏版に入るを得たり、後師翁に便りて江戸に來り歸國して再び出府し、淺草堀田原に住せり、俳諧歌を三世淺草庵春村に學び春村本歌に據り國學を專らにするに臨み淺草庵の號を門人廣道の仙果に讓りて四世となせしも此ころ其道廢れて糊口するに足らず、故に戲作を專門とし一たび柳亭種英と改號し幾程もなく師名を襲いで二代目柳亭種彦と自稱せしが、此人和

漢の學びもありて且文章も凡ならねど、性頑癖ありて人望なく晩年一女子と共に堀田原の家を轉じ本所石原なる舊幕旗下奈須與市殿の長屋に寓居し其處にて死去せしとぞ、于時慶應四（改元明治元）戊辰年二月九日齡六十三、法號忠山宗儀居士、本所原庭町東盛寺に葬る。

腕だけのちから賴もしさく男　　五柳亭德升

魯曰、德升通稱關根甚藏、鎌倉河岸の有名なる酒店豐島屋十右衛門の分れにて其頃本材木町三丁目の紙商なりしが、後零落して四日市魚役所（世に御納屋と云）に出勤す、狂歌は文々舍蟹子丸の社中といふ、魚役所に出勤せざる前は伊東典山の弟子となり山洲と呼びて講談の席に出で、又七代目團十郎の食客となりて草雙紙を作れり、此故にその作名を市川三升と書し德升其序を記せし冊子多くあり、嘉永六癸丑年七月廿五日六十二歳にて歿す、法號五柳院德升日輝信士、寺は牛込邊の日蓮宗と聞きしが詳かならず。〔追補〕寺は牛込宗伯寺なり。

種蒔いて他の田畑も作りとりうまい趣向の作の出來秋　　綠亭川柳

魯曰、川柳初め狂句の名をゴマメと云ふ、佃島に住する魚御用漁師にて通稱水谷金藏、後五代目綠亭川柳と號す、狂句吟詠の餘暇草雙紙を作り又名將勇士忠臣節婦等の畫像に小傳とその詠歌を附し

何々百人一首と題號せる冊子は中興此翁を以て鼻祖とす。〔追補〕安政五年午年八月十六日歿す享年七十二、築地本願寺に葬り法號を釋淨豐といふ、向島三圍社に句碑あり「和らかくかたく持ちたし人心」と。

名をかへて門ふだ白しうめの庵　　柳下亭種員

魯曰、種員は柳亭翁晩年の門人なり、姓坂倉氏俗稱金次郎後坂本屋新七、貸本を渡世とし又古本を露店に鬻ぎ故人の著書を熟讀して戯作者たらんと欲し元祖種彦の門に入りしとぞ、一度乾坤坊良齋の弟子となり二代目紀海音と名乘りて講談の席に出で、弘化の末年國芳翁の提携にて初めて錦繪の塡詞に作名を署し、是より草雙紙の作ありしかど遲筆にして其作數種に至らず、然れども美圖垣笑顏の遺稿を繼ぎて一筆庵英泉が綴りなしたる兒雷也豪傑物語を相續せしよりその作名世に知られ、妙々車、しらぬひ譚等の作行はれ就中しらぬひの如きは自作自版にて製本美を盡し、其著故人の糟粕に屬せども一時太く世に流布し、自己大吉利市を占めたるも彼の雙紙未だ結局に至らで、安政五戊年八月廿一日彼の傳染病コロリに罹り淺草今戸の自亭に歿せり齡五十三法號墓所未だ知らず此編結局に追記すべし〔追補〕寺は深川靈岸寺地中安禪寺にて法名を然覺常本信士といふ。

月花はおのが手にある作者かな　豊　芥　子

魯曰、豐芥子通稱石塚重兵衞家號鎌倉屋一に集古堂と號す、神田豐島町に久しく住し粉類の商ひを業とす、二女あり長女に聟を迎へしが此聟放蕩にして離別し、弘化の末淺草門跡の背後に移りしが其後嘉永元年の頃同諏訪町西側の角に店を移し、離別せし聟を呼返し從前の粉類を商ふ故に芥子屋と呼ばる、好みて稗史中の奇書珍籍を藏す、古本の好き者先づ當家を訪ふに稗史隨筆等の珍書多くは文庫中に藏せるを以て、求むる者芥子屋本とて之を珍重せしが、文久元辛酉年二月十五日六十二歳にて歿す、淺草法恩寺地中專念寺に葬る、法號釋豐芥信士、其の遺族は今は絶えたりとぞ。明治十七年十二月十四日豐芥子の二十三回忌追善法會を營みし時の手向の句を左に揭ぐ、

爐ばなしや其いにしへを夕時雨　二世　春水　染崎延房

枯菊もふたゝびかをる小春かな　龍吟　岡田治助

深切を今日の手向けや室の梅　紫香　大久保源兵衞

納豆にまたも芥子のうはさ哉　梅彦　四方新次郎

口切や友だちひとりかけ茶碗　其水　吉村默阿彌

枯蓮のしづくや秋の露よりも　二世　種員　有山新兵衛

丹精をけふ香にたつや冬至梅　芳幾　落合幾次郎

古塚も掃除のとゞく十夜かな　笠仙　橋本仙之助

故人の古寫本を見て

木枯しやちぎれ〳〵の鳥の跡　三世　新七　菊川金作

石塚氏のあとを弔ふむしろ開くあした自ら編みつゞり殘されたる文化見聞集を見て

こしかたを思ふ涙の落葉やまかき集めたる文のかず見て　二世　種彦　高畠藍泉

今は世になき芥子屋のきゝ書は目にしみの巢もあまた見えけり　魯文　野崎文藏

とぢ絲は切れてもすゑに藏書印からしの文字や年をふる本　雅樂　鈴木定吉

はたとせをみつの昔に廻り逢て手にふる本のあかも懷かし　只誠　關根七兵衛

まだ生て居るかと人に言はれても斯こそ長けれ筆の命毛　爲一　百翁

魯曰、前北齋爲一翁一號卍老人、初號勝川春朗改めて二代目俵屋宗理、又更に北齋辰政一號戴斗、後北齋の名を門人に讓り前北齋畫狂人卍翁と記名す、壯年安永の頃黃表紙靑本の畫作を共にし一筆

庵可候と號し又時太郎とも署名せり、此の作名は翁の幼名なりしもの歟、此翁の奇聞最も多くして盡し難し其傳は友人只誠氏が筆記誠垓只錄中に詳細に擧げたり、嘉永二己酉年四月十八日九十歳の高齡を以て歿す法號南總院奇譽北齋、淺草新寺町誓願寺に墓あり、建石の左側に「人魂で行く氣さんじや夏の原」の辭世の句あり、實に近世我が浮世繪師の巨擘獨立一家の畫風、今に於て獨り內國人のみならず支那歐米各國の活眼者此翁の畫風を觀て奇に驚き妙を賞せざるはなしと聞けり。

師と賴む人の敎へをちから足ふみ見る毎と恩を忘るな　山東　京山

魯曰、京山は京傳の舍弟俗稱岩瀨利一郞、書號賢山一に京仙といひ家兄の本舖京橋銀座二丁目なる山東庵を相續して家製の讀書丸を鬻ぎ、傍ら草雙紙を綴り石印を刻して業とす、晩年其子京水に家を讓り木挽町二丁目の河岸通りに別居す、此頃旣に七十に餘れり歿年未だ知らず。〔追補〕京山は安政五戊午年九月二十四日歿す享年九十二、本所回向院先塋の傍らに葬る、法號修省院自默居士。

飼ひ立て羽づくろひする鶯の笠に被るなら梅のはながさ　香蝶樓豐國

魯曰、豐國初號國貞、父は角田庄左衞門とて商家なり、俳諧を好みて俳名を五橋亭琴雷と號す（五橋亭の號此の時分より本所五ツ目渡舟場の株主なりしにや）天明七丁未八月十六日歿す年六十九、

辭世「もどかしや絲はほぐれて散る柳」法名觀行院理山善知、龜戸光明寺に葬る、一子國貞（後豐國）天明六丙午に生れ俗稱角田庄藏（初め庄五郎）本所五ツ目より龜戸天滿宮門前に移轉せり、一雄齋、五渡亭、香蝶樓、樹園、月波樓、富望山人、富眺庵等の數號あり、又英一蝶と別號せしは天保四年の頃英一蝶の餘流一桂の門に入りしを以て斯く號す、香蝶樓の號も一蝶とその實名信香の兩字に依ての名なりと、又五渡亭の號は父琴雷の五橋亭に基き蜀山人が贈りしものとぞ、青年のころ元祖豐國の門に入りて出藍の譽あり、式亭三馬が日記の內に、國貞本所五ツ目渡舟場の際に住す卽ち此の渡舟場のあるじ俗稱庄五郎とて柔和溫順の性質なり、文化五年の春吃の又平大津土產（版元十軒店西村源六）三馬作國貞草雙紙の書き初めにて、此時大に評判よくその翌年より益々行はれて今一家の浮世繪師大立者となれり云々、又溪齋英泉の話には、京山初めての作國貞初めての畫は妹脊山の草雙紙なりと、魯文幼年の頃その草雙紙を見たり序文は山東京傳と歌川豐國との掛合ひ、山東は山盡し歌川は川盡しにて「東西々々京傳中橋お邪魔ながら、兩個の壯年を卑下まをさう、京傳舍弟の音羽山、四角な文字も毫ばかり、讀習うたる實語敎、山高きが故に澤山書かず、留ても止まらぬ若葉山、そんなら書いて三笠山」（是より川に移る）などありしを今以て諳記せり、斯て國貞

が畫名世に名高く就中俳優の似顔繪に至りては師の豐國去りて後國貞が右に出づべき浮世繪師曾て無く、天保甲辰年（改元弘化元）當春先師の名を嗣ぎて一陽齋歌川二世豐國と改號す（實は三世なり）弘化二乙巳の秋剃髮して肖造と俗稱し、翌年柳島に別居して國貞の名を門人國政に讓り、之に長女を配偶して養子とし龜戶の家を相續せしむ、元治元甲子年十二月十五日歲七十九にて歿す乃ち前記の光明寺に葬す、附て云、豐國長女なべの聟國政龜戶を轉じて本所割下水の寓居に於て安政二乙卯年二代目國貞と改名、後三世豐國と號し明治十三庚申年七月十八日五十八歲にて歿す、法號三香院豐國壽貞信士、前同寺に墓あり

味噌揚げて作り上手になりたくば世によく熟し甘口ぞよき　曲亭馬琴

魯曰、こは前章にもいへる如く未だ此の刷物の配達に至らざる前年曲亭翁に乞ひ求めたる戯歌にして、製本成りし頃に先だちて翁は遠逝せられしなり。馬琴翁名は解字は瑣吉江戶の人、源姓瀧澤氏俗稱清左衛門後剃髮して篁民と稱す、明和四丁亥年夏六月九日深川淨心寺近傍に生れ嘉永元戊申十一月六日享年八十二にして卒す、小石川茗荷谷清水山深光寺に墓碑あり、法名著作堂隱譽蓑笠居士、辭世「世の中のやくを遁れて元の儘かへすはあめと土の人形」馬琴別號あまたあり玄同、閑齋

賴齋、狂齋、信天翁、愚山人、晩年失明して亡息の未亡人路孀に代書を命じて著述する頃戯れに盲文人と號せし事あり、戯作の始め京傳門人大榮山人と記せしは卽ち此翁の處女作なりしと。

僕がつぎはぎする狂文のはさみ仕事は古衣の趣向を洗ひ張りして戯作者の手前符牒をつけんとて

赤本の桃ならなくに我はまた洗濯もの丶名や流すらむ　英　魯　文

魯曰、余が披露の刷物表紙ともに六葉自他の吟詠四十二章以上茲に誌し畢んぬ、是れに洩れたる前後の戯作者文政より慶應年間に至るまで猶數名あり、其の小傳わづかに諳記せしもあれど未だ稿本全からねば、他日の餘暇又一睡邯鄲の枕に寄らんと先づ當編の筆をさし擱く。

田島任天翁の遺著

私の親しく交はつた友人中に田島任天翁がある、翁は通稱象二舊幕の士にして下谷根岸に生る、戲號を醉多道士、生成山房主人又御門倚史と呼び、明治七八年以後十餘年の間に渉つて著述に從事し、稍や濫作の嫌ひはあつたが明治七年の『耶蘇一代記辯妄』を始めとして雜著三十餘部を世に出し、明治十年には『團々珍聞』の記者となり、後自ら滑稽雜誌『妙々雜俎』『同樂相談』を發行し十七年頃には『讀賣新聞』の特別寄書家であり、二十年頃には岐阜より名古屋に移り同地の『新愛知』の主筆となり、數年の後名古屋市より衆議院議員たらんとして其の運動に失敗し一時東京に歸つたが、更に三十九年には『上野日々新聞』の記者となり後歸京して池上本門寺の住職久保田日龜氏とは懇意の中であつたから細君と共に同寺の本坊に寄寓して居たが、明治四十二年八月三十日五十八歲を以て同寺に於て歿した。翁の小傳は明治十三年發行の『新聞記者奇行傳』にも

田島象二　同樂相談幹事　居所　神田區神田五軒町十六番地

宣化天皇の皇子惠波王の後胤にして、祖先は信州の豪士本姓は伊達といふ、幼にして父を失ひ母に從つて東叡山北根岸の里に住し、御行の松に登りて蟬を追ひ螢澤に入りて魚を釣る、遊戲自ら他の總角に優れ英邁の氣顯る、或人周旋して横山町三丁目の書肆和泉屋金右衛門の丁稚たらし

めしより居ながら萬卷の書に眼を晒し區々として商家に仕ふるは大丈夫の爲す所ならずと師に就て漢籍を熟讀し、當時藤森大雅、安井息軒先生等に愛せられ、或る時は尊攘の說を唱へ京師に走りて浪士の群に入り、曾て和學を好むを以て多治比廬野と變名し又或る時は伊達律之助と稱して宸賞を蒙りたりと、爾後城攝和泉の間を經歷せしが明治五年に歸つて武勇の念を斷ち、風流文壇に遊びて團々珍聞社員たりしが、故ありて去つて獨立し、妙々雜俎、同樂相談を著す、就中滑稽に看客を絕倒せしめ又諧を能くしてポンチを作るに妙なり。

とある通り或る時は國事を憂ふる慷慨家の如く、或る時は世間を茶にする樂天家の如く、風流人かと思へば俗な處もあり遊蕩兒かと思へば時には中々の締り屋で、且折々坊主臭い說法をする事もあるゆゑ吾々友達仲間では田象寺の和尚と呼んで居た、學問は雜駁で純漢學者ではなかつたが天性の才筆があつて何でも達者に書きこなし、漢文體の作に至つては當時の服部撫松、石井南橋、總生寬等と並び稱されて居た。晩年本門寺に寄寓の頃は『五十年前の東京』――今から云へば七十年前――といふ著作の執筆中であつたが、その稿を終らぬ前に夜中便所に通ひ「アッ仕舞つた」といふ一聲を殘して卒倒し呆氣ない終焉を遂げたのである。その遺稿は未完の儘私の手に傳はる事となつたが

も報うであらうとの婆心から、左に採錄する事とした。闇から闇に葬り去るのも本意なく、之を公けにして置けば東京沿革の參考ともなり且本人の遺志に

五十年前の東京

江戸遺民　田島象二　著

總論

曠邈千里陵谷其間に起伏し、枯草斷蓬霜晨に悩き芒花茵茅投暮に痛み、交ふるに紫莖瑞香紅白を鬪はせ朝露玉を結んで葉末輕く金鐘兒稜々として其聲愁れに、蟋蟀其吟幽かにして悲風蕭條之を伴ひ轉た遊子をして悲しましむるは是れ中秋の光景に非ずや、而して月の孤荻に昇り皎々として限りなき大原を照らし、更に白蘋に入るものは是れ遠き吾妻に有名なる武藏野の原に非ずや、太田持資入道道灌が未だ江戸に入らざる嘉吉文安時代に於ける江戸の前身は、正に斯の如くなりしなり、況や中將業平卿が東下りの時代をや、月悲しみ日曛き以て知るべきのみ。平兼盛の歌に能く此れを表顯せり。

武藏野を霧の晴れ間に見渡せばゆく末遠きこゝちこそすれ

又左衛門督通光は

むさし野は往くとも秋の果ぞなきいかなる風の末や吹くらむ

監の命婦に至つては更に曠逖を言ひ盡せり

　武藏野は月の入るべき山もなし尾ばながするゑにかゝるしら雲

旣にして長祿の交、太田道灌江戸の地を領有し陣屋を城きて住趾し、神社を祭祀し佛寺を建立し城下の繁榮を企畫せしより、民戸漸く散所し炊煙また芒花の上に騰るに至りき、若し夫れ沈思閉目して此の光景を追懷し、而して眼を開いて現下の東京を瞻望せば、其の桑海の變蓋し女媧氏の吾人を欺かざるを知るあらん。

斯の如くにして中武藏の江戸は狐狸の管轄より脫して人衆の部落となりしが、天正十八年八月一日德川家康駿府より來りて紅葉山鶴舞の城に入り江戸を開張す、此れ今を距る實に三百十九年とす、爾來江戸の發展すること日進月歩の長足を致し、鐵砲洲及び靈岸島の築城成りて現時の地勢を形成し、三百諸侯の第樹館邸鱗比せしと雖も、尚ほ田舍の小部會たるを免れざりき『吾妻廻り』

寬文年間出版畫本 上卷に

往へいかにと白露の、葉ずゑに結ぶ淺草を、うち越えゆけば程もなく、武藏の江戸に着きにけ

り、云々

淺井了意の『江戸名所記』寛文二年印行に、武藏國淺草觀世音と書し、又上野東照宮の社前に獻納せし數基の石燈籠に武州東叡山と彫鏤するが如き、之を要するに淺草橋より西お茶の水赤坂に至る外濠以外は、江戸府内にあらずして村落と見しや疑ふ可からず、且吉原遊廓が日本橋區蠣殼町二丁目に存在し、神田明神が大藏省構内に鎭座し、本所の報恩寺が日比谷公園に、芝の増上寺が大手町に、淺草の誓願寺が神田山本町に存在せし迹に徴すれば、江戸府内と雖も尚ほ人家密接せずして諸所に耕地の點在せしこと推測するに難からず、斯て江戸は三百年の泰平の間に文物の醇化と共に開拓せられ、徳川氏の末造に及んで八百八街四里四方の大都會は完成し、日本に於ける首府となりぬ。此れ四五十年以前の江戸繪圖が具さに證明する所なり。

然れども宇内の大勢は江戸を以て如上の完成を以て甘んずるを許さず、寧ろ根本より覆へす可き一大變革は來りぬ。此れを明治一新となす、征夷將軍は亡びぬ、江戸の稱は亡なりぬ。旗本八萬騎三百諸侯の第舍邸宅は失せぬ、此の明治の革命は秋霜烈日の勢ひを以て江戸の舊態を形而以上以下となく破壞し、有ゆる面目を一新し、僅々四十年間なる東京の名の下に、殆ど將軍の亡びた

るが如く江戸の形相まで亡び失せき、若し夫れ此の成行きに委せん歟、將來近き江戸を說明する者なくして江戸歷史上の缺陷を補ふの機會なからんとす。況や市區改正なるノアの大洪水は滔々として舊江戸の遺蹟を漂蕩し去らんとするをや、然らば則ち江戸の遺民たる吾人が此擧又敢て無益の業にあらざる可し。五十年前（明治四十二年より逆算して）の東京、請ふ是れより徐ろに語らしめよ。

宮城下

和田倉門より南々して西に折れ櫻田御門に至る外濠以內は、是れを宮城下と唱へ、麴町區に屬し千代田町、寶田町、祝田町の町名は存すと雖も、萬頃眇忽、區劃せる芝生の稚松點々として瑞氣祥々たり、眞に壯偉閎燿洵に至尊に咫尺たる崇敬の念は禁ぜんとして能はず、楠廷尉騎馬銅像の東南隅に萬世皇居を護するもの豈偶然ならんや、此の宮城下は原西の丸下と稱し、其の西の丸なるものは元將軍の妻妾の住棲せし所、蓋し大將軍は御本丸に住し玆に妻妾のみ住せしが、弘化元年本丸燒失の後將軍此に移住し政治を見る所となりぬ。將軍既に西の丸に移るや老中以下有司は勢ひ官邸を其下に置かざる可からず、乃ち大手の下馬は玆に移動するの已むなきに至りき、看よ

西丸下の舊圖を看よ、日下灑然開豁なる宮城下も元此れ複雜なる官邸併列し、勤番の御國侍、定府の家來と其の妻子眷族と共に此に住し、小者折介の出入、乘馬の嘶き、八百屋の聲魚屋の叫び酒屋の御用まで此處に徘徊せり、殊に腰掛なる一棟の建物を中心として日々簇がる者三四百人、此れ果して何者ぞ、即ち日々登城する百官有司の家來にして、三人より少からず三十人より多からざる行列團體が輻湊せしなれば、其の鬧喋喧囂不規律にして殆ど耳も聾せん許り、槍の林立する曳馬の騷擾する、下郎輩の喧嘩する所謂下馬評の出る所、而も腰掛なる建物は狹隘にして斯る行列團體を收容するに足らざれば、十の五六は其の以外即ち青天井の下に日光を浴びて主人の下城を待たざる可からず、斯の如き喧擾の一方には腰掛の內に在つて供待ちの小者折介等こゝ彼處に集團して賭博を行ひ輸贏を鬪はし、以て消暇の具となす、是れ果して泰平の顯象か抑々亦武陵桃源の眞相なるか。本圖南端に御厩あり、將軍の御乘馬數頭此に養はる、馬に於ける衞生知識の未だ發達せざる時勢なれば、糧秣の散亂・屎尿の惡臭、洗濯水の汎濫、その陋態名狀す可からず而して和田倉馬場先（現凱旋道路の東路）櫻田の各門は其の入口に方二間の辻番ありて出入に注目し、既に入れば見附番なるもの儼然として玆に存し、突棒、刺杖、袖搦、槍弓等の武具を樹立

し、番所には其の家紋を現はしたる幕の中央を絞り上げ、番士の面々是れに居並び以て警戒す、若し夫れ御三家（舊紀州侯、舊尾州侯、舊水戸侯）御三卿（田安、一橋、淸水）及び大老又は老中若年寄の過ぐるあれば、各々式臺に出て拜伏敬禮す、畢竟是れ縟禮に過ぎずと雖も幕府禮典の致す所、以て重きを衒ひし所以ならん、其の西の丸に登城するは坂下門の一方にして二重橋は將軍のみ通行する正門なりき、當時は共に木橋にして第一の門を桔梗門といふは道灌の家紋より呼び來りしものなり。

五十年以前の宮城下は斯の如く複雜に、斯の如く狼藉なりき、今や庭除顯敞潔樸淸楚只だ積翠森嚴の間に宮闕の參差たるを拜するのみならず、凱旋道路は三方に拓かれ其の雄觀壯狀當年の比に非ず、寧ろ神苑と云ふも可なり。

吾人は是れより筆歩を興感多き方面に向けんと欲するも、順序は之を許さゞるを以て、暫らく凱旋南道を出て其の四圍を語らざる可からず。卽ち舊圖の方面是れなり。

櫻田御門より一直線南方に向へば是れ虎之門に非ずや、而して櫻田門外煉瓦石より成る層々の建築、雲に聳え牢として嚴なるものは卽ち司法省にして、當時は出羽米澤の藩主上杉侯の第邸なり

き、大審院、控訴院其隣に蟠居し、相馬西尾は撤せられて海軍省は其迹に在り、而して長州鍋島邸より南、北條南部の兩邸其他を併せたる絶大なる方域は今日の日比谷公園にして、廣袤萬弓、繞らすに鐵柵を以てし、園内怪石參差、泉を疏し石を鑿り地を闢きて池と爲す、松柏森爽、佳花香木列植して蔭を作し、亭あり休むべく椅子あり憩ふべし、春に宜しく夏に涼しく秋冬また佳ならざるはなし。實に熱鬧中の樂園にして人造庭苑の尤なるものならん、是に於て乎華の如き淑女玉の如き秀才、皆簇がり來りて淸遊を探る、然れども其の前身は强藩の邸宅、武骨士人の棲息せし所にして往來の人影常に太だ多からず、而も雙刀の田舍武士その七八を占めたりき、況や長州藩邸の如きは元治元年京都堺町の變に於て朝敵となるや、幕府は忽ち其邸全部を破壞し去て一朝に荒涼の原野となりぬ、是れ後年日比谷の原の名の起る所以にして公園となるの順序なりき、吉田松蔭、木戸松菊も皆公園の南隅に栖居しつゝ在りしを想はゞ懷舊の價値なしとせず。日比谷御門は如何、外濠埋沒せられて其の面影を止めず、唯だ石垣と喬木と掌大の泉池の存するありて僅に當年を語るのみ、鍋島邸の遺蹟は公園正門の北に方形巨大の水盤存し溶漾流るゝもの長しなへに之れを謠はん、薩摩の中邸は漆黑雄嚴の門華族會館の表門に用ひられ半勸業銀行の占有する所

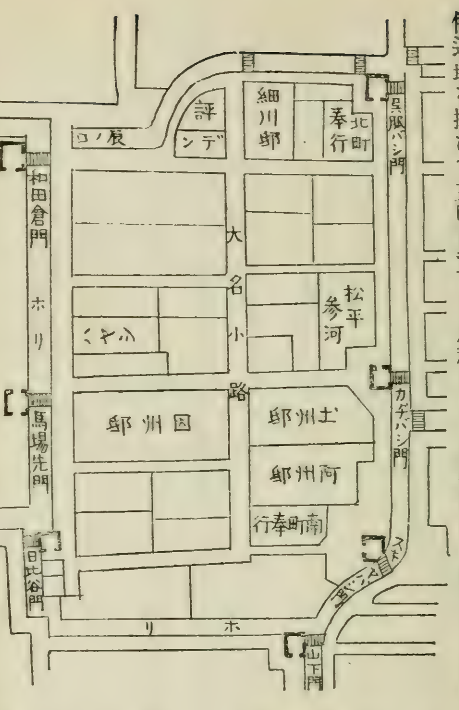
となる、阿部邸の帝國ホテルの層樓に化せしが如き、更に奇とすべきは夙に歐洲の文明を唱導せし先覺者、佐久間象山の住棲せし眞田邸が國會議事堂と爲りしが如き、偶然と雖も亦奇蹟の一に數へざる可からず、象山若し靈あらば莞爾として得意なるや明かなり、霞ケ關黒田侯白堊の舊邸は其幾分を存して建築の強固を表示するものは外務省の一郭に非ずや、而して虎之門より幸橋門に抵る間は既に埋沒せられて幕府の南防禦線は玆に滅却し、僅に細流の潺湲として東に注ぐあるのみ、長州邸と鍋島邸とに挾まれる御用邸とは何ぞ、此れ西の間に仕へたる官女の年老いし者又は主公たる御臺樣逝去の後剃髪せし等の忠節なる女性の退隱する邸宅にして、幕府は終身之に祿を與へて老を養はしめし所とす、想ふに幾多の涙と閨怨とは玆に噴出しつゝ有りしならん、而して今や春秋草花の園苑となりて靑春の士女等が觀玩する所となりぬ。

吾人は是れより大名小路を中心として語る可けん歟、舊圖の大名小路讀んで字の如し、即ち因州（池田侯）土州（山内侯）阿州（蜂須賀侯）細川家、岡山の池田侯其他大名の藩邸を以て充塡せるが爲め俗呼んで大名小路とす、土州邸の趾は即ち東京府廳のある所なるを知るならん、吳服橋門内の北町奉行所と數寄屋橋内の南町奉行所とは如何、是れ江戸市政中央集權の官衙なり、行政

司法兩政を專擅し生殺與奪欲するが儘のみ、只だその所屬刀筆の吏に贈呈する賄賂に由て鴉は鷺と化して飛ぶ所、所謂地獄の沙汰も金次第の出處にしておッかねえ所たり、此の兩奉行の官衙前に廣大なる茶屋あり之を腰掛と云ふ、即ち裁判を受くる原被兩造若くは願伺屆の爲に出頭する町人供の控所なり、但し罪囚は官衙内の假監獄に投ずるを以て玆には居らず、貸借、姦通、喧嘩、盜難、出火、あらゆる爭論を決する爲め集まる者擾々焉として喧騷限りなく、門番は出頭簿に照らして訴訟人を呼ぶ其聲恰も叱咤するが如く「芝新網間男一件這入りませう！」と呼べば、原被兩造は町役人に從つて官衙に入り、而して白洲の礫石磊々たる中に蹲踞するを例とす。其の狀況政治門に縷陳するが如し。

圖中評とあるは評定所にして樞密院と大審院とを混合せる官衙なり、彼の賴三樹三郎が老中を罵倒して罪を買ひしも玆なれば、西洋人の渡來に方りて是非を論ぜし處も玆なり、其隣りなるデンとは何ぞ、傳奏屋敷即ち是れなり、京都の勅使の旅館にして、彼の殿中問答として有名なる中山大納言愛親が一大波瀾を捲き起せしは即ち此處なり、和田倉御門と馬場先御門の中間なるハヤシとあるは林家にして即ち林大學頭の邸舍なり、幕府學問の本宗朱子學の淵源なると同時に頑迷の

發生地、人才壅閉の鐵壁なり、而して今如何、夷狄の家屋は天飆に聳えて其の東南に在り、而も儒道地を拂ひて文明に資する所稀なり、林家亡びて地空しく存し三菱原頭秋色寒し、若し夫れ日



比谷門を起點とし數寄屋橋御門を經て呉服橋御門に抵る其間の塹濠石塀を回想し、更に塘上翠松の點々として蟠居せしを偲ばゞ、昨今夢の如し、況や高架鐵道の蜒々として南品海に曳き北、上野に達する其の中央停車場が鍛冶橋御門内に構成せらるゝをや、然れども天保年間洋學を唱へて彼の緒方洪庵と共に西洋醫書數部を飜譯し、斯界に貢獻したる宇田川某が、鍛冶橋御門内なる松平三河頭邸即ち津山藩邸より出しを見れば、此の變遷は宇田川某の期待

せし所なりしや否や未だ知る可からず。

辰之口より北神田橋、常磐橋より西、大手より右折して更に西する竹橋の境域は、邸榭の築造悉く一變し大抵洋館になりしと雖も、其の位置は當年と更に異る所なし、只だ下馬將軍と綽名して天下の權柄を弄したる酒井雅樂頭の舊邸が内務省となりしは聊か奇の觀なくんばあらず。

京橋新橋間

吾人は茲に麴町區を出で京橋と新橋間の四圍を語らんと欲す、元來此間は明治五年の交故大久保内務卿が、東京改造の模範として多大の國費を投じて根本より改造せしなれば、二三の土藏家屋を除くの外は何の舊態をも存するなし、而して五十年前の當時は如何、京橋は幅員稍く三間に過ぎざる木橋にして左右十箇の柱に銅製の擬寶珠を飾れり、之を度れば銀座一丁目にして本通りの幅員は六間に過ぎざりき、其の家屋は橋手前なる南傳馬町に比すれば頗る見劣り、現在の日本火災保險會社の在る所は松田てふ繩暖簾式の料理屋なりき、此の松田より南五六間にして蠣殻の屋根を爲したるは山東京傳の宅趾にして讀書丸といふ藥を鬻ぎし處とす、二丁目は人相見本國堂及び一負擔すれば無くならんとする古本屋、屋臺店の天麩羅屋、凧屋（歌川國松の家）八百屋、荒

物屋といふ店附なれば銀座街頭の狀態は推知するに足るべく、只だ當時出色の店舗なりしは惠比壽屋といへる呉服店にして、現在の東京日々新聞の建物は改造後の同店なることを知らば、其の規模は白木大丸と覇を爭ひし一大商店たりしや言を俟たず、尾張町を經て新橋に進むに從ひ一歩は一歩より場末の景狀となり、新橋橋畔には草履、草鞋を店頭に吊せし立場の茶店然たる陋屋さへありき、而も新橋は府の內外の境にして其橋は纔か二間の粗造木橋なりしなり、蓋しその西方に土橋のありしを想はゞ如何に場末の風光なりしかを知るに難からず、而して當時より連綿たる商家は大通りに於て針屋の美壽屋、丸八の松澤、絲屋の布袋屋、足袋屋の中川、恐らくは之等に過ぎざる可し、大通り街頭にして既に斯の如く蓬家陋屋相連なれり、況や其の左右の裏町に至りては殆ど中流以下の淵叢にして、山下御門內の諸侯及び築地の諸侯中下屋敷又は旗本等を相手とせし小商人勞働者等の住居なりき、夫れ斯る場末の陋街に金春藝者は如何にして存在せし歟、頗る奇に似たりと雖も大に理由の在る有り、元來舊幕府は藝者の市中に在住して營業するを許さず則ち市の執政者たる町奉行は嚴に之を戒飭しつゝありき、是を以て藝者營業人は町奉行の管轄以外に在て營業せんことを企圖し、之が爲め勢ひ御坊主又は御家人等の拜領地内に住居せざるを得

ず、是れ町奉行の權能以外の地域なればなり、金春は卽ち御能役者金春太夫の拜領地なれば偖こそ此地を借區して彼等は玆に芳草百花の薰園を構成せしなりけれ、今日新柳二橋の阿嬌と並び稱せらるゝも其の昔年は微々たる場末の野猫のみ、今尙ほ竹川町の西方に金春稻荷の存在するは拜領地の遺蹟たり、ごぶ板新道の小路は幅一間の泥溝に板を蔽ひて蓋とし以て通行に便し、之に面して巢窟を營む者は卽ち板新道の藝者たり、今日之を觀んと欲するも其の形跡だになし、然しながら場末藝者の本能として枕絃の二タ筋道なるは蓋し此時より發生せしもの乎。

八官町は最も狹隘なる陋街にして殊に土橋に接する所は彼の自身番の突出するありて、僅に一間半の往還なりしを思はゞ其の前後に住居する商工者の地位の如何に低級なりしかを知るべく、時計商小林某が始めて屋上に大時計を揭げたるが、土地の一異彩として賞揚されたるの外記すべきものなし、又山城町より數寄屋橋外を經て比丘尼橋に抵る濠端は、極めて寂寥たる街衢にして、日中人の往復も數ふべき程なりき、此の山城町は舊時山城河岸と稱へ、玆に津藤（香以山人）なる富裕の俠兒ありて花街劇場に出入し、頗る奢侈を盡して遂に破産せしが、此失へる財産は五六萬兩に過ぎざる可く、今より想ふに金剛石嵌入の指環三四個の價に匹敵すべき財産の蕩盡も、當

時に在りては津藤大盡と稱せられ昔時の紀文に比せられたりき、時勢の變遷亦摩訶不可思議と云はざるを得ず、但し京橋新橋間に於ける横丁として最も繁昌せし往來は、日々新聞社の角より折れて山下門に抵る狹隘なる一路にして、玆には古着屋、道具屋、割烹店、雜貨店、八百屋、魚屋の類櫛比せり、是れ各藩家中日用の需要に應ぜし須要の街區なればなり、更に三十間堀の河岸通りに出れば、商家の存在するものは石炭商の某と大村屋、兵庫屋の船宿のみにして、他に一も存在するなし、此の河岸通りは西の濠側に比して稍や往來人の稠きを見たり、是れ畢竟、材木商、米商又は倉庫を有する商賈の多數なりしが故なり、又大村屋、兵庫屋等の比較的大なる船宿の存在せしは、此等は芝居の關係者、遊藝の師匠若くは銀座附近の商人等が、向島の觀櫻、兩國の川開き、品川沖の汐干等に一遊を試むる、不時の需めに應ずべき屋形船の備へあり、若し夫れ吉原に一夜の春を買ふ連中が猪牙舟を傭はんとする、亦此の二家に依るが故に土地不相應なる繁昌を極めしなりき、尤も金春の妓を聘して花影隔簾の興を催せしも此の二軒に於てせしこと固よりにして、今日純然たる待合となりしは乃ち此に基因せり、此の區域は大通りに旣に松田の茶漬飯屋あり、蠣殼屋根の山東庵あり、京橋に大根川岸ありて江戸市中に蔬菜を供給するの有樣なりしを

以て、江戸市内の盡處たりしや明かなり、且南金六町の河岸には猶ほ蒹葭の簇生しつゝありしと云へば、此の一事よく新橋附近を語り竭せるならん、然るに今日は如何、大廈層樓軒を列ねて東京第一の繁昌區となり、金碧壯嚴の街と變じぬ、蓋し故大久保利通侯の德を頌するは此の區域間住民の義務なるべし。

日本橋附近

是れより吾人は日本橋京橋間を說明せんとす、此の兩橋間大道の幅員が八間なるは市區改正前に目擊せられしが如し、但し日本橋の當時は僅々幅員四間の木橋にして、京橋と同じく十個の擬寶珠に由て飾られたり、蓋し橋に擬寶珠を粧飾するは幕府に於て重視する橋梁の目標たり、況んや江戸の日本橋として首府の中央に在るに於てをや、然れども讀者驚く勿れ、この日本橋橋南の廣場は是れ刑場なりし事を、卽ち磔に處すべき主親殺し、强盜殺人等の重罪犯者にして主刑執行前死亡せし者は鹽漬となして此の廣場に晒し、以て公衆に視せしめたり、且僧侶にして女犯せし者、情死の未遂者も亦共に玆に曝されたりき、今其狀を語る可ならん乎、卽ち橋南の左方廣場に間口三間奥行一間許りの小屋掛を作り罪人を縛せし儘こゝに坐せしむ、鹽漬は全體を埋たる大瓶

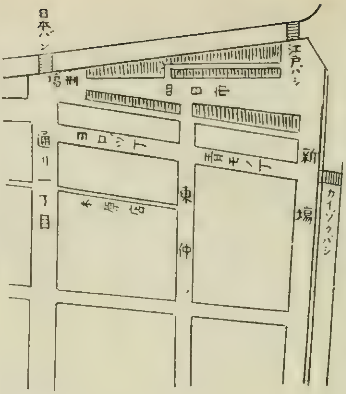
より其首のみを露出して玆に置かる、而して突棒、刺叉、袖搦等を樹て列ね、斷髪の非人五六人之を看守す但し四圍には繩を張りて區域を立るのみ、傍らに捨札なるものあり長サ一間幅尺餘、厚三分の杉板へ横さまに氏名及び罪名を筆記し、中央に杭を打ち往還に向つて之を樹つ、其の凄愴なる光景人をして顏を背向け色を失はしむ、嗚呼日本の首府江戸の中央、日本橋橋南を以て刑場となす、其の蠻風寧ろ驚くに堪へたり、而して是れ五十年前の東京なり、今日支那政府の刑場を笑ふ者之を聞かば果して如何なる感かある。

通り一町目の東側は近江店と稱し今尚ほ土藏造りの商鄽を存す、伴傳西川即ち是れなり、白木吳服店は舊位置にあるも大に發展して全然面目を一新し、左側の大倉書店、黑江屋、古梅園、一角丸等は當時より存續し、獨り書肆須原屋のみ今は南傳馬町に千鐘書房の名を止むるに過ぎず、一町目以南京橋迄は之を銀座街頭に比すれば敗亡の商家比較的鮮なし、蓋し此間は所謂江戸府内目貫の土地柄にして基礎の鞏固なる商賈の多きに由るならん歟、即ち柳屋の外池、近江屋の大西川金花堂、白牡丹の大西、紙店の太刀伊勢屋、中將湯の津村等猶ほ數ふべきもの少からず、想ふに銀座に舊商家の存せざるは概ね荒物屋、玩具店、駄菓子屋等の小商人なりしが爲め、一朝煉瓦石

造に改築せられて之に棲居する資力なく、安住の地を覓めて他方に飛散せしに據るならん、吾人は此處に於て特に語るべきは中橋の名稱なり、人は電車に駕して無意味に中橋々々と呼ぶを聞くも、中橋なるもの果して何處にか在る、此れは是れ實に通り四丁目より南傳馬町一丁目に架したる一橋の名にして、此川は東は材木町より西は外濠に貫流せし一川にして、其の存在せし年代は嘉永年間までならん歟、吾人も實は其の實體を知らずと雖も恐らくは嘉永の末年頃埋られしものなるべし、於是乎その埋沒せし跡の空地を稱して中橋廣小路とは云ひしなり、舊時は此の廣濶なる空地を利用して各觀せ物は興行せられ笛太鼓の錚々たる聲を絶たず、就中佐野松と稱する寄席小屋の如きは大通りに面するに拘はらず、演劇を興行するの盛況なりき、然るに今や一坏土の叢なく中橋廣小路の名稱は只だ町名に存するに過ぎず、其の變遷の速かなる驚くべきのみ。

東西仲通りは敢て變らず、獨り形跡だに留めざるに至りしは四日市と新場なりとす、四日市とは日本橋と江戸橋との中間にして、現時日本郵船會社の倉庫と東京郵便局との所在地々區を云ふ、看よ、舊圖を看よ、舊圖の▤印は町家にして小商店櫛比せし所なるが、沿川の地は悉く倉庫となり、南は全然撤去して郵便局と併行線の通路となりぬ、且海運橋（舊名海賊橋）を挾める新場

は魚市場にして、日本橋の魚河岸と競争して俠名を恣まゝにせし處なるが、今は魚市場の腥風さへ止めずなりぬ、茲に特筆すべきは江戶橋橋畔の南より北方に斗出せし棧橋上に存せし御納屋にして、這は幕府將軍御膳所の魚御用なるを以て、虎威を假りて抑壓的手段を用ひ、相、房、總等



より來れる漁船は先づ此處に繫留せしめ、納屋の者は揚揚として其船に乘り移り、板子を除きて鮮魚を檢查し其の尤物は悉く自ら魚鈎に掛けて之を取上げたり、而して其價を償ふは僅々、殆ど强奪に異らず、而して悉く御膳所に納付するに非ずして三分の二は之を私するなりき、當年弊害の及ぶ所想ふべきなり。

此の區域に於て有名なる小街は、通一丁目木原店の食傷新道と同二丁目の浮世小路にして、共に小飲食店の盛んなりしは今日に異らず、解語花園は檜物町のみにして是則ち御同朋の拜領地たる故を以てのみ、然れども其の景氣は寂々寥々として嬌名太だ振はざりき、又通り一丁目の左側は晝夜となく露店の羅列する所にして雜沓を極め、更に日

本橋より四日市に入る所は鹽魚商を以て充たされ、之に續いて露店的小舗は左右に列を作し往來稍く一間許りを餘すのみといふに至つては、その熱閙の狀推して知るべく、地方人の始めて此處に來る者は此の盛況に惘々然とし、日本橋の名を記憶する亦偶然にあらざりしを知る、さて西河岸の地藏、四日市の翁稻荷は今は如何、此邊に散在する商家は紙店の榛原と漆器商の會津屋其他二三、殊に萬町角の飲食店立場は卽ち實際の立場茶屋にして勞働者の飲食する繩暖簾店なりしが今は卽ち第二流の割烹店となりぬ、菓子商榮太樓が露店より榮進し、某々の矢大臣的小屋がうまい物屋の名を恣まゝにするに至りし等、數へ來らば屈指するに遑あらず、故に吾人は其の概略を記するに止め、筆を提げて橋北に移らんとす。

橋北の東は卽ち魚河岸にして本船町、安針町、本小田原町、、長濱町の魚區依然として當年の狀況を存し、敢て變遷の語るに足るもの無し、要するに江戸ツ兒の淵叢、俠客の發生する所、助六の劇は此地の同意を經るに非ざれば紫の鉢卷と河東節を用ふる能はざるが如き、猶は多少昔日の面目を存するを知るべし、西は釘店にして猶は乾魚店の專有に屬す、此より北今川橋に抵る間を一區として吾人は之を語らん、請ふ舊圖に照らせよ、日本橋より今川橋に至る大通りは敢て明

治革命の變に與らざる所、猶ほ日本橋京橋間に於けるが如くなれば、三越呉服店は彼の如く、木屋の漆器店、人篇の鰹節店亦た彼の如し、只だ面目を一新せしは本町一丁目より常磐橋を右にして一石橋に至る小區なり、現下石造の大廈巍然として横はるものは日本銀行に非ずや、而して其昔は何ぞ、町年寄なりし舘市右衛門及び樽藤右衛門の事務所と係員の家屋なりき、且本石町一丁目通りに在りては菓子司鈴木越後と其の北隅は「ことぶき」といへる茶店等その重なるものなりしなり、蓋し町年寄とは江戸市中一般の非訴訟公衙にして、則ち規定の問屋、出版允許、其他官許を經たる組合等の願、伺、屆等を許否する權能を有し、町奉行に次での市中の一權勢家なりき、而も舘、樽共に徳川の曩祖家康の勃興に就て功勞ありし農民の江戸に徵されて此の權職を賜はりし者に係る、殊に行政のみの機關として刑法の權を附與せられざりしを以て、町民との折合ひ極めて圓滑なりしは無用の用として市政の好機關なりしなり、日本銀行の南一石橋畔は總て幕府の呉服用達後藤縫殿允の賜邸にして、橋南の後藤三右衛門と相對す、五斗—五斗—之を併せ乃ちち一石橋の名の起る所以なりき、其間に介在する兩替町、駿河町にあるは三井の兩替店、下村の油店等其尤なるものにして、當時の狂詩は之を寫せり、

越後屋呉服店　　駿河町角

兩側一町三井店。小僧判取帳場遐。半時商内何千貫。知是繁昌江戸花。

下村山城油　　本兩替町

三都無類山城製。貴賤珍重六十洲。貯得道中經幾日。不融不替一番油。

本町一丁目に至りては彼の戯作者の巨擘たりし式亭三馬の舊肆存せり、狂詩あり曰く、

三馬江戸水　　本町一丁目

近年三馬大流行。德利往來店不遑。賣出繁昌江戸水。粧成八百八町娘。

鈴木越後羊羹　　本町一丁目

江戸誰知越後名。本町入口土藏宏。當時處々多新製。依舊羊羹天下鳴。

看じ來れば只だ三井の他夢一場に消散し去りて痕跡だに止むるなく、藝園的の市街に變じて大廈高樓の鱗次するのみ、本町一二丁目より今川橋の川岸に至る間は敢て沿革に就て語るに足るものなし、室町通り以北に於て面目を改めしものは川の埋立なり、即ち荒布橋より北、堀留に至り西に折れて尚ほ流れを通ず、是れより本町三丁目と大傳馬町一丁目の間より江戸橋に至る堀割を小

舟河岸と唱へ水運の便に供せしが、今や之を埋沒して宅地となしぬ、又本町三丁目は藥舖の淵叢にして、鰯屋彼の如く酢屋彼の如く舊時の面影を存す、大傳馬町一丁目にも地方に本店を有する問屋向の巨商等多きを以て退轉せしもの少きを思ふ、是れより以北は亦敢て語るに足らず、只だ其區に於て桑滄の變を見しは今川橋とす、元來今川橋の架する所は六七十年の昔は現今の如く川なりしも、此川一帶の東西水流は神田方面より來る大火の要衝に當り、茲を越えて南する火災は遠く築地靈岸島に延燒すること屢々にて、之が爲め江戸の經濟を消耗せしむること巨額なるを以て當時の政治家水野越前守は頗る之を憂ひ、遂に大土工を起して今川橋の流れを埋沒すると共に同川以北即ち龍閑橋より傳馬町牢獄の横手に達する一大堤防を構成し防火線とはなしたりき、吾人が八九歳の頃此の堤防上に遊戯せしこと今尚ほ記憶する所なり、而して何時しか之を撤去して平地とし暫らく有名無實の今川橋なりしが、明治に及んで再び舊川を開鑿し現下の今川橋の流域となりぬ、此の今川橋橋畔は舊時陶器商の輻湊せし所なりき。

十軒店は昔より雛人形、五月幟の工藝者の存する猶ほ今日の如し、その三月と五月との節句前々日に至るや、現下の電鐵線に當る中央に各々假建ての店を作り腹背ともに之を鬻げり、混雜名狀

す可らず、此の十軒店名物として夜間稲荷鮓を鬻ぐ露店あり、其の主人露店内にありて絶叫し曰く「十軒店の次郎吉ぢやア!!」と、其鮓の美なると此の狂態は府下の人口に喧傳せられ、丁稚、權助、人夫等先を爭うて喰ふ、次郎公爲めに財産を作り子孫今尙ほ東横町に其業を營みつゝありと云ふ、次郎公たる者亦えらし〇〇と云ふべし。

内神田萬世橋方面

吾人は是れより興味深き今川橋以北萬世橋以南を語らん、但し今川橋大通りより須田町に至る間は變遷の著しきものなきを以て、直ちに萬世橋々南卽ち筋違見附に及ぶべし、此の筋違見附はその構造毫も櫻田門に異なる所なく、枡形の石垣上儼然たる櫓を構成し、銅製の鯱棟の上に相對し、見附番衆玆を固めて往來人を警戒しつゝありき、而して東の廣場は下層社會の歡樂地にして辻講談、デロレン祭文、チョボクレ節、チョンガレ節、阿房陀羅經の類、葭簀張の小屋掛を設け木戸錢なしの開放に公衆を集め、三絃の聲、法螺貝の音、講談師の机を叩く響等、その喧騒今の淺草第六區の光景に異ならず、而して其語り物將さに佳境に入らんとするや、從者は扇又は笊を公衆の胸に突付けて以て傍聽料を要求す、與ふる者あり與へざる者あり、或は暫らく去つて復

た傍聽する橫着者あり、其與ふる者と雖も僅々文久四五文に過ぎず、偶まに天保錢二三枚を投ずる者あれば從者は「有難い何百文」と高唱して其の金高を吹聽し、且客の器量人格を賞揚して阿諛至らざるなし、聽く者却て捧腹す、此バラックの間には下等の飲食店散在し、稻荷鮓、强飯、おでん、大福餅、榮螺の壺燒、烏賊の附け燒の類、砂に塗れたる儘之を鬻げり、殊に洗ひ流しの水縱橫に漂ひ、放尿之に混じて臭氣鼻を衝く、狀態斯くの如くなれば公道は左右三尺を餘すのみ而も此處は有名なる柳原の入口なるを以て古着屋、古本屋、武具馬具屋、ガラクタ道具屋、古書畫屋、下等の飲食店、賣卜者、慶庵等、軒より軒に連なる、今日此の種類の多きは之れが遺傳と云はざる可からず、古着に柳原物と稱して危險の代名詞たりしは何の故ぞ、彼等は刷毛を以て色彩を施し糊と燒鏝とを以て光澤を出し、一時の外觀を粧へる衣類を作つて之を七八倍の價ひを以て售らんとす、知らざる者其の三分の一に直切らんか賣る者熟考の體を粧ひ遂に之に應ず、若し購ひて雨一過せば染色は流れ糊付は離れて形ちはゼロのみ、獨り之れのみに非ず共謀詐欺、贋物公賣は白晝公々然として行はれつゝありしなり、何に由て柳原は斯く奸商の群集する所となりしか、卽ち近傍なる馬喰町、小傳馬町等は旅人宿の櫛比する所にして、之に投宿滯在する質朴正直

なる田舎漢を欺かんが爲めに然るのみ、而して筋違見附より淺草橋に抵る柳原は神田川の堤に沿へる一條の通路にして、堤上數十株の柳を植う是れ柳原の名稱ある所以なり、此堤に添うて假店を設くる者百數十店の多きに達し、彼のイカ物の古着店は殆ど其三分の一を占む、殊に醜陋を極めたるは春畫專門店にして故らに畫中の醜態を曝露して數十冊を陳列し、以て國侍及び田舎の百姓等の來つて購ふを待つ、其價ひ亦掛直多きが故に利を得る少からず、一戸二三口は之が爲め優に生計を營み得らるゝと云ふ、又この柳原は無宿乞食の徘徊する所にして、投棄する所の殘飯剩菜は塵埃と相混じ路上不潔を極めたりき、然も新し橋（今の美倉橋）以東五六間の處より淺草橋に至る堤の向面は郡代屋敷の板圍ひにして二町ばかりを遮斷し、堤下に五六軒の非人小屋あるのみ、茲に驚くべきは郡代屋敷と淺草見附との間に默許せらるゝ私娼の一廓なりし此處白晝下級民遊園地の一部と紺屋の乾場とに充てられたれど、日沒して人去り乾し物撤せらるゝや、點燈頃に及んで本所吉田の私娼（所謂夜鷹）は妓夫に引率せられて此の空地に來り、須臾にして疊一枚の蓆小屋を作り以て春を鬻ぐ茵席とす、其の私娼の容貌如何、『戯作者小傳』山東京傳の部に曰く文化五戊辰發兌せし冊子『紋染五郎剛勢談』に辻君（私娼）多く描きたる繪樣あり、或は偏盲鼻

缺又は鼻より頰へかけて膏藥をひたと打ちたる樣なんど、最見苦しき姿に畫なしたるを實の夜發（私娼）等之を見て、如何に吾々なればとて斯まで見苦しくはあらぬを、箇樣に書き僻めたるは皆是れ作者の虐業なり、京傳といふ似而非者を若し途中にて見つる事あらば、捕へて此由を恨みんものをと、豫て相譚り合せて置つるが、或る黃昏に打連達て其の場所に行かんとする折から、不圖翁に行逢ひたり、其中には翁を見知りたる者もありけん、彼こそは京傳なれいで取押へて怨みを云はんと下知する裡に、伴ひ連れたる辻君等が翁を中に取圍みて口々に猛り罵しり、吾々をなど彼の如く惡ざまに畫なしたるやと姦しく恨むるに、翁は思ひ掛けぬ事なれば駭く事大かたならず、其上外視も惡く又むさく穢はしき事限りなければ、言葉を盡して言ひ慰むれど、彼の輩は猶ほ聞き容れず、穢なきを厭ふを見て故らに取つき纏るもあり、

云々と見ゆ、是れ私娼の容貌と風姿との寫眞にして四五十年前の昔も猶變る所なし、而して私娼は各自小屋の内に在りて客を待つ、但し屋內寢具あるにあらず唯だ板一枚を横たふるのみ、之を圍みて集まる者は折介、人足、職人、貧しき遊冶郎等にして一枕の春價二十四文、一夜十人の客に接して稍く二百五十文を得、亦憐れなる境遇に非ずや、而して彼等は大抵第三期の黴毒患者な

り其毒を流すや實に恐るゝに堪へたり。

吾人は次に郡代屋敷の事を語らざる可からず、郡代屋敷とは關八州に於ける幕府直轄領地代官の御用屋敷にして、代官の人員八人、各自管轄内人民の行政上の爭ひを吟味する所なり、是を以て馬喰町は三町を通じて地方旅人宿の大部分を占むると同時に、更に地方仕入れ商人の淵叢とはなりき、屋敷の門前に長六十間許りの長方形の馬場ありて初音の馬場と云ふ、二三株の柳春風に梳るものありしが今やなし、橋本町の表通りには商家建ち並びしも裏通りは多く大道演藝人の巣窟なりき、阿房陀羅坊主、兩國見世物小屋に出づる不具者、野師、門附け、物貰ひ等之に居る、芝の新網、下谷の萬年町と同等の陋街なりしなり、而して今や郡代屋敷は跡なく橋本町また乞兒の足跡を見ずして堂々たる市街となりぬ。

兩國の西南部

吾人は此の一區劃を終了せしを以て、次に兩國附近及び西南部に遡りて解く所あらん、如上私娼醜廓の前面は卽ち淺草見附なるが故に、警衞の士は晝夜となく嚴然として往來を看視しつゝあるなり、而して目前は彼の如く其の滑稽も亦極まれりと謂ふべし、馬喰町の通りを右に兩國方面

に向ふ所を俚俗鍔店と云ひき、蓋し刀劍に於ける鍔商の多く在りし所以ならんか、その鍔店の北方卽ち見附石垣の下に至る一帶も亦一の平民公園なりき、其の前面は例の柳原のイカ物店連なり背面は有らゆる露店とデロレン祭文、大道講釋師、揚弓店、飲食店等にて立錐の地を餘さず、現下の高等便所は其の中央に當れり、玆に有名なる講談席あり號して太平記場といふ、三代將軍の頃より存續し江戸に於ける講談席の嚆矢なりと、進んで廣小路……今の所謂兩國廣小路……に抵れば、橫山町三丁目の角より紀文煎餅の店頭まで、中央一列に數十の屋臺店の連なれるを見る之を四文屋と稱せり、卽ち天麩羅、鮓、團子、田樂、煮しめ屋等の下等飲食店にして各店とも一品四文の定價なり、其盡る處自身番を隔てゝ苫を以て屋根とし蓆を以て壁に代へたる小屋掛ありて角藏及び村右衛門の定芝居は絕えず此小屋に於て演ぜられ、其の附近に點綴するものは飲食店の外揚弓店、覗眼鏡、吹矢、女太夫、手品師等にして其趣き曾て石川雅望が『都の手ぶり』に記する所と異ならず、而して此邊尿水の紛々たる鼻持ならず蓋し十個の四斗樽は諸所に配置せられ之より溢れて流出するに由る、而して箭取女、女太夫等は平然として此の臭氣中に嬌唱を恣まゝにするに至りては驚かざるを得ず、此れに連なれる兩國橋通りは朝は菜蔬の市場にして正午之を

撤し、兩側ともに雜貨の露店を以て充たさるゝに至る、橋の西端には長く棚を結べる茶店十數個あり之を並び茶屋と稱す、納涼、雪見、花火の他、客の休憩する所、阿嬌の媚を獻じて茶を侑むること勿論なり、而して此の平民樂園のバラックは一たび將軍放鷹等の事あれば一夜にして撤退し、塵埃だも止めずして其の清潔殆ど別天地の感あり、橋北川に枕んで二百坪許りの空地あり圍ふに四寸角の埒を以てす之をお上り場といふ、則ち將軍鷹狩の際隅田川方面より船を着けて上陸する所とす、此のお上り場の北は柳橋を隔てゝ江戸唯一の敎坊にして、成島柳北先生の『柳橋新誌』に其名を擅まゝにせし所、卽ち同朋町、吉川町、裏河岸の三所より形成し、淡粧赤足左褄の面影は髣髴として吾人の目睫に在りしも實體は明治の變風に遭ひて亡び失せき、而も尙ほ兩國橋の架換へと共に吉川町、同朋町の家屋は撤退して新廣小路となり野暮の俗地と化したり。

藥研堀は矢之倉と相並んで横山町二三丁目の東に在り、而も藥研堀は醫者町と稱へ戶々醫家ならざるは無く、林薫亦茲より出づ、藥研堀を過ぎて村松町に入れば此邊亦刀劍商櫛比し新刀の出來合其選ぶに委す、是れより東南は悉く諸藩邸、旗本御家人の居宅、及び風流人の別墅等にして晝間猶ほ往來稀なりしが、今や旺盛彼の如く地形亦隨つて變革を來し、就中人形町の東に至りて

は殆ど隔世の感あり、舊圖を按ずるに蠣殼町二丁目は舊銀座を置かれし所にして人形町今の南谷陳列所の處にその表門あり、銀座役人は總て十五名、僅々十人扶持を給せらるゝに過ぎざりしも私する所多きが故に其の奢侈琴を折て鶴を烹るの概ありき、その對面なる松島町は有名なる貧民窟にして今尙ほ裏長屋に當年の面影を留む、然も蠣殼町は米穀取引所の設立に由て今の大繁榮を來し其の輸贏を鬪はす結果は銀貨鑄造の私利多きに異ならざるも奇なりと謂ふべし、蠣殼町の水天宮は原赤羽根の久留米邸より遷座せしものにして其の近傍各川の埋沒せらるゝものありて籠河岸も稻荷堀も今は只だ其名を殘すのみ、江戸の進化と膨脹斯の如し、かの其角の句に

鐘一つ賣れぬ日はなし江戸の春

と、之を吟じ今更感殊に深し。又此の小區に於て奇とすべきは日下小傳馬町の大師堂、法華堂及び小學校の在る所は元囚獄の地たり、此處は石出帶刀の所管に屬し江戸に於て審問糺斷する罪人は士民の別なく皆茲に投ぜられ且刑を執行したる所とす、當時士分以上の收容所を揚屋と唱へ、以下は普通の牢舍にして二つながら此内に在り、彼の橋本左內、吉田松陰、賴三樹三郎、小林民部少輔等も茲に幽囚せられたるなり、而して此の牢獄こそ事實に於て地獄の沙汰も金次第の出

處にして賄賂の多寡に由りて牢内取扱ひの厚薄あり、即ち其の牢役人は株の賣買に依て就職し得らるゝを以て、彼等は私慾を恣まゝにして我腹を肥やすを常とす、例へば彼等は時に牢外を巡回し自ら獄中に向つて曰く「親方（親方とは獄中兇徒の首座を云ふ）何か用はないかね」と、囚人答へて曰く「そんなら少し賑かさうか」と、乃ち貳分金一個を牢格子より投出して酢一包を註文すれば、役人は之を懐にして忽ち門外に走り、貳朱の酢を購ひて之を獄中に送る、一回の小使錢は壹分貳朱に當り註文主は僅に四分一に値する實物を得るに過ぎず、其他杖罪を執行するに當りても、罪人より黄白を贈れば笞百杖に處せらるゝ者も其實二三十杖に減ぜらるゝ事あり、其の方法は牢役人先づ刑杖を取り最初は一ツ二ツ三ツと呼びて之を鞭うつも中途より其數を呼ぶことを略し、直に飛ばして九十八、九十九、百と云ひ以て其刑を終る、之を監視する上役人も亦敢て咎めず知らぬ眞似して通過せしむと云ふ、而して斬首は玆にて執行せしも磔罪は引廻しと稱し此處より罪人を馬に乘せ、捨札竹槍等を携ふる非人等數名之に從ひ、遠く南（鈴ケ森）北（小塚原）の刑場に送るを例とす、是を以て小傳馬町の囚獄附近は世人の嫌忌する所となり地價極めて低廉なり、今猶ほ法華堂、大師堂の存するは囚獄移轉後も世人此地を顧みざるより、順逆成佛の方便より佛家が數千

死囚の冥福を祈る爲め之を建立せしものとす」

原稿は是れで中絶して居る、そして其の後半は未だ推敲を經ぬものと見えて前半ほどに文章も整はぬ處があるが眞に任天翁の絶筆ゆゑ、二三の誤字を正したのみで其他は草稿の儘である。

假名垣魯文翁の自傳

魯文翁の事は前章に於て屢々引合ひに出して置たが、此程筐底から翁自筆の小傳と『遊京日記』の草稿とを發見した、小傳の方は、横帳の日記の餘白へ書込んだもので簡單に失し、且維新までの事で筆を止めて居るから、其の後半を補ひ且處々註解めいたものを書加へ『遊京日記』と共に左に掲ぐ。

初め鈍亭又英　假名垣魯文　本姓野崎　幼名兼吉後文藏

文政十二丑年正月六日京橋鎗屋町に產る、戲述を好みて花笠文京の門に入れるは弘化の末年なり嘉永元年正月戲名披露せんとて文京に託し、當時の戲作者浮世繪師その他の雅客に乞ひて狂歌發句を集む、之を櫻木に刻し既に名弘めせんとの際故障ありて其事成らず、版木も畫餅とならんとせしを翌年二百冊ばかりを刷出して知己に配る、此頃馬琴翁北齋翁など前年に逝けり、英と號せしは花笠に因みてなり、題號『名聞面赤本』今も猶ほ坊間に殘れるを見る、狂歌は香以ぬしの紹介を以て三世千種庵諸持 淺草里長勝 田權右衞門 門人となり斜月窓諸兄、俳句は江戶座風を好み香以に習ひて初名を鳳子應一など書きたりし。

戲作者を自任して活業とせしは安政元年（戲作は嘉永六年、其前にもあり）初めの居は湯島妻戀

坂にて表看板に

◇滑稽道場 談笑諷諫 **御誂案文認書** 江戸作者 鈍亭魯文

と認め門に掲ぐ、此頃切附け本五十丁ものにて讀と繪の丁を限り安物抄錄の本を多く作り漸く糊口せり、妻は酒井新三郎氏の妾の妹にて則ち亡兒熊太郎の實母なり。

明治維新の際一人兩名不相成とて野崎文藏を假名垣魯文の通稱に改む、其筋の內命なり、妻戀稲荷の社邊に在りし頃野狐庵と號し後に猫々道人の別號聞ゆ、こは猫皮を鳴らす藝妓の毀譽を假名讀、いろは等の新聞に多く記せしに依てなり、猫々道人の名は成島柳北翁のざれ言より附せしなり、むかし猫の一名をカナといひしは金澤文庫に書籍をはむ古鼠あるを避んとて飼ひしこと梅花無盡藏に記せり、或書にはふるくより然か云へりとあり、表題忘れたり。

諱は能連、野狐庵は戲號、又骨董屋惟樂の名ありしは同所にて道具屋を開店して、筆硯の傍ら世經の一助とす、安政二年大地震の時借物の器物道具多く破損す、此時猩々曉齋初め狂齋本姓河

鍋洞郁）お茶の水火消同心市川寅次郎の紹介にて初對面、繪の版下に戲作を附す、明治の今日まで交際不變なりしは落合芳幾氏と曉齋老人、芳春などなり。

左文云、安政大地震の當時魯文翁が『安政見聞誌』三冊を著した事に就ては翁自記の『新舊繪代記』に「かゝる折しも書肆三河屋鐵五郎より安政見聞誌と題する際物の著作三册の註文あり、即金の手附け遁さじと二三日の猶豫を乞ひ堅く約して三鐵歸る、書肆去りて後つら〳〵惟ふに杜撰粗漏の書と雖も數枚の草稿爭でか結局の完きを成さん、誰か助筆者を傭はんと思案にくれ方、故人溪齋英泉の門人英壽獨身食客の氣樂者、かゝる大地震にも頓着なく偶然おのれが破れ家に訪ひ來りしを、是れ幸ひと雇ひ込み、纔か三晝夜にして安政見聞誌三冊の稿を脫す、潤筆の折半翌日五兩足らずの潤筆料を得たり」云々とあるに依りて、私は曾て『假名反故』に安政見聞誌を魯文の著作目錄中に記入して置いたのであるが、其後無物翁の『瓦の響』には安政見聞誌序に附記して「是は燕栗園千壽が作る所なり」とあり、其孫梓石氏も「此の見聞誌を魯文の著とすれども序文に據れば本文も燕栗園の筆なるが如し、達磨屋當時此書の取次賣を託せられしより推して、此の序の誤りを指摘して言送りしを見れば千壽の作を是とすべき歟」と述べて居る、成程原本を通讀して見ると、英壽が助筆

したにしても何處にも魯翁の筆癖は見えず他人の作かと思はれる節もあるが、魯翁の自記には明かに自分が筆を執つたと書いて居るから、姑く其儘を記して後考を俟つ事とした。

妻戀の貧家に在りし頃雪降りの日

白妙を肌にきつねの皮ごろも
雪やこん／＼妻戀の里

門人疊職富藏全亭おろかは隣町三組町に住し余が妻戀の侘住ひを能く知れり、此の時分今の風來河原英吉折々訪ひ來りしなり是れも舊友なり、又妻戀下お駕籠町の評定所書役橋本惣助と云へる士余が極貧を助け呉れたり。

假名垣魯文翁

是れで自傳は終つて居るが、猶文久三年刊行の『粋興奇人傳』には左の通り翁の小傳が掲げてある。

魯文は始め鈍亭と號して花笠文京秘藏の門たり、其かみ富豪に仕へて丁稚たりし時或人相して此

の小僧長く商家に在るべき者ならず文に遊ばゝ世に名を揚げんと言はれしが、果して幾程もなく主家を退身し路通が昔ならねども處定めぬ旅にさまよひ、其外種々艱難して終に妻戀に居を設けてより次第に賣名す、元是れ幼少より商家に仕へ半途にして大に窮し物學ぶいとまあらずと雖もそも十八九歳の頃より作道に志深く、まだ兼吉と呼びし頃より著述の書あり、好きこそ物は上手の理り、今作者中の才子なり。

魯文翁は維新前には專ら操松月景清、黄金花猫眼蔓、東紫哇文庫、當九字萬倍曾我、傀儡師、薄緑娘白波の如き合卷物の草雙紙を著して居たが、文久年間『滑稽富士詣』十冊を發行するに至つて讀者も始めて滑稽の才を認め、その輕妙なる筆致を歡んで翁を呼ぶに今三馬を以てするに至つた、翁自身も亦夙に三馬に私淑し（明治十年頃の東京繪入新聞へ翁は赤神三馬の名を以て屢々寄稿した事もあつた）人情世態を穿つことを心掛けて居たのだから、是れより滑稽作者を以て世に立たんと志したものらしく、維新後はあまり草雙紙の筆を執らず、西洋道中膝栗毛、胡瓜圖解、安愚樂鍋等の如き滑稽本を著述し、夫れから假名讀、いろは等の新聞記者になつてからも專ら諧謔の文を弄し且猫々奇聞、猫洒落誌等の欄を設けて毎號藝妓のアラ捜しの文を揭げて居たが、此の獨特の滑稽文

は啻に花柳界を騒がしたばかりで無く、紳士、學者、書生等にも愛讀せられて、魯文の名は益々世上に喧傳せられる事になつた。

翁は文久二年妻戀坂から日本橋龜井町に移り、翌年神田久右衛門町に轉居したが、そこは佐々木博阿彌が大屋で、其の店子には魯翁の外に同じ著作仲間の山々亭有人（條野採菊）や講談師の寶井琴凌などが居た、それから慶應三年には淺草馬道寢釋迦堂の傍らに移轉したが同地内には舊友の河竹新七（後の默阿彌翁）や後の福地櫻癡居士（夢の舍主人）も住つて居たとの事である。翁が『西洋道中膝栗毛』を著したのは此の寢釋迦堂時代の明治四五年の交であつたが、翌年は横濱の元辨天に移轉して神奈川縣廳の雇員となり更に櫻木町に轉じたが、此家は今の鐵道線路を前にした片側町の二階家で、私がまだ魯文翁を識らぬ前に其の門前を二三回通過して、これが戲作者で名高い假名垣の

住宅かと暫く彳んで眺めた事もあつた、其頃は入口の格子戸には黒牡丹や其他の賣藥の看板が掛けてあつたやうに記憶するが、不思議な事には當時掛けてあつた門標がゆくりなく私の手に這入つたゆゑ、昔を偲ぶまでにその門標の寫眞を茲に挿入した。翁が神奈川縣廳に奉職中内々で横濱毎日新聞の記者を兼ね又野毛山に窟螻蟻といふ新聞縱覽の休憩所を設け後妻ため女をして其の經營に當らしめて居た、明治八年翁は横濱毎日を去り自ら主宰して假名讀新聞を同地に起し、翌年本社を東京に移すと共に翁も京橋彌左衛門町に移轉し來り、後新富町六丁目に一家を構へた、假名讀にある時翁は別に『魯文珍報』を發行し又珍猫百覽會なるものを催した事は前章「明治初期の新聞小說」中に記した通りである、後又新富町七丁目に佛骨庵といふ一廬を營み、古佛像佛具類を蒐集し自ら玩物居士と號して佛いぢりを樂しんで居たが、明治十二年の年末故あつて假名讀を退き、兩國廣小路の京文社より發行するいろは新聞（元大井憲太郎等の發行して居たあづま新聞が發行禁止となつた跡を引受け其の組織を改めていろは新聞と改題したもの）に入て主筆となり、同十五年いろはを退社して京坂地方を漫遊した、十七年には小西義敬氏が今日新聞を發行するに當つて翁は其の主筆として入社したが、翁が盛んに文壇を雄飛した時代は假名讀、いろはの兩社に居られた頃であつて、

今日新聞在社の頃は翁も既に老境に入り且得意の文章も時勢に作はず以前ほどの盛名を馳するに至らずして十九年に同社を退き更に東西新聞の客員となり、廿三年には名納會なるものを催し故舊の書畫、原稿、書翰類を來會者に頒つて文壇を退き、是より後は都々、逸の選者となり又いろは連を組織して遊戲文藝を樂しんで居たが、廿七年十一月八日享年六十六歳を以て新富町の自宅に歿し、遺骨を谷中三崎町の永久寺に葬つた。

魯文翁は實に明治初期に於ける戲作者の殿りであると共に、又小新聞記者としての魁けであつた、逸話に富み奇行も多かつたが夫等は『假名反故』に載せてあるから茲には都て省略する事とした、其の門人を擧げて見れば

伊東專三氏 橋塘と號す、初め魯文の門に入り後ち退門して魯翁と紛爭を生じた事もあり、伊豆の伊東氏の末裔だと自ら稱して居たが、元は淺草の菓子舖船橋屋の主人で、橋塘と號したのは書を島春塘に學んだ故である、明治の初めは大藏省の小吏であつたが之を辭して假名讀、次て有喜世新聞の記者となり辛辣な筆を揮つて居た、氏は固より惡人ではないが筆舌ともに兎角毒氣を含み人を罵る癖があつたので敵多くして味方少く、有喜世を辭してからは荒川高俊氏と共にタイム

ス新聞といふのを發行して居たが、いつの間にか新聞社會から姿を沒し其の消息を絶つに至つた。數年の後私が橘町の住宅を訪うた頃は中山法華經寺の信者となり、二階に壇を設けて加持祈禱を修して居たやうに記憶する、歿年月は大正三年十月で享年六十四歳であつた。

渡邊義方氏　東京の人灣泊童子と號す、魯文の門に入り翁より花笠文京の號を讓られて二世となり、いろは新聞、繪入自由等の記者として續き物の小說を書いて居たが、其後僧侶より出て實業家となつた宏虎童氏に就て實業界に入り、品川電燈會社の支配人ともなつて蓄財し、三田豐岡町の自宅附近に貸屋などを建て、自分は釣魚を唯一の樂しみとし氣樂に餘生を送つて居たが、麻布竹谷町に移轉後何か事業に手を出して大損失を招き、北海道に在勤中の養子某は急病にて死去し細君また精神病に罹るなど種々の不幸續きで落魄其極に達し、大正十五年悶々の間に死亡したとの事である。

若菜貞爾氏　胡蝶園又は夢想樓と號す、千葉縣長生郡佐坪村の人、神田區役所の書記より身を起し魯文翁の門に入つて明治十一年には假名讀新聞の記者となり、十三年には大阪に於て津田貞氏の創立せる魁新聞に聘せられて同地に赴き、魁の廢刊後は大阪朝日新聞、福井の越陽新聞、

東京のめざまし新聞に轉々し、めざましを經て今の東京朝日新聞に移り、故半井桃水氏と共にその創刊から筆を執つて居たが、或る事件から失脚して放浪生活に入り、後には半狂人となつて日本橋大坂町の途上で人を傷け、保護者のない爲めに根岸病院に引取られて療養中、大正七年五月廿五日六十五歳で歿した。

廣岡豐太郎氏　大阪の人始め雜賀氏、彩霞園柳香といひ豐州又東洋太郎の別號がある、氏は一面識もない魯文翁をたよつて突然上京しその門下に馳せ加はつた人で、左のみ文才は無かつたが、いろは新聞から有喜世、開花等の記者となり、有喜世在社の頃は別に『晝夜燈籠』といふ雜誌を發行して居た事もある、同門でありながら私はあまり親しく氏と交際せず、どんな物が刊行せられたか幾ど記憶する所がない、明治卅五年五月廿三日四十六歳で歿したと云ふ。

富田一郎氏　生國は知らず二世一筆庵可候と號す、胡蝶園若菜氏と同じく區役所の書記であつたが若菜氏の紹介で魯翁の門に入り、いろは新聞を振出しに高知の土陽新聞、靜岡の靜岡日報等に筆を執つて居た、多く地方に留まつて居た爲めに東京では其名を成すに至らず、晩年窮迫して根岸の陋屋で病歿した、時に大正三年一月十一日、享年五十五、芝三田の大信寺に葬つた。

三浦義方氏　信州松代の人、號蘭省亭花時又八坂之居守、魯文翁は三浦といふ姓に因んで百六齋といふ號を贈つた事がある、上田花月氏の語る所に據ると、氏は明治十二年に宮島春松の譯した歐洲小說哲烈禍福譚の文を潤色した人で、馬琴風の流暢なる文章に書き直したのであるから譯者の功は半以上三浦氏に歸すべきだといふ、私の氏を識つたのはいろは新聞の末路の頃で、魯翁は已に去り社の財政も窮乏を極め社員の給料さへ仕拂ひ得ざるに拘はらず、氏は編輯局に踏み留まり殆どひとりで忠勤を抽んでて居た時であつた、其頃私は狂歌に遊んで居たが氏の祖父は六樹園側の判者で有名な園薰亭義信である事を後に知り一層追慕の念に堪へなかつた、氏の去死したのは明治十七年十二月七日、享年四十歲であつたと是れも花月氏から聞いたのである。

久保田彥作氏　此人は魯翁の純門人では無かつたかも知れぬが、魯文翁から引立てられた人、假名讀新聞の記者となり、明治十一年には『鳥追阿松海上新話』と題する草雙紙體の小說を著して居るが、是れが恐らく新聞に出た續き物が更に單行本として刊行された嚆矢であらう、後ち明治十五年に時事新報が創刊された時雜報記者として聘せられ又『歌舞伎新報』の編輯にもたづさはつて居た、本業は狂言作者で竹柴幸次といひ、新富座を退いた後は赤坂田町に待合を出し、自

分は茶の師匠をして暮して居たとの事であるが明治卅一年一月三日五十三歳で病歿した。

此外に最も古い門人としては全亭おろかがあるが、新聞には關係せず且一の著述をも公けにした事がない、又前に述べたいろは連中には猶ほ健在の人もあるから其の連名を左に掲げて此の小傳の局を結ぶ。

友垣以文　佐藤喜三、辯護士

百垣仁文

網垣浦文

清垣平文　清水晴風、神田旅籠町住、玩具蒐集家、大正二年歿

升垣斗文　青木藤吉

荒垣痴文　落語家談洲樓燕枝（長島傳次郎）明治卅三年歿

色垣奴文

藻垣苧文　全亭おろか、神田三組町の疊職富藏

歌垣和文　三世歌川廣重（安藤德兵衛）明治卅七年歿

梅垣佳文　狂言作者竹柴金作（小暮善太郎）淺草馬道に住す現存

嫁垣鼠文　姓川上氏、地方新聞の記者又壯士芝居の作者なり

花垣都文　山田直次郎、淺草菊屋橋通りに住せり

綾垣羅文　瀧澤愼八郎、號朗月亭、根津の酒舖相模屋の息、明治廿四年歿

霧垣夢文　和田辰之助、金物新報主筆たり、明治四十三年歿

袖垣右文　村松要次郎、俳號扇中、芝の俠客某の乾兒

茨垣萎文　渡邊太餘文、別號蔦の屋金澤の俳人、大正三年歿

山垣彌文　姓氏を逸す本所龜井戶の人團十郎の假聲を善くす

千代垣萬文

無駄垣戲文

金垣古文　河合寸洲

彌陀垣阿文　木崎六之助、表德釋迦六、淺草公園古物茶屋主人

蟹垣左文　（老生は此連中には加はらざりしも緣故あれば玆に名を列す）

柴垣其文　狂言作者竹柴瓢藏（四方梅彦）明治廿九年歿

小手垣味文　村越滄洲、漆食細工の名匠、明治廿四年歿

菊垣飛文　高井瀧次郎、明治廿七八年頃大阪に移住す

神垣茂文　內田茂三郎、著述業、中野町に住す現存

留垣寸文

億垣京文　佐々木佐兵衛、魯文翁の義弟

（終）

遊京日記（明治廿一年？）

魯文手記

六月六日　大阪出發西京に着し四條御池下ル書肆內藤彦一方に立寄り同道木屋町三條上ル三十七番地路次歌川國松氏を訪ひ近傍よろづ屋旅店に一泊。

同七日　內藤店に立寄り同道柳の馬場中村繁彦氏を訪ひ午後御所前柳の馬場に稲野年恒氏を訪ふ。國松門生佐野延四郎同道。

同八日　國松氏宅一泊、內藤彦一氏と共に東山巡り古跡奇跡は別紙に在り。伏見に至りて人形を

求む。本日京都新聞記者繁彦其他の記者國松氏宅に來訪。

同九日　昨夜内藤氏方に一泊すべき處（四條御幸町内藤芹水）引止められ國松氏方に一泊す待遇鄭重を極む。

同十日　大雨、昨夜より京都新報社主醫師鈴木福次氏と同行國松氏の宿所を訪ひ、又雅會周旋の事にて二見朝隈子來る（四條繩手宿所泊）内藤彦一氏も來訪。此日朝より雨降りて終日止まず賀茂川濁水。

　蒲團着て寢たり起たり東山雨の晴れ間をまつのたかどの

同十一日　大阪に歸る高島屋泊、角芝居見物。

同十二日　中芝居見物。

同十三日　大阪發京都着四條下ル御幸町内藤彦一方に至る。前日より小川幻夢同道夫れより内藤氏と共に三名同道京都府を發し花園妙心寺（二里）に至り貞山禪師に謁す。境内諸堂悉く巡覽、貞山和尚の勸めに依て寺中光國院に一泊。

同十四日　尚境内を巡觀す實に有名の大梵刹近傍比類なし。午前書堂にて貞山禪師老生問答の揮

毫禪師に猫の贊を乞ひて車駕京都に歸り内藤氏の向ふ谷口旅館に泊す（小川同宿）日暮内藤梓案内にて祇園町見物小雨降り京極通り雜沓の地にて東玉の仁和加を見る。十一時谷口旅館に歸り牛肉にて一盞を傾く。幻夢居士老生と臥す大雨睡眠を妨ぐ。

同十五日　昨夜より雨降り續き午前八時頃空晴れたり。小川居士出立、午後西京の絲商熊野陸三郎（集會の狂言師）來訪。

同十六日　晴、永井米七殿周旋にて寺町姉ケ小路鳩居堂樓上樓下觀覽。四條國松氏方に立寄り展覽畫を依賴す。夫より車駕洛東東福寺（伏見街道本町十五丁目）萬壽寺（法性院、本尊觀音なり）當時開山堂古墳景清娘人丸法名立海大姉の古墳右の如し

東福寺本堂燒失只大門柱石を見る。開山堂古色凡ならず番僧村上衞定案内す。廻廊の席

勅謚
聖一
國師

金襖四季草花　狩野山樂〇七福圖三幅　應擧〇參聖寺額　石川長者建立〇經山寺圖二幅〇松柏

鶴屛風一雙　雲谷等益筆○達磨大師像　雪舟筆○粟に鶉一幅　藤原光芳筆○粟に雀　狩野古法眼元信○寒山一幅　探幽齋筆○維摩居士　牧幽筆○釋迦文珠普賢　兆殿司筆○狗兒三幅　應擧筆○鹿四枚折屛風　元信筆○三國傳來布袋像　伏見人形門工○九條關白道家公尊像○閻浮壇金彌陀如來　關白兼實公念持佛○開山聖一國師尊像○宸翰　後伏見天皇○勅額（勅諡聖一國師）後櫻町天皇御筆

伏見人形師高木九兵衞方に立寄り寶塔寺前紀伊郡深草村字直違橋八丁目五番戸の雀の宿（鍵本重）に立寄り雀の巣一覽

若竹や囀る聲も千代八千代

藤の森神社に參詣神皇后御遺蹟參拜。是より難所大龜谷（藤の森より八丁）を越え十町、黄檗山に到りて

吳竹の伏見の里に立寄りて雀のねぐらとひにけるかな

黄檗山拜觀、案内僧知說寮役僧多々良義勝十七歲覽僧　翌朝に及び不殘巡觀、淡路屋守平（三原旅泊前夜なり）に泊す。

同十七日　宇治梅林重方に休息山上淺丸方に立寄る（梅林、山上共に葉茶師なり）浮船古跡脊くらべの石像を見る、離宮上下の宮社殿拜觀、是より興聖寺參拜（山吹の名所）平等院扇の芝一覽、更に柴舟に打乘り伏見觀月橋北詰觀月亭にて喫飯、車にて五條まで歸り金子錦二氏方に立寄り、大壽町最勝樓（谷口貞三）に歸宿、空居中芳藏來り泊す明朝歸京の由、提藍爲持自宅に屆けん事を託す。十一時頃より京都雅員親睦會を催す。八坂神社栂尾料理店

親睦會出席諸彦

金子錦二	日の出新聞可猫散史
羽山尚德	同社菊醉山人
成川米三郎	
藤澤淺次郎	活眼
岡本猶吉	三條旅店萬屋主人
田中金次郎	米僊門人
岩井藍水	

上田仙吉　日の出新聞
服部稻雄　樗庵、俳士
松本彌兵衛
岩永嘉兵衛　四條袋物師
今井良則　西京第一の菓子舖
稻野年恒
熊野六之助　樂師
內藤彥太郎
歌川國松

催主鈴木福次（冠月）內藤彥一（芹水）魯生共に十九名午後三時始まり九時解散。

同十九日　岩永氏權妻君來り同氏依賴染筆を需む。永樂翁より狸火入の極札屆く。

同二十日　曇、內藤彥太郎殿同車妙心寺に至り貞山和尚に謁歸宅、祇園座芝居見物喜知六悴力松改め簑助に逢ふ。蔦三郎同部屋阿古屋琴責、廿四孝・後ち四條河原東入ル岩永嘉兵衛殿より（袋

物商）催にて西石津廻廊？建增普請落成祝に招待全盛の宴を開き藝妓其他諸子の需に應じて揮毫十二時頃歸宿。

同廿一日　午前より內藤氏案內にて東寺へ參詣本日は每月の定市にて境內賑ひ諸商人松林杉村の間に露店を張る。午後內藤氏先導車上七條停車場に到り待合にて岩永氏に出會同氏は大阪支店に赴く由にて同車。

西京の夢を運ぶや十三里

黃昏岩永氏支店の門前にて同氏と別れ獨行高島屋（市川右團次）に歸り仁淸の狸火入、鹽松茸等を土產とす。

同廿二日　快晴、昨今の暑氣激烈、早朝疊屋町東入ル北側硝子製造所石川與助方岩永嘉兵衛氏を訪ふ不在。西京內藤氏へ音信の狀別に谷口旅店へ勘定二圓五十錢を託す。歸路秀吉公の木像、安土問答丸本、短册二枚を求む惣二十錢也。

同廿三日　野崎左文來訪、高島屋方留別竹屋町出立、平野町佛光寺前後藤昌直氏方に立寄り夕飯馳走一盞の後暮景中之島野崎方に至り一泊。

同廿四日　第一番汽車にて歸路に就く野崎停車場まで見送る。午後二時尾州名古屋ステーション近傍青柳亭に宿る。大阪人母子連れ身延參詣人と同宿、名古屋市中見物の折白雨車軸を流す。金の鯱遠望のみにて歸宿。

同廿五日　當地停車場より發車沼津驛小松氏を訪ひ旅店にて晝食、午後より發し翌廿六日午前東京本宅に歸る。

柳亭種彦氏の逸事

既に魯文翁の小傳を掲げたからは其の權衡上三世柳亭種彦氏の事も書くのが順序であらうが、私は氏との交りは餘り深くなかつたゆゑ茲には門人故柳塢亭寅彦氏や現存の三品藺溪氏、畫家の歌川國松氏等からの又聞きと自分の見聞した事とを湊合して此傳を作る事とした。

種彦氏通稱高畠瓶三郎、後藍泉を以て通稱とす。金座役人辻某の庶子であつたが幕府坊主衆の株を買うて一家を興した人。天保九年淺草七軒町組屋敷に生る。慶應の始め畫を松前藩士高橋波藍に學び藍泉と號したのは其故である。是より先好んで稗史小説を讀み初代種彦の作は殊に愛讀する所であつたが、戊辰の役氏は彩筆を拋つて佐幕黨に加はり、東北に脫した幕兵に軍器輸送の事を引受け、銃砲を函館に廻漕せし時脫兵は官軍の爲めに破られ殘る者は降を乞ふに至つたので、氏の盡力は徒勞に歸して身の置き處を失ひ、房總地方に遁れて畫く所の半折扇面類を途上に並べ、之を鬻いで米鹽の資を得んとしたが、誰ひとり買ふ者もないので昔大雅が畫扇を瀨田の橋から投棄したと同樣之を破棄して復た江戸に歸り、轉々堂主人の名を以て草雙紙の類を綴り辛うじて其日を送つて居るうちに、明治五年東京日々新聞の創刊あり。氏は同社に入て編輯に從事し、明治八年には同社資本家の一人落合芳幾氏を說いて別に平假名繪入新聞を起さしめ、氏は同社に入つて主筆の任に就いたので

ある。其頃の一佳話として傳へられて居るのは後年小說、考古及び鑑定の大家と呼ばれた夏繁前田健次郎氏が落魄して横濱にさすらひ、梅屋といふ小さな骨董店を出し古書畫類を鬻いで居た頃、之を聞き傳へた藍泉氏は豫て懇意な中では無かつたに拘はらず、國學者夏蔭といふ名門の嗣子が斯くまで不遇に陷つて居るのは氣の毒に堪へぬとて、一の義俠心からわざ〳〵横濱に赴いて漸く其居を捜し當て、夏繁氏を救うて繪入新聞の校正掛に据ゑたのであるが、驚く勿れ其時の夏繁氏の俸給がたつた八圓であつたと云ふ。そして夏繁氏が横濱に居た頃は良心に疚しいながらも、少々怪しいと思はれる古文書類をも商賣上據なく客に賣付けた事もあつたが、數年の後身を立家を齊ふるに及んで賣先のわかつて居る處からは悉く價を償うて取戾し之を破り棄てた

柳亭種彥氏

といふ。これは人格者たる前田氏としてはさもあるべき事ではあるが、又後世に傳ふべき一の美談である。

藍泉氏は社論の合はざる爲め明治十一年に繪入新聞社を退いて暫く閑地に就き、著作に從事すると共に芳譚雜誌へ續き物を寄稿し、又東京日々新聞といふ一枚摺の錦繪に筆を執つて居たが、同十三年讀賣新聞に入つて印刷長に署名した。氏が柳亭種彦の名を襲いだのは十五年一月でその名弘め會を日本橋呉服町の待合柳屋で催した。其頃氏は京橋彌左衛門町の二等煉瓦家屋に住ひ私は西紺屋町に居たので近傍だけに折々訪問もし、又繼號披露のチラシを賴まれて自分の知己に配つた事もあるが、氏は三世種彦であるべきを二世で押通した爲め世評に上り、彼の歌川國貞が二世豐國と名乘つた時と同樣、にせ種彦云々と落首に歌はれた事もあつた。それから是れも同年の事と記憶するが、氏が維新前の佐竹家（秋田藩主）のお家騷動を、表題は忘れたが一編の小說に綴り、挿畫の彫刻も本文の印刷も半ば以上進行し、既に其書肆から發行の準備中、之を聞傳へた佐竹家の家扶が拙宅へ來て私から取消し方を交涉して吳れまいかと依賴せられたので、私は直ちに種彦氏を訪ひ彫刻料印刷料は固より氏の潤筆料等一切を同家から辨償させるから出版を見合せて吳れまいかと懇談に及

んだ處が、佐竹家直接の申込みならば自分も信ずる所があつて執筆したものゆゑ拒絶する外は無いが、同じ著述家中間の依頼とあつては無下に拒む譯にも行かぬから、宜しい君の顔を立てゝ取消す事にしようと快諾された事もあつた。それから明治十七年?には大阪の大東日報へ今の社會部長格で招聘せられて同地へ赴かれたが、三品藺溪氏の談に依ると此時の俸給が八拾圓であつたと云ふ。氏の在阪當時は丁度北の新地で蘆邊踊りが創始された頃で、氏は其の唱歌を作るのみか節付けは固より舞師の手まで書入れた原稿を見た事がある。それは私が十九年に浪華新聞に聘せられて同地に滯在して居た時で、私も同年種彦氏の後を承けて『御幸の賑ひ』といふ蘆邊踊りの唱歌を作つた事もあつた。

氏は一年餘の在阪で歸京した後は淺草千束村に閑居してやはり著述に從事して居たのだが其頃面白い一話がある。それは門人の右川寅彦、片山友彦、此花新二の三氏が吉原へ遊びに行きたくなつたが揃つて懐が淋しいので、先づ師の門を敲きその顔色を窺つていくらか借用しようといふ目算であつたが、面と向つては流石にそれを言出し兼て三人共口をモグ〳〵させて居るのを敵も去る者早くも察して、ドウダ時刻から考へると吉原行と見えるが金が無いといふ寸法ではないか、併し俺も

持合せが少いから行きたくば手紙を附けてやらうと、サラ〳〵と書いたのが仲之町の手引茶屋近江屋のお琴へ宛た紹介狀で。その文句は「この若い者三人あまり持てぬやうに一晩遊ばせてやつて下さい勘定は私が引受けます」との意味であつた。三人は大に歡び此手紙を約束手形代りにして一夜の春を買ひ、翌朝また打揃つて訪問し、昨晩は有難う御座いましたお蔭さまで……と禮を述べて引取つたといふ事である。若し此話を道德家にでも聽かしむれば、師匠の身分として門生等が遊蕩の幇助をする抔は以ての外だと額に青筋を立てるであらうが其處に言ひ知れぬ情味が籠つて居る。元來其頃の作家の仲間では餘程師弟の關係が親密で、弟子は師の爲めに働き師は弟子の爲めに勞する事が多く、その弟子が職を失へば直ちに就職口を捜したり出來る限りの援助を加へたりして世話をして吳れるから、弟子も亦師の家庭まで立入つて手傳ふ事もあるくらゐで、今の官廳や會社の親分が名を整理に藉りてドシ〳〵子分を馘るとは趣きが違つて居る。此の一事なども全く弟子を愛する情誼から出たもので、よしや事柄は讃めた事ではないにもせよ頗る面白く感じられる儘を記したのである。又此話を聞出した緒は種彥氏からお琴へ送つた賴みの手紙が不思議にも私の手に入つたので或日之を寅彥氏に示すと、イヤ夫れは我等三人の事であるイデ後日の爲め裏書をして置かうと

て「此三名は友彦、新二及余の三人に相違なし恥を忍んで證明す」云々と朱筆で書入れたのが私の貼込帳に殘つて居たのである。

種彦氏の著作は數十部に達し、明治十一年頃より木版繪入活版摺の所謂明治式草雙紙の作が其の多數を占めて居る。就中『岡山紀聞筆命毛』『楓時故郷廼錦木』『晝夜帶賀茂川染』『慶應水滸傳』『繪本德川略史』が評判であつたやうに覺えて居る。それから氏は千束村に卜居中脊髓病に罹つて執筆意の如くならず、去ればとて生計に餘裕があるでは無く筆を執らねばパンを得られぬ窮境に陷り、天井より一枚の板を數條の紐にて吊下げ之にピンにて原稿を綴付け蒲團の上に仰臥しながら草稿を書いて居た程の悲慘な有樣であつたが、其頃舊門人は多く離散しかゝる窮狀を目のあたり見て之を慰問したのは現存の二世柳下亭種員（有山氏）外三人に過ぎなかつたと云ふ。斯くして氏は遂に起たずして享年四十八歳を以て明治十八年十一月十八日溘焉として逝き、淺草松葉町正定寺に葬つたのである。

種彦氏は寫眞にも見える通り瘦ぎすな苦味走つた風丰、性質は稍や神經質の勝つた人であつた。稍や強情な處もあつたが友情に厚く世話好きで且座談には長じて居た。實子が無くて姉の子を養子

として之に瓶三郎の名を繼がして居たが氏に先だつて歿したゆゑ、更に親戚の金子氏から益三といふ人を養子にして居たが、今は遺族の居處も私には詳かでない。

柳塢亭寅彦氏の狂歌

三世種彦氏門人の氏名は前章にも記して置いたが、其内の一人右田寅彦氏は同門中の秀才で所謂藍より出て藍より青く、その文才は遙かに師を凌ぐ程であつた。種彦氏の事を書いてたのに因んで茲に右田氏の思ひ出をも語ることゝする。

右田氏名は寅彦、豐後臼杵の人で明治八年兄豐彦氏と共に笈を負うて上京し、豐彦氏は始め西洋畫を學び後大蘇芳年の門に入つて梧齋年英と名乘り、寅彦氏は明治十二年三世柳亭種彦氏の門に入つて柳塢亭寅彦と號し後師から三ツ彦の印を讓られた程で所謂柳亭名取りの高弟となつた。始めはめざまし新聞に入り更に都新聞に入つて小說雜報に艷麗な筆を揮ひ、めざましが東京朝日と改題せし後ち再び同社に入つた頃は其文益々圓熟し氏の筆に成る日々の雜報は輕妙洒落、これあるが爲めに朝日新聞はその賣れ高を增したのである。其頃氏は麻布簞笥町六十六番地に寓し、私も亦同番地の同じ家主の借家に住つて居たが、拙宅の庭とは生垣一重を隔てたのみで而もその生垣が大破に及んで居たから氏との交通は表門よりせずして雙方生垣の破れを潛つて庭傳ひに往復するのが例であつた。又私は朝日と同じ持主の國會新聞に勤めて居た頃ゆゑ、雨天の外は每日誘引ひ合つて徒歩で出社するのが二年間は引續いた。

氏は餘り書籍を貯へず當時は私の方が藏書に富んで居たが氏は夜分のツそりとやつて來ても微醉を帶びた時の外は面白い話をするでもなく、私の藏書を片端から引出して煎豆鹽煎餅の類をかじりながら默讀し、十二時の時計の響で驚いて歸つて行く、そして三四日後の朝日新聞を見ると私の處で讀んだ材料が巧に消化されて雜報の文中に引用されて居るので、私は氏の記憶力の强いのに竊かに舌を捲いたのである。

其後氏が若葉會といふ文士劇に出演したのが朝日社と衝突の基となり、同社を退いて一時中央新聞の客員となり又牛込宮比町に好文堂といふ雜誌店を營んで居た事もあつたが、帝國劇場の創立以來其の立作者となり、脚本數十編を作つて默阿彌以後の名作者といふ名を恣まゝにし、中にも『鎌倉武士』『俵藤太』『堀部妙海尼』『お江戸日本橋』『水谷高尾』『江島生島』等は今でも評判に殘つて居る。氏の最後の宅は雜司ケ谷六本杉で、大道具方長谷川の設計に係る離家がある、四疊半の二室より成り一室には中央に爐があつて粗朶を焚き、燻ぶつた自在鍵が懸けてあり、他の一室は一段高くすべて簀の子天井に荒壁、障子は客のいたづら書に任せて反故張と見せるといふ凝り方であつた。其時の勸進の文に曰く

反故無盡勸進帳

人誰か書捨ての反故なからんや、空しく還魂紙の料として、張三李四の輩に青洟をかまれんよりは、隣柿庵の北窓に貼られて、あるじの爲に寒さを禦がば、其の功德や廣大なるべし。おのれ此の草扉に居を占めてより、反故障子の物數寄に、なにがしの書殼、くれがしの草稿、あるに任せて用ひ畢んぬ。されば蒼頡が鳥の跡、朝な夕なに影させども、客到ること稀なれば、庭に蚯蚓はのたくるとも、其の手跡のめでたきは、豈浪花津淺香山の、程近き類ひならんや、彼の鐵釘の折れを拾ふが如きは、普請當時の事にして、飛驒の內匠のかんな文字、以呂波てふ合印に、柱建ての名殘はあれども、今は蝸牛の這ふに任せて、家はいつしか煤に黑みぬ、やがて障子も古りに古りたり、悲しいかな窓打つ雪は、徒らに紙を破りて、讀書の燈し火となる事なければ、漫ろに車胤が螢を羨む、痛ましいかな秋吹く風は、穴に通ひて笛を鳴らせど、寮の御馬の來るにもあらねば、唯片折戶の月にのみ、嵯峨野あたりを偲ぶめり、玆に破れ窓繕ひの爲め、來訪の諸君子に執筆を求め、これを稱して反古無盡と云ふ、卽ち友垣の賴母子講なり、佐理行成の書ならずとも、庵主はこれを寶とする、一字千金二千金、手習鑑の與太を學んで、人形書くとも隨意たるべし、

たゞ一卷を前に置いて、頭をかきたまふを喜ばず、辭退最も無用なり、即ち伊左の紙衣に似て、引けば切れる障子紙、拒めば跡に師走浪人、兩つの袖のふたつ文字、牛の角文字こいも薄いも、只管墨の續くに任せて、散らし書に書き給へかし、早きを尊ぶ直ぐな文字、建付けのゆがみ文字、切張りすべき穴かしこ、哀れと見やり給へと云爾、

隣柿庵のあるじ　寅　彦　敬白

書きたまふまじき品々

一　横文の蟹文字を忌む、庵主は泡を吹いて苦しみ申すべき事

一　インキを用ふる事を禁ず、雨染みむら雲に似てさす月にさし合ある事

一　議論に渉る字句を野暮とす、箱根よりこなたなるを忘れまじき事

一　畫もよろしく候へども洋服の類を嫌ふ、袖ない人の筆ずさみと見るべき事

以上

隣柿庵とは在郷唄の隣りの柿の木といふのを取つた別號であつたが、偶々流行性感冒が肺炎に變じて大正九年一月十五日五十五歳を一期として芝の岩島病院で病歿した。氏はまた狂歌に巧で狂名

を杉葉亭又六と稱し、吾々の狂歌月次會へも折々出詠して居たが、その遺稿中から拾ひ出した百餘首が私の手に傳つたから玆に掲げて同好の子に示す事とした。

柳塢亭遺詠狂歌

春寒

春あさき山のふところまだ寒し千金になるあてはあれども

子年の春

青表紙の端をもかじる子の春はまづ堯舜のためしをぞひく

藪入

虎の子の錢さへ持ちていそぐ身は一里も千里のやぶ入小僧

うし紅

道草を喰うてのろりと行く下女はうし紅買ひの使なりけり

梅

うぐひすの宿はこなたと軒の端に目じるしいだす梅の花笠

観梅

梅見にもぬすみ句吐くはおほ森の百日かつら提げしくせ者

室の梅

花の兄惣領どのは室のうちにだまさるゝとも知らで笑へり

力士観梅

下やかた梅見の宴にはべる身は幕の内なるおかゝへすまふ
咲く梅も山のはたけの三段目ふさはしと見る田舍すまひ男
すまひ男がうかれて道を踏切ればかつ色見する園の梅かな
角力男が梅見に來れば立上りあるじも外す門のくわんぬき
かつ色の梅を見るなりあづま屋の四本ばしらにすまふ年寄

春の月

月はたゞ一りんながらこれなくばまとまり兼ねる千金の春

柳

馬をこそつなげ女の髪に似て風によらるゝかどのあをやぎ

淺みどり絲くりかけつ土蜘蛛の謠ひ洩れ來る門のやなぎ葉

櫻

麗はしき御法のにはの兒ざくらみのなる果は坊主なりけり

春雨

休みなく降る春の夜の雨の足あすともならばはれ上るらむ

春雨のふり出したるぞ藥なるかぜは名殘も凪ぎてしまへば

奢れる雛段を見て

人前を飾り立てたる雛まつりその身のほども棚へ上げつゝ

豆雛

はじけたる娘は餘處を羨みんこゝろいらるゝ豆ひゝなとて

桃

花のいろのべに木綿めく桃ばたけ二三反ほど咲つゞきつゝ

歸雁

咲く花を三くだり半の雁の文字別れて歸る氣が知れぬなり

蛙

苗しろに歌よむこゑはなにものと人が見たれば蛙なりけり

春の山

笑ふ中にピンヘッドてふ廣告をなどてや含む春のやまく

山吹

花の色は口無しなれど折らるゝは猶わざはひの門の山ぶき

汐干狩

老女まで汐干にまくる袖がうら年の波さへひくかとぞ見る

汐干潟貧を忘れて遊ぶにもなほかかり暮らす身こそつらけれ

龜戸にて藤を見て

天神の御まへかしこみ見る人もあたま上げ得ぬ藤だなの下

小手鞠の花を

指折りて蕾をよめばひと枝にちよと百ついた小手まりの花

時鳥

ほとゝぎす不如帰とぞ啼く棒讀は月を句讀の點をたよるか

聞き惚れて茶碗おとせば時鳥かけたかといふ聲をのこしつ

貧家牡丹

やりくりの三十日も近き二十日草頭おもげに咲ける賤が家

麥の秋

正直の德はとなりの人の手もかりいれにけり麥のとよとし

遊女の蚊遣火

蚊やり火にひそむあそびの柳腰けぶりこめたる姿うるはし

夏の寒暖計

のぼりゆく度の高どのに風待ちて寒暖計もはしらにぞ倚る

螢狩

荊鞭のくちをしけれど罪もなしほたる空しく飛ばす騒ぎは

身を焦すほたるの戀は飛火野にもえ出し草のくされ縁かも

一疋の螢を追うて里の子はしりに火のつくやうにさわぎつ

俳優の螢狩

つかはれてけふも堤の下廻りほたる一ぴきとつたりやく者

占領地の納涼

夏の夜も風の價ひはせんりやう地草木もともに靡く涼しさ

すゞしさに秋立ちしかと新領地風のおとにも敵ぞおどろく

明治卅年五月　煉瓦地より麻布に移りて

かはら屋のまつたきよりも破れ庇碎くるぞよき梅雨の玉水

水引の花

この庭のながめは天のたまものか露をむすべる水引のはな

草市

むさし野の月の素顔のたをや女も草より草の市に分け入る

萩

添へ竹の杖つきの腰の婆ならめのゝ字にくねる萩のはな妻

赤白の萩いづれ宜しきやと人の問ふに

白からぬ萩なればこそ愛たけれ見惚れて縁をふみも外さず

十六夜

もちの夜は下戸に譲りて獨酌にいざよふ月の支度こそせめ

月

ふところのさびしき秋は見るもうし金が敵のかたわれの月

冴え渡る弓張月をすかし見れば百歩の外にやなぎ散るなり

月かげもあがるといへば飲み相手縁に一ぱいさすぞ嬉しき

暴風後の名月

大風のふいたる跡はくもりなくかゞみのやうに見ゆる名月

京橋煉瓦地の名月

煉瓦地ははたけちがひと疾くいねて衣かつぎたる芋の名月

千金のなか秋なれどれんぐわ家の軒ではたゞの一りんの月

後の月にまだ日もある氷川の森蔭にぐつと狂歌師がりて

月はまだ十三夜にはほどとほき七ッ子なればもりは離れず

折から月のさし上りければ

蒲鉾のかたちに似たる月かげはもりの梢のはにかゝりけり

聞蟲

おどまなる鉦たゝき蟲鳴くからに人も暫しは物云はず聴く

秋の商人

秋來ればつゞれさせてふ蟲賣も町から町を縫うてこそ行け

紅葉

柳島亭寅彦氏の狂歌

春先にわらひ過ぎしを恥ぢてにやさつと紅葉をちらす山姫

瀧前の紅葉

夏はみどり秋はもみぢの散りしきて赤く染めたる瀧の白絲

秋日御殿場を過ぎて

紅葉する峰のこしもと錦着てやまひめぎみをまもる御殿場

霧積山の紅葉

山姫も衣裳とり出すつゞら折紅葉のにしき着てぞ見せける

鹿

餌をねだる奈良の男鹿はほら／＼と行かふ人の褄や戀ふ覽

隣家の菊を見て

雲の上はいざしら菊を垣越しにせめて一枝ほしとこそ見れ

氷

ものゝふの刃に似ればてうづ鉢の柄杓の首を取るこほり哉

時雨

名もちなむ燒はまぐりの時雨ぞら冬の始めの口をあけたり

社頭の時雨

うま酒の三輪のいかきの村時雨德利のやうに又もふるなり

霰

ある甲斐もなき身は耳のいた庇碎くる玉のあられ聞くにも

雪

飛石のひき臼につむ粉雪をば團子のなりに子等もまろめつ

雪の日の二の字ばかりは蒼頡も人のあとぞと天窓かくらん

多摩川の雪

ながめさへ淸くめでたきたま川を綿にやつゝむけさの白雪

不手際なる雪兎に

つくりても似つかぬ雪の白うさぎ月と朱盆の上にこそあれ

二度の大雪

礫打つ敵も味方もかんじけり二度のかけなる今日の雪には

歳暮大賣出し

光陰の矢だねのかぎりあきびとが軒なみに張る提燈のゆみ

節分

豆打ちのおには外よりそよ〳〵とふくをこそ待て梅の下風

椿

七わたにあらねど是も玉つばき智慧づく子等の絲を通しつ

洋服裁縫師

蟋蟀鳴く音にまがふみしん縫ひの夜なべも寒き霜降の羅紗

姙婦述懐

それぞとは岩田帯する煩惱のいぬの日さへも忍ぶ身ぞ憂き
我腹をかくす袖さへ子持じま筋目あらはに言はれぬぞうき

寄鬼戀

雨風の夜にかよふともいばら木の手をば切らじな十八の鬼

後悔の臍はかむともかみなりの鬼ともならん戀のならずば

鬼娘の茶すゝむる繪に

番茶さへ出ばなを飲みて見る庭の鬼のしこ草風情こそあれ

美女のかたに

顔は花指はしらうを肌はゆき身持ちもいづれ人でなしめが

寄蕎麥戀

逢見るもみそかといへば吾妹子のおそばに長く鼻毛延さん

逢ひし夜は涙の玉のあられ蕎麥われを柱とたのみてぞ泣く

ペスト豫防

今はたゞいのちのくさの用心に暮らすつき日のねずみ騷動

總選擧

運動をはげむも敵の區域へと喰ひ込む爲めの候補者のはら

烏鷺合戰

鷺をうつ合ひことばにや鳴く聲もかはと掛けたる山鴉かな

博物館

上草履はく物館の御所ぐるま人に引かれてめぐりつゝ見る

下戸神詣

勝いくさ神に願ひを掛茶屋に下戸も手に取るもろこし團子

進水式

船おろし海のおもては靜かにてうらにぎはしく人の浪たつ

酒

飲むひとは浮いて見えたる水鳥も足にひまなき樽拾ひかな

酒のため討死にをする宴會は諸所にて猪口をさし違へけり

かよひ帳片手にさげて行くものは晝夜をすてぬ米の水かな

酒は飲むべし

先づ禮に始まる酒の燗德利はかまを穿いて出るぞをかしき

酒は飲むべからず

四君子のらんに終りを見するかな醉うては恥も知らぬ席書

河合英忠子と宇治に遊びて

水勢も箭を射るなかの宇治川を二騎うちわたるひざ栗毛馬

左文翁の北海道に之くを送る

熊祭り疾く見て歸れ月の輪のみづにかくるの數を經ぬ間に

北海を越るもやすき旅路かなかはほり傘をわきばさむ世は

花井お梅の出獄と愛猫

罪ありてつながれし身の出獄にいだくもをかし玉といふ猫

五代目菊五郎の本葬を見て

とむらひの造花の菊もにぎはしく人がき結ひし間にぞ見る

蟹廼屋うしと避暑旅行を約しけふ出立といふ日に詠みて送る

君の足に任するたびの返り事こゝの門までふみつけてたべ

鎌倉なる頼朝邸跡を過ぎて

頼朝のやしき跡とて弓矢とる案山子のなりも天窓でつかち

奈良土産鹿の玩具のかた

手廻らぬかせぎの角の細工場に妻も呼ぶなり奈良の市びと

長月のはじめ半眠、雙鯉兩子と共に大森八幡濱に遊び伊勢源に投宿す蚊の餘りに多かりければ

大森の八幡のやぶ蚊うるさくて泊るこゝろぞ先づ迷ひぬる

兩子と共に樓より沖合の漁火を眺めて

沖の方凪ぎて動かぬ舟の脚いざり火といふ名にし負ひけり

翌朝雙鯉子と共に上汐の中に立ちて網を引く

波はよせ網はひくとも魚をとるむな算用のくるへるぞ憂き

波打際にて金の指環を拾ひ宿の女將に渡すとて

やまぶきの黄金の指環主やたれ返しやるべき口無しにして

貸舟を借らんとするに素人の櫓は危しとて受がはず櫂にてあやつり給へといふ、さるを錢多く取らせて櫓を立てたる舟を借り入れければさて詠める

かし舟のいた子の下は地獄とて櫓かいの沙汰も金次第なり

沖の方にふたり連の書生ひとりは舟をやり今ひとりは水中に立ちて其舟を覆すなど興じ戯ぶるゝを見て

君はふね僕は水とてあそぶらん浮べては又くつがへしつゝ

午の貝吹く頃雨降り出でたり

潮浴みるをんなの脛の白ければ雨も雲より落ちて來にけり

雷も亦鳴りはためきぬ

海荒くなるかみの聲のたか浪も舟の櫓臍をかくすまで立つ

此邊にも近き頃うたひ女の弘めする者ありと聞きて

弘めより二十日ばかりの月ならで田舍に出でゝ照らす唄女

今はとて家に歸る、詠み捨てたる夷歌の反故ども掻集め、人が見たらば蛙になれと祈るも閑靜なる一日の遊びに腸を洗ひたる縁ありてをかし

人の見て蛙となるもうた仲間みずにすむてふ事なわすれそ

鹽原雜詠　那須野ケ原

我れはまた疲れてたどる大汗のあられたばしる那須の篠原

同　關谷の里

ゆく春の無切手なれば通りかねて關谷は今も花の眞さかり

同　箒川溪流

水きよきながれの音に世の中の塵はとゞめぬはゝき川かな

同　兒ケ淵

谷水のながれての世につたはるは昔ばなしに聞く兒がふち

同　天狗岩

天狗てふ岩のはなさへ高ければこれも自慢のしほばら名所

同　旅館升屋に宿りて

くたびれし旅のうれひを掃ひけりはゝき川原のやどの晩酌

金澤八景　平潟の落雁

平潟にことぢのやうな雁のつら十三たうげ越えてこそ來れ

同　稱名寺晩鐘

いりあひの鐘は六字の稱名寺ゆふ日も西のかたへこそ行け

同　乙鞆歸帆

乙鞆に汐燒くけぶり灸に似てあしさへいとゞかろきいり船

同　野島夕照

白波は寄れど野島の夕日かげ照らせばさすが盜み句もせず

同　小泉夜雨

一刷毛にゑがきたる繪に似たる哉うす墨の山こいづみの雨

同　洲崎晴嵐

風かろく吹きぬく海のかゞみかと見ゆる洲先ぞ天下一なる

同　内川暮雪

そとがはの眺めはとても及ばじな雪つむ山のうちかはの暮

同　瀬戸秋月

くまもなき名月の夜の芋と瀬戸はなれがたなき仲秋ぞよき

（終）

成島柳北仙史の面影

明治文化の研究といふ事が熾んになつたと共に、文學者としての大家新聞記者としての古老で、文化史上重要な位置を占めた成島柳北仙史の事も往々引合ひに出されるが、中には其の眞相を誤つた妄評を試みる人もあるやうだ。私は仙史に親炙して其の薫陶を受けた一人で、新聞記者としての學問は師の魯文翁よりは仙史に負ふ所が多いから、記憶を辿つて茲にその一面を語る事としよう。

先づ傳記から述べて見れば仙史は徳川麾下の儒官で有名なる圖書頭成島司直の孫、天保八年二月を以て生れ幼名甲子麿後甲子太郎と改めた、幼き頃より書を讀み和歌を詠じ詩賦は最も好むところであつたが、嘉永六年父稼堂君と別れ翌安政元年家を嗣ぎ始めて侍講見習を仰せ付られ、兼て幕府實錄編修の事を命ぜられた。同三年侍講に進み翌年は布衣の班に列した、是より先王父圖書頭幕府實記五百卷を編纂し父君亦後鑑三百七十五卷を著したので仙史はその校訂を命ぜられ之を完成した賞として黄金と時服とを賜はつた。此時に當つて外客初めて渡來し攘夷鎖國の論紛々として決せぬのを見て、仙史は屢々建策する所があつたが一も採用せられぬので、不平の餘り一編の狂詩を作つて幕府の因循を譏つた爲め職を免じて閉門を命ぜられたのは文久三年の春であつた。此の閉居中仙史は師を聘して英書を學び又神田孝平、箕作秋平、桂川甫策、柳河春陰、宇都宮三郎等を會して文

翌の遊に耽つた、慶應元年の秋拔んでゝ步兵頭並に任ぜられ祿千石を賜ひ其冬騎兵頭並に轉任し佛式の練兵を監督する爲めに翌年居を横濱に移した、三年には騎兵頭に進んで祿二千石を給せられ、其秋更に騎兵奉行となつたが議の容れられぬ爲めに職を辭した、當時は慶喜公が將軍に任ぜられた

成島柳北仙史の葬列

年で國內多事、殊て幕府は財政に苦しんで居た時であつたから、仙史を起して外國奉行とし幾程もなく會計副總裁(俸給三千圓)に轉じ從五位下大隅守に任ぜられたが、慶喜公將軍の職を解くと共に仙史も亦野に下り向島須崎村に退隱して濹上漁史と號したのである。以上は自傳の記すところで

あるが猶維新後の事を聞くに、仙史には數號がある柳北は柳原の北に住んで居たからで維新後は之を通稱とし、名を弘字を保民といひ、誰園は園の名、春聲樓は樓の名、不可拔齋は書室の名、松菊莊は向島新宅の名で自著の『柳橋新誌』には何有仙史の號を用ひて居る。維新後左院の議員たるべしとて明治政府より徴されたれど辭して受けず、無位無官の一風流人となつて氣儘に世を送り、明治三年には淺草本願寺地中に學校を開いて師弟を教育し、五年には本願寺の大谷法主に從つて歐洲各國を周遊し、翌年歸朝の時多くの外國古錢を携へ歸つたが、仙史はこの前後より古錢を愛して其の鑑定に長じ曾て『新撰泉譜』を著した事もあつた。明治六年八月明石の舊藩主松平侯が朝野新聞（公文通誌改題）を發行するに當つて仙史は入つてその社長となり、雜錄の一欄を設けて日々雜文を草し看客を歡ばして居た、その雜錄なるものは蓋し仙史得意の文で、滑稽中に諷刺を寓し諧謔中に不平を洩らし、善く世間の穴を捜し又善く人情の機微を穿つ、朝野新聞の賣れたのは重に此の雜錄あるが爲めで、私などは之を購讀する餘裕がなかつた爲め近傍西紺屋町の自宅から、毎朝社前に出す新聞掲示の前に立つて此の雜錄を讀むのを樂しみにして居たものだ。元來仙史は和漢の學問あり英書も讀め歐洲巡遊中は通辯を傭はずに用を辨じた程語學にも通じ、其上文明の空氣を吸ひ新知

識を齎して歸つた人ゆゑ、新聞記者としては誂へ向の適任者であつたが、一布衣となつてからは復た政論を口にせず、社説は末廣重恭、高橋基一等の諸氏に任せて一切政論の筆を執らなかつた。偶ま雜錄欄内で明治政府に反抗する場合でも、文を舞してさかさまに賢明なる政府などとおだて上げて竊かにその急所を衝くといふ風であつたから、其筋でもつかまへ處がなかつたのだが、明治九年二月の紙上に時の法政官井上毅、尾崎三良兩氏を誹毀した廉で筆禍を得、禁獄四ヶ月罰金百圓の刑に處せられ獄中に繋がれる身となつた（其の前年禁獄五日に處せられた事があつたが是れは自宅禁錮で濟んだと云ふ）出獄後は依然朝野の社長たる位置を占め後末廣氏を上戸局長自分を下戸局長と呼び、又全く社長を辭して自ら火の番と稱して居た事もあつたが一社の勢力はやはり仙史の占有する所であつた。明治十年には別に『花月新誌』を發行し精選せる詩文特に品花評月の艶文を載せて居たので、當時簇出した文藝雜誌中一異彩を放つて居た。

明治十一年頃から毎年四季に雜誌仲間の懇親會が花月樓、喜多川樓、昇月樓等で開かれ其の出席者は毎會二十名前後で、重なる人々は花月新誌の柳北仙史、磯部節、團々珍聞の野村文夫、田島任天、東京新誌の服部撫松、風雅新誌の石井南橋、山田風外、農學雜誌の津田仙、魯文珍報の假名垣

魯文、芳譚雜誌の守川實丹、高畠藍泉の種彦等で、其他何社からであつたか菊地九江、總生寛、白河船山などの顏も見えた事がある。私も風雅新誌の客員として四五回出席した事があるが、此時が仙史との初對面であつた。此の懇親會でも仙史はいつも盟主と仰がれて上席に押据ゑられ、他の諸氏は其前に連なつて優遇するのを見て、私は竊かに文壇の一勢力家たるに驚いた、さればとて仙史は自ら尊大ぶるでもなく、さうでゴス〳〵と上品な江戶辯で善く談じ善く謔し、堂々文學を論ずるかと思へば忽ちにして柳巷花外の品評に移るなど殆ど應接に遑ない風であつた。

それから三四年の後私が繪入朝野新聞に入つた頃は、仙史は日々本局（朝野新聞を本局、繪入朝野新聞を別局と稱して居た）から見廻りに來てその編輯ぶりを監督し、且重立つた記事は前以て目を通し添削するのが例であつた、殊に學者だけに漢字の熟語に就ては中々やかましく、他の新聞の誤りなどを一々指摘して吾々に示すなど、概して後進者を教へ導く事は頗る懇切であつた。一體仙史の筆は漢文に宜しく和文に宜しく又雜錄體の雜文にも宜しいのであるが、得意であつたのは繁昌記風の漢文、紀行文及び狂詩であつた。繁昌記風の漢文は『柳橋新誌』や『京猫一斑』の示す如くかゝる猥境俗地を寫すに當つて少しもこじつけの文字を用ひず、一語一句みな雅典あつて行文流麗

而かも能く微に入り細を穿つ、當時此種の文を善くする人は仙史と菊地三溪翁のみとの評判であつた。紀行文に至つては文其物は無類と稱するに足らずとも、能く土地の人情風俗を寫し其弊あるものは忌憚なく筆誅して後の誡めとする點にあつて、唯だ形容修飾を事とする他の紀行文とは自ら其流を異にする所があつた、狂詩に至つては半可山人、方外道人以後に於ける名人で、其の調格は仙史に至つて完成一定せられたものである、此事に就ては仙史も自ら花月新誌に於て

此頃世間ニ狂詩ト云フモノ流行シ新聞雜誌等ニハ屢々載スルヤウナリ、其中ニテ石南橋源無水ノ二君ナドハ有名ノ作家ナレバ余ガ敢テ批評スベキニ非ズ、其他ノ狂詩ニ有リテハ時トシテ韻字モ無ク平仄モ無ク寢言に近キモノ多シ之ヲ狂詩ト稱スルハ僻事ナルベシ、又平仄韻字アルモ狂體ニ堅キ語ヲ雜ヘテ作ル人多シ、狂詩ニハ自ラ狂詩ノ體狂詩ノ語アレバ決シテ眞ノ詩ト同一ニ作ルベキニ非ズ、然ルニ平仄に窮スルトテ百日說法ト云フヲ十旬說法トシテハ狂詩トハ言ヒ難ク、或ハ韻脚ニ困リ評判高ヲ評判嵘ト作リテハ所謂無理コジ附ケニシテ更ニ面白カラズ斯クノ如キハ作ラザル方甚ダ勝レリトス、既ニ狂詩ニ有名ナル蜀山翁モ其ノ狂詩ハ狂歌ニ比スレバ遙カニ下レリ通詩選ノ如キ往々看ルニ足ラザル者アリ、狂詩ノ宗トスベキハ獨リ半可山人アルノミ山人ノ狂詩ハ

自在ニシテ其語モ皆純粹ナル狂詩ノ語ト思ハル、畢竟狂詩ノ如キハ作ラザルニ若カザレドモ作ルナラバ其ノ心得アルベシ。

と言はれた通り常に吾々に語られたのも同樣で、實は狂詩は正詩を作るよりも六つかしい、正詩に在つては故人の作例もあり又平仄に合ふ熟語も求め易いが、狂詩に至つては何も據るべき字彙の類がないから皆自分の智嚢から絞り出さねばならぬ、特に對句を作る場合次韻の場合には平仄に苦しめられて措辭に窮するのが常ごあるが、かゝる時には成る可く他の俗語を以て堅い文字を碎いて之を通俗化させるやうに注意せねばならぬ、要するに狂詩に禁物なのは無理こじつけと生硬にあるから第一に平易と圓滑とを心掛けねばならぬ、近頃某氏新年の作に百人一首歌牌始。千里同風手紙來。などは近來の名對で、狂詩は斯くの如く作るべきものだと云ふのであつた。

茲で仙史の風貌を云へば長幹痩軀形ち鶴の如しとでも評すべく且常に脊を丸くして前に屈む風があつて見るから不完全な體格であつた、其顏は殊に長く昔騎兵頭として馬上で兵士を叱咤して居た時、或人が乘つて居る人が馬面と惡口を云つた通りで、その右耳の下に蠶繭大の瘤があつた、服裝はいつも縞の羽織の着流しで私は仙史の禮裝したのを一度も見た事は無かつた、此頃より仙史は胃

弱が持病で藥瓶を携へて出社する事もあり一時は醫師の勸めで日本酒を廢した事もあり、夏は避暑冬は避寒の爲め每年箱根熱海へ旅行するのが例で、行けば必ず紀行を作り之を朝野紙上へ載せて居たが、後亡友竹内馬溪氏が蒐輯して『函嶺文藪』『熱海文藪』を著した事もあつた。此の宿痾あるが爲め兎角に意志活潑ならずして用心深く、一時は身、改進黨員でありながら餘り政治運動にも關係せず又是れぞといふ大著述もなく、唯だ墨上の花を愛し鴨東の月を樂しむ一風流客を以て半生を終つたのは全く病の爲めであつたかも知れぬ。

明治十一年の冬、仙史は惡年なる哉と題する一文を作つた、其の文中に「漁史前半年は胃病に苦しみ後半年は肺病に惱まされ、日に湯藥を喫し只管攝生を務め、美酒あるも飮む能はず佳肴あるも食ふ念なし、人間の快樂既に十の九を失ひ空しく衾褥の間に起臥呻吟するのみ、疾病死亡の災厄亦大なりと謂ふべし」と嘆じて居るが、此の一文が讖をなし又絕筆となつて同年十一月三十日四十八歲を以て向島の自邸に逝き、越えて二日本所本法寺に葬つた。生前仙史は自ら墓誌を作つたが簡單に失する爲め更に信夫恕軒翁の撰文を請ひ、表に仙史の肖像を顯した碑石に刻し之を濹堤長命寺畔に建てたが、此碑惡戯の爲め肖像の鼻が缺損した儘今猶同處に殘つて居る。

傳記は之れで終つた譯だが曾て仙史に『ごく內ばなし』の著がある、是れは前にも記した通り明治九年二月仙史が筆禍の爲めに入獄した時の記で、當時に於ける獄內の實況を知る唯一の文獻で、博文館から發行された『柳北全集』にも掲げて無いから、長きを厭はず全文を轉載した。

ごく內ばなし

天下不祥ノ地狴圄ニ若クモノナク天下不樂ノ人獄囚ニ過グルモノ無シ是レ婦女兒童モ能ク知レル所ナリ、然リト雖モ獄內ノ情況ハ決シテ人間界ニ在テ忖度シ得ルモノニ非ズ、僕今卿等ニ語ル所ノモノハ毫モ賢人君子ノ氣取リヲ以テ所謂負ケ惜ミ痩我慢ノ說ヲ吐クニ非ズ又故ラニ善イ子ト爲ラント欲シテ所謂辯茶羅ヲ言ツテ官人ニ媚ブルニモ非ズ、又例ノ扼腕切齒ノ流行ニ倣ツテ無益ナル癇癪ヲ起シテ惡口スルニモ非ズ、唯是レ一味ノ眞率着實ニ說キ出シ來ラントス、僕ノ獄ニ在ルヤ四箇月其ノ情況前後大イニ變化アリ要スルニ始メハ否終リハ泰、前ニ凶後ニ吉ナルモノナリ是レ則チ僕ガ怒リ少クシテ喜ビ多キ所以ニシテ而シテ却テ卿等ニ語ルベキ資本ニ乏シク或ハ大ニ新聞紙ノ爲メニ失望トスルヤ否ヤヲ知ラザル所ナリ、若シ之ニ反シテ事々凶大ニ否多カラシメバ僕ト雖モ亦應ニ一大罵詈ヲ以テ卿等ノ爲メニ看客ノ喝采ヲ買ヒ得ベキニ惜イ哉々〳〵々々。

嘗テ澤田氏（直温）ガ二月中ノ新聞紙ニ記シタルガ如ク、僕ガ二月十二日法廷ニ於テ再度ノ口供ヲ奉リシ時僕ハ竊カニ罪案ノ輕重ヲ臆測シタリ且天意ノ深遠ナル所以ヲ悟リ得タリ（上天ノ載ハ語ル可カラズ）看官或ハ二月ノ新聞ヲ讀過シテ怪シム者アラン何故ニ柳北ハ岡田判事君ニ久シク喋々辯解ヲ費シ鎌田判事君ノ代ツテ訊問セラルルニ及ンデ復タ一語ノ辯解ヲ爲サズシテ其罪ニ服シタルヤト、是レ至當ノ疑問ト云フ可シ、獨リ看官ノミニ非ズ社中ノ人ト雖モ亦大イニ之ヲ疑ヘリ僕モ敢テ禁獄罰金ヲ好ム事蒲燒牛肉ノ如キニ非ズ、然ルニ俄然強項ヲ屈シテ一語ノ辯解ヲ爲サヾルニ止マリシハ抑モ故アリ・僕二月一日ノ夜奇怪ノ靈夢ヲ見ル其夢見ル所ハ何ゾ、夢ニ日本武尊赤兎馬ニ跨リ北氷海喜望峰ノ絶頂ニ出顯シ僕ニ教ヘテ曰ク汝前世大江山ニ棲ム獅子ノ角ヲ以テ矛ヲ造リ琵琶湖ニ浮ミシ水母ノ目玉ヲ突キ潰シタル報イヲ以テ今度獄中ニ繋ガレ數月間讀書ノ苦シミヲ受ク可シ、汝今如何ホド辯解スルトモ何ノ役ニモ立タズ徒ラニ長ク拘留ノ責ヲ受ケ竟ニ上等裁判所大審院ニモ引キ出サレテ到底活路ナカラン、若シ是レヲ虚言ト思ハヾ試ミニユートン氏ガ三世相ヲ見ヨヤト言フカト思ヘバ驚キ覺メタリ、此ノ靈夢ノ僕ガ心肝ニ銘スルト鎌田君ノ說諭ノ厚キヲ以テ再ビ辯解ヲ爲サズシテ其罪ニ服シタリキ、二月十三日ノ朝ハ風雪霏々タリ僕

末廣氏ト共ニ大白洲ニ引キ出サル、然ルニ僕ニ續キテ二人ノ書生ラシキ男入リ來リ相並ンデ立ツ僕竊ニ思フ是レ亦新聞記者ナル可シ如何ナル暴言ヲ吐キ散ラシテ同ジク罰責ヲ受クルヤト、既ニシテ二人ハ即チ僕輩ガ獄事ノ原告人タル井上尾崎兩法制官ノ（代言人デハ御座ナク）名代人タルヲ知リ得テ始メテ蹙々トシテ頭顱ノ胸腹ニ陷入スルノ思ヒアリ、仰ギ見レバ昨日迄ノ御掛リタル鎌田立見ノ兩君ハ影ダニ見エズ未ダ一度モ尊貌ヲ拜セザル判官並ビ坐セリ（法官ノ變ル事度々三度ノ神ハ正直ト申ス事ニ候ヤ）是ニ於テ乎益々戰々慄々口ニ萬歲樂ヲ唱ヘ交フルニ念佛題目ヲ以テセリ、判官忽チ聲ヲ勵マシ申シ渡スノ一語ト共ニ末廣子ト總計合セテ一年ノ禁獄ト二百五十圓ノ罰金ヲ命ゼラレタリ（天恩至寛）然ル後往ニ拘留サレタリシ獄內ニ赴ク今度ハ腰繩モ無シ且風雪烈シキヲ以テ蓑笠ヲ貸サレタリ、既ニ獄ニ至ル衣服ノ檢査拘留ノ時ト同ジ獄丁僕輩ニ云フ汝等何ゾ覺悟ノ善キヤ襦袢ノ控鈕足袋ノ小鉤一モ奪ヒ去ル可キ物無シト、僕答ヘテ云フ過日拘留ノ時老爺盡ク僕ニ教ヘタルニ非ズヤ故ニ今謹ンデ老爺ノ勞ヲ省クト衆皆笑フ、獄吏忽チ導イテ艮ノ區內二十二號ノ房ニ入レテ鎖セリ內ニ禁獄一人居ル（同業ノ人ニハ非ズ）末廣子ハ二十四號ニ入ル蓋シ艮ノ區ハ禁獄人ノミナリ、禁獄人ハ拘留人ニ比スレバ待遇少シク厚シ猶勅任ト奏任トノ別

ノ如シサレド奏任ト判任程ノ違ヒハ無キニ似タリ。

獄内ノ景況ヲ話スルニ於テ先ヅ其ノ位置ヲ說カザルヲ得ズ、抑モ此獄ノ落成スルヤ客歲ノ末ニ在リ而シテ其ノ結構ハ略ボ西洋ノ牢獄ニ模倣スルモノニシテ其形チ十字ナリ、樓上樓下共區ヲ八ツニ分ツ一區十房々數合セテ八十、樓上樓下トモ監守ノ吏中央ニ在テ四方ヲ視察ス僕ノ二十二號ノ房ニ入ルヤ集思社ノ横瀬氏（文彥）對面ノ房ニ在リ其他該社ノ小松原、山脇二氏、采風社ノ加藤氏皆同區ニ分居ス他囚其中ニ雜居スル者モ亦數名ニ過ギズ各房寥々トシテ形影相吊スルノミ既ニシテ各社ノ記者陸續網ニ罹リテ此中ニ墜ツ房々處トシテ新聞記者ナラザル無シ故ニ記者自ラ一房中ニ同栖セザルヲ得ズ、是ニ於テ乎遂ニ禁獄世界ノ景況ヲ一變スルニ至リシナリ僕ト前後同ジク獄中ノ妙味ヲ喫シタル者ヲ左ニ列セン。

禁獄	三年	采風	加藤九郎
同	二年半	同	本木貞雄
同	二年	評論	小松原英太郎
同	一年半	報知	岡敬孝

同	一年	評論	山脇巍
同	一年	同	中島富雄
同	一年	朝野	澤田直溫
同	十ケ月	采風	矢野駿雄
同	八ケ月	朝野	末廣重恭
同	六ケ月	采風	杉田定一
同	四ケ月	評論	東淸七
同	四ケ月	同	鳥居正功
同	三ケ月	同	横瀨文彦
同	三ケ月	同	滿木淸繁
同	三ケ月	同	柴田勝文
同	三ケ月	日報	市喜山景雄
同	三ケ月	采風（投書）	宮本千萬壽

同	三ヶ月	朝野（投書）	西河通徹
同	二ヶ月	報知	箕浦勝人
同	二ヶ月	采風	中島恭雄
同	二ヶ月	評論	岡本淸一郎
同	二ヶ月	同	中島勝義
同	二ヶ月	同	高羽光則
同	二ヶ月	同	渡邊敬之
同	二ヶ月	同	小松正胤
同	二ヶ月	報知（投書）	植木枝盛
同	一ヶ月	評論	田中直哉
同	一ヶ月	同	石田知彦

合セテ二十八名ナリ今既ニ出獄スル者半ニ至ル（未ダ獄内ニ在ル諸子皆健全ナリ其ノ親族朋友宜シク安慰シ給ヘ）而シテ轉房有リテ僕ト同室シタルハ岡本、宮本、東、柴田、植木ノ五氏ナリ、

去年六月新聞條例ノ出シ以來記者ノ禁網ニ罹ルノ多キ實ニ此ニ至リテ極點ニ至ルト云フ可シ（我輩ハ新聞各社ニ向ツテ之ヲ弔ス可キカ將タ政府ニ向ツテ之ヲ慶スヘキカヲ知ラズ）

僕ノ獄ニ入リシ時ニ當テ獄內監守ノ吏未ダ巡査ニ變ゼズ（警視廳ノ管轄ニナリシトハ聞ケド）舊來ノ獄吏ニシテ僕輩ヲ叱責スル事頗ル嚴刻ナリキ、其人大半袴ヲ着ケ麻裏草履ヲ穿チ竊々然トシテ前廊ヲ巡行シ蒼鷹ノ如キ巨眼ヲ張リテ僕輩ノ房內ヲ睨視ス、毫ニテモ規則ニ觸ル、事有レバ叱責ヲ受クル事盜兒輩ト一般其ノ規則亦頗ル嚴肅ナリ（此ノ規則ト稱スルモノハ禁獄人ノ規則ニハ非ザルノ臆說アリ僕ガ後段ニ說キ出スヲ待テ）故ニ同業ノ徒一人モ叱責ニ遭ハザル者ナシ、僕ノ如キ惴々タル怯丈夫ト雖モ猶ホ數次ノ御叱リヲ蒙リタリキ其中マタ寃罪ナキニシモ非ズ一日壁ニ向ツテ獨語ス獄吏忽チ叱シテ曰ク汝何ゾ隣房ト語ルト、一日扉ニ倚リテ呻吟ス又忽チ叱シテ曰ク汝何ゾ前房ト語スルト、衣ヲ振ツテ虱ヲ捫スレバ乃チ曰ク汝何ゾ正坐セザルト、起テ壁間ノ塵ヲ掃ヘバ乃チ曰ク汝何ゾ猥リニ步行スルト、甚ダシキニ至リテハ一夜同房ノ人腹痛ヲ患フ（醫官ノ急診察ヲ乞フ程ニモ非ズ）僕其ノ苦痛ヲ問ヒ其人是レニ答フルノ際俄ニ房外聲アリテ云フ汝何ゾ點燈後ニ私語スルト、僕辯解モ面倒ナレバ恐入候ノ三字ヲ以テ答フルノミ、然ルニ天運循環（少

シ言ヒ方ガ大キ過ギルカ知ラネド囚人ノ身ニ取リテハ）シテ巡査ノ監守ニ變ゼシヨリ警視ノ官吏ガ注意スルニ因ルカ政府ノ法律ガ開明ニ進ミシカ獄内ノ規則嚴ハ固ヨリ嚴ナレドモ僕輩ガ心ニ憤リ腹ニ悶スルガ如キ一種言フ可カラザルノ苦惱ヲ免レタリ（未ダ一二ノ改定ヲ乞ヒタキ事無キニ非ザレドモ）是レ僕ガ前段ニ於テ始否終泰前凶後吉ト說キタル所以ノモノナリ、若シ僕輩ヲシテ長ク彼ノ袴ト草履トヲ以テ監守スル人ノ手ニ在ラシメバ今日ニ至ル迄醫局ノ藥劑幾千萬匙ヲ費シ僕輩ノ命脈ヲ幾分カ短縮スルニ至リシナラン嗚呼恐ル可キ哉、僕輩此ノ警視革命以前ヲ稱シテ着°袴時代ト云フ僕將ニ詳カニ革命前後ノ異同ヲ後段ニ說キ出ス可シ。

昔々四百餘州ノ執權職ト爲リ主人ノ身代ヲ後家ノ一類ニ横取リセラレントスルヲ一人デ持怺ヘタルノミナラズ百萬ノ軍勢ヲ手足ノ如ク働カセシ絳侯トカ云フ先生モ生涯一度獄吏ニ出遭ヒテ辟易シ鬼神ノ如ク恐怖シタリトゾ、ソリヤ全ク傳記作者ノ筆ノ綾ト思ヒノ外今度ハ思ヒ中リタリ、僕ノ入獄セシ初メ（所謂着袴時代）獄吏ノ貴キハ論ヲ俟タズ一月五圓ノ獄丁殿モ僕輩ヨリ之ヲ見レバ其貴キコト蝦夷人ノ義經ニ於ケルガ如シ、何ヲ以テカ之ヲ恐ル彼レ能ク我ガ死命ヲ制スルヲ以テナリ、然リト雖モ所謂獄丁殿モ亦人ナリ善アリ惡アリ才アリ愚アリ豈盡ク惡鬼羅刹ノ如キ根

性ノ男ナランヤ、サレドモ僕輩囚人ヨリ之ヲ見レバ中々以テ尋常ノ人間トハ思ハレズ是レ其貴キコト勅任以上ニ比較スル所以ナリ、僕輩ニ日々食ヲ與ヘ藥ヲ與フルヨリ其他百般ノ事一トシテ獄丁ノ手ニ出デザルモノ無シ就中恐ル可キハ溺器（獄内之ヲ便器ト云フ、大小便スル之ヲ詰ト稱ス獄中ノ説文ヲ按ズルニ曰ク詰トハ詰ツテ出ルノ義ナリト其レ然ラン）ヲ洗滌スル處ニ赴ク時ナリ獄丁一個來リ繩ヲ以テ僕輩二三名ヲ一束ニ縛ス菜賈ノ蘿蔔ヲ束ネルト一樣不幸ニシテ最モ苛刻ナル男ニ出逢ヘバ其繩ヲ腰ニ括リ小意地惡ク引キ立テ行ク情態實ニ言語ニ絶セリ（諸君宜シク諒察アレ）僕輩ハ其罪既決何ヲ苦シンデ脱走センヤ滿期迄ハ出テ往ケト云フモ條理無クテハ出テ往クヲ好マズ、然ルニ何ゾ束縛ノ嚴斯クノ如キヤ且僕輩ハ罪ヲ政府ニ獲タリ未ダ罪ヲ獄丁ニ獲ズ然ルニ凌辱ノ甚ダシキ僕ノ如キ痛痒ヲ知ラヌ愚人モ少シク心ニ不平ヲ懷キ意中竊ニ此ノ老漢他日獄中ノ人減シニ出逢ヒ衣食ニ困ミ新聞社ニ電信ヲ求メ配達人ヲ熱中スルトモ僕輩必ズ會計課ニ上告シテ之ヲ打拂ス可シト思ヒシ程ナリ（今日ニシテ之ヲ思ヘバ實ニ一大笑）然ルニ革命後ハ溺器洗滌往來ノ腰繩ヲ廢シ獄丁モ頗ル待遇ヲ改メタリ是レ亦泰否一變中ノ一事タリ、若袴時代ニ臍テハ獄丁ノ苛嚴斯ノ如シ其貌ヲ見レバ美丈夫アリ醜男子アリ其面猿ノ如キアリ狐ノ如キアリ其頭瓢ニ似

タルアリ瓶ニ似タルアリ千狀萬態僕輩ノ眼中ニハ齊シク之ヲ鬼ト視做セド其心溫柔慈惠ニシテ大ニ僕輩ヲ憐レム者アリ其志慷慨悲壯ニシテ竊ニ僕輩ト嘆ヲ同ウスル者モ有リタリ、其內一個淡泊、毒無クシテ太ダ痴ナル男アリ日ニ來テ藥ヲ賦ス各房ニ高ク叫ンデ曰ク、水藥有ルカ丸藥有ルカ何ダ成島カ何ニ末廣ダト、一日滿木淸繁子コレヲ揖シテ曰ク賦藥中滿木ノ名アリヤト、彼レ大聲ニソンナ奴ハ無イト答ヘテ去レリ其ノ非凡ナルコト斯クノ如シ、最モ注意ス可キハ時トシテ破布黃斷ヲ以テ附藥ト飮藥トノ口諭ヲ誤ルコトアリ（僕ノ同房人一名附藥ヲ飮ミ嘔吐シタル事アリ僕其名ヲ記セズト雖モ其ノ痴漢平生ノ氣力ニ似合ハズ醫官ニ告ゲテ吳レルナト謝シタルコトヲ己ガ心ニ忘レハスマジ）同業ノ人後日誤ツテ獄ニ入ル者宜シク注意シテ格子ノ間ヨリ藥瓶ノ筆記ヲ窺ヒ見テ而シテ後之ヲ受用ス可シ決シテ嘔吐シタル後ニ至ツテ獄丁ノ疎忽ヲ咎ム可カラズ、彼等若シ能ク字ヲ知リ事ヲ解シ萬ニ一モ失無キ人タランニハ何ゾ久シク獄丁ト爲ツテ僕輩囚人ノ傅姆タル者アランヤ。

古來暴虐ノ甚シキ夏桀殷紂ヨリ甚シキハ無シ（羅馬ナドノ帝王ニモ隨分恐ロシキ人有レド）其ノ紂王ノ時代デスラ文王ハ禁獄中ニ讀書ドコロカ著述スル事ヲモ許サレタリ況ンヤ我ガ大日本

明治九年ノ今日ニ於テヲヤ、故ニ拘留ノ徒ト雖モ讀書ヲ禁ズルコト無シ、僕輩禁獄人ノ如キハ隨意ニ讀書スルヲ得ルハ固ヨリ怪シムニ足ラズ（獄内未ダ筆墨ヲ與フルコトヲ許サズ故ニ著述ニ至ツテハ斷念セザルヲ得ズ詩文ノ如キモ隨テ作リ隨テ忘ル是レ一大憾也僕輩密ニ思フ文士幽閉一二年ノ久シキニ至ル者或ハ有用ノ著作無シト云フ可カラズ且禁獄人ハ其罪既決筆墨ヲ弄セシムルモ亦何ノ害アラン、密ニ内外ノ信ヲ通ズルガ如キハ固ヨリ其ノ禁防ノ嚴ナルアリ希クハ檻倉ノ長吏宜シク適宜ノ法ヲ定メテ筆墨ヲ給與セラレンコトヲ是レ僕ガ改定ヲ乞ヒタキ條件ノ一ナリ）僕ノ入獄セシ時各房一卷ノ書ナシ（加藤氏ノ如キハ殆ド一月ノ久シキニ及ベドモ）僕好ンデ柳々子ノ文ヲ讀ム且先人手譯ノ柳文アリ薄葉摺合本三卷旅行モ必ラズ携フ決罪ノ日一卷ヲ懷ロニシテ往ク衣服檢査ノ吏人帶褌ト共ニ其書ヲ與ヘズ獄吏ニ對シテ云フ、獄内讀書ヲ許サル、ト後日此書ヲ乞ヘバ速ニ附與セラレンコトヲ願フト、吏曰ク諾既ニシテ監守ノ吏ニ向テ携フル所ノ柳文一卷ヲ與ヘラレンコトヲ乞ヘリ、吏又曰ク諾早速其事ヲ伺フ可シト、爾後數日吏ニ消息無シ屢々之ヲ問フ一吏來リテ告ゲテ云フ柳文ノ儀ハ渡ス事相成ラズト僕大に惑フ、乃チ問フテ曰ク然ラバ何等ノ書ガ能ク讀ムコトヲ得ベキ、吏曰ク既ニ許可アル書四部アリ左傳ナリ名臣言行錄ナリ日本外

史ナリ一部ハ忘レタリ、僕曰クサラバ左傳ヲ家ヨリ取寄セント、吏又曰ク相成ラズ囚人差入レヲ乞フノ書必ズ代價ヲ本人ノ家ヨリ出シ御用ノ書肆須原屋ヨリ納ムルヲ例トスト（誰カ圖ラン新聞記者ノ禁獄多ケレバ須原屋ノ利益隨テ多ク記者ノ禍ハ反テ書肆ノ福トナル之ガ爲メニ一噱）僕曰ク何デモ宜シウ御座ルカラ早ク願ヒマス、吏又曰ク諾此諾三度ノ神ハ正直ニシテ實ニ二月二十三日ノ亭午ニ至テ左氏十五本ヲ房中ニ投ゼラレタリ、是ニ於テ予始メテ幽閉ノ憂悶ヲ一洗シ仰デ古人ト晤スルヲ得ル眞ニ入獄以來ノ快事ナリキ、コレニ先ダツ數日對面ノ房横瀨氏ノ友人ヨリ同氏ニ贈ルニ史記一部ヲ以テス（此書ハ所謂須原屋保證ノ書ニハ非ズトノコト眞ニ一大僥倖横瀨氏喜色面ニ溢レ直ニ把テ之ヲ讀ム意氣揚々、僕ハ數日來頗ル書ニ渴セリ其聲ヲ聽クニ及ンデ艶羨甚シキコト宛モ鰥夫面前ニ美人ヲ擁スルモノヽ如シ、横瀨氏獨リ欣々トシテ僕ニ一卷ヲ分チ借サズ人ヲシテ少シク忿恨ニ堪フル能ハザラシムルニ至レリ（各房飲食ヲ分ツコトヲ禁ズ況ンヤ書冊ヲヤ貸サヾルハ同氏ノ吝ニ非ズ是レ着袴時代ノ風習ナリ）然ルニ革命ノ後ニ及ンデ各房讀了ノ書ヲ交易シテ讀ムコトヲ許サル而シテ其事ヲ檻倉課ニ懇請シタルハ同氏ナリ、今日禁獄ノ書籍ニ乏シカラザルハ皆同氏ノ賜ニシテ之ヲ許セシハ檻倉課長ガ慈惠ノ厚キニ因ル、僕固ヨリ課長ヲ

知ラズ皆云フ身短クシテ髯ノ美ナル人ナリト又云フ姓ヲ石澤ト云フト、僕時々短身美髯ノ人ヲ見タリ恐ラクハ其人ナル可シ課長能ク百事ニ注意シ人ヲシテ冤屈ヲ訴ヘ憂憤ニ堪ヘザルノ事ナカラシム、就中文學ノ事ニ至テハ大ニ意ヲ用フル所アルガ如シ、看守ノ巡査中ニ於テハ河田（四本筋）ト云フ人能ク事理ニ明カナリ之ニ次グハ橋本（三本筋）ト云フ人ナリ其他猶囚人ヲ看護スル厚ク待遇スルニ正シキ人多カリシナレド一々其ノ姓名ヲ聞ク能ハズ惜ム可シ々々々々、是レ等ノ事ハ決シテ僕ガ今日ニ至リ口ヨリ出任セノ佞辭ニハ非ズ世人若シ之ヲ僕ノ一家言ト疑ハヾ宜シク同業二十八名ノ禁獄人ニ問フ可シ、然リト雖モ獄内巡査ノ交代スル數回ニシテ其數ヲ識ラズ多キ中ニハ謹ンデ世間流行スル賢明ノ二字ヲ奉ル可キ御人物無キニシモ非ズト云ヘリ、僕輩實ニ其然ルヤ否ヤヲ保證スルコトハ御免。

色食ハ人ノ大慾ニシテ聖賢デモ口ノ通リニハ參リ申サズ凡夫ハ言フ迄モ無ク假令僕輩ノ如キ謹愼恭順ナル禁獄人ト雖モ此ノ二慾ヲ斷ツハ甚ダ難シトス、サレド獄内ニ在テハ意ヲ一身ノ安危存亡ニ注ス何ノ暇カ能ク心ヲ男女ノ慾ニ動カサン、偶々洗濯婆ノ皺面ヲ見テハ遙ニ老妻ヲ想ヒ囚繫女子ノ垢顏ヲ拜シテハ誤ツテ青樓ノ尤物ナリト疑フノミ是レ其ノ慾點ノ至ル所極底ノ度ニ在ルヲ

以テナリ、食ニ至テハ然ラズ獄裏ノ快樂唯讀書ト喫飯ニ在リ（讀書ハ多キヲ厭ハズ食ハ極メテ節ス可シ多ケレバ必ズ大害アリ）官ヨリ給スル三度ノ食モ着袴時代ヨリ漸々上進シ方今ハ下等私塾ノ食ト級ヲ同ウス且親戚知己ノ贈遺物アリ（贈遺ハ牛肉鷄卵ヲ佳トス集思社小松正胤子ガ全遂志妻ノ説確カナリ）着袴時代ニ當テハ贈遺ノ制限甚ダ嚴ニシテ願書一字一句ノ誤ヲ譴責シ且一日兩家以上ノ贈遺ヲ禁ズ故ニ遠路貽送スル者空ク携ヘ歸ルコト數回ナリト云フ甚ダシキニ至リテハ婦人ノ贈遺ヲ乞フ者アレバ故ラニ其ノ年齢ヲ問ヒ少シク諧謔ニ近キコトモ有リシト僕之ヲ采風社某氏ノ家ニ聞ク蓋シ其ノ婦人ノ聞キ違ヒナル可シ）革命ノ後ニ及ンデハ査吏寛嚴宜シキヲ得テ復タ小瑕ヲ以テ親戚朋友ノ厚情ヲ傷クルコト無ク又其ノ贈遺人ヲ長ク待タセ置クコト無シト云フ、書籍ノ如キモ自家ノ藏書並ニ他ノ贈本ヲ檢査シテ本人ニ與フルヲ許スト是レ亦僕ガ前段ニ説ク前凶後吉ノ一ナリ。

文士多クハ疾病ニ苦シム是レ古今ノ慣習ナリ況ンヤ獄舍ニ在テ新鮮ノ空氣ニ觸ルヽコト稀ニシテ身ヲ垢衣汗物ノ中ニ埋メ穢臭ノ鼻孔ヲ穿ツニ於テオヤ、僕輩囚人罪有ルヲ以テ此境ニ墮ツ其苦ヲ吃スルハ固ヨリ已ムヲ得ズト雖モ其レガ爲メニ健康ヲ害シ命脈ヲ縮ムルニ於テハ僕輩ノ甚ダ驚

ク所ニシテ政府ノ法律ニモ亦其罪ヲ罰スルノミニシテ決シテ其人ノ健康ヲ害シ命脈ヲ縮ムルノ道理有ル事無キヲ信ズ、其ノ一證ヲ擧ゲンニハ醫官ノ設ケアリテ以テ病因ヲ診シ日ニ藥劑ヲ投ズルヲ見ル可シ醫官ノ病因ニ注意スルハ頗ル厚シ決シテ諺ニ御役目一通リト云フ如キニハ非ズ、然レ共醫藥ハ善クコレヲ病ノ既發ニ治ムルモ敢テ之ヲ未發ニ豫防スル能ハズ房内人員多ク（平常一房五ニ過ギ夏日四名ニ過グレバ頗ル其ノ苦惱ニ堪ヘズ）空氣清爽ナラズ血液十分ニ流動セザル是レ病ヲ釀ス原因ナリ、方今檻倉美ハ則チ美ナリ然レ共初メヨリ禁獄人ノ爲メニ設クル者ニ非リル可シ（其證頗ル多シ僕之ヲ漸次ニ說キ出サン）僕輩竊カニ希フ官吏ハ人民ヲ保全スルノ職務ナリ特リ權官ノ意旨ヲ仰グ可キモノニ非ズ今ヤ時勢夏ニ向フ速カニ禁獄人ノ健康ヲ害シ命脈ヲ縮ムルヲ救フノ方法ヲ設ケラレン事ヲ、或ハ其ノ健康命脈ニ關スル度ハ醫官之ヲ測ッテ長吏ニ告グ決シテ其ノ氣遣ヒナシト、是レ決シテ然ラザルナリ如何トナレバ僕輩ハ獄ニ在ル百餘日未ダ嘗テ醫官ノ僕輩ガ房中ニ來リシ事ヲ見ズ時トシテ他房ヘ診察ニ來ル事アルモ亦時間十分以上房内ニ止マリシ事ナシ假令ヘ扁鵲タリトモ房内晝夜ノ冷熱晴雨ノ燥濕ヲ實驗スルヲ得ンヤ、故ニ僕輩ノ如ク實踐シタル者ノ喋々論ゼザルヲ得ザル所ナリ、而シテ之ヲ救フノ方法ハ別ニ禁獄所ヲ營スルカ其ノ規

則チ定メテ自宅ニ錮スルカノ二途ニ在リ、然リト雖モ其ノ方法ニ至テハ敢テ僕輩新聞記者ヨリ喙ヲ容ル可キモノニ非ズ唯僕輩ノ正シク官吏ニ控告セント欲スルハ他ナシ禁獄人其心ヲ苦シメ其體ヲ苦シムルハ敢テ嗷々コレヲ論ズ可キノ理無シ其ノ健康ヲ害シ其ノ命脈ヲ縮ムル事ニ至リテハ是レヲ甘受セズシテ釐革ヲ乞フ可キノ理有リト。

讀書ト飲食ヲ除クノ外樂事三アリ一ニ曰ク運動二ニ曰ク入浴三ニ曰ク溺器掃除、其レ溺器ハ不潔ノ最上等ニ位スルモノ也之ヲ捧グルコト玉ヲ執ルヨリモ恭シキハ何ゾ其ノ顚覆ヲ恐ルヽガ故ナリ（國家ヲ顚覆スルノ論説ヲ以テ罪ヲ獲タル諸子モ幸ニ溺器ヲバ一度モ顚覆セザリキ）恭シク不潔ノ物ヲ捧ゲ恭シク不潔ノ器ヲ洗フ誰カ之ヲ樂ム者有ラン然ルニコレヲ以テ樂事ノ一ニ置クモノハ何ゾ九尺四方ノ窄室ニ數人雜居シテ（最多キ時ハ七八名ニ至ル）室内ノ空氣彼レ吐キ我レ吸ヒ化シテ大毒氣トナル屢々起テ窓欞ニ新入ノ氣ヲ吸ハントスルモ窓高ク風遠シ故ニ一日兩回溺器ヲ捧ゲテ戸外ニ出テ清爽ノ空氣ヲ受用スルヲ樂ム是レ其ノ不潔ノ如キハ措テ之ヲ問ハザル所以ナリ、況ンヤ運動場有テ運動無シ二月ノ末ニ至リテ着袴先生始メテ一次ノ運動ヲ命ズ爾後之ヲ廢セズト雖モ一月僅ニ兩三次ニ過ギズ未ダ以テ僕輩ノ身體ニ一大補藥タルノ効有ルヲ覺エシメザ

リシ、然ルニ革命ノ後大ニ運動ノ數ヲ增シ更ニ新運動場ヲ獄ノ四隅ニ設ケ頻々運動ヲ許セリサレド拘留人ノ運動ト風雨アルトヲ以テ算スルニ一月十四五回ナリキ、蓋シ舊運動場ハ其ノ周圍廣大ニシテ新場ハ甚ダ窄小且藩籬之ヲ界截シテ縱五六間橫一二間ニ過ギズ僕想フニ新場ヲ開クノ趣意一ハ舊場ノ大ニシテ警防ノ吏多數ヲ要スルヲ患フルニ出デ、一ハ法ノ簡易ニシテ頻々運動ノ樂ヲ取ラシメント欲スルニ根シ一ハ盜兒偷漢ノ瓦石ヲ拾ヒ且囚人互ニ其面ヲ見テ或ハ相話スルヲ防グ爲ナラント是レ固ヨリ良圖ナリ、然レ共僕輩禁獄人ハ唯健康ヲ保ツニ汲々タルノミ何ゾ逃遁ヲ謀ランヤ何ゾ惡計ヲ企テンヤ、石瓦我レニ於テ何カ有ラン假令同業諸子ト相面スルモ唯其恙ナキヲ心ニ喜ブノミ假令相話スルモ其言フ所ハ足下頃日何ノ書ヲ讀ムヤ、僕昨夜拙作幾首ヲ得タリ、某社新聞ノ氣焰ハ如何デアラウ、新入ノ記者ハ幾月ノ禁獄ナリヤノ數件ニ過ギズ、其中チト不謹慎ニ涉ル事ト雖モマタ僕近來頻リニ荊妻ヲ思フ君ハ滿期近シ定メテ某樓ニ痛飮スルヲ樂ムナラン等ノ如キ閑言語ノ外ニ出ズ、決シテ牢獄ヲ破リ守吏ヲ殺ス等ノ密謀ヲ通ズルニ非ズ萬一其語ノ外事ニ係ルアルモマタ牛肉玉子ノ差入レヲ促スノ他ニ求ムル所ナシ、故ニ僕輩ハ竊ニ守吏ノ勞ヲ省キ禁獄人ノ如キハ風雨ヲ除クノ外一日一次一齊ニ之ヲ舊運動場ニ驅リ出シ巡查一名獄丁一名之ヲ看

護シ其ノ失儀ヲ禁防セバ足ラント思ヘリ、斯クノ如キモ決シテ不測ノ變ヲ生ゼザルハ僕輩ガ萬々保證スル所ナリ、若シ然ラバ囚人健康ノ幾分ヲカ助クルニ至ルナラン、入浴ニ至テハ其法頗ル良シ然レドモ一度變ジテ日曜ト改マリショリ浴日ノ青袴時代ニ比スレバ減ジタリ是レ囚人ノ痛嘆スル所況ンヤ天既ニ炎蒸ニ向フ垢膩滿身衣襦穢臭其ノ苦惱甚シ、仰ギ願クハ司獄ノ長吏三伏中更ニ入浴ノ數ヲ增加シ囚人ノ發病ヲ豫防スルノ仁術有ランコトヲ。

右ノ三條ヲ除クノ外猶剪髮ノ一事アリ、聞ク囚人ノ髮ヲ刈ルコト三月ニ一次僕モ四月中旬ニ蓬鬆タル鬣髮ヲ剪リ大ニ爽快ヲ覺エタリ且他ノ禁獄人ガ嘗テ知ラザル所ノ妙味ヲ喫セリ、今コレヲ諸君ニ告ゲン僕ノ獄ニ在ルヤ禁獄人三十餘名ニ及ベリ然レ共一名モ所謂鐵梏ナルモノヲ受ケタル者ナシ然ルニ僕一人其鐵梏ヲ手ニシタリ豈一奇遇ナラズヤ剪髮ノ第二日獄吏僕ノ名ヲ第一ニ呼ベリ出テ運動場ニ赴ク桃花盛ンニ開ケリ花ニ背シテ小椅ヲ設ク剪髮工來ツテ後ニ立ツ工人ノ品等ハ一頭一銖五錢ノ間ニ位セリ那時獄丁來リテ忽チ鐵梏ヲ僕ノ兩手ニ鎖セリ僕思フ傍ラニ剪刀ノ類アリ不測ノ事ヲ防グ爲メナラント、既ニ剪髮シ了リ房ニ歸ツテ漸次ニ同房ノ人ニ問フ皆云フ我々一人モ鐵梏ヲ鎖サレズ其形チスラ見ザリシト僕大ニ怪ミ各房ノ景況ヲ窺フニ一人モ其ノ妙味ヲ喫シタ

ル者無キガ如シ、僕疑團益々堅ク慨然トシテ嘆ジテ曰ク同ク是レ禁獄人ニシテ其罪マダ僕ヨリ重キ者アリ何ノ故僕一人ニ梏スルヤ且僕ノ罪ヲ獲タルハ常ニ口舌ニ在リ其口ヲ嵌シ其舌ヲ拔クハ敢テ辭セズト雖モ僕ガ手ニ於テハ又何ノ罪有テ之ヲ鎖シタリヤト、忽チ隣房ニ聲有テ曰ク足下ノ筆ハ足下ノ手ニ役スル所ナラズヤト僕負ケズニ答ヘテ曰ク筆ハ右手ニ使フトコロ左ハ何ノ罪カアル、又大聲有ツテ曰ク、左手ハ從テ以テ論ズ禁獄四ケ月罰金百圓ト僕一語ノ抵抗スル事無カリシ。

(跡ニテ聞ケバ前日拘留人ニ用ヒタルヲ獄丁ガ誤ツテ僕ニマデ及ボシタルナリト)

何ボ恐ロシキ牢獄ノ中デモ毒蛇惡蝎ノ居ルニハ非ズ唯恐ルベキハ蟣虱ノミ然レ共蟣虱ハ捕ヘテ之ヲ誅ス可シ蟣虱ニ比スレバ其ノ恐ルベキ數百倍ナルモノハ蚊ナリ蚊ハ翅有テ飛ブ之ヲ捕フ可カラズ唯之ヲ防グ可キノミ是レ人間ニ蚊幮有テ蟣虱幮無キ所以ナリ、僕ノ獄ニ在リシ日暑威猶微ナリ然レ共蚊雷既ニ房内ニ起リ夜々之ガ爲メニ苦惱眠ル能ハザル事有リキ、一夜二更ノ比拳ヲ以テ額上ノ蚊ヲ撲ツ適マ巡吏來リ過グル有リ僕ニ問フテ曰ク最早蚊ガ出マシタカ、僕曰ク左樣、吏曰ク蚊ニハ困リマスナ、僕曰ク炎暑ニモ蚊幮ヲ釣ルコトハ出來マセヌカ、吏曰ク未ダ其ノ方法ガ定マリマセヌ、僕曰ク私ハ跡ノ日數僅カナレド長ク獄中ニ在ル者ハ實ニ困苦ニ堪ヘ兼マスカラ宜シク

評議ヲ願マスト、其後蚊ノ襲撃日ニ甚ダシカリシカド僕ハ暫時ノ事ト思ヒテ忍ビ居タリ今ヤ我ガ墨陀ノ家ノ如キハ晩餐ノ時既ニ蚊ニ困シメラレ獄裏夜眠ノ人其苦痛果シテ如何ゾヤ、聞ク新獄ノ成ラザル以前ハ禁囚或ハ蚊幮ヲ釣ルヲ得タリト然レ共盗兒惡漢ノ如キハ夜間蚊帳ノ遮蔽アレバ巡吏燭光ノ洞徹シ難キヲ以テ何等ノ惡事ヲ爲スヤヲ測リ難シトス是レ新獄ノ結構初メヨリ蚊幮ヲ張ルニ便ナラザル所以ノ原因ナルベシ、僕輩新聞記者ノ如キハ其罪ハ既決萬一狂病ヲ發スルニ非ザルヨリハ何ゾ再ビ罪ヲ買フノ事ヲ爲サンヤ假令房内千里萬里ノ屛障ヲ設クルモ決シテ罪ヲ巡吏ニ獲ルノ擧動ヲ爲サヾルヤ必セリ、然ルニ盗兒惡漢ト共ニ夏月數旬蚊群ノ爲メニ膏血ヲ吸ハレテ終夜困頓シテ竟ニ滿身疥癬ヲ生ジテ幾月カ痛癢ニ堪ヘザル苦ミヲ受ルニ至ル豈寃ナラズヤ。

昔攝政荊軻ハ己レノ身命ヲ抛ツテ人ノ君相ヲ刺ス史遷之ガ爲メニ刺客傳ヲ作リシヨリ後世マタ其ノ遺風ヲ慕フ者鮮カラズ故ニ權官貴人モ惴々トシテ所謂暗殺ヲ恐レ之ヲ防グニ重關高牆ヲ以テシ之ニ加フルニ護吏巡卒ヲ以テス其心ヲ用フルヤ深シト云フ可シ、夫レ蚊モ亦僕輩禁獄人ノ刺客ナリ而シテ彼ハ私カニ刺シ此ハ公ニ刺ス彼ハ則チ時トシテ來リ此ハ則チ夜々來ル安ンゾ僕輩ノ爲メニ重關高牆タル一張ノ蚊幮ヲ設クルヲ許サヾルヲ得ンヤ況ンヤ蚊幮ノ如キモ亦決シテ官費ヲ仰

グヲ要セズ獄吏若シ一タビ德音ヲ垂レバ親戚朋友爭ッテ之ヲ獄舍ノ門ニ捧送セントス希クハ囚人ヲ看護スルノ官吏速ニ至當ノ處分アランコトヲ。

僕更ニ一ノ取越苦勞有リ謹ンデ之ヲ諸君ニ告グ、近來朝ト無ク野ト無ク事西洋ノ典則ニ由ラザルナシ獨リ學術兵制百般ノ技藝ノミナラズ衣服飮食ヨリ屎モ味噌モ皆西洋々々ト稱スルニ至レリ僕恐クハ法律學者中一種屎ト味噌トヲ混合スルノ議ヲ發シテ西洋ノ獄ニハ蚊幮ヲ設クルノ例無シト謂フ者有ランヲ、仰モ西洋各國ノ都府ハ汚穢ナル溝瀆無ク園庭街衢ニ塵埃ヲ積ム所無ク城市ニ樹木鮮シ何レノ處ヨリ殷々タル蚊雷ヲ起シ來ラン其人蚊幮有リト雖モ亦我ガ日本帝國ニ於テ之ヲ必要物トスルガ如キニ非ズ豈彼邦獄裏ノ囚人ニシテ其有無ヲ問フ可ケンヤ是レ東西趣ヲ異ニセザルヲ得ザル所ナリ、且事々其趣ヲ異ニスルハ獨リ千萬里外ノ西洋各國ヲ論ゼズ我ガ帝國內ニ於テ考フルニモ同ジ禁獄人ニシテ或ハ獄ニ在リ或ハ家ニ在リ家ニ在ル者ハ蚊幮ニ安眠シ獄ニ在ル者ハ蚊雷ニ震慴ス是レ亦其趣ヲ一ニスト謂フ可キカ、故ニ僕杞憂ヲ抱イテ豫メ一言以テ法律學者中ノ屎的先生ヲ挫折スルノミ、夫ノ純粹ナル味噌學者ニ至テハ何ゾ僕輩ノ言ヲ俟テ始メテ其ノ異同ヲ知ルトセンヤ。

民事ニ代言人有テ刑事ニ無シ故ニ新聞記者ノ如キ筆舌ニ不自由ナラザル者モ法廷ノ訊問ニ對スルニ於テハ巧拙無キ能ハズ其罪ノ決案ハ固ヨリ賢明政府ト賢明官吏ノ擬律ナレバ毫モ過誤有ルコト無キハ僕輩モ萬々之ヲ保證仕ルナレド同ジ禁獄人ニシテ一月ノ短キヨリ三年ノ長キニ至ル其文ヲ讀ミ其語ヲ聽クト雖モ某ノ罪ハ某ニ一倍シ某ノ罰ハ某ニ十倍スルノ限界ニ至テハ僕輩法律ニ暗キ者ノ少シモ相分リ申サヾル所ナリ、嗚呼禁獄ニシテ三年ノ久シキ罰金ニシテ三百圓ノ多キ實ニ多病客ト貧書生トノ能ク堪フル所ニ非ザル可シ況ンヤ其ノ老妻幼兒ノ之ガ庇護ヲ以テ人間ニ生活スル者ニ於テヲヤ其罪ハ固ヨリ惡ム可シ其人ハ實ニ憫ム可シ然リト雖モマタ僕輩ノ如何トモ爲ス可カラザル者ニ非ズヤ。

聞ク禁獄人中其ノ處刑ノ甘受シ難キトコロ有ルヲ以テ大審院ニ上告セシ者數名有リト其詳ナル事ハ知ラザレドモ各房ニ於テ時々巡吏ニ迫ツテ上告如何ヲ問フノ語ハ僕モ屢々傍聽セリ其言フトコロ曰ク速ニ大審院ニ御呼出シヲ願フ、又曰ク私ノ上告ハ如何ナリシヤ數月ヲ經レドモ御沙汰無シト、僕ハ自己ノ事ニ非ズ之ヲ聞クモ漠然トシテ思フ所無ケレド上告人ノ屢々促スヲ見レバ法廷ノ御用多ノ爲メニ延緩シタル事モ有リシト思ハル僕ガ獄ニ入ルノ初メ一吏僕ニ向ツテ言フ處刑不

服ナラバ三日間ニ大審院ニ上告スベシト僕ハ直ニ上告スベキ事無シト答ヘタリ若シ僕ヲシテ無益ナル上告ヲ爲サシムルモ所謂御用多ニ出逢フ時ハ延緩シテ今日ニ至リ滿期ニテ出獄セバ上告マタ何ノ益カアラン却テ上告事件ノ爲メニ萬一自由ノ身ヲ町内預ケトデモ申渡サレンニハ其レコソ意外ノ迷惑ト謂フ可シ、知ラズ獄内ノ同業者ハ直ニ上告シテ御用多ニ出逢ヒシカ抑モ別ニ仔細アルカ將タ僕ノ聞キ違ヒナルカ、評論ノ小松原氏、日報ノ甫喜山氏ノ如キハ實ニ上告シタル者ノ如シ其他ニモ有ル可シ僕ハ善ク之ヲ記セズ。

我社ノ澤田氏ノ如キハ社中第一ノ謹愼家ナリ決シテ僕輩ノ如キ筆舌ヲ弄シテ罪過ヲ招クノ徒ニ非ズ何ノ故ニ大罪ヲ犯シテ一年三百六十日ノ禁獄ヲ命ゼラレタルヤ、獄ニ來ルノ時僕ハ之ガ爲ニ潸然トシテ涙下ルヲ覺エザリシ、謹ンデ他ノ新聞記者先生ニ告グ他人ノ投書ヲ取捨スルコト最モ注意セズンバアル可カラズ謹愼澤田氏ノ如キモ既ニ法廷ニ引出サレシ上ハ喋々之ヲ論ズルモ辯解ハ容易ニ相立チ申サズ候況ヤ謹愼寡言ノ性質ニシテ殊ニ法廷ノ嚴威ニ震慄スル者ヲヤ。

其ノ既ニ口供ニ捺印シ獄内ニ送ラルヽニ及ンデハ必ズ賢明ノ法官ニ於テ萬ニ一失モ無カル可シ何ゾ亦上告シテ官紙ヲ費シ官墨ヲ減ラシ空シク新法官ノ御手數ニナルヲ須ヒンヤ宜シク悲風凄月ニ

吟嘯シ以テ己レノ罪過ヲ悔ユルトモ己レノ寃枉ヲ哀ムトモ心ノ中デ勝手次第ニ爲スベキノミ、獨リ憐レム房中筆硯無シ假令日夜吟嘯ノ餘幾首ノ佳作幾編ノ文章ヲ得ルモ一夜ヲ經レバ溺器ノ糞汁ト共ニ流レ去ツテ復タ痕跡ヲ止メザルヲ、獄内ノ文士往々好詩文アリキ同房ノ人ハ面ノアタリ之ヲ聽ク各房ノ人ハ時トシテ喃々相話スルノ語ヲ洩レ聞クノ際併セテ其ノ詩文ヲモ耳ヲ傾ケテ聽取シタリキ、今一二ノ最モ僕ノ心ニ感銘シタルモノヲ左ニ錄ス。

矢野俊雄

故園何日賦刀頭。　節近禁烟泣楚囚。　東郭一樽誰代我。
落花風裏灑松楸。

人定陰房風欲腥。　鵂鶹叫雨夜冥々。　瞥然來照幽窓外。
一點流螢似鬼青。

澤田直温

九十春風半已過。　花香月影夜如何。　世間一刻千金夜。
却是囚人暗涙多。

加藤九郎

身如擒虎鐵欄圍。　陰雨濛々何日歸。
法網雖嚴難縛夢。　吟魂夜々自由飛。

末廣重恭

浩歌杖劍獨辭家。　期叩金門乘驄車。
今日獄窓空伏枕。　恍然有夢到桑麻。

同業ノ徒詩ヲ作ラザル者ハ二三名ニ過ギズ故ニ若シ其詩ヲ編次セバ若干卷ヲ爲スニ足リナン、僕記憶惡クシテ自家ノ詩モ大半忘レタリ況ヤ他人ノ作ル所ニ於テヲヤ他年同業記者盡ク出獄シテ同ク一堂ニ會シ獄内ノ悲慘ヲ紅燈綠酒ノ間ニ話スルヲ得バ僕將ニ僭シテ詩卷ノ編輯長トナリ以テ之ヲ江湖ニ傳ヘント欲ス知ラズ各社ノ諸賢ヨク僕ニ許サンヤ否ヤ。

獄内禁獄人ノ規則無キ也、僕ガ此ノ一語ヲ聽クヤ否ヤ獄吏ハ必ズ大喝シテ言ハン汝何ゾ妄言スル獄内豈禁獄人ノ規則無カランヤト、僕亦之ニ答ヘテ云フ可シ獄吏ハ盡ク其ノ規則ヲ知ルナラン僕輩ハ敢テ之ヲ知ラズト、獄吏又大喝シテ言ハン汝ハ汝ノ房壁ニ掲示スル告諭ヲ見ズヤ是レ則チ

汝ノ遵守ス可キ規則ナリト、僕輩固ヨリ眼睛アリ靈魂アリ豈面前ニ掲示スル文章ヲ讀ミ且解スルコト能ハザランヤ、然レドモ房壁ノ告諭ハ拘留人ノ規則ニシテ僕輩禁獄人ノ爲メニ設クルモノニ非ザルヲ信ズルガ故ナリ、何ヲ以テカ之ヲ信ズ僕輩ハ禁獄ヲ命ゼラルヽノ以前拘留ノ厄難ニ遭ヒ其ノ苦境ニ墮ルノ際拘留ノ規則ヲ熟諳シタリ其ノ壁書ハ則チ禁獄房中ノ告諭ト毫モ異ナラズ夫レ禁獄ト拘留トノ異ナルハ固ヨリ僕輩ノ喋々論ズルヲ俟タズ官家既ニ其ノ待遇ヲ異ニスルニ非ズヤ飲食ノ器ヲ異ニシ湯沐ノ處ヲ異ニシ運動ノ數ヲ異ニスルヨリ百般ノ事ニ至ルマデ皆然ラザル無シ且獄內ノ吏人親シク僕輩ニ向ツテ既決未決ノ異アルヲ說カレシ語モ今猶僕ガ耳底ニ止マレリ之ニ據レバ禁獄拘留同一ノ規則タラザルコトハ昭乎トシテ疑フ可カラザルナリ況ンヤ現今房壁ニ存スル所ノ告諭ノ文ト現ニ僕輩ヲ待ツ所ト大イニ異ナルコト有ルヲ見ルニ於テヲヤ（假令官吏ノ慈惠ニ出ルニモセヨ）是レ僕ガ斷然壁書ヲ以テ僕輩ノ規則ト見做サヾル所以ナリ、故ニ曰ク獄內禁獄人ノ規則ナキ也ト、或ハ問ハン何故ニ禁獄人ノ房內ニ拘留ノ規則ヲ掲示スルヤト、僕ハ竊ニ其故ヲ憶測セリ前段ニ說キシ如ク新築ノ獄ハ固ヨリ拘留ノ爲メニシテ禁獄人ノ爲メニスルモノニ非ズ其ノ建築既ニ然リ何ゾ獨リ壁書ノミヲ論ゼンヤ、今春以來故有テ自宅禁錮ヲ廢スルヨリ他ニ禁房

ノ地無キヲ以テ俄ニ拘留ノ房ヲ分ツテ禁獄人ヲ容ルヽノ處ト爲シタルナラン故ニ壁書ノ如キモ其舊ヲ改ムルニ暇有ラズシテ假リニ之ヲ規則ト視做シ其ノ條欵中折衷スルトコロ有テ以テ僕輩ヲ制馭セシナル可シ、仄ニ聞ク近來監守ノ吏ハ略ボ禁獄人ヲ待遇スルノ規則ヲ設ケテ之を商議せりと僕輩未だ之ヲ瞥見スルヲ得ズ故ニ曰ク獄內禁獄人ノ規則無キ也ト。

抑モ我ガ政府ノ獄官ハ既ニ罪人既決未決ノ異ナルヲ知レリ又僕輩禁獄人ガ決シテ牢獄ヲ破リ遁逃ヲ謀ラザルヲ知リタルナラン、又僕輩新聞記者ガ禁錮中爲サント欲スルハ唯講讀著作ノ一途ニ在ルヲ知リタルナラン、又僕輩多病ノ文士ハ獨リ生命ヲ保チ健康ヲ求ムルニ汲々タルヲ知リシナラン、若シ然ラバ宜シク速ニ適宜ナル禁獄所ヲ經營シ規則ヲ改定シ僕輩ヲシテ盜兒惡漢ト相隣スルノ醜辱ヲ免レシメヨ是レ僕輩ノ旻天ニ號泣スル所ノモノナリ然リト雖モ僕輩ハ罪ヲ法律ニ獲タル人ナリ豈其ノ罪戾ヲ忘レテ猥リニ一身ノ安逸ヲ狴獄ノ中ニ求メント欲スルモノナランヤ。

僕ガ獄內ノ情況ヲ說キ出シテヨリ既ニ十日ニ及ベリ今將ニ口ヲ鎖シ舌ヲ結ンデ以テ其局ヲ結バントス、世人或ハ言ハン獄內ノ苦情ハ實ニ想像スベカラザルモノ有ル可シト思ヒノ外今柳北ノ說クトコロニ據レバ左程ノ困難ニモ非ズ未ダ以テ犯罪者ヲ懲戒スルニ足ラザルナリト、嗚呼是レ深ク

僕ノ衷情ヲ諒セザルニ因ルノミ抑モ僕輩ハ實ニ政府ノ法律ヲ犯シタル者縱令獄内言フ可カラザルノ苦楚ヲ受ケ命ヲ械鎖ノ中ニ絕タレ骨ヲ鳥鳥ノ嘴ニ啄マル丶モ亦何ゾ敢テ一語ノ怨懟ヲ吐クヲ得ンヤ然ル故ニ世人ノ以テ苦楚ト爲ス所ノモノモ亦敢テ苦楚ト思ハザルニ至リシノミ、若シ青天白日自由ノ空氣ニ呼吸スル人ヲシテ一日片時モ獄中ノ隱房ニ閉居セシメバ其ノ憤氣天ヲ衝キ怒聲雷ノ如クナル可キハ僕輩ノ信ジテ疑ハザル所ナリ、噫獄裏慘苦ノ情豈容易ニ說キ盡ス可ケンヤ其ノ寒宵一星ノ火無ク手龜シ膚粟スルノミナラズ肺肝モ亦凍ラントスル時ニ當ツテ半椀ノ熱湯ヲ獲ント欲スルモ亦得ベカラズ何ゾ況ンヤ一瓶ノ濁酒ヲヤ、酒ノ酌ム可カラザル煙草ノ喫ス可カラザル固ヨリ怪シムニ足ラズ而シテ快ク一勺ノ水ヲ飲マントスルモ亦溷濁ニシテ喉ニ下ラズ況ンヤ隱雨冷風ノ日衣被沾濕シ蟣虱跋扈ス、溺器唾壺ノ穢臭室內ニ滿ツ、此時ニ於テ一分時間之ヲ他ニ避ケントスルモ木檻前ヲ遮リ鐵櫺後ニ列ナル起テ彷徨セントスレバ房內人多ク膝接シ脚交ハル何レノ處ニ隙地ヲ求メンヤ、又況ンヤ炎日窓ニ當リ熱埃房ニ漲ル流汗全身ニ溢レ垢膩ヲ漂ハシ來ツテ衣ヲ染メ席ニ滴ル、何ゾ知ラン人間世界綠陰ニ涼榻ヲ下シ快ク雀舌ヲ瀹スルノ人アルヲ又何ゾ知ラン紅裙ヲ畫舫ニ伴ヒ靜カニ兕觥ヲ擧グルノ客アルヲ、至若時氣頓ニ變ジ宿疾俄ニ動ク、胸

膈窒塞シ腸胃衰弱シ心悶シ神痛ムニ際シテハ僅ニ醫藥ノ救ヒヲ仰イデ以テ一縷ノ生命ヲ繫ガント欲スルノミ、僕賦性孱弱常ニ胃病有ルヲ以テ醫官ニ乞ヒ獄内百餘日食フトコロハ粥ノミ、其病ノ危篤ニ至ラザルヤ蓋シ天公ノ賜ナリ同房柴田勝文子ノ如キハ獄内ニ在テ熱ヲ患ヒ困臥數日日夜嘔吐絶エズ其ノ苦惱甚ダシカリシガ幸ヒニ滿期ニ及ビ病ヲ荷フテ出獄セリ聞ク同氏今猶舊ニ復セズト、同氏未ダ出ザルノ日病檻ニ移ル可キヤノ問題アリタリ然レドモ獄内未ダ眞ノ病檻無ク尋常ノ囚房ヲ分劃シテ病檻ト呼ビ中ニ病囚ヲ臥サシム、而シテ其房ニ移レバ拘留人ト雜臥スルノ患無シト云フ可カラズ其ノ看護者モ亦拘留中輕罪ノ者ナラントノ恐レアルヲ以テ竟ニ其ノ轉房ヲ止メタリ、嗚呼盜賊ト雜臥シ掏兒ノ看護ヲ受ケテ斃レンヨリ寧ロ同業諸子ノ手ニ死ナン乎、嗚呼獄囚ト爲ツテ恐ル可キハ二豎ニ若クモノ無シ獨リ己レノ苦惱ニ堪ヘザルノミナラズ併セテ同房ノ人ヲ痛傷セシムルニ至ル豈一大厄難ナラズヤ、僕輩竊ニ想像ス今ノ政府ハ往日ノ政府ニ非ズ焉ンゾ囚人獄裏ニ病ム者ガ老豚病鶩ノ如ク汚穢ナル木柵ノ内ニ斃レテ至重ノ生命ヲ瞬頃ニ失フヲ顧ミザルノ理有ランヤト故ニ僕輩ハ深ク信ズ官吏ガ新ニ禁獄所ヲ營ミ併セテ病囚ヲ待ツノ良法ヲ設ケラル可キコトヲ知ラズ、江湖ノ君子僕ノ說クトコロニ於テ如何ノ意想ヲ生ズルヤ、說キ了テ憮然其身ノ

猶獄裏ニ在ルカヲ疑ヘリ噫。

仙史は後顧の憂ひ無からしめん爲め、向島の家には池を穿ち來客の膳に上すべき鯉鮒の類を養ひ園には花を愛するよりも其實を貴ぶ桃梨のたぐひを栽ゑ、畠を拓いて蔬菜を培ふなど家政上に注意を拂つて居られたが歿後未亡人が或人に欺かれて貸衣裳屋を營み終に之が爲めに大損失を招き、嗣子復三郎氏も文學を以て先考の跡を繼ぐに至らず、安い給料取りとなつて諸方を轉々して居られたが今は全くその消息を絶つに至つた。兎角大家の跡が振はずして往々湮滅に歸するのは誠に嘆かはしい次第である。

石井南橋散史の一面

成島柳北仙史と時を同じうして、漢文學者、新聞雜誌記者及び狂詩家として名を知られた石井南橋散史がある、私は曾て散史に親炙してその恩澤を蒙つた事があるので、漸く世人から忘れられんとする散史の傳を作つて玆に掲げる事とした。

散史姓は石井氏通稱瀧治、名は隆讓字は子龍又太奇、初め竹陽と號し後南橋と改め、天保二年八月二日筑後國浮羽郡吉井町に生れた。其家は代々大庄屋で、父は學者といふ程では無かつたが常に讀書を好み又筆法を善くし、今でも同町鎭守の常夜燈、石燈籠等にその筆蹟の刻したのが殘つて居る。散史は幼にして日田郡豆田の廣瀬淡窓先生の門に入り孜々として勉強したが、十四歳の時三顧草廬に題すといふ席上の課題を得て、

孟德兵威列火焚。仲謀英質亦無群。未知逐鹿落誰手。頼有臥龍扶此君。
意氣由來呑六合。江山終古歎三分。大星墜地劉天暗。五丈原頭空暮雲。

の一律を賦し同窓の人々をして驚異せしめた。淡窓先生も此詩を見てから散史を麒麟兒と稱して愛育して居たが、學成り家に還つて父の家職を繼ぎ、又田代氏の女阿紋を娶つて長男隆甫（初名岩次郎）長女某（浮羽郡大石村の田代龜次郎に嫁す）二男巖の三兒を擧げた。さうかうするうちに世は

明治維新となり散史は士分に列したが、廢藩置縣に及んで大庄屋の職も廢せられ散史は俄に浮世の荒波に漾ふ身となつた。

田舍に在つて村夫子として朽果てんよりは帝都に出て大に志を舒べんものと、單身上京したのは明治五年の春であつた、先づ學友長三洲、廣瀬青邨等に就て官途に就くべき周旋を賴んだ處が、三洲氏之に答へて君は慭ひ學問が邪魔になつて俗吏たるには不適當だ、やはり學者として身を立てるが宜しからうと忠告した。それでも坐食して遊んで居る譯にも行かぬとあつて大藏省の屬官を拜命し腰辨仲間になつて見たが、果して親友三洲氏が言はれた通り俗氣紛々、殊に何事でも上長の頤使に從はねばならぬ階級制度の嚴しい官吏生活には放縱磊落なる散史としては中々辛い勤めであつた。そこで悶々の不平を醫する爲めに酒と親しみ、又足を花柳の街に入れて風流の遊びに耽る事となり、是れが段々面白くなつて勤め向はそつち除けで浮かれて居たが、此の遊興費は少からぬ金額に上つた。是等の負債はすべて鄕里の地面を賣り家屋家財を賣つた金で償却したが、噂に依ると散史の舊宅地は廣さ四丁餘、家屋も舊式ながら代々續いた大庄屋の家柄だけあつて頗る手廣く堂々たるものであつたが、明治十五年頃にはその地面の一部分にさゝやかなる小家を造つて玆に細君以下

の家族を任はせ、殘り少い財産は親戚の古賀仁三郎といふ人が管理し、其他は總て他手に渡つて仕舞つたとの事である。

散史が大藏省（後に内務省に轉じたとも云ふ）を辭したのは何年であつたか明かに知ることを得ないが、その頃は神田邊に寓し私の知遇を得たころは京橋元數寄屋町三丁目に一家を構へ獨身で浪人暮しを營んで居た。尤もその前年散史が遊びに身が入り過ぎた事を傳へ聞いて、細君阿紋さんは三兒を伴うて遙々上京した事もあつたが、家政の都合上復た細君を鄉里に歸らせて、依然獨身生活を續けて居た。

是より先明治九年頃、朝野新聞雜錄欄内に成島柳北翁の選評に係る狂詩が載せ初められ、其の唱和が盛んに行はれたので、散史も折々同新聞へ狂詩を投じて居たが、柳北翁の爲めに其の學殖を認められ終に散史と源無水（原退藏）二氏を以て狂詩の兩大關と稱するに至つた。次で柳北翁編輯の『花月新誌』が發行せらるゝや散史また題詞を作つて送り、其後も引續いて詩文を寄稿して居たが、其頃より南橋散史の名は漸く世上に傳はり文を以て交はる友も亦隨つて多くなつた。それから『團團珍聞』の野村籐雨（文夫）氏が散史を聘して編輯顧問としたのは、醉多道士や天保錢人が同社を

出た後の事であつたが、散史が筆を執るやうになつてからは同誌の茶說は一異彩を放ち、殊に狂詩に至つては選擇宜しきを得て調格一變し始めて狂詩の正道に入つた觀があつた。それから十三年六月山田風外翁が『鳳鳴新誌』を發行するに及んで、散史はまた局長關槎盆子を助け每號得意の滑稽文を寄せて其の誌上に光彩を放つて居たが、就中鳳鳴新誌題詞、聖駕西巡、訪二澤上情仙臥病一書、發二見女豪傑一、東京散記の如きは翁獨特の名文であつた。

明治十四年の夏帝政黨の一人丸山作樂氏が八官町の忠愛社より日刊新聞『明治日報』を發行するに膺つて、散史は幹部の一員として入社し、その發刊の辭は丸山氏の意を承けて散史が筆を下したのである、そして又朝野新聞の雜錄に倣つて紙上に散記の一欄を設け專ら諷刺的の文を載せて暗に柳北翁の向うを張つて居たが、大勢に反し官權を旗印として討つて出た新聞の事とて、一般讀者には歡ばれず、個人同士では交際の親密であつた柳北翁からも紙上では散々に其說の迂濶陳腐なるを駁擊せられるといふ風で、官僚主義が禍ひして散史の文名は世間に喧傳せられず、新聞記者としての初舞臺も上々吉の評判を得ずして同日報は二年後に至つて廢刊の千秋樂となつたのであるが、十五年元旦初刊の附錄として出した年中行辭一百韻の長編は散史傑作の一に數ふべきものであるから

左に採錄する事とした。

明治十四記念年中行辭一百韻

我日本則瑞穗國。農商務省最要官。乃與內藏爲鼎立。勸奬多事可以觀富强固須與實利於此設置無間然。今也世上爭空理所言九分行一分。謂是謂非謂利害損云益云得失云。遂使刊行文字數。太倉之粟亦逡巡。衆口鑠金今猶古。論弊果見肆蔓延。所說自由與自主。所務犯上與煽民。逆潮滔々誰禦者。我忠愛社始興焉。屹然立當隄防任。狂瀾激濤不敢專。文廻八代功何遜。志在九重命亦捐。今也世上大異古。實與歐米爲比隣。一喜一憂彼此事。船信電線日々傳。就中米國統領變。身斃狂豎一彈丸。彼國從來稱合衆。即是國人選擧賢。擧之殺之朝夕際。愛惡顚倒何所因。縱說自由與自主。豈有如此生殺權。無乃黨禍生斯變。洛蜀相競勢不親。果其甲乙相敵視。曰共曰和是虛言。在他帝國亦不免。始知日本天皇尊。開港以

來外交熱。貴賓續々踰海臻。是皆來觀我風土。東海天府應流涎。今
年亦是巡海次。來過英國兩皇孫。借問山河田野美。較君彊域如何
看。呼我或稱小英國。小之一字欲奉還。言論社會風波險。掎之角
之字句間。正誤解嘲篇幾種。啓蒙辨妄說多端。就中日報記者筆。
代言健訟弊風文。一出忽觸狀師怒。切齒扼腕百餘員。能言能文爭
不決。訴狀遂向法廷陳。幸有高名二三子。勸解無私又無偏。巧釋
除二三子外。二三子辯歷儀奏。兩虎相鬪必斃。此論最徹原被肝。
兩告交綏各講和。始解名譽回復煩。健訴之弊無耶有。我不敢知不
敢論。本段說出是巡幸。鳳輦遙向奧羽天。省伙尤要愼糧食。夸功豈
敢傚封禪。昨是西南今東北。天步艱難山又川。固是東西無別視。宛
如日月不私懸。問疾察瘼無不到。老幼感泣仰龍顏。尊爲天子勞如
此。庶民豈其可不勤。十月中旬始還輦。僅登御床未遑溫。卽夜發
詔告朝野。國會開於廿三年。諭下誰敢不雀躍。歡聲到處欲動山。

徵集俊秀應有法。奚止納税算金圓。則前準備無他事。要在學問請勉旃。」開拓使廳存廢議。事與官物公賣連。何物論士逞想測。氷炭相混猶交薰。廟案縱令有遺算。訐無忌憚豈人臣。犬吠相傳市成虎。新富場中咆哮喧。此局應至明滿結。優命尤謝聖旨寛。縱有要路進退事。一掃廟堂數年塵。不容首鼠兩端志。一意忠君醇乎醇。以官親民情雖好。在朝黨野道太懸。猶感名士悔悟早。道誓不倣舊參甕。此言果信我何咎。過不憚改人所難。」頃有疎枉好事輩。遽標黨傍揭其門。聞其所言附人尾。猶弱力士負他褌。負者亡論使負者。抑亦何心飯堪噴。明詔一下國是定。大體誰復説紛紜。但至枝葉每人異。方向東西不同倫。磁針萬方心所指。何止保漸急三船。保也順風可勇往。急漸逆風豈其前。舟師尤考風順逆。猪進不招覆溺患。況又事々有急緩。豈可三義限萬般。譬欲登山誰奔走。譬欲防火誰焚躙。臨機應變則得活。膠柱守株皆是頑。論則無論論始正。黨至無黨黨乃眞。」

地方長官諮問會。朝命召集有所詢。如其詳細雖難識。賢能上對策
必全。我惟他日之國會。倣此模型而完。有問則至對畢返。猶農兵
之有屯田。書生輕浮說夸大。似以對場爲朝班。漫道場中執牛耳。必
當咄嗟受衣冠。虛想至此躁亦甚。擢拔別有廷評存。」東西通商稍經
歲。外猾往々逞其奸。錙銖曖昧病物主。出入詭秘煩稅關。誰哉奮
設荷預所。要護絹絲賣買安。此約深中彼貪竇。一時葛藤亂紛々。內
商相盟屹不動。結局遂成十分勳。蓋自開港幾年月。似箇快事所不
聞。條約法權猶未改。却見商估着先鞭。此事似小決不小。揚我國
威爲淵源。東海餘潮及玄莵。修信使來盟約新。由來同文須相倚。
亞洲唇齒日支韓。但宜開明守順序。我舉吾憂告貴賓。」以上一有十
三項。先記大略一紙塡。此他瑣事難勝數。活劇場中萬態繁。書生脫
管狂何甚。天狗乘桴愚可憐。名妓輾轉頻爭寵。」老娼隱顯苦求錢。
勸工場兮摸擬夥。新聞社兮賣買頻。」獨有我黨欣然事。各地同志競

爲群。正義固是天日似。何妨一時點寸雲。雖彼論途誤岐於我皆有兄弟縁。鬩牆勿受五洲侮。賚豆忍聞七歩歎。鶺鴒原上並金玉。棠棣花下吹虎損。唱和至此一家福。家郎是國金甌堅。記畢一千四百字。丹心淋漓和墨痕。分將一掬遙相濺。同胞三千餘萬人。下午新年忠愛社。各員再拜白諸君。

忠愛社は其後專門の印刷所となり、編輯部の人々は永らく忠勤を抽んでた報いとして社長丸山氏は宮內省の勅任御用掛となり、太田實氏が內務省に、關謙之、渡邊安包二氏が司法省に入るが如く夫々官途に就くと云ふ恩澤を蒙つたが、獨り散史のみは前の實驗から官吏には不向だと自覺したものと見えて其筋の內意を固辭して請けず、又元の筆一本で世を渡る人となつた。そして是れも其頃の事であつたと思ふが、散史は個人雜誌の『東京竹枝』といふのを自費で發行して居た、それは葉書大白紙摺の小雜誌で散史得意の狂文狂詩のみを集めたものであつた（此時は居處に因んで數寄屋雅史又吟坐居士等の別號を用ひて居た）此の竹枝中に散史が狂詩中の名什といふべき湯屋行の一篇がある。先づ男湯の有樣を叙し次で女湯に及び最後に二階に美人が居て櫻湯を薦め菓子を侑め又折に

は肉を賣るの淫風ある事までを穿ち、最後に湯屋難不ㇾ在ㇾ湯兮不ㇾ在ㇾ水。唯在二樓上轉覆間一。と結んで居る。

此の竹枝も僅か六七號限りで跡が續かず、又『鳳鳴新誌』も十五年の三月限りで廢刊した爲めに暫く散史の文を雜誌上で見ることを得なかつた。その翌々年の事であるが九春社から發行して居た『吾妻新誌』の主筆服部撫松翁が持主たる數寄屋橋外の紙問屋〇一事丸谷新八と利益金分配の事から衝突し、袂を拂つて撫松翁は退社した、そこで其跡の編輯は同社員たる三木愛花氏が引受ける事となつたが、愛花氏が表面に立つ事は撫松翁に對して遠慮せねばならぬ樣な事情もあつた處から、又南橋散史にお鉢が廻り散史が顧問格として毎號執筆する事となつた。然るに樂天主義でノン氣一方に暮して居た散史も浮世の風には逆らひ難く、漸く米櫃に關する悲境に陷つたので、詩友たる千葉縣知事船越衛氏（號靜廬）方に身を寄せ同家の食客となつて居るうち病を獲て、明治廿年七月廿五日五十七歲を以て逝く、遺骸は郷里吉井町の北端字京塚なる祖先累代の墓地に葬つた、法號智海院楠亭降範居士。

元來散史は眞に酒の味ひを知る人で常に灘池田の芳醇を好み、醉へば則ち天眞爛漫、起つて紀伊

國蜜柑船を踊りまた一の谷熊谷陣屋の段を演ずるのがお箱であつた、それは一人で三役を勤める身振狂言で、忽ちにして直實忽ちにして相模又忽ちにして藤の方といふ忙しい演出方法でいつも一座を絶倒せしめて居た。要するに散史は學問該博最も經書に通じ又折々文學論を持出す事もあつたが其の蘊蓄を披瀝した眞面目な著書は一ツも無いやうで、後世に遺されたのは前記の『東京竹枝』と『新橋雜記』と題した情譜やうのもの而已であつた。つまり眞面目な學問から横道へ外れて世の中を茶にし、滑稽文を專らとして自ら風流界の情仙、狂詩壇の老將を以て任じ、一生を氣儘に送つた處が散史の本意であつたかも知れぬ。

服部撫松居士の評判

既に柳北南橋二翁の傳を記した以上玆に洩らしてならぬのは、明治初期の著述界に於て前二翁よりは遙かに高名であつた撫松居士服部誠一氏である。居士の詳傳は詞友三木愛花氏が既に『早稻田文學』及び芳聚閣で雕刻した『東京新繁昌記』の卷首にも書いて居られるから玆には筆を省いて唯その梗概を記すのに止めた。

居士は通稱服部誠一、號を撫松と稱し代々二本松藩主丹羽家の儒臣で、其父は半十郎といひ洞城と號し祿百石を食み藩學の教授を勤めて居た。居士も亦維新前後は藩廳に出仕し教官となつて居た事もあるが、廢藩置縣後に家祿を奉還して東京に移轉したのである。

居士が文名を轟かしたのは『東京新繁昌記』の著作の爲めであつたことは言ふ迄もなく同書は寺門靜軒の『江戸繁昌記』に倣つて明治維新後に於ける新東京の風俗習慣等を漢文體で描寫したもので、初編は明治七年の春銀座の奎章閣（柳北仙史の柳橋新誌、三溪居士の東京寫眞鏡等を出版した書肆稻田政吉）から發行し、五編までは同年中に續々賣出されたが第六編のみは同九年の春遲れて發行されたのであつた。ところで當時はまだ漢文を讀み得る學生も多く殊に東京の新粧を寫し出した此の新著は忽ち大評判となり、洛陽の紙價を高むるに至つた、されば出版元は是れが爲めに大儲

けをしたのであるが隨つて著者撫松居士の懷に入つた金も四五千圓に上つたであらうとの噂であつた。其頃の四五千圓は今の四五萬圓にも相當する金額で、此の收入を得て居士は湯島の妻戀坂に立派なる邸宅を新築し、樓を吸霞樓と號し文士としては羨まれる程の豐かな生活を營んで居た。同じ漢文學者でありながら居士よりは學力の勝つた南橋散史は財產を蕩盡して不遇に終つたのに、一方には此の撫松居士ありて筆頭數萬の黃金花を咲かせたのは誠に文士中の幸運兒である。

元來居士の學問は博く淺い方で、純漢文學から論ずれば語法句法に誤りが多く、殊に助字などはよい加減の處へ嵌め込むといふ風で、其の一例は居士はいつも焉耳と書くべき處を耳焉と書いて濟まして居た、故に南橋翁の如きは蔭で耳焉先生と仇名して居た程であるが、居士は漢學の技倆を示す爲めに新繁昌記を書いたのでは無く、一種の和製漢文を創意して勝手に新熟語を作り、卑俗猥褻に頓着なく其の實情實景を描出することに努めた爲めに、却て一般讀書家に愛讀せられ、當時福澤先生の著書に次いでの賣高を來した所以である。

その花柳界の情況を寫すに當つては艷筆縱横いかにも歌吹海中を泳ぎ廻つた風流才子らしく思はれるが、實際其人に逢つて見ると思ひきやで、容貌は醜といふ程では無いが滿面痘痕あり言葉は

奥州訛りのズウ〳〵で一體の風采上らず且交際嫌ひの風であつた。明治十一年以後各雜誌社の懇親會が毎年四季に催された時成島柳北、石井南橋、菊地九江、總生寛の諸氏も出席し居士も其席に連なつた事を見受けたが、前記諸氏の間に談論風發の場合にも、居士は一語を交へず獨りチビ〳〵と盃を重ね、知らぬ間に退席するのが例であつた。

『東京新繁昌記』の好評なるに乘じ、此機逸す可からずとして居士は『東京新誌』といふ雜誌を京橋竹川町の九春社から發行した、初號は明治九年一月の刊行で四六版白紙摺の色表紙、内容は居士獨特の繁昌記體漢文もの七分を占め、其他は片假名交りの文と人情本體の小說續き物一篇とであつたが、是れも亦時好に適し團々社の團々珍聞と並び行はれ雜誌中賣れ高の多い兩大關であつた、其中の漢文ものは多く居士自ら執筆し、顧柳散人桑野鋭氏も之を助け後には三木愛花氏も入社して麗筆を揮ひ、小說は東條竹翠といふ人が書いて居た。それから九春社の印刷機械に餘裕が出來た處から、居士は更に『春野草紙』といふ姉妹雜誌を發行し、又政治雜誌『江湖新報』と題するものをも刊行し、單行本としては自著の『第二世夢想兵衛胡蝶物語』『勸懲繡像奇談』等をも出版した。其頃出版界に居士の名の高かつた證據は内容は兎もあれ居士の名前で書籍が賣れるといふ有樣であつ

た、故に他の書肆でも居士の前に叩頭してお名前拜借を願ひ出たもので、現に織田純一郎氏の『華柳春話』と『寄想春史』桑野鋭氏の『蝶舞奇緣』其他に服部撫松校閲としたのが數部ある、是れ則ち著者其人よりも校閲者の名に依つて其書を賣らんとするものであるが、更に一例を擧ぐれば明治十五六年の頃九春社内に四通社といふを設け『内外政黨事情』といふ隔日發行の新聞を出した時も其の記者は帝大卒業の市島謙吉、山田喜之助、高田早苗等新進學士の腕揃ひでありながら、やはり居士を社長と仰ぎ其の名前を看板として居たのである。

さて九春社は新に投資家として京橋元數寄屋町の紙商丸谷新八氏が入つて益々營業を擴張し少からぬ利益を擧げて居たが、東京新誌が時の外務大臣井上馨侯令孃の醜行を發いた記事を掲げた爲めに忽ち發行禁止の厄に遇ふたので、居士は早速その身代りとして記事から體裁から東京新誌に寸分違はぬ『吾妻新誌』といふのを作り一ケ年餘り發行を續けて居たが、南橋散史の傳中にも記した通り資本家の丸谷氏と居士との間に利益分配上の事から葛藤を生じ、雙方より裁判所に持出す程の騷ぎとなり、居士は憤然として同社を去り別に獨立して『京華春報』といふ吾妻新誌と同種の雜誌を發行したが、其頃は文學界も漸く新進の氣運に向ひ最早古臭い漢文ものは顧みる讀者が少くなり、

京華はわづか三四號で斃れ吾妻も明治廿一年？　に廢刊の已むなきに至つた。

居士は其後どうして居たか、帝都の文壇から其姿を沒し其名も殆ど忘れられた程であつたが、聞く所に依ると居士は明治廿九年の春宮城縣尋常中學校――今の第一中學校――の作文教師に聘せられ居ること十二年、適ま四十一年八月暑中休暇を利用して久し振に上京し、牛込納戸町の僑居に滯在中卒然腦溢血に罹り、同月十八日享年六十有八を以て同處に歿した。

居士の名を成したのは『東京新繁昌記』の著あるが爲めで同書は實に居士の出世作であつた。今同書中新聞社の一章を錄して新聞紙の幼稚なる時代を知るの便りとする事にした。（原本は漢文茲には聚芳閣飜刻の大月氏譯文に據る）

新聞社（明治七年）

固陋の夢醒めて、開花の春に遇ふ、文華の爛漫、發明の光彩、內外眼に觸るゝ美事多し。人麝香を嗅がずんば、開花の花あるを知らず、寫眞を見ざれば、文明の人あるを想はず、普天の下王土に非ざるなく、率土の濱何を以て能く開化せん。これ新聞紙の人に吝戀せられて、四方に出づる所以なり、毎社自らその專務とする所あり、公布裁判等の事を記するものは、日新眞事誌なり（京

橋銀座にあり）府下の珍事奇談を報ずるものは、日報社なり（淺草の茅坊にあり）各州諸縣の事を告ぐるものは、報知新聞なり（兩國矢の倉にあり）この三社は最も都下に鳴る。これ皆開化の引札、文明の番附にして、缺く可からざるの器械なり。一枚の紙にして、世界の新奇を網羅し、一も遺漏することなし、彼の讀賣先生の三舍を避くるも、亦た宜ならずや。社内高札數箇を列ねて、その課を分ち、各神速なるを要す。東西に奔走して、新奇を探るものあり、院省に出て、公布を寫すものあり、文章を編むものあり、活字を植ゆるものあり、明日出す所の新聞、今日午後四五時の間に至つて已に成る。その簡便なる、一の器械あつて數千枚を摺り、菓舖の丁稚の煎餅を燒くより速かなり、一枚の値ひ、四五錢に出でず。若し一月を括つてこれを買へば、則ち社よりこれを配布し、且その値ひを減じ、一月間五十錢、乃至七十五錢なり。藝妓の一纏頭を以て、世界の新事を知る、亦た廉價ならずや、紙上載する所の概略は、則ち政府の布告、海外の新事、國土の豐歉、物價の高低、貿易の盛衰、開店の報告、或は絃妓の醜美、或は戶長の動情、凡て耳に入り目に觸るゝの新事は、貴賤を問はず、必ずこれを記載す、火災の如きは、則ち報じて曰く、昨何時某坊出火あり、横濱の如き電報有の三字を加ふ、これ皆隣婆の孕んで赤猫を生むの如き空

談に非ず、富士山に登つて、歐羅巴の火事を一目するが如くなり。傭夫野人と雖も、一たび新聞紙を閲すれば、則ち長髪を刈つて、嚴君の舊習を歎き、或は老婆の裸體を視て、野蠻の風を覺り五合の酒を減じて、白布褌を與ふる者あり、不幸の子と雖も、雪を衝いて竹筍を斸らんと欲し、好色の娘と雖も、夜を徒して戀歌を唱ふる無く、田舍の節婦は、都府の淫婦を懲し、都府の勸商は田舍の惰商を戒む。これ新聞紙の國内に頒布して、開化を助くる一二なり、人車の轉倒も新聞に連り放屁の高きも亦新聞、それ新聞々々。奸吏懼れて新聞を閲みす、我を罪するものは、それ唯だ新聞か。稗史者流の拙筆も亦、新聞紙上の懲戒を免れ難し。

世の損益を議し、人の長短を評せんと欲する者は、その議論を細記して、これを新聞社に投ず、これを名けて投書と曰ふ、社その摺り賃を收めずして、これを紙上に掲ぐ。これ新聞社の施恩にして、乃ち無布施の引導なり。(甲の議論を乙の耳に渡すも、亦た引導か。)淺草の伏雛、芝口の臥龍、或は倫敦(英京なり)の演史家、或は華盛頓の吹螺師、自ら大先生と稱して、未だ三顧の命を蒙らざる者は、競うてこれを投ず。何となれば則ち、至高至大の贅論を吐いて、頻りに灰吹の大蛇法(若し邪法を變ぜば大に恐る可し)を說くと雖も人曾てこれを信ぜず。又これを邦内に頒

布せんと欲するも、その財力無ければ能はず。故に空腹を叩いて、その腐志を吐き、以てこれを社に委ぬ。その投書の多きや、机上に輻湊して、蝟集蠅屯、或は羊兒と化して、紙の餘白を嘗むるあり、或は蠹魚と變じて、活字の命を喰ふものあり。靚詞粧論、喋々として柳橋の風俗を評するものは、爲替座の伴頭なり、怨言恨語、懇々として吉原の零落を訴ふるものは、蓄財家の情男なり。鍼を以て棒と爲し筆頭の花を栽するものは、好事家なり。己の姿を以て人の姿に擬し、恍惚の辯を費すものは、自負家なり。或は暗に不平を鳴らすものあり、或は顯はに慷慨を述ぶるものあり、或は人をして己の功を言はしめ、或は己に擬して人の非を拾ふ。かくの如きは皆、一片の文を社に投じて、四方の君子に揭示す可きなり。長崎の開化先生、坐して遙かに函館の古陋先生と數回舌戰す。今その概略を斯こに記せん。貴社新聞何百何十號を閲みするに、開化先生の古陋先生を鼓舞する論中に曰く、余輕氣球に乘つて、遍く國內を飛行し、熟々人民の風俗を視るに、方今、散髮筒袖の世に會し、間々結髮佩刀の人あり、この人や、口に牛肉を喰はずして、澤庵の大根（俗に蘿蔔を呼んで大根と曰ふ）に甘んじ、足に革靴を着けずして、葬式の草履を愛す。その甚だしきに至つては、則ち太陽曆を捨てゝ、太陰曆を用ふ。辱くも日輪を以て月輪の門番（陽

暦の陰暦の上に在る故か）となす。何ぞその愚の甚だしきや。事に順逆あり、物に大小あり、天地日月と稱する、これ世の通言なり。豈に地天月日と稱する者あらんや。陽暦を捨て、陰暦を取る者は、倒まに地天と稱するに異ならず、かくの如き輩の因循病は、膏の上肓の下に在つて、終に姑息病と變じて、その寒苦に堪へず、良醫を招いて貧を救はんと欲す、尚は洋醫の興奮劑を以て、毒素と爲して、而して漢醫の懶惰湯を欲す。この輩生きて蝸牛の廬に栖して、井蛙の智を羨み、死して餓鬼道に陷つて、獄卒の車を挽くものなり。嗚呼、三たび歎息せざらんや。余（固陋先生なり）讀んで此處に至つて、激憤に堪へず、自ら机上を叩いて、爲めに拳頭を傷け、赤膏一貝を損せり、冀くばこの輩を喜望峰（亞弗利加に在り）に上り、以て歐羅巴の繁華を示さば、少しく發明する所あらんか。是れ全く西洋風の吹き足らざるが故なり。噫これを如何せん。余（開化先生なり）神官を傭うて、大小の神祇に祈り、神風を藉りて、西洋風を助けんと欲す。然らば、則ち洽く邦内に波及して、僻陬と雖も、亦た馬車の聲を聞くに至らん。因りて新聞の餘白を假りて可否を江湖の諸君に問ふ。余讀んで激涙の襟を濕すを知らず（机上よりその新聞を執つて曰く、斯く丈夫にして、斯の激涙あるか）何ぞそれ暴論なる。余敢て應答せずんばあるべから

ず。それ開化と稱するものは、散髪と結髪との間にあるか。これ一を知つて未だその二を知らざるなり。余固陋の一生と雖も數町の田を耕して、巨大の屋に住み、常に鼓腹して太平を歌ふ、亦樂しからずや。余口に開化を唱ふる者を視るに、概ね一の貧生にして、纔に牛店に至つてその餘肉に飽き、未だ五層の樓に住して、金庫を建る者あるを聞かず、心既に開化すと雖も、嚢に一錢無くんば、則ち開化も亦因循病と爲り、終に西洋店に寄食するに至らん。假令その値を減ずるもこれを顧みる者なく、蜘網を被つて縛り死なんのみ。事は速かにす可きものあり、速かにすべからざるものあり。牛糞は乃ち牛糞にして、未だ味噌に化する例あるを聞かず。故に暫く老者の固陋を捨て、壯者の因循を曉さんと欲す。これ全國に學校を設くる所以なり。又何ぞ子の訥辯をこの舌戰に假りん。何號より何號に至る、終に社報あり、某先生の投書は、矇聰先生寢語の誤りなり。因つてこれを消棄すと（下略）

山田風外翁と關樸盆居士

私が明治十一二年頃から親しく交はつた益友に山田風外、關槎盆の二氏がある、共に新聞記者として、著述家としての功あり、又次章にも記した飲仙會員として狂詩は殊に得意であつた、私は曾て二氏の傳を作つて『新舊時代』に寄稿した事があるから、それを玆に再錄する事とした。

●●●●●

山田風外翁　は通稱孝之助、風外は其號、別に籟生と稱し狂歌に松廼舍華南の號がある、嘉永六年日本橋通三丁目の羅紗問屋松葉屋吉兵衛の長子と生れたが、異腹である爲めに長女即ち翁の姉に番頭某を配して家を繼がせ、翁は早くより別家して日本橋檜物町に住つて居た。幼より學を好み元大工町の小松原塾に通つて漢籍を學び、又好んで國文稗史の類を涉獵して常にそれらの學生と交はり當時檜物町の自宅の門に一株の柳があつたので自ら柳門生と號し、詩作歌詠に耽るなど少しも商家に育つた人の風が無かつた。

明治六七年頃、舊幕時代の八丁堀與力であつた菰田某（其頃は向島に住せり）の女てい子を娶つて後二兒を擧げたが二男は夭折し、長男馨一郎氏が健在で今は横濱に住つて居る。又其頃銀座二丁目の煉瓦家屋——現今の筆墨店英章堂の北隣——に移轉し、松葉屋の分店として羅紗及び洋服裁縫の店を開き、本店より附け渡りの番頭平三郎といふのが店の事を掌つて居たが、文學好きの翁は

商賣には身が入らず凡てを番頭任せにして、自分は新聞雜誌に投書したり又は新聞記者、投書家等と交際して、文藝に遊ぶのを無上の樂しみとして居るのであつた。就中隣町に住む書肆でかの『柳橋新誌』や『東京新繁昌記』の版元であつた山城屋主人稻田政吉氏とは殊に親しく交はり、稻田の紹介で成島柳北仙史に面會してから、深く仙史の學殖と人格とを欽慕し之に師事する風があつたと同時に、仙史も亦翁を愛撫して、每に誘掖する所があつた。ところで仙史は『花月新誌』を發行し服部撫松居士は『東京新誌』を刊行し、石井南橋散史は『團々珍聞』に陣取つたのを見て翁は矢も楯もたまらず、明治十一年の末自宅に開新社を置き、そこより『滑稽風雅新聞』（後風雅新誌と改む）といふ雜誌を發行するに至つた。內容は花月新誌の稍や卑俗なるもので、和漢の散文詩歌俳句狂詩狂歌の類を連載し、柳北南橋の兩大家が後援となり、和文和歌狂歌等の選擇は語學に精通せる岡野伊平氏（蓬室と號す後ち淺草庵五世の號を襲ぐ）が擔當し、又翁の異父同母の兄杉山孝次郎氏（狂歌師三世琴通舍康樂）も之を助け、今の中川柳外氏も亦その編輯の一員であつた。

翁は其後南橋散史の推薦により、關謙之氏（槎盆居士後ち梅痴と號す）を聘して局長とし、明治十三年六月同じ開新社より『鳳鳴新誌』といふ『風雅』の姉妹雜誌を發行したが、これは八分通り

は漢文で、かの『東京新誌』の向うを張つたものであつたから、凡く書生社會に歡迎せられ殊に狂詩は此雜誌の呼び物の一ツであつた。又翁は同時に含翠閣といふ書房を社内に設けて出版業をも兼營し、槎盆居士の『銀街小誌』憑空逸史の『東京粹書』拙著の『名士品評』等を出版したが、皆多くは賣れず出版費を取返すにも至らなかつたのに、獨り『警官必携』といふ小冊子は一萬部を賣盡し多くの利益を得たので、翁は出版業の祕訣はこゝにあるのだ、憖ひ文學などを解する者には本屋で儲け樣とするのはダメだと嘆じられた事があつた。

『風雅』『鳳鳴』とも時勢の推移で已むなく廢刊した後の明治十五年の冬（？）翁は銀座に於ける最後の企劃として獨力『繪入朝野新聞』といふ半紙五枚綴の日刊新聞を發行したが忽ち資金に差支へてどうする事も出來なくなつた。そこで翁は柳北仙史にすがり、仙史の周旋で之を朝野新聞で買收する事となり、翌年繪入朝野社を銀座四丁目の東北角に移して別局と稱し、普通の四頁一枚摺の用紙に改め更に壹號より引續いて發行するに至つたが、朝野の本局より論說部主任として淺野乾氏、營業部主任として磯部節氏が乘込み（柳北仙史も編輯を監督し、後には前田夏繁氏が主筆となつた）風外翁は唯だ編輯の員に連なるに過ぎずして自分の計畫は多く用ひられず、且いつ迄も與下

の阿蒙なるを潔しとせず、一年餘りで退社するに至つた。

翁の退社は唯だ意見の衝突ばかりでなく、自家の沒落といふのが其一因をなして居る、元來翁は江戸ツ子風の俠氣があり、且負けず嫌ひで豪奢を好む氣質であつたから、交際上新柳二橋の狹斜の地へ足を運んだのが病付きで、屢々花柳界に豪遊し財産の裕かなるに任せて大盡風を吹かせて居たがそれも五六年間は繼續し新橋へ落した金だけでも何萬と數へる程で、一時白山さんの名（翁の交友中山田鐵面氏は色が黑いので黑山、今一人の山田中太郎氏は特色がないからロハ山、翁は色が白い故白山さんと藝者間に呼ばれて居た）は新橋の南北に轟いた位であるから、豪遊の有樣推して知るべしである、松葉屋家から言はすれば惡友たる私等も此遊び友達であつたが、貧乏人と金持とでは其使ひ方も莫大な相違で、翁が繪入朝野を退いた頃は既に財産を蕩盡して却て借財に苦しむ破目に陷り、おまけに家庭上にも面白からぬ悶着が生じて、終に銀座の家も人手に渡し細君をも離別し翁は竹川町の小粹な家に身を寄せる事となつた。

是より後翁は不幸にも下り坂の一方に向ひ、明治二十年頃は新潟にて發行せる『繪入新潟新聞』の主筆に聘せられて同地に赴いたが居ること一年餘にして歸京し、夫より地方を轉々して一番長く

筆を取つて居たのは前橋の『上毛新聞』及び『上野日々新聞』であつた。それから大正に入つて飄然歸京して遠縁に當るとかいふ堀江町親父橋橋畔の菓子舗新杵方の番頭役を勤めて居たが、新杵の盡力で東京橫濱の菓子商組合で機關雜誌『精華』を發行する事とし、翁をして其編輯を主宰せしむるに至つたので、翁は再び筆の人となり『精華』の發行地たる橫濱に赴き、長者町から不老町最後に南吉田町に轉居して居たが、十二年九月一日の大震火災の時一旦戶外へ遁れ出で、折から駈付けた令息馨一郎と二タ言三言詞をまじへて居た內、大切な書類を忘れたとて再び屋內へ取つて返した折から、猛火忽ち襲ひ來つて其儘行方不明、あはれにも終に慘死を遂げたのであるが、不思議にも其燒跡から死體を發見し得なかつたとの事である。

佳人は薄命才人は窮するのが習ひとは云ひながら、後半生を全く不遇に終つた翁の如きは誠に不幸の人であつた。翁は個人として著書の遺したものは無いが、新聞雜誌書籍の出版にも私財を抛つて文化の爲めに盡し、又後進者を援助し之を世上に紹介して名を成さしめたのも少くない。關謙之（槎盆）吉田喜聞（淞北）の如きは卽ち是れで、私なども若し文士とでも稱する資格があらば、やはり翁に引立てられた一人である。

翁に遺稿がないと云つたが、今憶ふと翁が晩年横濱に居られた頃、曾て新聞記者たりし時代の思ひ出を何くれとなく書留た備忘錄やうのものを私に示して、是れが自分の大切な書類である、出版するものでは無いが一の記錄として永く我家へ遺すつもりだと語られた事があつたが、前に述べた大震火の際大切な書類を忘れたと云つたのは、或は此の記錄の事では無かつたらうかと思へば甚だ殘念に堪へぬ。今一つ是れも殘念なのは『新聞記者列傳』三編（中島中洲氏編）同四編（吉田溢北氏編）の稿本も資金の都合で出版に至らず、翁の手許に殘つて居たが、是れも空しく灰燼と化したのであらう。

關槎盆居士　は謙之が通稱で、字は伯亨、旭巖は其號、又亨堂ともいひ、始め戲れに槎盆居士と號したのは關謙の國音が石鹸に通ずるからの洒落で、シヤボンを槎盆と聞かせたのである。後年日報社に入つてからは福地君の櫻癡に倣つて梅痴の號を用ひ、又戲れて散錄魔王とも稱し、晩年易占を業とするに至つて南華堂華隱と改めた。

豐後日出に關準平といふ人があつた、同藩の馬廻り役を勤め號を蕉川と呼び、當時指を帆足萬里の次に折らるゝ碩儒であつた、其の長子を讃藏號を星巖と云つた、父ほどの學者では無かつたが好

んで和漢の書を讀み、又早くより洋學に志ざし、壯年の頃長崎に赴いて兵術砲術等を研究した事もあつた。安政元年十一月五日、夫婦の間に一男兒を擧げたのが則ちこの槎盆居士である。

多くの傳記にある紋切形通り、居士も亦幼にして頴悟、神童と稱せられた程で、漢學は誰に學んだといふ事は無く、七歳にして唐詩選を諳誦し十歳にして周易を熟讀したといふ風に、殆ど獨學で仕上げたものらしく、居士自身も亦祖父の後を繼いで儒者たらんとするは難くは無いが、父の如く泰西の文物に接して新知識を取入れる事は到底及ばぬと嘆じて居たさうだが、慶應二年即ち居士が十三歳の時父君は俄かに病歿した。

明治維新の革命に關氏もその打擊を受け、是からどうして家を建てゝ行かうかとの問題に逢着したが、兎に角田舍に燻ぶつて居る時節でないと、居士は明治初年大阪に出でゝ一時開成學校に學び翌年東京に出で本所の尺振八氏の塾に入つたが學資の續かぬ爲めに一時歸國し、四五年間村夫子然と暮して居たものゝ、一たび都の風に當つては臀が落着かず、明治八年再び上京し、何禮之氏の周旋で內務省の等外出仕（月俸十圓）となり、同十年辭職して報知新聞社に入り、茲では栗本鋤雲翁の知遇を受け、其頃から新聞雜誌等へ投書して居た爲めに成島柳北、石井南橋等の先輩に其の筆才

を認められ、明治十三年六月山田風外氏の經營する『鳳鳴新誌』に南橋翁の紹介で入社して局長に署名し、得意の漢文ものを書く事となり、是れより世に槎盆居士ある事を知られるに至つた。

其頃は漢文もの〻雜誌が讀書家に歡ばれる時代で、單行本では服部撫松居士の『東京新繁昌記』の類が熾んに賣出されて居たので、居士も之に倣つて翌年（發行されたのは十五年一月）『銀街小誌』の初編を著した。是れには柳北仙史の序あり、且題號も始めは銀座繁昌記とする筈であつたが仙史の說で夫れでは餘り撫松氏の新繁昌記の眞似をするやうだとて、銀街小誌と改めたのであつた、此書の總論は後章『昔の銀座と新橋藝者』中に引用して置いた）

此書は新繁昌記の如き和製漢文では無く、措辭皆妥かで、居士が漢學の手腕を見るに足るべき好著であつたが、具眼者に乏しかつた爲めか賣れ行き宜しからず、貳編も草稿に着手しながら、遂に發行を見るには至らなかつた。

明治十四年の六月、丸山作樂氏が明治日報を發行するに當つて、居士は南橋翁と共に入社し、社說の筆を執つて居たが、居士は政論は得意でなく、殊にその日報は御用黨の機關紙であつた爲め、民權論の熾んな當時では顧みる人も少く、隨つて居士の文名も埋もれて仕舞つたが、日報の廢刊後

は時の司法卿山田顯義氏の盡力で、十七年の春司法省奏任御用掛となり、十九年には檢事に任命せられ新發田の區裁判所に赴任し、同廿二年東京始審裁判所に轉じ、翌年樞密院書記官に任ぜられたが在官二年に足らずして罷められて野に下つた。明治八年には月給僅か十圓の所謂デシマル・チフキサーであつた居士が、十年後には一躍して奏任の高官を贏ち得たのを見て、その舊友中には出世の速かなのに驚いた人もあつたさうだが、又一つ可笑しい話は、居士は檢事となつた當時法律は眞ッ闇ゆゑ（後には熱心に研究して居たが）事件のある毎に法の適用を下級の同僚から敎へて貰ひそれを諳誦して論告したといふ、譬に謂ふ盜人を捕へて繩を綯ふやうな窮策でお茶を濁したとの事であるから、其便りない論告ぶりも推して知るべしである。

居士は明治廿六年に東京日々新聞の日報社に入り福地氏の櫻癡といふに倣うて號を梅癡居士と改め、紙上に散錄の一欄を設け「何でも來い」といふ題で讀者から出す難問に對し、一々こぢ付けの解答を掲げて居たが、是れは居士が獨特の滑稽を盡して能く人を笑はせ、一時は近時片々と共に同新聞の呼び物であつた。それから又散錄魔王と號して狂詩を唱導し、散錄內に唱和の作を連載し中には咸韻の七律で次韻五十餘首に及んだ事もあつたが、柳北南橋二翁の歿後は居士と中島玩球、眞

木痴嚢等が狂詩壇の驍將であつた。
日報社に在ること二年、後には客員待遇で自宅から原稿を送つて居た事もあつたやうだが、卅二年九月帝國制度調査局の設けらるゝや、總裁伊藤博文侯から拔擢せられて同局の主事（高等官五等）に任ぜられ、或年は詩人森槐南氏と共に同侯爵に從つて九州を巡回した事があつた。此時が居士の最も得意の時代らしく、途中日出に立寄つた時などは所謂故郷に錦を飾るの感が深く、在京の友人へ偶感の一詩を贈つて來た事もあつた。

居士は二代目の總裁土方伯にも仕へたが、卅六年七月辭して芝公園の金地院地內に移り、若い時に學んだ周易を元手に、南華堂といふ看板を掲げて卜筮を營み、傍ら狂詩其他の文藝に遊んで居たが、平素胃をわづらひ重患といふのでもないのに、今の內根本的の治療をするとて、四十年の三月築地采女町の某胃腸病院に入院し、前日までは看護婦を集めて面ない千鳥の遊びをするなど、大はしやぎで居たに拘はらず、治療を受けてから急變が來て、その月の廿七日同病院內で遂に息を引取つた――享年五十四。

居士は性質至極淡白な樂天家で、且常に滑稽を好み、まじめな座談中にもやゝもすると諧謔をま

じへて、人を笑はせる事もあつた。その平生を知る吾々友人間では、此人にどうして鹿爪らしい檢事の職務が勤まつたかと、不思議に思ふ程であつた。其の嗜好としては芝居、落語、遊藝の類何でも御座れで、自分では義太夫を野澤五助に學び、靈南坂の官舍に居る時も、屢々太棹の音を聞かせた事もあつたが、居士の義太夫は數年稽古したにも拘はらず、親類でも二段とは聞かれぬ程のまづさ加減であつた。それも言葉や地の文はどうやら物になつて居たが、サワリとなると調子が外れて聽衆がクス〳〵と笑ひ出す、そこで五助も大いに弱りサワリを抜いてお語りなさいと勸めたが、義太夫はサワリが一番聞かせ處であるのに、之を骨抜にしては興がないと、本人どうしても承知せずドッと落の來るにも構はずやはりサワリを語つて居た。又或る年（明治十三四年ごろ）は文友と共に素人芝居を催し、新橋の花月や喜多川の大廣間を舞臺として「車引」「鞘當」などを演じた事もあつたが、是れが文士劇の嚆矢であつたかも知れぬ。

居士の長子鴻一氏は、南華堂の跡を繼いで卜筮に從事して居たが、四五年前新宿通りの電車から墜落して、非業の死を遂げた、今は未亡人が上州高崎に居らるゝとの事である。

明治年間の狂詩と飲仙會

狂詩の沿革に就ては未だ十分研究する暇がないが、已に一休和尚に狂詩の作がある、尤も狂雲集以外のものは僞作もあるのを、後人が一休作と誤り傳へて居るやうである。降つて安永天明年間には京都に銅脈先生（畠中頼母）出で、江戸に寢惚先生（蜀山人太田南畝）起り東西相應じて筆陣を張り、之を學ぶ者も亦續々輩出して一時盛況を極むるに至つた。併し其頃の狂詩は平仄も正さず、字句にもまた生硬の嫌ひがあつて、聲調體格ともに上乘のものでは無かつたが、天保年間に方外道人（木下健藏）半可山人（植木鉢三郎）の二氏が出るに及んで句法韻法漸く整ひ、始めて狂詩の體を爲すに至つたのである。方外には『茶菓詩』、『江戸名物詩』半可には『狂詩絶妙』の家集があるが就中狂詩絶妙中に收むる所の忠臣藏十一段の七律の如きは、句法皆妥かで狂詩の手本とするに足るべきものである。

其の前後に愚佛、安穴、鈍齋、仰山など云ふ作家もあつたが、維新後數年間は狂詩も暫らく鳴りを鎭め、唯折々世を譏る落書體のものが顯はれるのみであつた。

明治八年成島柳北仙史が朝野新聞に入り雜錄欄に輕妙の筆を振はれるやうになつてから、狂詩も亦仙史の唱導に依つて俄に擡頭し來つて、俊才四方より起り皆仙史に逼つて技倆を競ひ、其作は仙

史の評點と共に朝野紙上を賑はす事となつた。其頃某氏原作の 去 年 減レ給ヲ成ニ十 圓一ト 今 年 今 月 猶 依 然。といふ起句の長篇はその次韻が七十篇あまりも續いて底止する所を知らぬといふ有樣であつた。

柳北仙史の狂詩は韻をあやつること總て妥當、字句も亦平易で少しも堅くるしい文字を用ひず、それで居て正詩の體を失はず、實に圓滑自在な處がある。曾て博文館から發行した『柳北全集』には狂詩も採錄してあるが其中にある白樂天の顰に倣うた新諷諭狂樂府の如きは再讀三讀すべき妙什である。仙史の狂詩論は前段「成島柳北仙史の面影」中に記した通りであるが、南橋散史（石井瀧治）源無水（原退藏）の兩翁も亦斯道の老手で、當時この人々を狂詩三大家と稱へて居た。されば狂詩は蜀山に因つて培はれ半可之に花を咲かせ、仙史之に實を結ばせたといふ順序で、兎に角狂詩は明治に至つて大成したものである。又當時柳南二翁に向つて其腕を磨き其才を競うた作家には玩球少年（中島中洲）槎盆居士（關謙之）六々童子（山田鐵面）杵屋情仙（三木愛花）愛桃漁史（吉田淞北）風外迂夫（山田籟生）紅雪小史（堀紫山人）等があつた。

明治十年に野村簾雨氏經營の下に『團々珍聞』と題する滑稽一點張りの雜誌が發行せられたが、

この雜誌は諷刺的狂畫の外に狂詩、狂歌、狂俳、川柳都々逸等を滿載したもので、編輯員には田島任天、梅亭金鵞の二氏あり、狂詩は專ら任天氏の選評に成つたのであるが、氏の狂詩は平仄も正さず措辭も雜駁で、柳北仙史の所謂無理コジ附けの作が多く、其の選に成つたものも皆自家の鑄型に嵌めるので一種の調格を形造り、世人は稍や冷評する意味で之を團珍調と稱へて居た。それから任天氏が同社を去つてからは、狂詩の評者も三四轉して石井南橋翁となり、眞木痴嚢氏となつて始めて平仄の正しいものを採り調格整然たるものが紙上に載る事となつた。私は引續いて團珍を購讀しなかつた爲め記事の改良等に就ては委しく知らぬが、一時は團珍一派の狂詩家だけでも百名近くはあつて就中小室屈山、木一庵粹痴、尾ノ道の王鐵峰、京都の一々庵百一、木葉山人、上田の花月漁夫、長崎の東來野夫、鈍々粹史諸氏の名が今猶耳底に殘つて居る。

團珍以外に狂詩を載せた雜誌は『同樂相談』『風雅新誌』『鳳鳴新誌』『吾妻新誌』等であつたが、明治十七年に柳北仙史逝き同二十年に南橋散史歿して後は、狂壇俄に寂寞、後四五年間は特筆すべき出來事も無かつたが、髀肉の歎に堪へざる中島玩球、關槎盆の二氏發起人となつて、明治廿六年?の春新橋の喜多川樓で狂詩の大會を催した。其時出席者に飮中八仙歌の次韻を課したので此

會を飲仙會と命名した。そして其の會員中には痴仙（朝比奈知泉）翠煙（川村淳）逸鹿（巖谷一六）黒樂天（同小波）黄金公子（野口寧齋）烏玉（佐藤六石）樂在（黒岩涙香）乙羽庵（大橋乙羽）吐劍（岸上質軒）常陸大掾（堀紫山）愛花（三木貞一）痴甕（眞木幹之助）風外（山田籟生）醉處（西村捨三）運神（大庭雲心）少女庵（小林天龍）無名居士（中川柳外）軟々（内田福太郎）豁然（永島今四郎）素直翁（磯部節）夢春（島田某）其他の諸氏四十餘名であつた。次會は築地の西村醉處翁の自邸で開催し、夫より年々一二回づゝ會合し來つたが、終に明治廿九年には黒岩涙香氏が資金を投じ大に狂詩の發展を圖る爲めに『狂詩戰』といふ機關雜誌を發行し、同年の末には關樣岔中島玩球の二氏が別に『新詩國』と題する狂詩專門雜誌を發行するに至つた。それから狂詩戰は翌年の末まで發行を續けたが、新詩國は僅か三四號で廢刊し、是より後狂詩は漸く下り坂に向ひ飲仙會員も多く滅び行きて今猶健在なのは玩球、愛花、痴仙等の數氏に過ぎぬのである。

以上述べる如く明治年間に狂詩の盛んであつたのは飲仙會設立以後の四五年間で、同會は實に狂詩再興の旗揚げであつた。私の手許に當時の詩集『飲仙集』が殘つて居るから其内より一名一篇づつを左に抄錄する事とした。

飲仙集

（換序）閉口歌　明治十一年作　灑上漁史 成島

船頭過多却覆船。社員夥時我宜眠。況此難渉士用天。五體出汗口出涎。縱令文章湧如泉。休息何思月給錢。小樓高枕對墨川。酒易菓子色易賢。我爲記者已五年。禁獄罰金屢仰天。竊恐罪業超以前。懺悔々々拜佛前。無間念佛天魔禪。妄語吐來何百篇。賣出忽覺幾人眠。辟易之賦遊山船。朝呼灑漁夕柳仙。虛名自愧四方傳。事業不成一人前。生計細於煙管煙。社員若見思憫然爲我一開愉快筵。

○鎌倉見物歌　槎盆居士 閱

一番汽車發大船。中有生酢催居眠。腹掛上着印半天。聞鎌倉驛驚拭涎。僕等去向壽溫泉。入湯喫飯拂卅錢。過本覺寺渡滑川。想出時賴家來賢。石碑多鐫元弘年。武將分戴兩朝天。巡來八幡鳥居前。步登石段拜神前。圓覺寺中始坐禪。老僧高講般若篇。小袋坂上乞食眠。稻村崎沖連漁船。此里人間

惚似仙。昔譚依案內者傳轉出長谷觀音前由井濱邊立汐煙取宿三橋金持然。鰹刺身開酒盛筵

玩球評。僕曾試鎌倉見物貧嚢如洗。不能金持然呼鰹刺身開酒筵于三橋。今讀君詩聊似醫當年腹抱腹一笑。

左文評。步險韻毫不困踏健脚踏破鎌倉山來所謂足八町口八町者乎。

○述懷　愛花情仙　三木

貧乏未乘屋根船薄緣又不與女眠貧乏薄緣雖任天。時見美人口流涎。金謂湧物不如泉。欲抱權妻奈無錢。寧學屈原投淵川或入竹林學七賢雖然未棄色氣年。謀友時起春先天。偶借高利飾人前。覥面見苦晦日前。再度發心姑入禪。未讀碧巖集一篇。若爲坐禪始居眠如意爲櫓頭滑船。更變宗旨雖學仙。誤學久米仙家傳。見脛幾度落女前。好酒却嫌霞與煙。不如運命任天然。獨片敷衣寢狹筵。

梅痴評。詩雖結構言事皆噓。學坊主仙人皆不成者。全坐此罪矣。

玩球評。愛花情仙粹道、英雄夙將運命任美人其、謂任天然欺人語耳。

左文評。愛花子、愛解語、花僕自十年前能知之。而今讀此編如有所大悟者。蓋年功使之然耶。非耶。

○閣中十賢歌　　玩球少年　中島

首相、取楫似行船方針狂時大磯眠。豈爲近所祭辨天赫山。童顏欲繰誕。南浦、風流愛林泉時購名花不惜錢。遊獵更探山又川。陶庵居士公家賢。留學佛國五七年。至極崇拜西洋天。福堂病引開院前。代理役目氣不前。無邊先生、號俠禪得意文章天龍篇。梁川近來殆如眠。不似往年操軍船。梅園顏色俗耶仙。只有一片硬骨傳越山縮首含雪前。黃夢被卷春畝煙。誰是閣中立卓然。一同崩膝新年筵。

槎盆評。作者長玩球之技宜矣採十賢轉之於掌上而黃夢庵轉落于閣外詩人之惡戲由來如此。

左文評。歌十賢來巧衝急處與驚作者筆力之雄寧不可不驚其膽大焉。

鷲々服々。

○本朝醉人歌　翠煙子　川村

浦島騎龜似乘船。三杯拔現龍宮眠。酒呑童子有頂天。手捧大盞舌啜涎。大江山奥擬酒泉。又六看板爲儲錢。鱶七捍樽不嵌川。忠義況助鎌子賢。開來大化第一年。大助百六運任天。籠城賴朝旗揚前。朝比奈母巴御前。後藤兵眠似參禪更繙赤穗義士篇。大石祇園做狸眠。豈向白川漕夜船。本心非是醉中仙。赤垣源藏德利傳。無端驚嫂夜討前。萬八酒會事非煙。東湖瓢乎豈偶然。山陽亦歌劍菱筵。

槎盆評。雖屬硬派別具一種狂骨。譬猶國民派在各政黨中。無冗語無氣障氣。占一等固宜矣。

玩球評。把東湖山陽入醉中仙。蓋自醉兄此篇始焉。

愛花評。大石祇園之二句。與豁然之淚灑四十七士前異調而同巧。

○狂中八仙歌　豁然子　永島

蜀山狂名似風船。瓢々高飛天上眠。風來罵人又罵天。開口欲吸龍之涎。遂殺小倅入黃泉。銅脈却不剩一錢。狂名誤流御裳川。太平樂府氣取賢。半可感心老少年。作詩遙望元祿天。淚灑四十七士前。方外氣象江戶前。詠到名物豆坐禪。靜軒獲罪繁昌篇。江戶城外民家眠。空與種彥同其船。浮氣何曾學粂仙。柳北風流雜錄傳。柳橋金春稱御前。歸來濹上月如煙。南橋散記亦嶄然。湯屋行成驚詩筵。

楼盆評。體在半眞半狂之間。然首尾連續不入橫道。

玩球評。詩調未似風船輕然。一氣呵成。優歷老人株來。敬服感服。

少女評。句々生硬。是狂詩中之楷書也。然捉狂仙來而無遺憾。是爲多。

○濹堤所見　　左文翁　野崎

遙眺幾艘帆掛船。又見都鳥芦間眠。隅田景色別開天。使風流人口流涎。何況酒樓酒如泉。魚十植半宜抛錢。長堤近川又離川。往來混雜愚與賢。花屋敷梅粧新年。黃鳥啼渡長閑天。眺望最好牛御前。富士在後筑波前。長命寺

是律耶禪。觀物聽物入詩篇。茅屋圍爐渡守眠。竹屋川岸誰呼船。時有雅人弔柳仙。詩名與言問碑傳。櫻餅食盡一人前。坐觀橋場今戸煙。噫此景色畫同然。忘歸終上茶屋筵。

槎盆評。粹人之詩。殆將紹柳仙之腰所以不得不粹服矣。

玩球評。踏韻亦如步濹堤垣路非老巧如左文誰得至此。

愛花評。噫此狂詩畫同然。

○新橋八艶歌　　少女庵　小林

玉菊醉男似醉船。久休藝妓裏店眠。阿妻丈高殆達天。一惚家橘頻垂涎。或總見物或溫泉。本太阿袋天保錢。慾張一點拜新川。眞是藝妓仲間賢。阿金習踊正十年。看者莫不有頂天。夫其笛時欲出前。阿艶厭濟御客前。客疑訝學面壁禪。久子感心通詩篇。雖稱藝妓未解眠。風流最喜雪見船。自稱妾是妓中仙。阿染取客有祕傳。不使警八犯門前。受探偵調濟吹煙。淸香意氣近傲然。手放惚氣驚酒筵。

槎盆評。蓋作者於八艷中最深出前阿金所以有此金玉篇。

玩球評。少女優形有愛嬌。而往々惱殺金春藝者。亦用丹治的祕傳。此篇之成。蓋非偶然。

○花見行

樂在居士 黒岩

花見被誘喜渡船。開戰忽忘食與眠。最初景氣張水天。大場絕對先流涎。惡運漸巡汗如泉。瞬間擲盡囊中錢。至是借金思儘川。夢中溺込愚又賢。脫肌捲腕不耻年。躍起自云運在天。替貫遣盡三人前。手役來時膝自前。敗者臀重如坐禪。出使金策書幾篇。勝人徐々始居眠。爲逃支度先漕船。拙者縱非斯道仙。經驗聊又知祕傳。欲免深手勿惜前。可靜張逃而吹煙。能逃必勝若不然。二度休臨花見筵。

槎盆評。樂在花見耶。將在狂詩耶。敢問。

左文評。于弄花于球戲。僕與樂在每戰取敗。而今於狂詩亦一敗矣。樂在器用于物可驚可畏。

○艶中八仙歌　　烏玉山人 佐藤

藝者操客如操船。祝儀入手席上眠。女郎三回喜拜天。漫並贅澤口流涎。願得相從遊溫泉後。家道樂費萬錢。窃言役者限市川。拭尻拭口稱穴賢。乳母四十島田年。掩皺白粉睨青天。恰如蝦蟆窺雨前。生娘已近嫁入前。流行振袖愛友禪。下女懸想文百篇。權介部屋氣樂眠。夜半呼起猶漕船。囈云我恐瘡痺仙。權妻三人浮名傳。取金拵男淒腕前。掘根洗種如雲煙。女房燒餅誠愍然。待合船宿恨酒筵。

槎盆評。飽饕原詩趣向與句調。此處見烏玉手腕。

玩球評。烏玉操韻亦如操船。可謂淒腕前焉。

○貧中八仙歌　　痴囊子 眞木

地獄輕尻如風船。銘酒屋內迎客眠。食客着物天鵝天。見奧樣粧口流涎。且羨主人遊溫泉。蔫者不使宵越錢。妻子雖困儘之川。遂爲軍夫自稱賢。壯士放蕩惡少年。懷如神樂遍天天。纔鳴月琴立門前。綴優困金蓋明前。空向鏡

臺組坐禪書生泥蒙小說篇。雖書小說筆如眠。欲賣不賣渡無船。餓在下宿籠城仙。藝妓惡蟲評判傳。隨分雖出御客前。挾帶祝儀忽化煙。坊主貧寺更恬然。借着袈裟臨法筵。

槎盆評。勉應用俚語避涉硬澁。雖謙稱痴聾。自今宜除去疒垂。

玩球評。捉八貧來。配之八仙。而造語無困窮之痕。是誠感服。

○議員生涯　　乙羽生　大橋

議場模樣似泊船。三百頭顱皆貪眠。彼窺鼻息唯望天。此無意見口流涎。偶際日曜遊溫泉。奢散八百泡吹錢。浮名被謠儘之川。色氣不分愚與賢。打忘先祖起業年。遺產忽付珍鶴天。爲珍鶴天覺悟前。昨日田夫今御前。勉強欲講詩與禪。又覗西洋飜譯篇。得意儘與美人眠。待合船宿頻漕船。阿呆恰似久米仙。近來新紙消息傳。高利貸迫後與前。相傳田畠今成煙。妻子眷屬只茫然。如夢當年花月筵。

槎盆評。善寫出議員世話場。呀乙羽屋。

玩球評。詩云鶴鳴九皐聲聞于天。不知珍鶴天。議員之聲能聞天乎否。

○怨中八羨歌　碌郎子　杉川

羨哉墨陀屋形船。中有嫖客擁妓眠。羨哉柳橋紅燈天。仰見茫然口緑涎。美人如雲酒如泉。羨哉岩崎財萬錢。別莊染井又深川。身雖平凡皆稱賢。羨哉新駒美少年。人氣今日位占天。藝子生娘媚其前。羨哉渡邊女御前。探盡書趣又入禪。羨哉槐南詩百篇。常侍宰相官邸眠。君子不器聖人船。自稱臣是俗中仙。羨哉一六書可傳。奇古墨痕秦漢前。潤筆料集如雲煙。羨哉世上皆斐然。吾獨呑怨坐破筵。

槎盆評。不求巧妙有自然妙。如此才鋒亦羨哉。

玩球評。若不用硬語。則詩品占天位矣。

○初買昔噺　風外老人　山田

向山谷堀急小船。待乳沈處覺鷗眠。叩舷合手拜聖天。籠顔姫達惚流涎。橋際舟宿角和泉。先投船頭酒手錢。此家女將育深川。客愛想善口前賢。思出

二八娘盛年。世間若手浮揚天。宛然當年玉藻前。殺生石毒在目前。僕洗床柱組坐禪。密讀らうノ文一篇。被促初夢長夜眠。合點直軋浪乘船。生憎寢衣綿銘仙。浮名忽自綻目傳。跋惡太鼓末社前。繰込廓内欲作煙。老蘭顏附閣魔然。錦襴蒲團似針筵。

槎盆評。自昔把玉手箱引出許多艶文句。宛然作家廿年前寫眞。

玩球評。以其角唄起句。以紀文奢結句。首尾照應。絲毫不紊。老人腕前依舊健全。是誠可善焉。

○醉中郎事　　醉處居士　西村

拙者生涯似乘船。其上半分飲酒眠。曾爲官吏屢朝天。途逢正宗口流涎。知大阪猶封酒泉。貧乏無由費萬錢。每用白馬與山川。傲然却擬淵明賢。笑我白頭如少年。吟行踏月芳原天。轉覺露命在風前。近來隱居坐樽前。夜雨蕭蕭入醉禪。假令名作無一篇。狂吟欲驚天下眠。行脚時上諸國船。自稱僕是狂詩仙。近頃迷惑浮名傳。多在京都御祭前。年寄冷水如雲煙。今日小集眞

偶然。忽呼藝者侍酒筵。

翠煙云。醉處翁自任淵明賢。兼凌李白狂賦。歸去來于吉原。花吐詩百篇。于祇園酒。其平生則於此詩盡焉。席上咄嗟之作。不求巧而自巧。是此翁得意長技也。敬々服々。

玩球云。半分飲酒眠。半分乘船眠。浮名流傳在御祭前。固當然事耳。先生勿復唱迷惑焉。

○南總八犬歌　　素直翁　磯部

發端主從鯉釣船。誤使伏姬入山眠。八行玉散八方天。如是畜生猶流涎。犬坂智略湧如泉。扮白拍子豈爲錢。犬山力量轟市川。無端結義庇二賢。犬山火遁亡國年。復讐一戰膽如天。欲知犬飼之腕前。庚申山奧妖怪前。修業犬村如坐禪。討山猫事冠全篇。得婦犬塚不肯眠。後年仲志殲敵船。犬川獄中暫學仙。不屈水責名先傳。犬江使至天子前。千里馬走揚砂煙。牡丹之痣割符然。大團圓是法事筵。

玩球評。並八行玉至大團圓詩亦圓如玉矣。

○宴中一人歌　　諦天情仙　野口

出國時乘蒸氣船坊樣一切夢中眠。通小學校番町天。見人卒業頻垂涎。自從老父赴黃泉。拔作被字天保錢。一人妹教女今川。子曰子曰慕聖賢。光陰如矢勘平年。阿輕不惚野暮天。夫故不願宰相前。同買大磯虎御前。時時禁酒不爲禪。聊作狂詩二三篇。讀無面白。欲催眠。飛入似乘乘合船。氣取李白號諦仙。却悔評判世間傳。虻蜂不取覺悟前。宿志消行煙草煙。今夜不圖通人然。舞子御酌醉酒筵。

烏玉曰。諦天自述其履歷。占地步高於太史公。曰通小學校番町天。見人卒業頻流涎。既已後世可畏的心術。曰一人妹教女今川子曰子曰慕聖賢。亦復先人可追的志業。宜哉名聲之播四方也。玩球子飲中八狂歌曰。狂鶩宰相是諦天。大磯捉蜓口流涎。群鶴樓上酒如泉。此是烏玉山人事實。玩球子誤爲諦天。故曰阿輕不惚野暮天。夫故不願宰相前。同買大磯

虎御前。是自辨疏也。謫天不似風流。情仙如是。誤謬極力辨疏。亦可以見先人遺訓之嚴也。

○小説八癖歌　　無腸公子　失名

篁村醉時似漕船。酒席每々飲潰眠。崇拜秋成有頂天。又向院本竊流涎。澁柿奇想湧如泉。賣出新作多儲錢。綠雨宅近小石川。姓稱齋藤名呼賢。卅三雖非男厄年。折々吐血頗仰天。浪六筆癖元祿前。寫出六法與丹前。風變露伴近學禪。又覗一切經幾篇。紅葉文覺粹人眠。色氣漾似淺妻船。香雪親讓小歌仙。筆跡多留短册傳。窮賣鍋釜廿年前。今日豐登竈之煙。幸堂杵柄天保然。抱六十年勿破綻。

玩球評。無腸公子筆頗有横這入癖。亦是一個大癖物。其好左道不問而可知也。

挈煙評。無腸公子亦是一個曲者。自家之癖一切揚之于棚而縱横無盡穿當代小說家之穴來。余他日應作無腸公子歌素齒拔之。

明治年間の狂歌と鶯蛙會

安永天明年間に勃興した江戸の狂歌は化政度には殆ど全國に普及するに至つたが、其代り所謂天明調の特色たる豪放奇警の趣きを失ひ、すべてが纖巧に陷り狂歌の本色たる滑稽味に乏しくなつた。それから文政十二年に四方眞顏が死し翌天保元年に五側の六樹園飯盛が歿した後は只惰力に依て狂歌界が維持されて居たに過ぎなかつたが、夫れでも維新前までは猶名ある判者が殘つて居て、各連とも月次會が催されて居たが、明治元年後の數年間はパツタリと影を潛めて復た狂歌を顧る者もなかつた。其後世の中が鎭靜して他の文藝もそろ〳〵復活の氣運に向つた同七八年頃から、狂歌もやつと芽をふき出して彼方此方で歌筵が開かれるやうになつた。而して其頃の狂歌界を顧みるに其の風調は概して眞顏の主張した俳諧歌卽ち之を興歌と稱へ和歌の規格を墨守して溫雅流麗なる詠み方を旨とする一派と、裏住等の唱導した純狂歌卽ち語格文法等にはあまり深く拘泥せずして滑稽諧謔を專らとする一派とに大別せられ兩派對立の有樣で、前者に屬する社中には八雲連、二葉連、松壽連、淺草側、巴水連等あり、後者に屬する連中には本町側、小槌側、壽連、北斗連、轡連等があつた。

明治十年前後には二葉連、松壽連は木挽町の眞陽亭に於て。本町側壽連は藥研堀の初鷹に於て

月次會を催し、其他一ヶ月三四回は別に會合する事もあり、殊に十三年の夏岡野伊平氏が五世淺草庵の號を繼ぎその披露會を前記の眞陽亭で開いた時は、出席者百名にあまり、出詠狂歌の點數に隨ひ甲乙錄（番附）をも發行したのであつたが、是れが甲乙錄最後の出版であつた。

最初は興歌派と純狂歌派との間に大分風調の相違があつて、興歌派からは純狂歌派を評してアレは地口落首の體で歌の一種として見るべき價値がないものだと嘲り、後者からは前者の作歌を評してアレは和歌のぬめりで狂歌の本領を失つた拔け殼だと譏つて居たが、年を追うて狂歌師の數が少くなるに隨ひ一派だけでは淋しく物足らぬ樣になつた爲め、二派の風調が雙方から步み合つて段々接近する傾きを生じ、興歌派の會へも純狂歌派から出詠し、後者の催しへも前者から投吟するやうになつて、明治二十年以後は自然と狂歌の大同團結が行はれるに至つた。併し一般の勢力は興歌派の方にあつて、狂歌師たる素養あり學識ある人はどうしても興歌派に多かつた。就中古面、松壽盛岡の愛竹の三翁は明治狂歌壇の三老大家で、斯道に盡した功蹟も少くないから左に三翁の小傳を揭げる事とした。

●古面翁　初號面堂安久樂、通稱藤木彥八日本橋萬町に住し、某藩の仕立物用達を勤め自分も亦裁

縫に長じて居た。故に長絲房針持と號し又倭文纒居と號して居た。初め四方眞顔に學んで出藍の譽あり後ち八雲連の棟梁となつたが、明治八年面堂の號を門人平野屋松惠に、安久樂の號を岩上亭可成に讓つて古面翁と改め、明治十四年十一月八日八十三歳で歿し本所法恩寺地中陽雲院に葬つた。著書には『變玉あられ』『忠臣藏狂歌合』『古面翁家集』等がある。

●●●松壽翁　初代琴通舍英賀の門人で初號琴詠舍德賀、後二世琴通舍の號を襲いで雅海と改めた。通稱平野忠八初めは日本橋檜物町に住して居たが、明治九年琴通舍の號を門人寸雅の舍如康（後ちの康樂）に讓つて三世とし、自分は向島に退隱して松壽翁と改め又墨水居、三渡庵とも號して居た。俳優中村芝翫と親戚の關係上曾て翫雀追善集『はなし鳥』を出版した。明治廿九年十月四日に歿し谷中觀音寺に葬る。享年八十四。

●●●愛竹翁　千秋堂と稱し閑窓と號す盛岡の藩士で同地仁王小路に住ひ通稱を小本村司といふ、嘉永年間江戸の藩邸在勤の頃檜園梅明其他に就て狂歌を學び、又國文雜書を渉獵し夙に博識の聞えがあつて曾て『杜陵方言考』の著作がある、明治十年以後屢々上京して八雲松壽の連中と交はつて居たが明治卅七年四月十五日八十八の高齡を以て盛岡に歿した。

いづれも八十以上まで長生をしたのも不思議であるが、年齢の上から云へば今ひとり忘れてはならぬ狂歌の老大家がある。それは和歌廼屋鶴彦即ち今の男爵大倉喜八郎翁で、先づ古今に渉つて狂歌師中の長壽者であらう。私は曾て翁を左の通り評した事がある。

實業家としての大倉喜八郎君、風流人としての大倉鶴彦翁を知る人は頗る多けれど狂歌師として和歌廼門大人を知る人は蓋し寥々たるものであらう。和歌廼門とは大倉男爵の狂歌の號で昔郷里に在る頃から狂歌に親しんで和歌廼門鶴彦と名乘り、後江戸に出られて檜垣連の頭目檜園等と交際して盛んに狂歌を詠んで居たのである（嘉永安政ごろの狂歌甲乙錄に和歌廼門の名を揭げたるもの數葉あり）後上野山下で一商店を開いたのが出世の緒で、終に今日の身代を作り上げられたのである。故に翁は狂歌師より出たる富豪であつて、富豪となつた後旦那藝として學んだ所謂出來星では無い、抑々天明調及び文政調狂歌なるものは江戸の特產物で、大阪の貞柳輩が唱へた狂歌の風調とは其趣を異にし、專ら輕快、敏活、奇警を尙び所謂氣が利くといふのを誇りとして居る。狂歌が江戸ッ兒に歡迎せられたのは之が爲めで、乃ち江戸趣味に一致した故である。翁は壯年の頃第二の故鄕たる江戸に在つて此の江戸ッ兒の氣質を養ひ、敏活と輕快とを尙び且常識に

富み決斷力に長じたる點など、全く當年の感化に由るものでは無からうか、少くとも翁は江戸趣味を解する一人なることは、今日まで狂歌を廢せず又一中節の如きを好み、其他演劇に小説に、今日の新しきものよりは江戸時代の脚色を喜ばれるを見ても知るべきである。又現時多端なる實業界に在つて東奔西走少しの暇だになき樣に見えて、其實忙中に閑日月あり、悠々として迫らざるは、是も翁が風流を解し胸中常に餘裕あるが爲めでは無からうか、殊に身華族に列しながら少しも尊大ぶる所なく吾々狂歌師其他の文藝者に接するに慇懃を竭し、自然と相親しましめる風あるは余の敬服する所で、是も亦翁の一德と謂ふべきである。翁が國家に盡したる功績を頌するは余の任ではない、余は唯だ我が狂歌界に於ける翁の足跡を述べるのに過ぎないのである。

翁は明治卅四年和歌廼門を和歌廼屋と改めて本町側に入り狂歌集としては『青葉若葉』『狂歌鶴の友』『豐の秋』『家集』『鶴彦集』等を出版した。

明治十八年の『東京流行細見記』（吉原細見に擬したもの）には俳諧屋うたとして當年の狂歌師廿五人が出て居るのを左に轉載する（括弧内の文字は私の書入れたもの）

まき丁　琴通舍（康樂）　南なべ丁　岩上亭（安久樂）　品川　千種庵（春吉）　向島　松壽翁（雅海）　赤坂　額翁（畫賛人）

いづみ丁筑波庵（繁樹）はま丁弓の屋（春兄）神田淺草庵（伊平）しば多麻園（巖美）赤坂北斗庵（一樹）谷中小松園（千壽）神田竹芝（浦人）下谷桃の屋（鶴彦）照ふり丁五葉園（松蔭）かやば丁千松亭（琴高）よろづ丁秋琴亭（緒依）しば蟹の舍（左文）琴の舍（志良邊）萩園（秋香）深草庵（杏村）武昇（七面堂）蜑人（海邊）千枝（大朴園）須磨琴（一絃舍）月丸（秋の本）

此内十九年より廿七年までの間に琴通舍、額翁、筑波庵、淺草庵、五葉園等は相前後して物故し、岩上千種等は漸く老て昔の元氣なく、斯道の稍やゝさびれ行かんとする時に當つて、桃廼屋鶴彦（飯野忠一）は秋廼屋望成（梅本塵山人）四世繪馬屋（田沼額輔）三世面堂（津久井安久樂）四世彌生庵（海老原雛興）四世琴通舍（三井富雄）等新進氣鋭の作家を率ゐて青年狂歌會を興し後に之を鶯蛙會と改め、陣容を新にして討つて出た爲めに、狂歌復た勃興し新聞に雜誌に狂歌が掲載されるやうになつた。丁度是れが狂詩黨が飲仙會を開いた年に當り狂詩と狂歌とは盛衰ともに同じ道連れであつたのである。前章に飲仙集の一部を載せたと同様、鶯蛙會で出版した『忠臣藏狂歌四十七題』の内から一題一首づつを左に抄出する。忠臣藏狂歌四十七題

社頭の花

馬かけの手綱の色のかは櫻さきをきそへる靖國神社　文の屋秀茂

華族宴會

門外にあさ日の御旗ひるがへしからすまる家のけふの宴會　柳の屋露交

女官聞香

うぐひすの初音と呼べる名香を竹の園生に聞くつぼねたち　福山人

猫

死するとも高きねになる三味線に皮をとゞむる虎猫ぞよき　柳崖亭友彦

寄文戀

しのびつゝ妹がたもとにやる文を人にな告げそ袖の八つ口　駒の屋好友

鎌倉名所

八まんの社參もどりをねらひつゝ銀杏のもとに賣る禪師柿　樂水居

古物鑑定

鷺りうのきやう言師さへ鑑定に小くびかたげる能のふる面　丁子園雅好

庭前松

をり〳〵ははさみ入れつゝ蟹ならで横に這はせる庭の若松　九梨園

賄賂

思ひきや風藥よりはなぐすり名醫も知らぬ利き目ありとは　竹の屋千尋

決鬪

すれ合ひて切れたる筆の鞘あてに決鬪狀もなぐり書きしつ　國の屋長丸

鮒

白扇のさかさの山の出し湖に小ぼねのおほき鮒はそだちつ　芦の本蟹丸

自由結婚

日の本はあなにやしてふいにしへの神代からして自由結婚　桃李園

婦人惱癪

かた腕とたのみし夫にわかれても押しての多き若後家の癪　塵山人

城趾夏草

里見家の城趾とへばひめ百合のはなにまつはる犬蓼もあり　秋の屋望成

保安條例

退去する三里以外も王土なり泣くなそつ土のひんきう壯士　繪馬屋額輔

會社配當金

名にし負ふ昆布會社は小きざみにきざみてや出す配當の金　不聞亭小聲

猪

筆の毛と成ぬ先からゐのしゝは眞一文字によくかけるなり　自然庵素朴

室內射的

射てき銃だるまを撃ちし景物に出す九年母も尻やくされる　五松亭琴成

當世風羽織

縫ひあげに鏝をきかせてなま壁のうらをかへした兩面羽織　桃廼屋

提燈

うたゝ寝の夢むすぶ夜の涼しさは小まくらがたの軒の提灯　駒の屋好友

山家蚊遣火

梅さくら松の折枝もてなしの蚊やりにぞ焚く佐野の山住　　五丁庵通里

娼妓貞節

泥水に身はしづめども心まで染まぬはきよき池のはちす葉　　紀志禮奴

生命保險

年々に積めるこがねの山吹はみのなきのちの花とこそ見め　　塵山人

狸

夜もすがら打つは砧をさかしまになせし狸の腹つゞみかも　　玉川居祐翁

雇人受宿

葛籠をばおのれ脊負ひて山出しのお宿はどことさがす雀屋　　星の屋照雄

田家唱歌

賤の女が歌ふ小唄もみのりよき稲もろともに節も延びたり　　秋の本月麿

妓樓夏月

たかどのに風の通ひもよし原や夏をよそなる風のすゞしさ　　不二の屋高嶺

生醉弄筆

飲む酒がめぐりて管をまきがみに同じことのみ繰り返し書　　弓の屋春雄

夜中電話

小夜ふけて睡たきまゝに番號の戸惑ひをしてかける電話機　　賤の屋裏垣

蛸

八ほんのあしたの花見辨當に付けあはせよきさくら煮の蛸　　柳の屋露交

化石

蓑のごとその甲にさへ苔むして龜の化石はよろづ代や經し　　都柳軒桐丸

燈籠

この庭の景色はおのがしめたりと踏みまたがりし雪見燈籠　　自然庵素朴

婦人梯子乘

竹ばしごいよ／＼高くのぼれるは月のみやこに歸る少女か　　彌生庵雛興

東海道初秋

はこね路に關こそなけれけふ秋へとほり手形や初雁の文字　蟹の屋左文

婦人旅行

腰ほその洋服も着てつく杖にすがるを女ははるの旅だち　柳崖亭友彦

富士寫眞

むら消て見ゆるぞ惜き不二の嶺に積れる雪のふるき寫眞繪　龜の屋良友

籠中蟲

曳馬野のもとのすみかや慕ふらんかごに飼はれて鳴く轡蟲　塵山人

隔道思戀

玉づさにあまる思ひもみちのくの道をへだてゝ通ふ文字摺　竹の屋千尋

杖

山吹のこがね造りの仕込み杖今はみのある世とはなりにき　長屋奥住

緣談

かくすべき雲のさはりもなか秋の今宵とゝのふ月のえん談　琴通舎富雄

閑居菊

黄金てふ菊は咲けどもかぎ付てぬす人の來ぬ庵ぞさびしき　夏の屋鈴志

西京名所

種にとてのこせし垣のひさごをば時雨の雨のたゝく空也寺　不二の屋

尺八

月かげと共にすむらん山寺に夜もふけ僧の吹けるしやく八　賤の屋裏垣

蛙

魂祭るころにはこゝを極樂と蓮のうてなにやどるかへる子　菊の屋千秋

冬夜門附

わざもやゝ枯れし荻江のひと節を霜夜の門に聞くが憐れさ　秋廼屋望成

本所區地圖

本所區の繪圖をし見れば鼠にていろどりしたる次郎吉の墓　塵山人

川邊紅葉

あらし山小ぐらかめ山紅葉して實にみところの大井川かな　三枝庵鳩丸

積荷問屋

濱かたへおくる問屋の荷物まで繩を千鳥にかけて出しけり　星の屋照雄

家宅捜索

塗りかくす壁のあなより見出せるは證據書類のねずみ半切　龜の屋良友

鴛鴦

思ひ羽に思ひ重ねて睦まじくふたつならびの池に住む鴛鴦　九梨園

幼稚園

もる人を母とたのみて淺香山ふもとをたどる文のみちしば　五丁庵通里

漢方醫者

ふところも温ためられず己が盛る唐人參のにほひ失せては　彌生庵雛興

人形

思ふこと言ひて子供はねだれども腹のふくれし護謨の人形　　蟹の屋左文

野外炭竈

三芳野の木の間がくれに立つ煙さくらてふ名の炭や燒らむ　　多麻園

雪中煤拂

しら雪は鵞毛に似たりはく煤も飛んで散らんしたるなか庭　　塵山人

蕎麥

七曲の玉子とぢとて四季ともにこの蕎麥切はあり通しなり　　繪馬屋額輔

犬

もろともに守るこゝろの裏おもてつま戸のさるに宿の飼犬　　玉川居祐翁

寄武器祝

亂れたる燒刃の太刀もやす國の額に治まる御代ぞめでたき　　井戸屋鮒輔

竹田出雲

意匠にもたけたと云へばいつもとの指に折るゝ淨るり作者　　秋廼屋望成

傾城になれもゆかりのいろ子とて野郎帽子も匂ふむらさき

元祿風俗　　　　　　　　　　繪馬屋額輔

其後花廼屋香哉（三上氏）首尾の屋松蔭（宮田氏）春廼屋梅雄（渡邊氏）文字の屋關守（鈴木氏）鶴の屋千壽（羽生氏）等の數名判者となつて續々鶯蛙會に入り、又散木山風（有田氏）は別に萬葉側を組織するなど大に景氣を持直した。同廿九年風流翁の別號を以て時事新報の寺山星川氏も當時の狂歌道に就て

眞面目にあらで可咲し味を旨とする場合より云へば、狂歌、川柳、物は附抔の類は皆同じものなるべし、されど之を作ることの難易と、之を作る者の人柄とは昔より差別なきこと能はず。今の所謂狂歌は萬葉集、古今集抔の中にも見えたり、閑寂の趣味に富める西行法師の如きも亦詠みにき

我だにもまだ食ひたらぬ水がゆの底にも見ゆる影法師かな

とあるは法師の作なりと云ふ。可咲し味十分ありながら品上りて鄙しからぬは、なか〳〵にめでたし。

そのかみ狂歌は唯歌人のをり〳〵のすさびに過ざりき、徳川氏に至りて専門の狂歌もて世に持て囃されたる者尠からず、天明度の蜀山人は云ふも更なり、杢網、菅江、眞顔、飯盛、岡持抔はその中でのえら物なりとす。

狂歌は久しく冬枯れの誰れ問ふ人もなかりしが、近ごろはめつきり春めきて花ある徑の自ら賑はふが如し、そが中に一廉の判者とも云はるゝもの二十人はありなん、調の高き低き、形の古へ振なる今樣なる、いづれ花もあり柳もまた。花、柳を色別けすれば曰く本町側、曰く八雲連、曰く俳諧調派、この三つに過ぎざるべし。維新前は山の手より下町にかけ何側何連など稱するもの澤なりしが、今は然らず。

本町側（側とは連と云ふが如し）の調は俗に近ければ世と共に推移ることを得、改進派とも稱すべきは此中に見るを得べし、唯俗に近きを以て時に趣味を破り、鄙調に陷るの弊なき能はず今東京にて此派獨り威勢よし。

本町側の頭領を桃の屋と爲す。繪馬屋、蟹の屋、秋の屋の人々、その外年若き人は必ずしも舊型に拘はらず世と共に進歩せんことを希へり、これを改進派と目して望を屬する者尠からず。

俳諧調派はいにしへの俳諧歌を其儘奉ずる者なり、故に調は雅にして綺麗なるを喜び俗に近づくを嫌ふ。向島の岩上亭は此派の隊長なり。岩上亭は近代の名家古面翁の門に學び、翁の初號を襲ぎて安久樂と云ひしが、今は他人に讓りて別に門戸を成しぬ。

此派は全く守舊派なり、東京にては流行らざれども地方には末社多し。

本町側と俳諧調派との中を行きて、雅なれども片苦しからず俗なれども鄙しからざるは八雲連なり、此派の旗頭を品川の千種庵となす、芝の多臙園も巧に物せしが今は故ありて作らず。

千種庵は最早六十餘の老翁にして斯道にかけては造詣頗る深し、つねに褌を掛け裾を端折りて家業を勵み、歌よむ人とは露見えざれども、若し打ちつくろぎて物語るときは諄々として說出る口尖に自ら名人たるの貫目ありと云ふ。

古人も云へる如く、狂歌は古き鼓の新しき調べを打出すこそ善けれ、强て新しき口調に詠み出さんとするときは言葉いやしくなりて惡しゝとは、千種庵が百千たび口にする金文なり、これに因りても其調の如何を知るに足るべし。

古面翁が存生の頃は八雲連の羽振り甚だ善かりしが、今は此派に屬する人思ひの外尠し、そは

入り易く詠み易く手ッ取早きが今の人の性根なればならん。此處に本町側、俳諧調派、八雲連三派の頭領株の吟詠を掲げてその特色を示すべし。

植物

妾宅にうつせる松も地ほりものみつきしばりの雪除けの繩　桃の屋

器財

とぎ出しに見せたる月の輪島塗りくもりはいとふ會席の膳　同じ人

調は當世向にして稍々俗なり、初心の人は時として踏み外すことあるべし。

文明開化

色にいでぬうけらが花の武藏女も開けゆく世は都びにけり　岩上亭

閑居時雨

雀生る庵のかよひ路人來ねどやよほとゝぎす露ばかり啼け　同じ人

調は雅にして綺麗なり、古へ振の儘一足も踏出したる所なきを見る

春の歌

うぐひすの初音につれて春のやま谷わたりする雪解けの水　千種庵

夏の天象

さやけさは春秋よりもますかゞみかすみも霧も夏の夜の月　同じ人

桃の屋の如く今めかず、さりとて岩上亭の如く古くもなし、これを雅俗の中を得たるものとす。古面翁は十數年前に死にき、存生中は八雲連の歌調を以て一世を風靡したり、この人業を眞顏に受け世々の家集、日記、物語等の類にも眼を曝して學問該博、句中の用語根柢あるもの多く實に近代の名家なりき、翁が狸の歌に

ぽん〳〵が痛いと噓を月の夜につゞみの稽古休む小だぬき

とあるは人の善く知る所にして、大方は蜀山人の作と思ひ、落語家抔もをり〳〵高座の上にて例に引くことあり、されど實際は蜀山人の歌にあらず古面翁の作なり。

俳句、川柳、狂詩の類は既に世間に流行せり、狂歌も亦間もなく流行すべし、これに志ざすもの彼の芍藥亭が云ひけん、狂歌は雅中の俗、俗中の雅なりと云へる言葉を味ひ、そを實にするを得ば言ひ分なし。

と論じて居る、星川氏は、自ら狂歌の道に遊んだ人で無いから又聞きの儘を記したものらしく、狂歌を三派に分つて論じたのは稍や杓子定規の嫌ひはあるが、大體に於て適評である。そこで東京の狂歌は間もなく流行すべしと云はれた期待に背いて、其後又々衰運に傾き、私共で『みなおもしろ』といふ狂歌專門雜誌を發行して宣傳に努めた甲斐もなく大正に入つて世間から葬り去られ今は唯鶯蛙會の一部が餘喘を保つて居るのに過ぎぬ。以上が明治初年より最近に至るまでの狂歌變遷の概略である。

昔の銀座と新橋藝者

日本帝都中の一大繁昌地として五階七階の高樓巍然として一町毎に峙ち、其間にショウウヰンドウを飾る諸商店軒を列ね、百貨輻湊ことに贅澤品の如き何一つ備らざるは無く、夜間露店に陳列する物品の價格だけでも數萬金に達するといふのは現時に於ける銀座の盛況である。紳士往き淑女往きサラリーメン往き女學生往き、有らゆる階級の人々日夕此處に群れ來つて終に銀ブラの名をさへ傳へるに至つたが、其昔に較べると殆ど霄壤の差があつた。私は明治七年から數寄屋橋外の西紺屋町川岸に住して居たから朧氣ながら當時の有樣が記憶に存し、今日銀座を通行する毎に桑滄の變——といふのも大袈裟だが——其變つたのを見て今昔の感に堪へぬから、玆に銀座の昔噺を試み續いて新橋の花柳談に及ぶ事とする。

銀座は京橋より一丁目二丁目三丁目四丁目とかぞへ四丁で終つて居るのであるが、今は京橋新橋間までの總稱のやうになつて大正十二年の大震火までは又煉瓦地とも呼んで居た。今その歷史から述べて見れば、德川幕府では慶長年間銀貨の鑄造所則ち銀座を始めて山城伏見に創立し、同十一年更に一ケ所を駿河の府中に設け、同十七年には江戸城完成し市區も稍や其形ちを整へるのに至つたので、府中の銀座を京橋以南に移し之を新兩替町と稱したが、寛政十二年には之を廢し翌年蠣殼町

に上地を賜はり茲に再び銀座を設けるのに至つたが、新兩替町は維新後銀座と改稱せられつまり元の銀座の名が復古したのである。

明治五年二月廿六日午後三時和田倉門内元會津藩邸跡當時の兵部省添屋敷より出火し折柄の西北風に煽られて火勢東南に擴がり、鍛冶橋内の土州藩邸、大藏省、紙幣寮、司法省等を始め京橋水谷町、金六町より銀座一圓に移り、猶は木挽町、采女町、新富町より南小田原町まで延燒し、西本願寺、築地ホテル等を燒き盡して夜の十時に鎭火し燒失町數四十一町に及んだ。(武江年表に據る)その再築に當つて政府は京橋新橋間の家屋を總て煉瓦を以て建築する事に決し、明治五年二月家屋に一等二等三等の規定を設け、資産あるものは此の規定に隨つて自費にて建築するは隨意なれども其他は一般に官設とし望みの者には年賦を以て拂下げる事として、翌年にはあらかた建築が落成した、是れが銀座が煉瓦地となつた由來で、殊に京濱間の鐵道は前年に完成し新橋は外客の爲めには帝都の玄關口となつたので道路も大通りは十五間幅とし中央を車道左右を人道としたのであるが、道路が車道人道の三筋となつたのもこの銀座が嚆矢であつた。今から見れば大通りの一等煉瓦家屋と雖も西洋まがひと云ふ迄で貧弱な建物に過ぎなかつたが、當時の人の目から見れば輪奐の美を盡した大厦高

樓で、田舍から此處に來る者は倫敦、巴里にでも遊んで居るやうな氣がしたとの事である。併し一つの缺點は窓少く床低く空氣の流通が惡い爲めに濕氣屋内に滿ち、押入れ内の品物は初夏では三日立たぬ間に黴を生ずるといふ始末であつた。殊に開豁を好む日本人としては三等煉瓦地などの薄暗い風透しの惡い家屋には進んで住ふ者がなく、最初の間は空家だらけで、此の空家では猿芝居や輕業などが興行せられ、現に私は明治七年頃に銀座四丁目の角（今の山崎洋服店）で俳優似顏國性爺合戰の活人形の觀物を見た事もあつた。

維新前の景況は前段任天居士の「五十年前の東京」に精しく記してあり、又新聞社の位置等は是れも前章に揭げて置いたが、猶ほ明治七年頃の景況は服部撫松居士の『東京新繁昌記』の初編に其記あり、十五年ごろ光景に就ては亡友鬪槎盆居士の『銀街小誌』に左の通り記して居る。

都下京橋より新橋に至るまで概して銀座と稱す、然れども其實銀座は唯だ四丁、餘は尾張町と爲し出雲町と爲し竹川町と爲し南金六町と爲す、此間凡そ八丁、東京新繁昌記の所謂都中の都なる者是れなり。故に人の始めて都下に來る者、淺草觀音に參詣し上野公園に逍遙し、新柳二橋の風月に醉ひ南濱北里の煙華に眠り、芝神明に、愛宕山に、增上寺に、神田明神に、湯島天神に、深

川八幡に、向島三圍稻荷に、待乳山聖天に、回向院に、靈岸寺に歴遊すると雖も、銀座の通衢を一目せざれば未だ共に東京の繁華を語るに足らざるなり。其故他なし、淺草の如き上野の如き皆固より繁華ならざるに非ず、然れども其の繁華たるや往日江戸の光景と太だ異なる無し、則ち繁華たる所以のものは陳なり、若し夫れ銀座八丁間は然らず、百般の事情未だ曾て往日に於て之あらずして獨り文明開化の今日に得る所、則ち其の繁華たる毫も江戸の舊樣を帶びず、東京の新繁華と謂ふ可きなり。且說く此地京橋區に屬す、家屋道路共に洋風に模倣し煉瓦石を以て之を築造す其の家屋等差有り規模大小同じからずと雖も、率ね皆層樓にして圓柱壁間窓を穿つ數個、長方形に非らざれば則ち楕圓狀なり、壁間は則ち塗るに白堊を以てし或は淡彩を其上に施すもの有り、此れ唯だ輪奐の美麗飴細工の如きのみならず結構の堅固幾んど將さに鐵砲玉に過ぎんとす。巨棟高く飛び城寨の如きもの有り或は疑ふ那破翁の嬰守する所乎、否是れ某舗なり、玻瓈朗かに映じ宮殿の如きものあり知らず秦皇の宴遊する所乎、否是れ某社なり、寺院に似て彌陀の本尊無きものの有り、神社に似て奉幣供物無きもの有り、千肆萬店甍を連ね棟を比べ各々其の體裁を異にす、又一々煩說せず。街路の幅廣さ十五間樹木を兩側に栽う、中央を車馬の通ずる所と爲す、樹外は則

ち人の徒歩する所なり、其樹に櫻桃松柳の屬あり春夏の交に當つて紅白と青綠と相錯はり宛然斑錦を展ぶるが若し、亦熱沓場裏の一雅觀なり、樹傍また數步の距離每に瓦斯燈を排置する凡そ數十基、夜に入れば輙ち火を點ず熒々煌々夜光の璧を提げて不夜城に入ると雖も亦恐らくは其明に及ばず、此れ眞に夜行人の便利と爲す所にして提灯屋の獨り病む所なり、其の路上平坦砥の如く清潔鏡の如し、瞽者の高履を穿つも尙ほ且疾走するに難んぜず、豈又雨夜足を溜水中に失するの虞有らん乎。東京新繁昌記煉瓦街の景況を寫す已に密にして且珍なり、然れども其著は數年前に係るの故を以て、或は當時の狀態今日に一變するもの無き能はず、即ち繁昌記の尾張町の布袋屋と稱する所の如き今は則ち日報社の所在と爲る是れなり、其他理髮床の水菓子屋に住換へ、天麩羅屋の巢を氷店に移し旅人宿の陰かに地獄窟に化するの類枚擧に遑あらず、此れ皆高運の盛衰に因る歟、抑も各自の勝手に出る歟、得て知る可からざる也。方今商社商店等の繁盛なるもの、洋服裁縫店は則ち銀座の大倉組及び丸善、森村、尾張町の大民と爲す、活版印刷は銀座の博文社、東洋社、績文社、竹川町の采章社、三卜堂、國文社と爲す、新聞社は則ち尾張町に在るものを日報社と爲す、朝野と曙と相對して銀座に在り、而して日報は早く諸社の嚮導となり、巨擘の稱

由る所無きに非ざるなり、朝野の雜錄の如き頗る妙悟善謔に富む、故に能く人の頤を解く他の及ばざる所と爲す、曙の論說は理義勃萃尤も力有るを見る、他に通俗文を以て專ら世間の雜報を纂むる者は銀座に在りて讀賣、繪入の兩紙と爲す、相共に聲價を婦幼社會に競ふ、讀賣の名最も高し蓋し探訪頗る精なるを以てなりと云ふ、繪入は則ち流麗舒暢間々情史の體に倣ふ、釵裙に在ては必觀の珍と爲す、以呂波は別に一派の宗門を開き猫魔狐魅を度するを以て務めと爲す、想ふに社長の善知識故に能く此の最上乘を開く也。南金六町又江湖新報有り、其體略ぼ近事評論に同じ、元數寄屋町に一大社牌を掲ぐる者を東京橫濱每日新聞と爲す、八官町に又明治日報有り、並びに政論を以て著る、又法律に關する事を記する者あり銀座の知新社是れなり、每日社內嚶鳴雜誌を刷り出すものは政治の論を擴むる所以、朝野社中花月新誌を發行するものは風流の訣を示す所以、竹川町の工業新報は宜く大工職人をして一讀せしむべし、銀座の歌舞妓新報は好劇家の座右に離る可からず、其他奇文を東京新誌に賣る者を九春社と爲し、妙說を近事評論に發する者を共同社と爲す。時計屋の最も大なる者は八官町の小林、銀座の山內、竹內三氏と爲す、小林、山內氏は屋背上一大時計を安置す、途上の人之を望めば則ち何時何分たるを知る可し、且其時を報

ずるを聽くに轟然として半鐘を撞くが如し、知らざる者は誤つて出火の號鐘と爲す固より無理ならず。西洋家具は則ち尾張町丸善の鬻ぐ所を最も善しと爲す、日本家具は純工舍の販る所純ならざるは無し。藥舖は則ち銀座に丸八有り、而して有名なる精錡水の本舖岸田氏も亦在り。器械舖は南金六町に在る者を田中と爲し、陶器店は竹川町に在る者を松井と爲す、尾張町の山口氏古器を陳列し、竹川町の三精舍專ら銅品を賣る。製作店は則ち尾張町の鈴木、銀座の西村靴を製す、銀座の秋葉と東開堂とは車を製す、別品其花顏を粧はんと欲する者は宜く竹川町の芙蓉軒に赴き一匣の玉芙蓉を購ふべく、下戶其腹を滿てんと欲する者は銀座の時雨庵に到り十二ケ月の汁粉を啜るに如くは無し。若し夫れ飲食店は上等西洋料理より下等天麩羅蕎麥に至るまで皆有らざる無く、而して西洋料理は南金六町に在る者を日本亭と爲す、銀座に在る者を相生亭と爲す、其の食品たる牛烙羊炙の類上中下三等有つて以て供給に便す。尋常割烹は則ち銀座に松田有り、尾張町に松本、梅廼屋有り、南金六町に千登世有り、松田の名有る如きは則ち既に東京新繁昌記に掲記す、鳥鍋乎銀座の今廣大淸を推す、牛肉乎銀座の吉川及び尾張町の公店樓を稱す、鮓飯の美は銀座の玉鮓小松鮓より美なるは無く、蒲燒の芳は出雲町の喜多川樓より芳しき無し、而して獨り上

等割烹は通街八丁間に於て絶えて之れ無し、蓋し此地稍や熱閙に過ぎて淸讌雅饗に適せざるの故を以て也、通街の外に於ては則ち之れ有り、竹川町の花月樓、南金六町の狐鰻、加賀町の赤松亭鍋町の伊勢勘是れ也。

銀座大通りの店掛りも明治十一二年頃には稍や整ひ、横町や新道にも漸く空屋が無くなるに至つたが、其代り新築當時のお化粧は段々剝げて外觀は太しく見苦しくなつた。元來此地の煉瓦家屋の建築は一坪何程といふ請負工事に任せたものゆゑ一體が粗造に流れ、當時私が傍觀した所では基礎工事などはぞんざい極まるもので、家屋の煉瓦塀に至ては內外兩面のみは無疵の煉瓦を用ひ中間の空隙へは屑煉瓦を投入れ、其上から泥水の如きモーターを柄杓で流し込むといふ風であつたから其他は推して知るべしである。其の結果として地盤の軟弱な處では一寸餘も床の陷落した箇所もあり、殊に一體に內樋の設計であつた爲め雨は遠慮なく壁を傳うて疊を潤す等の不始末を來し、又木造家屋に比して夏は暑く冬は寒きに過ぎ、居住者に取つては頗る不愉快なものであつた。槎盆居士は其の道路が平坦で、瞽者が足駄で走つても轉ぶ氣遣ひも無いと說いて居るが、是れも亦大違ひで大通り左右の人道は生燒けと燒け過ぎの煉瓦を混じて小口に並べたものゆゑ、其の軟部は著しく

磨り減らされて到る處凹凸を生じ、足の達者な人すらも歩行が太だ難儀であつた。唯だ中央の車道のみは今日の如く一噸二噸の貨物自動車が運轉するでもなく、車馬の交通が少かつた爲め泥田の如き惡道路となる事は無かつたが、其代り兩側の並木際には雜草の生えて居る處もあつた。

大通りで稍や目に着いた建物は銀座一丁目の松田料理店尾張町惠比壽屋跡の日報社（銀街小誌に布袋屋とあるは誤り）新橋北角今の博品館の處にあつた千登世料理店ぐらゐのもので、殊に松田は家屋の宏壯なのと料理の安いのとで評判高く、田舍客は便所の立派なのを見た丈けでも肝を潰す程であつた。それから煉瓦に改造の當時から今日まで殘つて居る商店で、私の記憶する所では銀座一丁目の丸十陶器店、向う側の武内時計店、三丁目の丸八、玉屋、四丁目の十二ケ月汁粉（是は今出雲町へ移轉）今の天金は四丁目の東側に屋臺店を出して居たが、十一年頃數寄屋橋通りの横町へ店を開きチョン髷の老主人が自ら天麩羅を揚げて居た、又今のパン屋木村屋も小さな店で、其の製造所は三原橋へ曲る横町にあつたのである。夫れから尾張町では鷄卵店の大黑屋、向う側の白牡丹、二丁目角の足袋屋（家號を忘る）等で時計屋の天賞堂も元の場所ながら其頃は印判彫刻が專業であつた更に南へ進んで竹川町の龜屋に家具類が並べてあつたやうに思ひ、藥店の資生堂もやはり同處であ

つたと記憶する。右の内銀座の丸八は他の洋式煉瓦家屋の間に挾まり獨り舊式な塗家構への見世附（大震火の時まで）であつたのが眼先に殘つて居る。

露店は今ほど盛んで無かつたが、やはり銀座一丁目から四丁目までを限りとして東側にのみ並んで居た、始めは我樂多店や飲食店が多かつたが段々骨董古書畫類のよい物を持出すやうになり其の品の位が漸く値打あるものに高まつて來た。此の露店中銀座二丁目で古本のみ賣る老人が居て、折折珍書の掘出し物があり、私は玆で三馬の臆說年代記を八錢、哥麿の吉原年中行事を五十錢で買つた事もあつた。そして地藏の緣日も亦中々賑はつたもので、銀座四丁目から三原橋通り、三十間堀の川岸へかけて露店や植木屋がズラリと連なり、往來も雜沓を極めたが、是れは近年電車々道が開通した爲めに緣日商人の露店は三丁目四丁目間の横丁へ移される事になつた。

銀座の名物中で今は無くなつたものは、銀座一丁目の美須屋針（本家と稱するものが二軒並んで居た）松田の玉子豆腐、玉鮓、大黑屋のシャモ鍋、四丁目の三色團子其の横町で野村屋の汁粉、尾張町函館屋のアイスクリーム等で、新橋の北詰には「しがらき」といふ茶店があつて玆で炮じ茶を啜りながら横濱からの來客を待受ける抔は隨分ゆつたりした氣分であつた。玆に一つ無くなつて却

て喜ばしい名物がある。それは夜間柳の下に出沒する白首で、明治十年前後には俗にヒツパリといふ婬賣周旋の婆さん抔――中には婬賣婦自身――が新橋附近の木蔭に佇み、若い男の袖を引く事が流行し、その上等の部に屬するものは板新道邊の藝者屋らしい小意氣な家へ案內する事もあつたと云ふ。今から考へれば帝都目貫の街衢にヒツパリが顯はれる抔は殆ど想像にも及ばぬだらうが、其れが全く事實だから仕方がない、是れを以ても當時の新橋界隈が如何に寂寥であつたかを思ひ當るであらう。

是れで銀座の昔語りは一わたり濟んだから筆を意氣な方面に向けて次に新橋藝者の話に移る事とする。明治十一年假名垣熊太郎（魯文翁の長子）の著した『會席眞面妓猫』に據ると割烹店では橋南に賣茶亭、伊勢源、太田樓、昇榮樓、松榮亭。橋北には狐鰻、花月樓、喜多川樓、伊勢勘、赤松亭、少し離れて釆女町に醉月、木挽町に會田屋、築地に壽美屋があり、待合船宿では橋南に濱廼家喜久村、藤田屋、鈴木屋、松本、富士屋、中村屋。橋北には大村屋、兵庫屋、中村屋、川崎屋、山口梅の家、木挽町に長谷川、福田、山本、秋本がある。それから大小の藝妓では橋南烏森に四十三人橋北金春に六十九人〆めて百十二人となつて居るが、それが十四年の『東京粹書』に據ると總人員

百八十五人で、僅か三年間に七十三人の増加を示して居る。

新橋の妓流が斯くの如く年々隆盛に赴き、之に反して江戸藝者の本場とも云ふべき柳橋が追々衰へ行く當時の現象は、やがて江戸趣味の没落を示すもので、新橋は盛んになればなる程、其の妓風は漸く野鄙雜駁に成り行くばかりで、つまり明治十年以後十四五年までは新橋藝妓の混沌期であつたそして此の新柳二橋の優劣に就て憑空逸士（此人も私の文友であるが本名は姑く隱して置く）は『東京粹書』に左の如く論じて居る。

新橋の南北藝妓の籍を掲ぐるもの無慮二百許り、盛んなりと謂ふべし、都人の藝妓を説く首として新柳二橋を推すもの其の所以なきにあらず、然れども柳橋の妓は洒落にして風致に富めり、新橋の妓は豪逸にして氣韻の高きを覺ゆれども、其の佳麗なるものは寥々として甚だ希なり、柳橋は藝妓の數少けれども流石は古來狹斜の名境なるが故に、絶美極艶の尤物あらざるも、亦凡々婢女一般の賤妓なし、且地江流に枕むを以て、納涼に觀月に皆佳ならざるなく、畫舫の往來するもの珠箔の參差たるもの、冶遊の情趣を助くるに足る、其客も多くは商賈者流にして、靴を鳴らし髯を捻るの野暮を學ばず、唐棧二子の羽織に華美の下衣を隱し、端唄の諷吟に心情を知らしむる

を以て常とす故に妓風自から粹の一點に歸して氣障らしき事なし。新橋は然らず一帶の濁水道を劃するまでにして、觀もなく趣もなき俗境なるのみならず、其客も亦鼻下三千丈ワイドン社會の多きが故に、妓風徒らに傲慢に流れ、動もすれば客を遊ばすの本分を忘れ、勝手氣儘の擧動尠からず、蓋し鯰公華君輩の妓を聘するや技藝の如何よりは寧ろ姿色を先にするを以て、自から然らしむるに至りしもの歟。

斯ういふ風であつたから、其頃新橋には一定の妓風がなく、日本橋葭町らしき處もあり下谷講武所に似たる所もあり、甚だしいのになると場末の宿場藝者にも劣る者もあつて所謂玉石混淆、後には月琴を鳴らす清樂藝者、蛇皮線を彈く琉球藝者などが顯はれるやうになり――大阪のやうに義太夫專門の藝者はまだ無かつた――又十五年頃からは名古屋種の藝者が輸入されて、お座敷で連發するスキヤタラン、オキヤーセの田舍訛りが、却て土地の一名物となつたやうな奇跡もあつた。

併しながらまだ幾分か江戸藝者の面影は殘つて居た、それは當時三十以上の老妓には若い時から叩き込んだ腕前で、藝に懸けては引けを取らぬ達者ものも數名あり、是れが昔からの慣例を守つて四季の更衣は固より其他の年中行事にも江戸藝者の型を崩さず、殊に一座の宴會などには此の老妓

たちは一座の周旋役に當り、若い藝者や半玉を指揮してまんべんなく客に應接せしめ、決して客に尻を向けて一ト處に寄り集まり、役者の噂に夢中になるやうな我儘な擧動を許さなかつた、其頃この老妓中に指を折るべきは橋南では春本お郁、新立花小時、橋北では若松屋鈴八、新小川お山等であるが、就中お郁は儼然たる顔役で、半玉等は其前に呼付けられると又叱られるのかとビク〳〵して居た程であつた。

私は藝妓の服装に就ては多く注意を拂はなかつたが、春衣は無論縮緬無雙の三枚重ねで其下は長襦袢一枚、その上衣は黑はあまり流行せず多くは年齢に應じた變り色であつたが、今のやうな華美な裾模様は見ることを得なかつた、そして此の正月だけは白足袋を許されて居たが平素は足袋を履く者は稀であつた。平日と雖も儀式張つた祝宴など、則ちお約束の口の懸つた時は必ず紋付であるが、御祝儀が濟むと他の衣服に着換るのが例であつた。此時でも縞物は用ひず、小紋の二枚重ねに黑襦子の帶といふ風で、ふだん着には——夏の外——多く黑襟のかゝつたのを用ひて居たが、極馴染の客とか親類附合の外は、此の襟附の着物で客の席に出る事はなく、羽織は絕對に許されなかつた。半玉の服装も今から見るとずつと質素なもので、禮装の時が振袖の裾模様——偶々袖下模様を

付けたものもあつた——帶の結ひ方は御殿やの字、平日が模樣ものか縞物であるが、是も現今の如くケバ〳〵しい赤色の友禪を着る者は無かつた。つまり藝妓の着附けは年々華美に赴いたのだが、就中半玉の服裝が京人形の衣裳を見るやうな豪華な粧ひに變つたのは、全く京都の舞子姿が東京に遷川されたので、夫れと交換的に關西の藝妓姿が髮かたちまで總て東京風に一變したのである。

半玉を除くの外、髮は年の老若に拘はらず總て島田である、偶ま銀杏返し抔に結ふ事もあるが夫れは馴染客のお座敷に限つた事で、口髮日風呂は藝者のたしなみであつた。それが後には束髮藝者も出來、二十一年頃には洗ひ髮のお妻と呼ばれて洗ひ髮の儘お座敷へ出る無作法な藝者もあつた。それから又藝者は皆素顏——襟白粉だけ薄くつけるのは有つたが——で今の如く眞ツ白に塗立てた石膏細工の胸像を見るやうな顏を晒すのは無かつた。

新橋藝者は前にも云つた通り雜駁で、他の敎坊と異るやうな特徴は無かつたが、强て云へば土地の聲望につれて一體に豪奢を衒ふ風があつたのと、柳橋日本橋の如き技藝本位の土地よりは割合に若手の美人が多かつた。其頃名妓と唄はれたのは橋南烏森で寳來屋玉八、須賀屋ふみ、增見屋淸吉立淺見仙吉、中村屋小鶴、橋北金春では武藏屋小萬、松屋小辰、大和屋勝子等で、此内玉八は西園

寺公の權夫人となり、ふみは箱丁の爲めに殺され其他はどうなつたか不明であるが、多分皆良家の人となつたので有らう。

藝者が席に侍する順序は、詞友三木愛花氏の『東都仙洞綺話』に實況を盡して居るから、その一節を譯して左に抄出する。

　未だ幾ばくならずして、妓障外に來つて微に婢を呼び、而して後障を開き半ば内に入り半ば外に在り、手を疊にして云ふ御免と、既に入れば則ち必ず今晩の二字を云ふ、蓋し御免は請ふ無禮を免せの謂にして、今晩はは今夜良辰の歇語なり、妓已に座に入り客に對して言はんと欲して未だ言はず、却て婢を顧みて云ふ、妾今將に玆に至らんとし適ま土橋に來れば河岸に狗兒あり、妾を見て驀然として走る妾吃驚殆ど跌かんと欲し胸悸未だ止まずと、語り罷んで半ば客を顧む、是れ蓋し閑語を以て客に話端を開くなり、客杯を把り妓に向つて云ふ、且燈下に進んで一杯を受けよと、妓乃ち膝を進めて杯を受く、是れより獻酬一二、妓絃を按して歌つて曰く「蓬來に治まる御代の末かけて、友白髪まで契りしを、旭に匂ふ鶴龜も、祝ふ年こそ愛たけれ」と、歌ひ畢つて微に頭を垂れて云ふおやかましうと、是れ卽ち座定曲なり、定曲畢り妓調を改め絃を促して短

歌二三を唱へ、再び絃を措いて曰く、官盃ぞ清唱妾等をして耳暫く明かならしめざると、客聞かざるまねして杯を擧げて云ふ敢て勞に酬ゆと、妓杯を受け婢を顧みて云ふ姉さんはゞかりさまと乃ち瓶を把り酒を篩ふ、酒杯に入らず假に篩ふのみ、妓亦假飲して傍らに措く、凡そ妓極めて親密の客に非ざるよりは、性甚だ酒を好むと雖も概ね多飲せず、蓋し醉餘體面を失ふを恐るればなり。客此時にして纏頭を妓及び婢に與ふ、而して妓婢未だ遽かに之を收めず、獻酬談笑之を姑くして婢、妓を目して云ふ、仕つけない事をしませうと、兩者則ち頭を垂れて「有」の一字を云ひ之を收めて帶間に挿さむ、有こは蓋し有難しの歇語にして、好意此の如きは他復た有難しの義歟是れより絃歌嬌を添へ燈燭光りを增し、柳拳敗を取りて仇を藤八拳に復し、滑稽笑ひを博して贊を俳優の假聲に得(下略)

是れが生面の客に呼ばれた時の有樣であるが、馴染の客に聘せられた時でも、客から特にお座附ヌキの令が下らなければ矢張りお座附は付けたものである。そこで又藝者が口が懸つてお座敷へ行く時の有樣は冬でも外套や羽織を着ずお定まりの左褄で右手を懐にして肘を張り、切火の音を跡にして我家を出ると、其後から唐棧の着物に博多の帶、股引の尻を端折り白足袋に麻裏草履を爪先へ

引ッ掛けた箱丁が、三味線の包みと家號を記した長提灯とを掲げて從ひ行くのは、宛然として豐國の繪でも見るやうな風情で、今のやうに三四丁の處を俥で飛ばせるが如き殺風景は無かつた。それから三味線は必ず箱丁によつてお座敷へ持込まれ――母親や下婢を箱丁代りに使つて居る自前藝者もあつたが、夫れ等は無論お座敷へは顏を出さぬ――此時客は若い衆さん一杯と盃をさし祝儀を遣るのが例であつて、今日の如く藝者は來たが三味線はたうとう座敷へ出ずに了るやうな不可思議な事は無かつたのである。それから前記の『仙洞綺話』にもある藝者の挨拶だが、座敷に入る時は必ず今晩アリーと云ひ、祝儀を收める時はアリーヨロと挨拶した。アリーは前の說明通り有難しの義、ヨロは宜しくを略したのである。

其頃新橋ではいろ〳〵な流行語があつた、挾み言葉やツの字言葉も用ひられ「アラよござい」「ナシンだねへ」「十錢頂戴」其外いくらもあつたやうだが今急には思ひ出されぬ、今日でも用ひられて居る唯の事を「ロハ」一圓を「圓助」半圓を「半助」祕密を發く事を「スッパヌキ」劣等又は粗惡を意味する「ヘナチヨコ」などは盛んに唱へられたものだが、此ヘナチヨコといふのは實は私共の作つた新語で、それは明治十三四年の夏風雅新誌の山田風外翁と私等四五人が同年神田明神

に開業した今の開花樓に登つて一酌を催した時、銘々の膳に附けて出した盃は内部がお多福、外部が鬼の面で、その鬼の角と顎とが絲底代りになつて居る樂燒風の氣取つたものであつた、是れは面白い盃だ先づ一杯を試みやうと女中に酒を注がせると、こは如何にジウ〳〵と音がしてブクブクと泡が立ち酒が盃の中に吸込まれた、イヤ是れは見掛けに寄らぬ劣等な品物だ、ヘナ土製の猪口だから以來ヘナチヨコと呼ぶべしだと呵々大笑したのが始まりで、爾來外見ばかり立派で實質の之に伴はないものを總てヘナチヨコと稱して居たのが忽ち新橋の花柳界に傳はり終に一般の流行言葉となつたのである。

一般物價の低廉な頃とて、明治十二年頃の新橋藝者の席價も今から思へば安いものであつた、確かには記憶せぬが當時の玉――則ち線香――は一本十二錢五厘で半夜十本、お約束が其の二倍、祝儀（纏頭）は大妓一圓、小妓半圓が普通で、樓婢などへは二十錢で濟ましたものだ、此割に依ると晝夜稼ぐ流行妓でも一ケ月の玉代は七八十圓にしか付かず、其内から料理屋に一割見番に何がしかの歩合を引かれると手取りは猶々減少する事となるが、そこには又カスリの餘得があつて、出席と退席前後の數分間は一本に計算せられ、此の端數がお座敷の變るごとに倍加して行くので切詰めた

勘定よりは其の金額は意外に多くなるのである。况やお座敷が變るたびに纏頭の收入は逃さぬゆゑ流行る藝者は「貰ひ」と稱して半時間も居るかと思へば其客に斷つて又他の席へ稼ぎに行く、斯くの如く一晝夜に七八席を勤めるのは珍らしからず、其上甲の客席に居りながら隣室に馴染の客が來て居ると見れば「御挨拶」と稱して乙の席へも顏を出して祝儀だけは貰つて來るから、應來の枕金は別にして眞面目に稼いでも名妓となれば一ケ月樂々と五六百圓の實入りはある。五六百圓は當時の勅任官の俸給に匹敵すべきもので、一纎手にして此の大金を稼ぎ上げるを見ば有髯男子は大に恥べきであらう。

新橋藝者が地としてのうたひ物は淸元、常磐津、長唄といふ順序で、踊りは藤間が幅を利かせ、藝者中にも新大和吉次、春屋きよ抔は舞踊の名人であつた。又幇間も數名居たが私は悉くは知らず、橋南に常磐津和佐太夫、橋北に淸元延太郎といふ幇間片手間の藝人も居たやうだし、柳河蝶次といふ手品遣ひもあつた。就中赤羽織の谷齋は此地の名物男であつた。

附録

狂歌一夕話

此の一夕話は十數年前或る集會席上で私の講演したもので、夫れを一冊に印刷して知己にのみ配つたのであるが、本編に狂歌談を載せた因みもあれば茲に再録する事とした。

狂歌の字義

狂歌の沿革等を述べまする順序として先づ第一に狂歌の字義に就てお話し致しませう、我邦の書に狂歌といふ字の見えたのは『喜撰式』に病者若雖不去又有何過然而詠誦不順中也誠是狂歌也何冷寒不去病云々とあるのが初めで御座います、尤も『喜撰式』は僞作だといふ人も有ますけれども、清輔朝臣も『奥儀抄』に之を引用して居ますから私は姑く僞作でないものとして茲に擧げました。此狂の字はクルフとかキチガヒとかいふ意味ではなくて戯の字と同じくタハブレと訓むのが正當で狂歌をくるひ歌といふのは沙汰の限りです、又『非蛙抄』に「後鳥羽院の御時柿ノ本栗ノ本とて置かる、柿ノ本は世の常の歌これを有心と名づく栗ノ本は狂歌これを無心といふ」とありますが之れも亦たはぶれ歌と訓むのが正しいのです、元來狂歌といふ熟字は支那にて諧謔體の詩を狂歌と呼ぶことも有るのが我國に傳はり來り、和歌の正體に對しておどけたる歌を狂歌として區別するやうに

なつた迄で、別に深く其の字義を穿鑿するにも及ばぬのですが、併し故人中には此狂歌の二字に力を入れて思ひ〳〵の解釋を下して居るのがありますから御參考の爲め左に二三說を御紹介致しませう、先づ生白堂行風は『後撰夷曲集』の卷末に夷曲、夷振、夷歌等の名目を論じたる後ち今狂歌といふ事をおしはかるに夷曲の曲をまぐるといふ訓あるに依りて正體の夷の字を忘れて曲の字を採り用ひ拄歌と誤りたるなるべし、然るに又拄と狂と草形に書くとき字形似たれば世俗誤りて狂歌といひ習はせるにや畢竟物ぐるひなせる無念の事歟、

と云つて居るのは附會も亦甚しいもので……奇々羅金鷄は自著の『閑雲愚抄』(寬政十二年刊行)に於て之を駁して

行風が拄と狂と字形の似たるを誤りて狂歌となしきちがひ歌となせるこそ無念なれと論ぜしは當らざる說なり、畢竟行風は物學びたる事のなきをこの故に狂の一事曲の一字もさらに知らぬと見えたり、狂は前に云へる通りにして決して狂人亂心者の事にはあらざるなり、曲はうたひ物の名にして賦、吟、行、歌、詩とおなじこゝろなればこそ夷歌とも夷曲とも呼びたるなれ、曲にまぐるの訓あればとてまがり歌と心得たるは誠にかたはら痛く覺ゆるなり、

と譏つて居ますが是れは金鷄の言を俟つまでも無く行風の論は只だ一笑に附し去るべき愚説です、曲亭馬琴の『燕石雜誌』にも亦前の行風の說を引いて、

後撰夷曲集の奥書に狂歌は世々の撰集に夷曲歌とありて狂歌と名くる事なし、之を狂亂狡猾の事に比す遺恨の事なり、おもふに夷曲の曲の字を狂と書き誤りそれを亦狂の字に讀み誤りて狂歌といふにやあらんと云へり、按ずるに此說迂僻にして信用しがたし、古今集の俳諧歌、續詞花集の戯笑歌その名目は異なれども皆夷曲歌なり、後世これを狂歌といふよしは夷曲の曲の字を狂に誤りそれを亦狂に誤り夷の字を脱して狂歌と唱ふるにはあらじ、唐土に俳諧體の詩を狂句狂歌など云へり、明の劉伯温が連珠に狂歌之士遺世若草菜といへる是れなり、然れば詩に狂歌あるに對して和歌にもまた狂歌といはんも嫌ひあらず、夷曲戯笑は天朝の名目なり俳諧狂歌は唐土の名目なり、若し異邦の名目を嫌はゞ古今集に俳諧歌と出されしを何とかいはん、依りておもふに夷曲歌を狂歌といはんも嫌ふべきにあらず。

是れは金鷄の說に一步を進めて狂歌の字の出處を明かにしたものです、又高松の林鮒主といふ人も『狂歌辯』に於て

夫れ狂歌と熟する狂の字は論語に古之狂也肆、朱註に狂者志願太高肆不拘小節云々、又楚の狂接輿が歌ひしは上古の狂歌なり、凡そ狂とは所爲局を出たるを云ふなり、袁中郎集中に狂歌あり六籍信芻狗三皇爭紙上猶龍以後人漸々諫伎倆噓氣若雲烟紅紫殊萬狀醯鷄未發覆甕裡天浩蕩宿昔假孔勢自云鐵步障一聞至人言垂頭色沮爽」是れ志願太高うして小節に拘はらず、局中の學者を破したる則ち狂歌なり又律なり、必ず狂亂の義と思ふべからず、歌はもと謠ふ聲なり說文に長引其聲以詠也とあり、然れば調よからざれば謳ふべからず、歌には歌の調あり狂歌には狂歌の調あり、調べなきを歌とは云はず、たとへば能藝には能藝の足取あり狂言には狂言の足取あり、足取亂れたるを誰か是とせん。

と云ひ源眞樹の『興歌考』には

（前略）から國の言にも問二我狂歌ノ詞一とあり、張九齡が後漢の徐徵君の碣に接輿狂歌而詭激、杜子美が詩に耽酒須微祿、狂歌託聖朝、白樂天が詩に鬼峨狂歌教婢拍又別に狂歌詞あり（白子文集卷ノ八）王表が詩に醉後狂歌盡少年、韋莊が詩に一曲狂歌入醉鄕、翁綬が詩に不識狂歌到白頭、王元之が詩に强作狂歌歌舜禹、陸務觀が詩に狂歌醉舞眞當勉、また爛醉狂歌亦足雄とあれば狂歌

とつゞく事はから國にもあり、彼れ此れかよはして考ふるに狂歌とは書くべけれどくるひ歌と思ふはいたく誤れり、狂歌はたはぶれ歌と心得るぞよき。

と說いて居ます、更に狂歌といふ語の用ひられざる以前に遡ぼり夷曲、夷振の文字の出處を考へますに、是れは『日本書紀』に下照媛の「天なるやおと七夕の」「天さかる鄙つ女の」云々の歌二首を掲げたる註に、此兩首歌辭今號夷曲とあるが初めで『古事記』には此歌者夷振也と註してあります。此曲も振も共にフリと訓むべきで、則ち昔は俳諧體の歌を「ひなぶり歌」と稱へたものですが、此夷曲といふのは今の狂歌とは稍々趣を異にしたもので、夷曲卽ち狂歌なりといふ說には私は同意が出來ません（此事に就ては後に述べる事に致しませう）又前に引用した『井蛙抄』に

有心には後京極殿、慈鎭和尚以下其時秀逸の歌人なり、無心には光親卿、宗行卿、泰覺法眼等なり、水無瀨殿和歌所に庭を隔てゝ無心座あり、庭に大なる松あり風吹きてことに面白き日有心の方より慈鎭和尚

心あると心なきとの中にまたいかに聞けやと庭のまつ風

といふ歌を詠じて無心の方へ送らる、宗行卿

心なしと人のたまへど耳しあれば聞き候ふぞのきの松風

と返歌を詠じけり、耳しあればが生さかしきぞと上皇勅諚ありて笑はせ給ひけり、とあるのを見て、此の無心體又は栗ノ本といふのが今の狂歌と同じものだと心得て居る人もあるやうですが、夫れは誤りの甚だしいもので、左に掲ぐる文化年間の『狂歌百人一首』に於ける六樹園宿屋飯盛の說が其の辯妄を盡して居ます、

狂歌は無心體なり之を栗ノ本と呼びつけたりといふ人あり、おのれ思ふに無心とは萬葉にいはゆる無心所着にて、こゝろ詞とゝのはず理り聞えがたき物をさして云ふめり、亭子院の有心無心歌合こ申すも作者の巧拙につきて名づけ給ひし事は、御はしづくりを讀み見て知るべきなり、後鳥羽院の末つかた有心無心と稱し柿ノ本栗ノ本と呼びたまひしは、和歌狂歌を別ちて名づけたまへるにはあらず、其比は連歌といふ物盛んに行はれて時人これを好みけるに、殊に勝をとれる人もあり又いつとても負け方に居りてはなじろめるも有ければ、是れを別ちて堪能なるをば柿ノ本と呼び不堪なるをば貶しめて栗ノ本とは呼ばせ給ひしなり、さるは後普光園殿の筑波問答幷に後成恩寺殿の小夜乃寢覺などいへる書に記させ給へり、但井蛙抄に記せるは聊かことたらはぬやうな

るは寫しひがめたるにやあらん歟、そは兎まれ角まれ無心栗ノ本とはくだし賤しめて呼つけし名なれば、ざれ歌など弄ばん人はかみに擧げたる御二所の御說を守り然か心得てあるべきなり、然るに無心栗ノ本とはざれ歌におはせたるこよなき愛たき名なりと思ひて、物にも記し口あそびにもすめるはいみじき僻言なりけり、今狂歌よむ人に向ひて、そここそ栗ノ本の長者なれといはんは、道にとりて不堪の人なりと云はんが如く、なか〳〵うらうへの差ひにぞ有ける、此道を好まん人はよく心得てあるべき事なり、」云々

要するに狂歌はどこまでも狂歌で押通すのが宜しく、之を「たはぶれ歌」「たはれ歌」「ざれ歌」などと呼ぶのは敢て差支はないのですが、狂歌堂眞顏の主唱したやうに何も人聞きを高尙にせん爲めに之を俳諧歌と改める必要もなく、又源眞楫が『興歌考』に論じて居るやうに、別に狂の字を嫌つて興歌と書くにも及ぶまいと私は思ふのです、眞顏が俳諧歌を唱へた事は後に詳しく述べますから、狂歌の字義に就てのお話しは此位の處で止めて置きます。

狂歌の沿革

狂歌の濫觴に就ては世に甲乙の二説が御座います、其の甲説は上古夷曲といひ夷振と稱へ『萬葉集』では戯笑歌『古今集』では俳諧歌と呼ぶものが狂歌の祖先であると云ひ、乙説は狂歌はそんな六ツかしい系統を有するものでは無く、只だ一時の流行に伴うて勃興したものであると云ふのですが、私は此の乙説を取るもので、夫れには愚見あるのです、先づ『萬葉集』の戯笑歌（たはぶれうた）とはどんな歌であるかと云ふに

　　池田の朝臣が大神朝臣奥守を嗤る歌

寺々のめがきまをさく大神のをがきたばりて其子うまはむ

　　大神朝臣奥守の嗤に報う歌

佛造るまそほたらずは水たまる池田のあそが鼻のへをほれ

　　平群朝臣の嗤る歌

わらはども草はな刈りそやほ蓼を穂積のあそが腋くさをかれ

　　穂積臣朝和る歌

いづくにぞまそほほるをか薦疊へぐりのあそが鼻のへをほれ

黑色を嗤り咲ふ歌

うば玉のひだの大黑見るごとにこせのを黑しおもほゆるかも

の類で、成程和歌としては一種の諧調には相違ないのですが、當時の歌は寛濶にして小刀細工の風なく心に思ふ儘をすぐに歌にしたものが多いのですから、此作の如きも偶ま滑稽がかつた意志を述べたと云ふに過ぎず、又其の用語も當時の俗語づくめでもなく只歌人が一時の興に乘じて口吟したまでのものゆゑ、後世に謂ふ所の狂歌と同じ物とは申されません。又『古今集』の中にある俳諧歌とはいかなる調であるかと云ふに、

題知らず

梅の花見にこそ來つれ黃鳥のひとく〳〵といとひしもをる　讀人しらず

同

山吹の花いろごろもぬしや誰とへどこたへず口無しにして　素性法師

同

いくばくの田を造ればか郭公しでのたをさを朝な〳〵よぶ　藤原敏行朝臣

同

秋の野になまめき立てる女郎花あなかしがまし花もひとゝき　僧正遍照

寛平の御時きさいの宮の歌合のうた

秋風にほころびぬらしふぢ袴つゞりさせてふきり〴〵す鳴く　在原業平

の類で、之は古今集の撰者が巻末に俳諧歌といふ標題を設け類別して掲げたものゆゑ、概して一種のをかし味ある歌では有ますけれども、矢張り萬葉集の戯笑歌と同じ事で作者が最初から俳諧歌を詠むつもりで詠み出したのでも無く、つまり歌人が一時の洒落に止まつたものですから、今の滑稽を本旨とする俗語づくめの狂歌とは其趣を異にして居ます、尙此の俳諧歌といふものも普通の和歌に對して確乎動かすべからざる區劃を立てたといふでも無く、特に俳諧歌として掲げた中にも見やうに依りては俳諧體で無いやうなものもあり、又本集中にをさめた和歌の中にも却て俳諧がかつた調のものも有ますから、一概に俳諧歌をさして狂歌だと誣ふるのは無理こじつけのやうに思ひます、私に言はすれば俳諧歌は狂歌に似て居るといふ迄で、決して血を分けた兄弟ではなく謂はゞ他人のそら似とでも申すもので有ませう、そこで假に狂歌の定義を下して見れば

（一）狂歌は和歌より分離したる一種の平民的滑稽短歌である事

（二）狂歌は最初想ひを構へる時より滑稽諧謔を旨として作るものゆゑ、歌人が一時の興に乗じて詠出でたる俳諧歌とは其撰を異にする事

（三）和歌を詠む人を歌人といふが如く、狂歌を詠む者を狂歌師と稱へ、和歌の支配以外に立ちて全然專門の文藝に屬する事

（四）和歌には古言雅言を用ふる例なれども、狂歌には俗語を專用するは勿論漢語でも洋語でも世の中に通用するだけの言葉は隨意に用ひ得るの自由を有する事

（五）狂歌は和歌や俳諧歌の如く、善く言へば餘韻あり惡く言へば迂遠なるものに非ずして、概して直感的なる事

ざつとこんな物であらうかと思ひます、尚左に六樹園の說を掲げて俳諧歌と狂歌との區別を明かに致しませう。

萬葉集に戲笑歌あり、さしつぎには古今集より後ち〳〵の俳諧歌、これら皆いまの狂歌にかよひたる物から、あかれる世人の言の葉にてこと〴〵く雅言なれば、古へをよく學ばざる人には容易

くよみ出ること難かるべし、今の世には狂歌をさして俳諧歌とおぼえたる人あり、狂歌は俗語もてつゞけいふなれば是れを俳諧歌なりと云はんは餘りなる誣ひごとなるべし、夫れも他人の詠みたらんはさも云ひてん自らのに云はんは嗚呼がましく雅俗の差別だに知らぬやうにてかたはら痛き事ならずや、さて今の如く俗語もてつゞけいへるは、何れの時にか始まりけんと問ふ人あり、おのれ答へていへらく「將門はこめかみよりぞ射られけるたはら藤太の謀ごとにて」といふ歌藤六左近が詠めるなりと保元平治物語に記したり、夫れよりつぎ〳〵世々のいくさ物語に落書とあるは大かた今の狂歌のふりなり、これは京童のさがなき口より出たるものとのみ人思ふめれどさにはあらず、九條の大相國など事として詠ませ給ひしよし愚管抄に記されたり、さればやごとなき御人もかゝる戯れは物し給へりき、今の人は落書體といみじく忌む事にすめれど、其もとはこれぞ初めなりける、さるは其の時代のさがをいひ人の上を謗りよみたらんこそ罪うべきわざとはすべかめれ、只だ月花にむかひて風流のこゝろを演べいはんにはさる體なりとて何の咎かあらん、されば狂歌は狂歌とてあるべきに、あながちに其道を高くせんとてうけはりて俳諧歌なりなど云ひて、ひぢもちいかめしう振舞はんは人笑ひなる事なりかし、

是れは主として狂歌堂眞顔が俳諧歌を唱へ出したのに當らん爲めに書いたもので……俳諧歌と狂歌との區別はどうしても六樹園の說に隨はなければなりませんが、只だ狂歌の根本を昔の落書から出たものだといふ說には、私は首肯する事が出來ません、是れは朱樂菅江が『狂歌大體』に

落書も歌よみの詠みたるは優にをかしけれど、歌よむすべ辨へざる人の詠みたるは聞くに只だむだ口など云ふたぐひなるべし、

と云つて居る通り、落書にも昔は調べも整ひ趣向も面白いものがあつたのですが、夫れが直ちに狂歌のはじまりだとは申されますまい、寧ろ私は鎌倉時代の曉月坊などが狂歌の家元であらうかと思ふのです。

此の曉月坊といふのは、定家卿の孫に當り藤原爲家卿の次男で爲守と申したのです、母は安嘉門院の四條といひ後に阿佛尼と稱し、かの『十六夜日記』を作つた人です、曉月は清水寺の法師でさして勇士といふでも有ませんでしたが、承久の亂には武器を手にして院中に馳せ參じ、宇治の手に向ひて敵の爲めに生捕られ、已に死罪に處せられんとした時に、

勅なれば身をば捨てきものゝふの八十宇治川の瀨にはたゝねど

と詠んだので、秦時も憫れに思ひて発したといふ事です、此の暁月は和歌の家柄に生れながら、平素たはぶれ歌ばかり詠んで居たのを或る人が難じた時、

暁月に毛のむく〳〵と生えよかしさる歌よみと人にいはれん

と詠んださうです、又或る年の暮暁月は米櫃ががたつき出したゆゑ、米一石を借らんとて定家卿の許に書き送つた歌は

暁月が師走のはてのそら印地としうち越さん石ひとつたべ

といふので有まして、石一つとは米一石といふ事です、ところで定家卿も度々の無心に困つたものと見えて

さだ家が力のほどを見せんとて石を二つに割りてこそやれ

と返歌して米五斗だけを貸てやつたとの事です。暁月は嘉暦三年十一月八日六十四歳で死んだのですが、其時の辭世は

六十あまり四とせの冬の長き夜に浮世の夢を見はてぬる哉

といふのです、此の暁月は由緒ある歌人の家に生れながら、其歌が多く狂體であるのみならず、平

素の行ひまでが頗る狂歌師的に出來て居るやうですから、私は此坊さんを以て狂歌をはやらせ出した祖先だと致したいので有ます、序ながら世に曉月坊酒百首といふのが傳はつて居ますから、左に十首だけ拔萃して御覽に入れます。

春

けふといへばまた珍らしき味酒のみは醉ながら春は來に鳧

うぐひすの巣立の酒の一銚子ひとく／＼といそぎてぞ飲む

醉ひてのち物もいはぬは口なしの山ぶき色の酒やのむらん

夏

春くれしきのふの酒の醒がしら今日はうづきに成にける哉

皐月まつたちばな色を飲む時はむかしの人の酒の香ぞする

秋

盃はめぐりて行くをきり／＼す誰にさせとか鳴明すらむ

飲むひとの命もいとゞなが月のこゝのかごとに匂ふ菊ざけ

秋の田のかり庵に造るをばな酒ともを招きて誰か飲むらん

冬

住あらす上戸の宿の板びさしさかもりがちて降る時雨かな

浦なみのよるになる迄のむ酒にゑひてたゞよふ千鳥足かな

さて曉月坊の後ち暫くざれ歌を詠む人はありませんでした、只だ足利時代に出來た『七十一番職人歌合』を始めとして、永正五年の『永正狂歌合』や其外『十二類歌合』『調度歌合』等が皆狂體の歌で有ましたけれども、惜い事には其の作者の名が傳はつて居ません、『七十一番職人歌合』は單行本にも有ますから之を略する事として、左に『永正狂歌合』と『調度歌合』の歌各十首づゝを掲げませう。

永正五年正月二日狂歌合

けさ照らす日なたぼこりに貧乏の神代の春や立かへるらん

ふる年の疊たゝきてしきをんが風呂のほこりも春や立らん

春たつといふばかりにや三さひの時も霞みてけさは見ゆ覽

節分にばけそこなひてふる衣きたる春こそをかしかりけれ
御禮とて群つゝ人の來るのみぞあたら閑居の春には有ける
今は世にめたと醉たる我なれど酒がなければ斷酒をぞする
錢米はてうち拂ひて露のみのおきどころ無き年をこそ取れ
登りたさ燃ゆるばかりに思へども山におひつくさしも草哉
世の中は正月小袖けふたつをしらみ布子のうらみてぞ着る
東國もとしを重ぬる紙ぎぬやつくり貧ばふしても見ゆらん

調度歌合

知らせばやくる宵毎に燈し火のあかしの浦にもえ渡るとも　　こうだい
埋火の下に焦るゝかひもなくちり灰とのみ立つうき名かな　　すびつ
みさをにも涙のかゝるこひ衣あはぬ限りはほされやはする　　臺の竿
妹にこひうき年月をふる屛風骨もあらはにやせなりにけり　　屛風
戀すてふ我うき名のみ高つきにもりし涙ぞくひてかひなき　　たかつき

ひく人の心かはらばおなじ世の契りものちやうすくなる覽　　茶うす

袖かけて硯をならしかく文と人にすみつくゑともならなん　　つくゑ

老人の力となれるかひもなし身さへくるしき戀のみちには　　けうそく

みきとだに人は今更思はぬをしひてうしとは猶うらみまし　　てうし

口にさていつか漏らさん思ひせく心の水のわきかへる身を　　水がめ

それから後ち。室町時代の末に山崎宗鑑といふ人が連歌を作る傍ら好んで狂歌も詠んだとの事ですが、私は此人の

かしましゝ此里過ぎよほとゝぎす都のうつけいかに待つらん

といふ狂歌の外は餘り多く見た事が有ません、憶ふに和歌連歌の力を以てたまに狂歌も詠んだといふ位の事で、無論狂歌の專門家では無かつたのでせう(宗鑑は天文十二年十二月二日歿す年八十九)

是れより少し後れて、龍野の城主であつた木下長嘯子（名は勝俊慶安三年六月歿す年八十一）も折好んで狂歌を詠んだとの事で、世に傳はつて居る長嘯子の詠は

みな人のこしをれ歌をよみおきてあたら櫻を杖にこそつけ

こと問はんこがね花さく山吹はみちのくよりやゐでの里人
しら雪は冬さく梅のかくれ蓑かくれがさ着て何にほふらん

の類で、どことなく力のある風調のやうに見えます。長嘯子と同時代に京都に松永貞德（狂號長頭丸）といふのが居て、和歌俳諧の外盛んに狂歌もくちずさみ『貞德百首』といふ家集を著したとの事です、此の百首以外に『古今夷曲集』に掲げてあるだけでも貞德の狂歌は五十二首もありますから、隨分熱心に狂歌を唱導したものと見え、或人の說では貞德は狂歌に落首體を詠む事を嚴禁し、門人に一々落首を詠まぬといふ誓紙を書かせた後ち之を敎へたといふ事であります（貞德は承應二年十一月十五日歿す年八十三）例に依て貞德の狂歌十首を左に掲げます。

年男あふて日數もたゝざるにはやくも解ける雪をんなかな
しら壁をつけたる宿の庭にさく花は豆腐のうばざくらかな
紫のふどしに似たり藤のはな松のふぐりを咲いてつゝめば
卯の花はどこから降れるしら雪と空にふしんの雲や立らん
陳皮にはならぬ先から橘の匂ひをきくぞ氣のくすりなる

賣ためて錢口おほく結ぶべし是れほど酒がいづみなりせば

涼しさを捲きこめて來る文月は一葉の風のちらしがきなり

落武者のおづるも道理薄の穗いり口をまねく鉾に似たれば

たぎらする茶の湯の廬路の下草にりん〳〵と鳴く松蟲の聲

風次第あなたこなたに立ち騷ぎ波の音さへちどりがけかな

同じ頃京都に雄長老といふ人が居て狂歌を詠み『新撰狂歌集』といふのを著したとの事です、此人は細川幽齋公の姉で建仁寺の如是院に居られた宮川尼のひとり子で、幼い頃入道して永雄と號し後ち建仁寺の長老に進まれたので、永雄長老といふべきを略して雄長老と呼んだのです（雄長老稱ニ英甫和尚ニ名ハ永雄若州武田氏の出、天正十四年十一月建仁寺塔中如是院に入りて長老たり、慶長七年九月十六日寂す）私は此人の『詠百首狂歌』といふものを所藏して居ますが、夫れは上編に雄長老の百首に也足軒の判の詞あるものを載せ、下編には古へよりの狂歌落書等を掲げてありますが、其歌は貞德に及ばず且餘り飄逸に過ぎ、殊に卑猥なる言葉をも勝手に讀み入れて居るのは此人の疵だらうと存じます。雄長老の狂歌十首を掲げて見ますれば、

春のくるしるしを見せて神垣や三輪の杉針立つかすみかな
櫻にはあらぬ春べをこきまぜてえだをたれたるはこ柳かな
まとひつゝ藤にしたゝか締られて難儀さうなる松ふぐり哉
春の日は長槍なれどさゝのはの一夜ばかりになれる石づき
夏の夜のふすかとすればほとゝぎすひる一聲にあくる東雲
よる毎に式部がそゝや洗ふらし結ぶいづみの水のくさゝは
花の露も日かげうつれば蛭て鹽晝はしほ／＼となれる朝顔
壺のうちに造りおきたる菊の酒口を開けば花の香ぞする
鬼はうち福をば外へ出すとも年ひとつゞつよらせずもがな
橋だての松のふぐりもいり海の浪もてぬらす文珠じりかな

の類で、貞德の温雅なるに較べると稍や品卑しく調拙ないものゝやうに見えます、又世俗小野小町が雨乞の歌だと傳へて居る「ことわりや日の本ならば照りもせめさればとて又天が下なり」（一に下の句去とては又天が下とはに作る）といふのは此の『詠百首』にある讀み人知れずの狂歌で、誠

の小町の歌は「あめにます神もみまさば立さわぎ天の戸がはの樋口あけたまへ」といふので有ます、慶安の頃江戸に石川未得（通稱又左衞門寛文九年七月十八日歿す年八十餘）といふ人があつて好んで狂歌を詠み『吾吟我集』と題する家集を著して居ます、此人は狂歌の天才があつたと見えて、學問の力のない割合には中々面白い秀吟が澤山あります、殊に吾吟我集の自序は古今和歌集かなの序をもじつたもので、是れが恐らく狂歌師が狂文を書いた嚆矢だらうと思ひます、其文は

やま川歌は人のとる早苗を種として、あまたの稲のことの葉とぞ成れりける、里々にある人ことわざ繁きものなれば、心におもふ事を麥つき籾する臼につけていひ出せるなり、花に琴ひく鶯水にあやおる蛙の聲を聞けば、いきとし池の端の蚯蚓いづれか歌をうたはざりける、力をも入れずして合槌を動かし、目の見えぬごぜ座頭をもあはれと思はせ、男馴れぬをんなをも和らげ猛きもの丶ふの心をもうからかすは小歌なり、此歌雨降りのさびしき時よりやいで來にけんしかありて世にはやる事は久かたの天が下てる日に鞠つく姉にはじまり、あらがねの土をこねては壁ぬるすさのをの子の口ずさびよりぞ起りける（下略）

未得の狂歌十首

空にはるかすみのきぬは篩かやこまかになりて落つる春雨

義朝へ文のつかひにあらねどもときはの里にかへる雁がね

嵐こそあいさうなけれ散る花の跡にぎやかす峰のしらくも

すがりても引とゞめまし行く春の霞の袖の手にしさはらば

頼政にあらねどけふは引とりてあやめを軒のつまに見る哉

立ちあへずはや吹そむる秋風はこらへ袋の緒や解けぬらん

まばらなる軒のあなよりかげ見れば月の鼠も桁はしるなり

六位より五位にやのぼる位山木々のみどりもあかくなる秋

節分の夜半に蒔きたるいり豆も花さく春のたねとこそなれ

活計にはらのふくるゝ世にあへば天下たいへをこく土萬民

又未得より二十年ばかり後れて、同じ江戸に半井卜養（名は奇雲延寶六年十二月二十六日歿す年七十二）といふのが盛んに狂歌を詠じ『卜養狂歌集』といふのを遺して居ます。併し其の狂才は未得よりも數段劣り、どうも輕佻で浮いた姿のものが多いやうですが、是れは卜養が只だ一時の座興を

添へん爲めに詠んだ卽吟のものが多かつた故で、唐衣橘洲も、

近き頃半井卜養など、頗る小手の利きたるに任せ、席上にて人々の需めをふさぐとて、あらぬ體を多く詠めるも餘儀なき事なり、それが習はしとなりて狂歌師とさへ云へば達吟なるものと人々の需めよんどころなくその責を塞がんとて、無下に拙き歌よみて恥を顯さんより、不達者ものと云はるゝとも善き歌の一首も詠まんこそ風流の詮もあるべけれ。

と席上の濫吟を嘆じて居ります。

卜養の狂歌十首

やり梅をこだちの椿受とめて花のいのちは生けてこそ見れ

三味線のちりてれてんを過すとも地にさんさがり啼け時鳥

せんざいにおきな草こそ立葵囃せとつぱいひやりたんぽゝ

更科やをば捨のをばとむさし野のはら一つよりいでし名月

白むくと見るしら鷺の毛ごろもを縫ふあを柳の雪のしら絲

時しらぬ雪と眺めし人の名のなりひらめける不二の山かな

瓢箪のすゞり箱から駒が出たげにするすみと人のいはまし

山もあり又舟もあり川もありかずはひとふた三つまたの景

扨も年暮なばくれよくれ兼る師走のしはゝしはんぼのしは

借錢を脊中にせたらおいが身は年くれずとも物くれよかし

之等の調は後世落首體と賤しめたもので、私は之を眞の狂歌では無いと斷言します。

是れから又すこし後れた延寶年間、山城男山八幡の社僧に豐藏坊信海（名は孝雄元祿元年九月十三日歿す年五十三）といふのが有ました、此人は松花堂の門人で書を善くし又狂歌を好み、彼の鯛屋貞柳の師匠であつたのです、其の家集『鳩の杖集』を見ますと、概して調格に凜として引締つた處がなく、又どうも優雅流麗の點に缺けて居るやうに見えます。

手習ひの道にかなへと我れことし筆こゝろむる六十のはる

雁かへる常世の團子いかならん花はいづこもおなじ春の日

人間の種ならぬ花のさかりには雲のうへ野の心地こそすれ

美しやあやめの前の小袖より眞菰かぶつたちまき目につく

慰みに今朝ひろげたるふみ月は見ぬ世のひとの來る盆の前

わかきよりとしに一度の星あひは養生ふかきあまの川かな

くらきより黑き雲にぞ入にけるつゆほど照らせ芋の葉の月

閨まではおもひも寄らず門口にうき名と共に立くらすかな

三國の山の中でも富士は伽羅じやあの空だきの煙見るにも

何としてかしこ過ぎたる我身ぞやとめるは稀な年々のくれ

同じ頃大阪に生白堂行風（姓氏並に歿年月詳かならず）と云ふ人があつて『古今夷曲集』四冊『後撰夷曲集』三冊を著し、自分も亦狂歌を作りましたが、元來學問もなく才氣もなかつた人と見えて、感心すべき狂歌は有りません、後ち天明年間に六樹園飯盛が『百人一首狂歌袋』を撰んだ時、行風には取るべき秀逸が無いとて遂に同人の狂歌を載せなかつたと云ふ話です、行風の狂歌十首、

山眉にかすみを引きて腰すそも優なる春の立すがたかな

色に出て見ゆる女の智慧のみか梅も諸木のはなのさきなり

ともすれば花の顔さへ打ちらめ風の手くせをなほしてし哉

野に立ちて夜風ひきてや撫子のはなたれたりと見ゆる朝露
御簾ごしにながめりゝへば只ふみ月のすきうつしなり
月にあそべ五尺にあまる身なりとも一寸先は闇のうき世ぞ
二本づゝ日本のかどの松たけは千歳を千代の證據にや立つ
今は只こゝろもほれつ身もなえつ中風に似たり戀の病ひは
川舟を登すに似たり雙六はさいつひいつに手のひまが無い
大黒の手に持つ槌はたからより足にふまへし米うたんとや

成程是れでは六樹園が秀逸なしと嘆じたのは尤もだと思はれます。又時代は前後しますが、和州郡山の池田正式（歿年月詳かならず）伊勢の荒木田守武（天文十八年八月八日歿す年八十一）堂上では烏丸光廣卿（寛永十五年七月薨ず年六十）武家では細川幽齋（名は藤孝慶長十五年八月卒す年七十七）なども狂歌を善くし、正式は平群實柿、布留田造の變名で『堀河百首題狂歌集』を著し、守武にも『世の中百首』の作があります。

池田正式の狂歌十首

はげ山も霞そめぬる春の日にきんかあたまは猶ぞかゞやく
紅梅と名に呼れぬるおはしたの頬先にこそかは知られけれ
あちこちの手次もいらぬ傳授をば錢のさせたる呼子鳥かな
松の木のたまにかゝるは紫に染むしたおびのさがり藤かな
花の香を惜みてけふも着かへぬを袷もたぬと人や見るらん
ほたる火も夜討をするか夏草の青野が原にみだれ入るなり
餅ならば袖にも入れて萩の花みやこへはよきみやげ野の原
水ばなに風のふきしく秋の野はひげにも露の玉ぞ散りける
菊水をくみし彭祖が長いきもまことにはあらじろその八百
いつか我れ借錢乞に身をなして師走の果にはしりありかん

守武『世の中百首』の内十首

世の中に朝ゆふ腹をたつ田山もみぢな顔にさのみ散らしそ
世の中は物の稽古をするがなる富士の高根に名を揚げよ人

むらさきの色より深き世の中の慾には恥をかきつばたかな
世の中の人ををかしと思ふなよ人は此方やをかしかるらむ
世の中は寢みだれ髮の風情して昨日いひしやけふ變るらん
世の中に人をそねむは目に見えぬ鬼よりも猶おそろしき哉
春の夜の朧月夜と世の中のばくち打たぬにしくものは無し
世の中にせまじき物は我は顏そらごとぬすみ勝負いさかひ
虎にのりかたわれ舟に乘れるとも人の口端に乘るな世の中
世の中につくづく物を案ずれば嬉しきもあり悲しきもあり

寛永から享保にかけて、大阪の鯛屋貞柳（永田善八享保十九年八月十九日歿す年八十一）といふのが狂歌界に打つて出で、大に浪花の歌壇を賑はゝせました、此人は俳諧師長閑堂貞因の子で山城掾といふ菓子司の子で有ました、若い頃から父に就て俳諧の道を修め、又前に述べた豐藏坊信海を師として狂歌を學びました、或る年奈良の製墨師古梅園が禁裡へ圓形の墨を獻上するのを見て、貞柳が「月ならで雲の上まですみのぼる是れはいかなるゆゑんなるらん」と詠んだ狂歌が、ゆくりな

く叡聞に達し時の　天皇より由縁齋の號を賜はりました、著書には『狂歌家づと』『續家づと』『拾遺家づと』『狂歌置みやげ』『机の塵』等がありますが、續家づとに貞柳自らはしがきして

もろこし日の本の詩歌の達人の沙汰したまふ六儀の中にもあらず、亦學文をして飛花落葉を觀じつゝよめる狂歌にもあらず、雪のあした風の夕にもさびしき下戸の爲めに一首をつぶやきぬれば、疑ひなく興を催し、底意は正道に入れんと思ひとりて、箔の小袖に繩帶したる姿によみ出る外に、別の習ひ候はず、但し三鳥三種と申す事は古今集の上にての事に候、若他をそしるの落首をよみ候はゞ和歌三神の御罰を蒙り、信海法印半井卜養二仙の教へにはづれ、本意に背き候べし、狂歌を詠まん人はたとひ廿一代集をそらんずるとも、一文不智のひやうきんらしく口ずさみて、尼入道無智の輩の耳をもよろこばしめ、古事連歌の振をせずしてたゞ一向に道歌を宗とすべし。

と說いて居ます、此の箔の小袖に繩帶したる姿に詠むべしといふのが、貞柳が狂歌の理想で有ませうが、なんぼ狂歌でも箔の小袖に繩帶はあまりに不釣合だとて、後人の非難の的になつて居ます。

貞柳は滑稽の才に富み、其の狂歌にも趣向だけは面白いのもありますが、私の見る所では其の口調

が概ね緩漫で奇警に乏しく、且大阪訛りでも野鄙な俗語でも勝手次第に詠込む風があるので、何とやら下品に聞えてどうも感興を與へる事が少いのは此人の爲めに殘念に思ひます。併し是迄の狂歌は歌人や連歌師や又は俳諧師などが、慰み半分其の片手間に詠んで居たのですが、此の貞柳に至つて始めて狂歌が獨立し、且其の口調が卑近なだけに却て俗人に歡迎せられて評判俄かに高まり、大阪地方では兒童走卒も貞柳の名を知らぬ者なく、其門人も五百人を降らなかつたと云ふ事ですから學力は別として狂歌を流行らせた點は、兎も角も貞柳の功績に歸せなければなりますまい。(貞柳の狂歌十首は後に掲ぐ)

又同時代に京都の公家正親町公通卿(風水軒白玉翁と號す享保十八年七月十二日薨ず年八十一)も狂歌を好み、『雅宴醉興集』といふ家集を著して居ます、其中の十首を左に拔萃しますれば、

家ごとに注連かざり繩くるとしの德となりある神の棚かな

春かぜの吹けども笛の曲もなく梅の花のみちりやたらりら

舞臺よりとんだと思ひきりがやつ一えだくれよ清水のはな

山蜂のすがたに花の似たるゆゑ匂ひやとほく人を追ふらん。

灰吹をたゝく水鷄の音すなりきせるのらうのみじか夜の月
落馬せし嵯峨野の露のふる事を偲ぶやうにも鳴くくつわ蟲
ふか草の露の下かぜさむさうにすくむ鶉のころもみじかし
雪降らば僞はりのなき世とぞ知るからすを鷺の人の言の葉
迷はじなあふ坂までと思ひたつ三里のもぐさ燃ゆる戀路は

福祿壽の賛

つく〴〵と見れば短かき頭かないのちながきに思ひ比べて

と云ふやうな調で、學問があつた丈けに高尙にして渾厚……感服すべきものはあれど其代り腹を抱へて笑ふやうな作には乏しく、是れが貞柳とは反對に、盲千人の俗人に歡ばれなかつた所以でせう、併し唐衣橘洲などは白玉翁の風を慕うたと見えて、

余額髪の頃より和歌を賀邸先生（內山椿軒）に學び、二十歲ばかりより戲歌の癖あり、しかも貞柳卜養の風を庶幾せず、たゞに曉月の高尙なる幽齋の溫雅なる、未得の俊逸、白玉翁の清爽なる姿を慕ひ、ことにつけて口あみをになひ出し侍り、云々

と云つて居りますから一部の人からは歡ばれたもので、兎も角此翁の狂詠はよく咀嚼して味ふべき値ひのあるものだらうと信じます。

明和のころ、洛東粟田口に蒼松亭清樂（通稱不詳）といふ隱れたる狂歌師がありました、矢張り貞柳派の口調ではあるが、中々熱心な人と見えて『狂歌卷轆轤』といふ家集の中に、廻文の狂歌ばかり五十首も詠んで居ます、素より廻文の事ゆゑ意味の徹底しないのも有ますけれども、左に十首だけを掲げます。

今朝は屠蘇ものもことぶこ東雲ののし昆布どこものもぞとは酒

羽根のす日くうもかすまず木々のえのきゝすますかも鶯の音は

ながき名やもゝとせもいく雛の日となびくいもせと桃やなぎ哉

やさし只日を重ね見しよき花は來よしみねさかおびたゞしさや

さで彥をまつらが浪のかしこゝ鹿のみながらつまを戀ひてさ

みの笠の日をもさびしき時雨すれくじきしひざも老のさがのみ

額づくは祈念し鈴とかしは手はしかとすゞしむ禰宜はくづかぬ

ぬぎのこしながる涙かのごはねば此かたみなるかなしこのきぬ
出し月をつねに待つ夜かたまのよのまだかよ妻の寢つ起つして
見る雪にいづれ白髪のむつかし賦つむのから知れついに消る身
同じ頃江戸に白鯉館卯雲（木室七左衛門天明三年五月某日歿す年七十六）といふ人があつて折々狂歌をくちずさみ『今日歌集』といふのを世に殘し、尾張の俳士半掃庵也有（橫井孫右衛門天明三年六月十六日歿す年八十二）も螇丸と號して狂歌を詠じ『行々子』と題する家集がありますが、一一之等のお話しを致しますと冗長にわたりますから、題を改めて次の天明調狂歌談に移りませう。

天明調狂歌の勃興

鯛屋貞柳の歿後は其の門人芥川貞佐（號桃縁齋安永八年正月十二日歿す年八十一）如雲舍紫笛（同八年八月十六日歿す年五十四）栗柯亭木端（安永二年七月七日歿す）一本亭芙蓉花（平野氏天明三年正月廿四日歿す年七十三）玉雲齋貞右（名勝房寬政二年正月廿四日歿す年五十七）等の力で、大阪の狂歌界はやつと維持されて居ました。就中貞右は別號を混沌軒國丸と呼び、師貞柳の衣

鉢を傳ふるだけの實力は無かつたにもせよ、門人も頗る多く可なり幅を利かせて居た人で、今日まで其流を汲み丸派と稱して何丸何丸と名乘る狂歌師が、大阪に數十名殘つて居ます。併し貞柳の死後大阪の狂歌はます／＼亂れて野卑に傾き、殆ど落首と區別の付かぬやうに成つて仕舞ひました。此時に當つて江戸では唐衣橘洲（醉竹庵小島謙之）四方赤良（蜀山人太田南畝）朱樂菅江（淮南堂山崎景貫）等が寄り／＼集會して、ほんの一時の座興の爲めに詠んで居た狂歌が意外にも江戸ッ子の人氣に投じて大評判となり、誰も彼も其盟に加はつて天明年間には捲土重來の勢ひを以て文藝界に雄飛し、終に天明調狂歌の名を擅まゝにするに至つたのです。此の起原に就ては蜀山人は『奴凧』に記して、

江戸にて狂歌の會を始めしは、安永四年二月廿三日四谷忍原横町に住める小島橘洲なり、其時會せし者わづかに四五人なりき、大根太木、飛塵馬蹄、平秩東作、四方赤良等なり、其後ち大根太木きり金を請取りに行き、市令の腰掛にありてかたへに湖月抄を讀むえせ者ありしを尋ぬれば、大野屋喜三郎といへる者にて、京橋北紺屋町の湯屋なり、是れ元の木綱が事なり、此妻も亦狂歌をたしなみて智慧内子と云へり、夫れより四方赤良を尋ね來り、太木木綱ともなひて橘洲を訪ひ

しなり、橘洲に唐衣といへる號を付けしは椿軒先生なり、

と云つて居るから、安永年間が最初であつたやうに見えますが、私が所藏の古寫本『明和狂歌合』に據ると橘洲、赤良を始め平秩東作、元の木網（號高松）坡柳、秀安（此二人姓名不詳）の六人が、明和六年に畫賛狂歌合を催し、當時の先輩内山椿軒、萩原宗固の兩翁に其の批判を請うて居て、是れには蜀山人も自ら

> いにし明和六年のころ、唐衣橘洲のもとに始めて狂歌の會興行しける次の歳の春、三輪花信齋にくさ／＼の繪をかゝしめ同じざれ歌の友三たり四たりに歌をよましめ、百華庵宗固と椿軒賀邸先生との二人の判を乞ひし事あり、其反故のいかにして世に殘りけん、青山堂のあるじ上梓して予が一言を乞ふにまかせて、其ことのよしを述ぶるになん、

と序して居りますから、私は江戸（天明調）の狂歌が呱々の聲を揚げて産れ出たのは、實に明和六年であると改めます。扨どういふ動機で天明調狂歌がかく全盛を極むるに至つたかを考へて見ますと、當時の和歌者流は各々自家の流派を守つて門戸を張り、和歌をして段々狹く窮屈なものに仕立てる風に傾いて居たので、其歌は萬葉時代の雄大な趣きが消滅し、只纖巧とか優美とかいふ一方に

のみ偏して、宛も箱庭的のものばかり詠むやうになつたのと、一方大阪（貞柳派）の狂歌は地口駄洒落で持切るといふ、卑しい口調に流れて居たゆゑ、斯道に趣味ある人々も少々鼻について居る處へ和歌の如く眞面目ならず落首の如く卑猥ならず、而かも雅なるも俗なるも古きも新しきも、凡そ目に觸れ耳に聞ゆる事柄は何でも取つて材料とし、輕快なる口調を以て歌ひ出した此の平民的滑稽歌が、忽ち人氣に叶つたのと、今一つは當時世の中が泰平で、劇場花街も繁昌を極め、錦繪小說の出版も飛ぶやうに賣れるといふ時節ゆゑ、都人士も日夜遊戲にばかり身を入れて、アヽでも無いカウでも無いと、其の遊び方を工夫して居る矢先に、之を聞いてさへ興味深く、况して自ら詠むのは猶更面白いといふ狂歌が大に歡迎された譯で、謂はゞ狂歌は其の時代の生み出した、江戸の一種の產物だと申すのが適當だらうと思ひます。又此の狂歌を唱導した橘洲、赤良菅江の三人とも、偶然にも儒家にして國學を兼ねたる內山椿軒（名は淳時通稱傳藏天明八年十一月九日に歿す）の門から出たのも面白い現象で……後人は此の三人を狂歌の三大家と稱へました。

そこで此時に當つて大に注目すべきは、

（一）狂歌の主權が大阪を去つて江戸に移つたと共に、終に貞柳一派を壓倒するに至つた事

（二）其の調格の緩漫にして野鄙なるものが、全く快活奇抜なるものに變じた事

（三）狂歌が全然歌人や俳諧師の手を離れて獨立し、專門の一文藝となつたと共に和歌俳句と對立……寧ろ之を凌駕……する程の勢力を保つた事

（四）當時の狂歌師は俳諧者の如く、點料を收めて活計を營んだのでは無く之を風流の一遊戲として判者等は無報酬にて斯道を奬勵した事

（五）是までは世人から一口に狂歌師と賤しめられたのが、赤良等の起つに及んで其の人格を認められ、一般に尊敬せらるゝやうに成つた事

等で、一々其の例證もありますけれども煩はしいゆゑ茲には演べません、又この天明調狂歌の全盛期は、實に天明元年から寬政享和を經て文政の初めまで凡そ四十年間で、此間に狂歌の名人大家が續々として名乘を揚げ、各々腕にヨリを掛けて功名手柄を爭うたのです。天明三年に普栗釣方が著した『狂歌知足振』に載せてある狂歌師の名前だけでも

數寄屋連	筭木有政以下	五十九人
小石川連	山道高彦以下	五十一人

吉原連　加保茶元成以下　十六人
堺町連　花道つらね以下　二十四人
芝　連　大木戸黑牛以下　四十八人
本町連　大屋裏住以下　六十四人
四方連　峰の松風以下　六十三人

で都合二百廿五人あります、又天明五年版『狂歌評判俳優風』の序にも當時名高い狂歌師の家號を列擧して、

世の中の人には時の狂歌師と呼ばるゝ名こそをかしかりけれと詠みし頃は、小百年も前の事にて、其頃狂歌師はをかしな名を付ける許りにて、浮世を茶にする事のみ心得、物事不自由なりし代のことなるべし、今の世にいたりては言葉の花の大江戸の中に、いろは藏を建てし四里四方の狂歌問屋と呼ばるゝ大分限丸の屋、橘屋、四方屋の三軒の問屋を始めとして、其外濱邊屋、へづゝ屋などおの〳〵出店仕にせの繁昌、もう狂名でもあるまいと三升を成田屋、路考を濱村屋といふかくで、家名を以て呼ぶ事とはなりぬ、中にも本町の平野屋、金吹町の白子屋、

中村屋、日本橋の小さの、伯樂のぬか七、山城屋、駿河屋、龜井町の文笑、新川の春蟻、深川の榎木、櫓下のたび屋、土橋の大屋など東方のはえぬき、赤坂の加陪屋、小川町のこのこ屋、赤坂の澤瀉屋、小川屋、小石川の山道屋、扇巴屋の番頭、山の手の片隅にも板屋、くれ竹屋などは皆高はごの出てゐる屋敷方の出入りばかり、別けて此道のすきや河岸の菊壽、三河屋、大坂屋、八重垣の小島、ますだの息子、京橋の傳、銀座の常と聞いては色男と知り、一ッ目の龜さんが留守とは大かた向島であらうと悟り、元成は釣より古錢が好きだと先ばしる世の中、云々

とある通り、其頃の狂歌師は上み貴顯紳士より下も俳優娼妓に至るまで、あらゆる階級に渉り、狂歌が詠めぬと殆ど通人の交りが出來ぬといふ程の有樣でありました。夫れが後には全國に廣まり、寛政十二年版の『狂歌年代記』に四方連の狂歌師なき國々を知る歌として、

連なきは蝦夷琉球に釜山海硫黃ケ島に女護と韓唐

とある如く、五畿七道到る處天明調の狂歌を詠まぬ者は無いやうに成つたのです、そして其内で一方の旗頭ごも謂ふべき江戸狂歌界の僥將はどんな顔觸れかと云ふに、先づ左の人々であらうかと思ひます（橘洲、赤良、菅江の三人は已に前に述べましたから茲に再錄しません）

宿屋飯盛　石川雅望六樹園又五老翁と號す天保元年閏三月廿四日歿す年七十八
鹿津部眞顏　北川嘉兵衞、狂歌堂又四方歌垣と號す文政十二年六月六日歿す年七十七
つぶり光　岸宇右衞門、巴人亭と號す寛政八年四月十二日歿す年四十三
馬場金埒　通稱大坂屋甚兵衞、滄洲樓と號す文化四年十二月十日歿す享年不詳
　以上四人を狂歌四天王といふ
手柄岡持　平澤平格、名は常富朋誠堂と號す文化十年五月二十日歿す年七十九
元ノ木網　姓渡邊氏通稱大野屋喜三郎落栗庵と號す文化八年八月廿六日歿す年八十一
智惠内子　木網の妻通女文化四年五月十八日歿す年六十三
節松嫁々　朱樂菅江の妻孤月尼文化七年正月九日歿す六十六
大屋裏住　久須見氏、通稱白子屋孫右衞門、文化七年五月十一日歿す年七十七
鳴瀧音人　池澤權右衞門、號古今亭、寛政八年六月歿す年七十九
三陀羅法師　清野正恒初號一葉、千秋庵と號す文化十一年八月八日歿す年八十四
平秩東作　立松東蒙、通稱稻毛屋金右衞門、寛政元年三月八日歿す年六十四

紀定丸　吉見儀助、初號野原雲輔、天保十二年正月十六日歿す年七十六

淺草市人　大垣氏通稱伊勢屋久右衞門、壺々陣人と號す文政三年十二月廿九日歿す年六十六

濱邊黑人　斯波氏通稱三河屋半兵衞、寛政二年五月十八日歿す年七十八

酒月米人　通稱榎本治兵衞、吾友軒と號す歿年月不詳

森羅萬象　森島中良、初號竹杖爲輕、文化五年十二月四日歿す年五十五

普栗釣方　通稱奈良屋淸吉、天明三年八月廿四日歿す年四十四

酒上熟寢　島田左内、天明四年五月十九日歿す年六十

腹唐秋人　中井嘉右衞門號董堂、文政四年七月廿四日歿す年六十四

俵船積　大竹三左衞門、文政三年十月十八日歿す

山陽堂山陽　能勢嘉門、初號大非千本、歿年月不詳

便々館湖鯉鮒　大久保平兵衞、初號桶林堂、文政元年四月五日歿す年七十

芍藥亭長根　本阿彌光悅七世の孫通稱三郎兵衞、弘化二年二月十日歿す年七十九

倚左堂俊滿　窪田易兵衞、初號紫蘭、文政三年九月二十日歿す年六十四

千種庵霜解　山中要助、初號道和留、文化八年四月廿六日歿す年五十一
淺草干則　熊岡友八、二世桑楊庵、文政二年十一月十四日歿す
桃の本雛丸　彌生庵と號す、姓氏未詳、天保元年三月廿五日歿す
土師掻安　榎本治右衞門、天明八年五月十日歿す
唐來參和　加藤源藏、號伊豆亭文化七年正月廿五日歿す年六十七
筆綾人　久野與兵衞、庭訓舍と號す文化十年二月廿三日歿す
奇々羅金鷄　畑道龍、燕石樓と號す文化六年正月廿一日歿す年四十二
塵外樓淸澄　中村淸三郎、石川雅望の男、天保五年四月十五日歿す年四十九
文々舍蟹子丸　久保泰十郎、天保八年三月九日歿す年五十八
芦邊田鶴丸　姓不詳、名治郎兵衞、天保六年十月三日歿す年七十七
山道高彥　通稱山口彥三郎、號馬蘭亭、文化十三年九月十日歿す
網破損針金　北三左衞門、梅園靜廬と號す、嘉永元年三月廿九日歿す年八十一
以下略す

猶當時有名な小說家曲亭馬琴、山東京傳、式亭三馬、烏亭焉馬、十返舍一九、柳亭種彥なども皆狂歌師と交はり、孰れも狂歌を巧みに詠みました。

かくの如く狂歌が盛んになつたに連れて、自然と群雄割據の姿となり、各自其の門戶を張つて弟子を仕立てる事となり、其の社中を何連何側と稱へるやうに成りました、先づ赤良の社中を四方側（後ち眞顏其の棟梁となる）と云ひ、橘洲の醉竹側、菅江のを一連、飯盛のを五側といふの類で、此外本町側、壺側、伯樂側、巴水連、芍藥連などが組織せられ、競うて月次會等を催して居ましたが、此會には必ず二三の畫家が出席して畫をかき、狂歌師は之に卽興の贊をして慰んだとの事です。

喜多村節信著の『嬉遊笑覽』にも

安永天明の頃狂歌の發會などは未だ行儀正しくして、出席の者は左右に別れ、たとへば左の側には書畫人居れば右の方に狂歌師控へて、望み人は好みの畫人にかいて貰ひ、すぐ向う側に坐したる狂歌師何某に贊を乞ふ事となれり、

と記してあります、又其頃江戶の狂歌師が大阪の狂歌を蔑視したのは甚だしいもので、貞柳の所謂「箔の小袖に繩の帶」に就ては酒月米人が

はなやかなる言葉を箔の小袖にたとへ、狂言のをかしみを繩の帶にたとへて諭したるは沙汰の限りの僻ごとなり、深草や鶉衣のてゝらにも繩の帶はいかばかりかいぶせかるべきを、況して箔の小袖なるをや、狂歌はおほけなくも無心體とさへみゆるされ蒙りて上下そぐはぬ奇異の曲者にはあらず、さるから帝王一の人と申すも翫びたまはぬ事かは、繩の帶錦帳のみもとにして何の用かある云々、

と論じたる外、誰も彼も異口同音に之を攻擊し、蜀山人も亦「眞顏に判者を讓る詞」と云ふ文中に

浪花調狂歌に就て、

言因（貞柳）とかやいひししれ者、いかなるゆゑんの侍りしにや、雲の上までずみのぼる烟の名を立てしより、其流をくみ其ひぢりこをあぐる輩、京わらべの輿歌などいへるあられもなき名をつくりて、はて〳〵は何の玉とかへる光なき言の葉もいで來にけり、

と嘲つて居ます、文中何の玉云々とあるは、天明三年正月大阪の一本亭芙蓉花が江戶に下り、寳珠の畫に自分が「磨いたら磨いただけは光るなり性根玉でも何の玉でも」といふ狂歌を賛した額を、淺草の觀音堂へ奉納したのを、或る狂歌師が見て「磨いても磨いただけは光るまじこんな狂歌の性

根玉では」と譏つた事を指したもので……つまり江戸と大阪の狂歌師は其頃は頗る中が惡く、唯だ交際を求めて文通などしたのは大阪の佐伯蕪坊（文化十二年六月十三日歿す）京都の加茂季鷹（天保十三年九月十八日歿す年九十一）ぐらゐの者だつたといふ事であります。

さて文化の初め頃、江戸の狂歌界に思ひがけなく一つの葛藤が生じました、それは蜀山人の四方側を受繼いだ狂歌堂眞顔が、狂歌は『古今集』以下の俳諧歌と同じものだとの説を立て、自分等の詠む狂歌を俳諧歌と改め、門人達にも專ら滑稽趣味に乏しい和歌のぬめりを見たやうな、纎巧な物のみを詠ませる事となりました、五側の六樹園飯盛は之を見てかたはら痛く思ひ、狂歌はどこまでも狂歌として詠むべきを、何も名稱だけ立派にして、僭越にも俳諧歌など丶稱へるには及ばぬ事だと駁したので、茲に端なくも眞顔と飯盛とは相反目する事となり、雙方とも固く自説を取つて動かず、たうとう兩人は數年間絶交するに至りました。私は事の茲に至つた原因を考へて見ますと、是れは全く眞顔の商略から出た事であらうと思ひます、元來眞顔は學問に於ては迚も飯盛と太刀打は出來ないのですが、世才に長じた人ですから狂歌を盛んにするにはどうしても歌人や上流社會の助けを得ねばならぬ、夫れに就ては狂歌など丶人聞きの惡い卑しい名目では、從來狂歌を敵視して居

た和歌者流の心を融和する事が出來ないから、狂歌も和歌の一派だといふ事を裏書する爲めに、之を俳諧歌と改めて歌人の同情を買ひ、追々上流社會をも取込まうといふ考へから出たものらしく、殊に狂歌師は點料を取らぬ内規であつたのに、獨り眞顔は狂歌を商賣として寛政六年蜀山人から四方姓を讓られ蜀山の後を襲うて四方側の判者となつた以來は、百首に付何程と點料を定めて收入を計つて居たのですから、斯くして貴顯の人々をも我々の連中に取入れ、狂歌を盛んにすると共に、自分の懷の增收を計つたのでは有るまいか、此事は後年に至つて眞顔に梅の門眞門（長州府中城主毛利元義侯）狂歌堂島人（肥後人吉城主相良賴德）歌垣綾麿（河内の九鬼隆度侯）倭文歌垣綾浪（池ノ端板倉家當主）夷曲堂鈍人（同隱居）閑春樓花友（築地の伊藤侯）紅翠亭群子（水野石見守宗）抔の大小名の門人が出來た結果や、又文政十一年五月に眞顔が京都二條家から俳諧歌の宗匠號を授かつた當時、紫の紐で髻を結ひ烏帽子帥干の姿で簾の内にすまし込んで來客に面會した抔といふ、俗人おどかしの擧動から見ても、概ね推測が出來るやうです、然るに飯盛は之に反して、和漢の學問に造詣深くして一個の識見を備へ、銅臭などは微塵もなく、且敢て世に諂ふ意もなかつたのは「歌よみは下手こそよけれ天つちの動き出してたまるものかは」と放言して、時の歌人の反感

を買うたといふ一事でも分つて居ますが、只だ飯盛は幾分か傲慢な風があつた爲めに、世の中に敵が多かつたのは事實だと思ひます、左に掲げる『嬉遊笑覽』の一節も飯盛の方を貶して居ますが、玆には參考までに載せて置きます。

其後暫く廢れしが安永ごろ又流行だして、菅江、赤良、橘洲、木網を始めとして其徒あまた出來ぬ、皆慰みわざとして點料など取る事なし、其後これをもて業としたる者は眞顏なり、別號を俳諧歌場または四方歌垣などゝ云へり、俳諧歌場はおほけなく歌垣は日本紀に見えたるを、いかに心得ひがめて斯かる名を付けたる事ぞいとをかし、六樹園と號する者は旅人宿にて、小傳馬町に住めり、此處はむかし六本木といへる馬繫ぎ宿なりしと云ふ、之に依りていま旅籠屋借馬などあること江戸砂子に見たり、眞顏はおのれ高くかまへてよく僞りごとをして社中の愚物を欺けり飯盛は大言して人を謗る本性にて世に一ふし新奇を唱へんとて狂歌は俳諧歌にあらず落首より出たものなりとて其徒をして卑しき事を旨と詠ませたり（中略）されどまめに筆とることを得て、雅言集覽などを著したる其の功勞とまれかくまれ稱すべし

此狂歌の點料の事に就て逸話があります、夫れは天明何年かの歲の暮に元の木網の許へ、懷紙に金

一歩を添へて狂歌の添削を乞ひに來た人があつたのを、後にて氣が付き其金を返す序に、木網の送つた手紙は、

いにしへの柯求といへる者歌あつむる頃、板の料とて錢を添へて贈りける人ありしを返すとて「俳諧のてんやものならさもあらん錢とは和歌のうらみなりけり」と詠て包紙にかいつけて返し侍りしと聞けば、我もこがね返すとて、

千金の春をとなりに置くゆゑにけふの一歩はまづ返すなり

といふのでしたが、頼んだ人も之を詫びて今度は狂歌二首の添削を乞ふとて、

かへされし一歩しゞうの金言によみ歌ばかり二しゆぞ送れる

と返歌したとの事です、今日でも狂歌の判者は點料を取らぬ事になつて居ますが、併し狂歌を出版する時の料に當てんとて、入花といふものを取る事はあるので、蜀山人の『奴凧』にも

其頃本芝二丁目に三河屋半兵衛といへる本屋、剃髪して齒を黑く染め青き道服を着たり、色黑くふとりたる男なり、狂名を濱邊黑人と呼ぶ皆齒までの黑人とあだなせり、此人狂歌の點をして半紙に摺り出す版料を取るを入花と云へり、今の狂歌の點料を入花といふの初めなり、

とあります。

お話が前に戻りますが、眞顔飯盛間爭論の影響を受けて、江戸の狂歌は大別して俳諧歌派と純狂歌派との二派に別れましたが、雙方競爭の結果文化の末には眞顔の門人三千人、飯盛の門人も亦三千人と註せられ、人數に於ては敢て優劣は無かつたやうです、併し純狂歌派は專ら江戸に用ひられ、俳諧體派は地方に勢力を得た傾きがあつて、式亭三馬の著した『俳諧歌觽』に據れば、四方側は關東を始めとして北は陸奥、西は筑前まで手を延ばして其の地方々々に判者を置いて居ますが、純狂歌派の五側では漫りに判者を許すといふ事は致しませんでしたから、地方の判者は至つて少かつたやうに思ひます、此の判者に進めるといふのには、別に試驗法があつた譯ではありませんが、凡そ先輩大家の衆議に依つて推擧する習慣であつたのに、眞顔は實力の如何を問はず身分あり小金のある人などを無闇に判者にするといふ俑を作つたので、是れも亦飯盛の癪に障つたらしく、左の文（昔語狂歌集序）の如きも暗に四方側に當つて居るのではなからうかと思はれます。

雅びたるをやまと歌としあざれたるをもて狂歌と呼ぶ、たゞ言葉に雅俗あるのみならず其趣きも大にたがへり、此さかひを知らざる人は音樂をもてちりからに混じ、唐の芋をもて楚王に獻ぜん

とす、夫れ明月を鍋燒となし燒味噌に鼻緒をすげんとするは、目玉のあかざる過ちなり、溫石なんぞ大通のたもとに入らんや、貫之躬恒のくりやを覗かず、藤六曉月が雪隱にだに上らずして、いかで味噌と糞とのけぢめをわかたん、判者々々とおしやますが、判者が文盲でてにはに疎くて、かんなも知らいで濟むものか、云々

又眞顏と飯盛とは何につけても競爭したやうで飯盛が『近江縣物語』といふ小說を著せば、眞顏も亦『月宵鄙物語』を作り、飯盛の『吾嬬なまり』を見ては眞顏も『四方歌垣戲文草』を編み、（是れは柳齋ちまたに編纂させたものなれど出版せずして止みたり）飯盛が馬琴、京傳等と交はつて意見を交換するのを見て、眞顏も三馬を味方につけて相談相手にした事が有ます、只だ飯盛の『都のてぶり』『北里十二時』の擬古文には到底及ばぬと諦めたのか、眞顏には終に此種類の狂文の著書が一冊もありませんでした。

久しく結んで解けなかつた眞顏飯盛のにらみ合も、文化十四年に至つて蜀山人の仲裁で、漸く雙方和解する事となり、此事に就て『戲作者小傳』には左の通り記してあります。

狂歌堂眞顏常に六樹園飯盛とその中むつまじからず、時に文化十四年丁丑年中村座顏見世狂言、

大名題看板『花雪和合太平記』に故坂東三津五郎、岩井杜若是まで其中不和にて、文化八辛未年より當年まで七ケ年の間一座の勤めなかりし處、雙方の連中より勸めにより終に熟談整ひ一座の勤めとなる、故に和合の二字を加へしと見えたり、其節蜀山人其の狂言見物の折から、飯盛眞顏常に其中睦まじからざりしをフト思ひ出し雙方への使者を馳せしに、兩人は何心なく劇場に來れるに蜀山人申けるは、秀佳杜若中直りより思ひ付き其方達も常々其中よろしからざれば、今日より以前の如く水魚の交り致すべしと和睦の盃事ありしと云ふ、其節互ひに詠める狂歌、

是までのだんまりの幕引かへし氣も相肩のもとの棒組　眞顏

膝と膝よい中むらの下棧敷二間つゞきの隔てだになし　飯盛

其後二三年目かに出版せられた『今樣職人盡狂歌合』は鍬形蕙齋の繪入で花、月、戀、述懷四題の狂歌を鐵の屋大門、五柳園一人の撰んだのに上編は眞顏、下編は飯盛が判の詞を書いたもので、是れが兩人和解の好記念とすべき出版物であります。

狂歌三大家の內菅江は寛政十年十二月十二日六十三歲で逝き橘洲は享和二年七月十八日六十歲で空しくなり、蜀人は前の二人よりも年の若いだけに生き延びましたが、是れも文政六年七十五歲で死

江戸の狂歌界は俄に凋落して淋しくなり、只是迄の惰力でやつと繼續して居るに過なかつたのです、そして文政の末より天保へかけて、芍藥亭長根の一派が踏止まり、文政調といふ俳諧體の歌を唱導して居ましたが、是れもさして發展するには至りませんでした、左に文政調を代表する長根の歌十首を載せます。

梅の花咲かんかぎりは縫ひながら笠宿りせよ雨のうぐひす

世の中に白く見えぬる花はみな吉野の山の葛にぞありける

此あたり若むらさきやさふらふと菫たづぬる春のみやびと

影もなきはつほとゝぎす蛙をやたづねて月の中に入りけん

春秋を知らざる蟬のしるしには孔子のなげきの森に鳴く也

かつら男にみせてほこらん盃のなかにも死なぬ藥ありきと

もみぢせし梢のほかに美くしきやどり木見する秋のいろ鳥

骨のなきものと見るまで降つみて海月に似たる雪のさし傘

鳥の毛にたとへし雪にくらぶれば梅の莟ぞたまごいろなる

大津畫の鬼やらふ聲きこゆなりみやこの春に近つあふみ路

之と同時に江戸中橋に盡語樓内匠（本田甚五郎文久元年五月十四日歿す年八十一）といふのが居て自ら天明老人と名乘り、狂歌道場を開いて天明調の復興を謀り、さもなき狂歌にまで高點をかけて社中の者を喜ばせ、又出版費を厭はずに『江都日千兩』『狂歌江都名所圖會』『狂歌百千鳥』『狂歌百物語』『狂歌四季人物』抔云ふ立派な狂歌集を發行して居ましたが、何分學力に乏かつたので終に之も振はずして明治維新となりました、併しまだ明治の十四五年頃までは古面翁、松壽翁、瓊舍二世緍馬屋、盛岡の千秋堂などの老人株が專ら誘導の任に當り東京に三百人の狂歌師は居たのです就中古面翁（藤木彥八）千秋堂（小本村司）の兩翁は誰が何と云つても狂歌軍殿りの勇將で、古面翁は『變玉あられ』其他數部の隨筆を、愛竹翁は『杜陵方言考』を著して居ます、打止めとして玆に兩翁の狂歌十首づゝを記して御覧に入れませう。

古面翁の狂歌十首

廣はたの色ある衣もさらしけりかすみ流るゝたま川のさと

折る事のかた山岸に咲にけり是れやゐがけるもちつゝじ花

むく／＼と生えん毛桃の花の色はさる歌よみの酔る顔かも

ひる寝する顔にすゞしくなき物はやぶ蚊の羽風蠅のぬれ足

日の木をそしる心のくされ儒者本箱をさへからにして干す

さうづかの婆々ア瓜さへ時をえていづれを見ても佛くさ市

ぽん／＼がいたいとうそをつきの夜に鼓のけいこ休む子狸

三合のこぬか雨さへ降らしえぬ狐はけふをはれのむこ入り

　　廿四孝の山本勘助を

もの〻ふの腰にほしがる片目貫ちんばながらも掘いだし物

　　文字鎖　題雑煮餅

上戸けさざふ煮を祝ふふと箸ももちにくしとは腹に思はじ

愛竹翁の狂歌十首

山住はうどに蕨を折りそへてうとは思はずわらひ居りけり

人のうへにたとへて盛りあやぶむは浮べる雲と見る櫻ばな

卯の花のしら波のみかたつ田山樹々はみどりの林なりけり

久方の星にまがへる白菊はあまの河原のよもぎとや云はん

縱といふ木はもみ出ずかへでとは云へど時雨に色かへて鳧

ちりくもる櫻だになしおいらくのなこそと思ふ年の關には

戀　蟲の名十

あふてふは名のみすなはちかへるだにいごゝくも聞人かありけん

源氏の紅葉賀を

さしかざす菊と紅葉を竝べては値打のちがふ黄金あかゞね

岡部六彌太を

秋の日の遊の岡べたゝずみて鐵漿つけやんま取りにける哉

八十八の年のはじめに

わが米は月日のねずみ喰ちらすやぶれ俵のこぼれさいはひ

それが今日では東京に判者と名乗る者わづかに十二三名で、本町側、松壽連、轡連、壽連等の落武者が心細く殘壘を守つて居るといふ見る影もない有樣で……以上が狂歌沿革の概略で御座います。

江戸の狂歌と大阪の狂歌

前項に江戸と大阪と狂歌の聲調に異なる點がある事を述べましたから、茲には今少し具體的にお話しを進めて見ませう、一體貞柳調と天明調との間にどれ程の相違があるかと云へば、それは土地の人情風俗が違ふやうに各々異なつた特徴があるのです、大阪の人は何事も悠長で念が入過ぎる代りに、頓智に乏しくそして濃厚を好む風があるのに反して、江戸の人は敏活でどこかに氣の利いた處があつて、そして淡白を好む傾きがあります、論より證據芝居でも落語でも俄狂言でも音曲でも江戸の方は輕快でさつぱりとして居るけれども、大阪の方は冗漫でしつツこい處があつてどうも輕快といふ趣きを缺いて居る、狂歌も亦同じ事で、江戸の詠み口は引締つて氣の利いた點がある、此氣の利くといふのが狂歌には大切な要素であるのに、大阪の口調は只ごて〳〵として居て此の妙味を存して居るものが少い、是れが卽ち江戸と大阪と狂歌の異なつて居る點で……私は曾て之を鮓に譬へた事が有ます、それは江戸の狂歌は握り鮓の如く、鮪とか小鰭とか一品の味を利かせ、隱し山葵をあしらつてヒリヽとした處もありますが、大阪の狂歌は押鮓の如くいろ〳〵な五もくを箱へ入

れて壓し詰めた物で、一寸と味へばうまいやうでも、嚙みしめて見ると却て其味が分りません……併し江戸の人は握り鮓を好み、大阪の人は箱鮓を好むのですから、狂歌もやはり江戸と大阪の風調の違ふのは自然の數だらうと思ひます、又前に述べた飯盛の純狂歌が比較的地方よりも江戸に用ひられ、眞顔の俳諧歌が江戸よりも却て地方に評判を得たのも、つまり氣の利いた狂歌は地方人の資格に適せなかつた證據でせう……斯く論じ來つて見ると、輕快な狂歌はどうしても江戸の特産物であつて、大阪の狂歌は到底之に及ばぬといふ結論になります。

尙ほ參考の爲め、左に大阪狂歌の代表者たる鯛屋貞柳の作と、天明調狂歌の主唱者唐衣橘洲の詠とを掲げますから、讀み較べてどちらが好いか御判斷を願ひます。

貞柳の狂歌十首

百人一首にどう有とても元日のあかつきばかりよき物はなし

春雨の徒然なる儘に下戸ならぬ友こそよけれさア呼びにやろ

散れば社いとゞ櫻はめでたけれけれども〳〵さうじやけれ共

これどうぢや啼け時鳥々々ほとゝぎすやよ明くるしのゝめ

螢こい女房どもの乳を呑ましよ黄金の釜は出よと出まいと
かくばかり死にともなう思ふ世中を羨やましくも月は常住
千ざいと祝ふ節句のおきな草さあらばすゞの酒を參らしよ
松茸は似たりや似たり何に似た花あやめにと匂はせておこ
神無月そりやこそ時雨僞りのなき世は知れたさつと休かし
此暮は諸事の商ひ利がなうて足らずがちなる大つごもり哉

橘洲の狂歌十首

やま姫の山づとめきて袂よりいだすは千代の初日なりけり
青柳の絲がらくりに花鳥のはるの音いろや引きいだすらん
文覺がこぶしの花はいろもなし西行ざくらゑみをふくめば
やみの夜に啼かぬ烏や聲たてん月のうまれぬさきの卯の花
ほとけでもよし君子でも蓮の花いざ舟よせて生け捕にせん
おほ江山いく野のあきは草かりの童子にまじる鬼のしこ草

菊のはな酒のゆかりに是れもまた憂ひをはらふ箒づくりか

ひとり見てあひ手ほしさの紅葉がり鬼とも酌まん林間の酒

ふみ込んで跡のつかぬぞ面白き火燵ながらの雪のあけぼの

掛とりのとはぬもつらし武藏鐙かゝらぬさまの年の暮をば

それから大阪の狂歌は貞柳からして兎角調格に意を用ふる事がなく、單に一首の趣向さへつけば其の仕立方はどうでもよいといふ風に詠んで居るとしか見えません、殊に字餘りでも字足らずでも一向平氣なものですが、狂歌とてもやはり歌から出たものゆゑ其の聲調をなだらかにして、吟誦の際感興を與へるやうに努めなければなりません、前に申した箱鮓でも箱の中にキチンと嵌つた形ちならばまだ賞翫が出來ますが、是れが箱の外へはみ出したり又は中で形が崩れて居るやうな手際では、迚も客への馳走には出されますまい、尤も和歌にも

ありそ海の浪間かきわけてかづく蜑の息もつぎあへず物をこそ思へ

といふ三十六文字、卽ち一句每に一字づゝ餘つて居る歌もありますが、吟誦して少しも耳障りにならぬのは、其餘つた字が皆喉音に屬するものばかりで有るからです、よし喉音でなくとも餘儀ない

場合は字餘りにするのも強ち惡いとは申しませんが、夫れは調格を紊らない範圍内に止めて貰ひたいものです、尚ほ貞柳派狂歌の事に就ては、友人秋の屋望成が自著の『狂歌文庫』(明治卅四年發行)に痛論してありますから、夫れを御一覽を願ひます。

狂歌と落首との區別

初めて狂歌を詠んで見やうかといふ人々の中には、狂歌と落首との區別をも辨へずに、狂歌とは語格、手爾遠波、音訓の假名遣ひにも構はずに、只地口や駄洒落のやうなものを三十一文字に纏めればよいのだと思つて居るのも有ますが、夫れは甚だしい心得違ひで、狂歌とても歌といふ字を名乘つて居る限りはそんな無法なものではなく、或る程度までは和歌の姿に據るべき夫れ相應の作法がある事を承知して貰ひたいのです、一體落首とはどんな物かと云へば、世々の軍記野史などに揭げてある時の政治軍事又は個人の言行等に就て、批評側に立つて詠み出したのが、卽ち略頌とも落書とも又は落首とも稱へ來つたもので、前に引いた藤六左近の「將門は米かみにぞ射られける」とあるのも、此の落首に屬すべきものです、尚茲に二三の落首を擧げて見れば、

『平家物語』に左馬頭殿御墓前に左右の手足を以て竿を尋がせ土に板を敷きて土礫と
いふものにしてなぶり殺にぞせられける何者かしたりけん

嫌へども命のほどはいきの守みのをはりをば今ぞ賜はる

海道宿々の遊君遊女あな忌まはしの討手の大將や軍には見逃げをだにあさましき事に
するに平家の人々は聞逃げし給へりとぞ笑ひけるさる程に落書ども多かりけり

ひらやなるむねもりいかに騷ぐらん柱と賴むすけを落して

富士川やぜゝの岩こす水よりも早くも落つる伊勢平氏かな

又上總守忠淸が富士川に鎧捨たりけるを

富士川に鎧は捨てつ墨染のころもたゞきよ後の世の爲め

『平家物語』爲義十六騎にて栗子山へ馳せ向ひ追返す同く劍の用とぞ聞えける其時山
法師の詠める

奈良法師栗子山まで澁り來ていが物の具をむぎぞ取らるゝ

奈良法師安からぬ事にしていかにもとの答詠み返さんと立やすらふ處に阿波の上座と

いふ者に衒られて山法師禁獄せらる奈良法師栗子山の答にぞ詠みける

比叡法師あはの上座にはかられて厳しく獄につかれけるかも

『平治物語』に検非違使八人行向ひて西洞院を上りにわたし左の獄門を樗の木にぞ梟けたりける、如何なる者かしたりけん左馬頭もとは下野守たりしかば一首の歌を書つけたり

下野はきのかみにこそ成にけれよしとも見えぬ上つかさかな

『源平盛衰記』に是の三人は四天王に數へられて一二の者なりければ義仲と同じく梟けられたり何者の所爲にか獄門の木の下に札を書きて立てたりければ

信濃なる木曾の御料に汁かけてたゞひとくちにくらう義經

の類で其例は澤山あるのです、併し藤六時代の落首は調べもよく整ひ、歌の主意は別として一首の仕立方は後に謂ふ狂歌と變りは無かつたのですが、世の降るにつれて落首は段々と墮落して、最初の批評的諷刺的のものは終に冷笑的惡罵的のものとなり、而かも文法語格にも構はず、幇間の駄洒落めいた字句を並べて獨り喜ぶやうな苦がく〵しい有樣となり、殊に徳川幕末に至つては奥向のお

茶坊主などが大小名の祕密をあばき、人身攻撃を事として、頻りに此の落首を詠むやうな事が行はれました、畢竟落首の作者は多くの場合匿名で……おれは落首詠みだと自ら名乘る者もなく、又之を撰評する宗匠判者のあるべき筈はないのです、かやうに其の作者等に歌學の力もなく、又詠み出る主意が只だ俗人の耳を歡ばせやうと云ふ迄で、おまけに匿名だけに其作に就ての責任もないのですから、段々下卑た口調になつて來たのは當然の事です、故に後世では世を諷し人を評するのでは無く、單に月花の風流を題して詠んだ狂歌でも、語格も整はず假名遣ひも正さず、只だ地口らしい文句を並べて居るのを一口に落首體と賤しめて狂歌界から之を驅逐する事に勉めたので有ます、然るに近代の狂歌判者中には、狂歌は語格や手爾遠波や假名遣ひなどをやかましく云ふものではないつまり夫れだけの學問があれば和歌を詠む方がましで、そんな事を知らぬ人々が詠むのだから之を狂歌といふのである、狂歌は文法を誤らうが假名が違はうが、三十一文字に足らないでも又三字や五字多くなつても構はぬから、何でも一時人の笑ひを取りさへすれば好いのだと眞面目に論じて居る人もあるさうですが、是れは自分の無學を辯護する負惜みの甚しいもので、何も多年故人が築き上げた狂歌の土臺を、自分の見地から破壞しようと試みないでも好さゝうに思ひます……全體語

格とは言葉の活用を定めた規則で、日常吾々が使つて居る通俗語でも此の規則から外れると、意味が通じなくなるのは言ふ迄もない事である、手爾遠波の如きも狂歌の聲調を整へるには必要缺くべからざるものゆゑ『言葉の玉緒』ぐらゐは讀んで掛らねばならず、又假名遣ひは現代の小學生徒すら其の一班を心得て居るのに、狂歌でも詠まうと言ふ人が之を知らずに濟まして居られるものでは無い、第一『言海』や『言葉の泉』などの今の字引で字を引くのにも、此の假名遣ひを知らぬ人はどの位不便だか分らぬでは有りませんか……狂詩でも亦其通りで、何も支那人には通じもせぬ日本の俗語を並べる律絶に、平仄を正すには及ばぬやうなものゝ、夫れでも尙ほ方外、半可を始めとして明治時代の成島柳北、石井南橋諸氏の狂詩は、悉く平仄が正してある、つまり詩の規則の範圍内に於て巧みを弄して、面白い文句を竝べるので興味が一層加はる譯で……狂歌でも或る點までは歌の規則に倣ひ、歌の姿にすがつて、そして和歌以上の滑稽趣味を發揮したのが、卽ち狂歌の上乘なるもので、此格に外れたものが落首體となるので有ます。

試みに昔の狂歌集を讀んで御覽なさい、曉月坊は云ふまでもなく、貞德でも雄長老でも（卜養、行風、貞柳などは論外として）乃至は天明調の大家でも語格手爾遠波を誤つたものは太だ少く（絶

無とは申しませんが）殊に言ひかけ秀句の假名違ひのものは頗る稀である、又狂歌は落首より出たものだと主張した飯盛ですら、言葉の活用を誤つた作は遠慮なく指摘して之を改め、秀句の假名違ひなどある歌は一首も採つた事は有りません、是れは當時の狂歌師が何も狂歌を詠む爲めに學問をしたのでは無く、皆相應の素養があつたからなのと、且狂歌に忠實であつた故だらうと思ひます、又世々の名ある狂歌師も、狂歌の詠み方を教へるに當つて落首體を學べと說いて居る者は一人も有ません、私共が見て餘程落首體に近いものゝみを詠んだと思はるゝ貞柳すら、其の門人をして「近き頃の初學びはともすれば横なまりの歌ども詠み出るはおぼつかなし」と言つて居る、況して貞柳派には全然反對した天明調の狂歌師は、悉く落首體を排斥して居る、先づ唐衣橘洲は

狂歌はひとへにざれたるものと心得、又は曲節にかゝはらずあらぬえせ落首さなる歌多し、狂歌はいかにも和歌に詠まぬ俗語をもてつゞり侍れど、樂天が俗にして俚ならずといふところ肝要なり、をかしみを詠まんとて戯場の道外方の如くはあるまじきなり、

と論じ、元の木網は

落首體詠むべからず。地口にならぬやう詠むべし、古き集にも宮城野の原を都へはよきみやげの

の原と詠み、又蕨をわらべと詠みたる狂歌あり、心得て地口をまぜては詠むべからず、

と說き、手柄の岡持は

狂歌なりとてあまりに拙きことは云ふまじきなり、いづく迄も體は和歌なれば其内をすこし狂じて詠むべし、

と諭して居ます、以上述べたのが狂歌と落首の相違の點ですから、初心の人々は卜養や貞柳の似而非なる狂歌を手本とせずに、能く名人大家の詠み口を味ひ、其の口調が鄙俚に陷らぬやう心がけるのが肝要でありませう。

狂歌の詠み方

前に引用した諸說で、略ぼ狂歌とはどんな物であると云ふことは御合點で有ませうが、尙ほ初心の人々の爲めに、狂歌の詠み方に就てお話し致しませう、狂歌の作法を論じたものには生白堂行風が『後撰夷曲集』の奥書に記してあるのを始めとして

狂歌老の胡馬　一册　京都　九如館鈍永著　寶暦元年版

狂歌訓	一册	大阪	栗柯亭木端著	明和三年版
狂歌濱のきさご	小一册		元の木網著	天明三年版
狂歌初心抄	一册		唐衣橘洲著	寛政二年版
狂歌大體	一册		朱樂菅江著	寛政十年著
ことばの本末	一册		元木網著	寛政十年版
閻雲愚抄	小一册		奇々羅金鷄著	寛政十二年版
狂歌題林抄	四册		酒月米人著	文化二年版
詞寄まさな草	二册	大阪	桃李園著	文化十年版
歌道手引草	三册		淺草庵春村著	天保十年版

尙ほ此外にも有ませうが手柄の岡持が、

（前略）口にまかせて卑しきことを言ひ出るは狂歌の本意を失ふことなりと、このかみ久敬みづからの狂歌三首を取出でて見す歲旦、春興、歲暮の歌なり

門松のひと葉の針を棒ほどに千代とぞいはふ今朝のはつ春

氷とけみどりの樹々の影うつる空にも魚のいかはのぼりて
掛がねを取るてふ年の夜も更てやゝ天の戸もあけんとす覧

かゝる姿に心得よとなり、されば之を物に譬ふれば、大諸侯の御前に召されて出る時、彼の侯書院の正面に社裃着たまひ臣下あまた從へて坐し給ふ、こなたも禮服を正しはるかの下座に這出で禮を爲し申さんに、物語などし給はゞ言葉少なくおろおろ答へ奉らんのみ、是れまことの歌のさまなり、其後常居たまふ一間に袴をも着たまはず坐し給ひて、肩衣とりて近々と寄りて烟草をのみつゝ世の中の事物語れとあるに、打解けてをかしき事ども言ひ出なば笑ひもし給ふめり、去れども大諸侯の御前なれば友どち物語るさまには何事も申がたし、狂歌は此の心得にて詠むべきものか、我にひとしき友に對して物言ふこゝろ持にては卑しくつたなくて、狂歌のさまを失ふなるべし、

とあるのは好い譬だと思ひます、私の見る所では和歌は楷書の如く、俳諧歌は行書の如く、狂歌は草書の如きものであるが、其の草書の崩し方を學ぶにはどうしても楷書や行書を知つて居ねばならぬと同じ事で、狂歌を詠むには一ト通り和歌や俳諧歌の大體を會得して置かねばなりません、然る

に始めて手習ひをするのに楷書行書の書き方も知らずに、いきなり草書ばかり習うた處で字の形だけは似るにしても、崩し方を應用することが六つかしく、其の筆意はいつ迄も手本以外に出る事が出來ますまい、故に狂歌を詠まうと思ふ人は先づ歌學の大意を呑込み、然る後ち古狂歌集のよいものを熟讀玩味するのが肝心で、博く學び多く讀むほど狂歌の元入れが出來て來るのです、又狂歌師に最も必要なのは機智頓才ですから、平素何事でも見聞する毎に之を狂歌の題にして卽吟を試み、其の頓智を養成するといふのも大切で……是れが狂歌を詠むべき祕訣だらうと思ひます。

以上述べたので狂歌よみ方の大要は盡して居ませうが、初學の人々には尙ほ物足らぬかも知れませんから、今少し例證を擧げて狂歌の作り方をお話し致しませう、凡そ狂歌は心より入りて言葉を後にするのが好いのですが、初心の内は言葉より入るのが詠み易いのです、言葉より入るとは緣語又は秀句を求めて、文字の上の興を專らとするの謂で、例へば蜀山人の寄鰻戀に

あなうなぎいづこの山のいもとせを割かれて後に身を焦すとは

とあるが如く、鰻といふ主題からあなといふ緣語を求め、山の芋が鰻になるとの俚諺に基きてやまのいもとせと續け、蒲燒になる事を思ひ寄せてさかるゝ、身をこがす等の詞を綴り合せて戀の意を

ほのめかすのが、卽ち言葉の上の興で……又秀句とは同訓異義の語、卽ち一つの言葉を二樣の意味に働かせた一首中の秀でたる句といふ事で、和歌でも小町の「我み世にふるながめせしまに」のながめとあるのが此類で、狂歌でも此の秀句をうまく遣つたのが中々面白いものです、例へば狂歌堂眞顏の元旦子日に、

元日にあたる子の日の玉はゞきはかず繁れる松や曳かまし

のはかずとあるは不レ掃と葉數との兩方に通はせた秀句です。

心より入るとは別に狂じたる文字を用ひずとも、奇想天外より來るとも云ふべき趣向を構へて、人を笑はせ人を興ぜしむるものを云ふので、狂歌の眞價は實に玆にあるのです……例へば

ほとゝぎす鳴きつるあとに呆れたる後大德寺の在明のかほ　蜀山人

ほとゝぎす自由じざいに聞く里は酒屋へ三里豆腐屋へ二里　頭光

にしの國百まん石も取るならば月の入るべき山はあらせじ　金埒

歌よみの頭とかしら打つけし音はこきんの序にきこえけり　飯盛

立てば閊へ立てば閊へて天に近き富士の煙は立たず成けん　眞顏

よし原は花のさかりと成にけりよし野ははだし傾城は下駄　岡持

このやうな鏡があらばたましひに男もほしきあきの夜の月　雛丸

折とるは憎さもにくしこゝろ根のかはゆくもある花の盗人　裏住

いつ見てもさてお若いと口々に讃そやさるゝ年ぞくやしき　菅江

いたづらに只のおやぢとなり瓢身の能とては酒のいれもの　橘洲

等は皆心の興を専らとしたものです、又狂歌にも六義十體あり、或は七病を去るべしなどと論ずる人もありますが、之等は銘々の心懸けに任せる事として、玆には六樹園飯盛が自分の狂歌を戯れに十體に分つて、人に示して居るのを御參考に掲げませう、

思ひあがりたる體

とばり帳立てゝも風をふせぎてんむこ山ざくら花のわう君

こけおどしの體

啼わたるしこほとゝぎすいかなれば夜のみ爰にくめの岩橋

小刀細工の體

山の井を手ならふ人の書初めにくむや古今のわか水のおと
　　くすみたる體
川たけの生ひしげるてふ吉原はうき世の人の子を捨つる藪
　　くちもとの體
淵明が頭巾うらなきまじはりは酒にこしたる物やあるべき
　　わづらはしき體
遁れても猶うき事はやま猿の獨りこのみに飽くばかりなり
　　たなつくりの體
忍ぶれば紅粉白粉の外にまたつれなし顔もつくるつれなさ
　　流行におくれたる體
越後をもぬき越中もとき捨てゝすゞむ夜かぜにちゞむ越前
　　二十年以前の體
戀すとは枕にだにも知らさぬをついふんどしに洩しつる哉

ふるき狂歌の體

戀わびて返せしよるの衣とは人やしらみのうは這ひをする

此内卑猥な文字あるものは取除いて、其他は手本として學ぶべき價値あるものと存じます、要するに着想といふ點に至ると、如何なる師匠でも之を門人に教へ込むことは出來ないのですから、是れだけはどうしても自分で想を練つて考へ出すより外致し方が有ません、是れが則ち狂歌にも多少の修養を要する所以であります。

扨また故人の風調に倣ひ、其の詠み方を學ぶには誰の狂歌を手本として好からうかと問ふ人あらば、私は古い處では第一に曉月坊を推擧いたします、此翁の狂歌はたけ高き方にて温雅のふしを失はぬ内に、自然と滑稽の意を含ませて申分の無い狂歌ですが、只だ酒百首しか世に傳はつて居ないのは残念です、夫れから貞德、未得、白玉翁等の詠み口を習ふのも面白かるべく、降つて天明調に至ると唐衣橘洲の狂歌がどうしても一頭地を抽いて居るやうですから、此人の歌集『醉竹集』は必ず熟讀するやうお勸め致します、蜀山人に至ては蜀山人の學問と才氣とがあつて、初めてあれだけの狂歌が詠めるもので、其代り歌柄は橘洲のやうに粒が揃はず、中には随分拙いものもありますか

ら、最初から蜀山人の口眞似をするのは、醜婦が貴妃の顰みに倣ふやうな物で有ませう、次に飯盛と眞顔とを比較すると、天明時代に詠んだのでは眞顔の方が趣向に無理が無く、其調もなだらかで且俗に通じ易いものが多かつたのですが、寛政の末俳諧歌を唱へ出してから、高雅らしい纎巧一方のものとなつて仕舞ました、飯盛のには理窟がかつたものや又卑猥に陷つたものゝ多いが疵ですが其代り故事などを詠入れた作には中々力の籠つたものが有ます、つまり此の兩人は一長一短一得一失があつて、何方へも團扇を揚げ兼ます、併し狂歌を撰むといふ點に至ると眞顔は迚も飯盛には匹敵する事が出來ませんが、是れは飯盛が博學で殊に批評眼は富んで居た故だらうと思ひます。

終りに臨んで一言して置きたいのは、初學の方々には狂歌は其の趣向が浮ぶ事があつても、語格や手爾遠波をやかましく云はれては、容易に詠むことが出來ぬと云ふ人もあるやうですが、是れは全く反對で狂歌の六ツかしいのは其の趣向を付ける事、卽ち落想の如何にあつて、語格や手爾遠波は一二ケ月もかゝつて學べば大要を會得する事が出來るのです、然るに其易いものを難いと云ひ六つかしいものを何でもないと思つて居るから、初心の人の詠んだ狂歌には自分ひとりに解つて居ても、世間へ通用せぬものが多い事になるのです、嗚呼狂歌の趣向……是れは天才にも因るのでせう

が、概して其人の學識如何に在りと云はなければ成ません。

天明調狂歌書目

私は曾て自分の目に觸れた狂歌集の書目を作り明治三十九年に國書刊行會より出版された『新群書類從』の第七卷へ掲げた事もありましたが、其内天明寛政年間に發行された書目（俳諧歌に屬するものを除く）だけを左に拔萃してお目に掛けます、是れを見ても其頃如何に天明調が流行したかがお解りになりませう。

（書目）	（册數）	（著者撰者）	（發行年月）
若葉集	二册	唐衣橘洲撰	天明二年
江戸の花海老	一册	四方赤良撰	同年
狂歌三十六人撰	一册	同上	同三年
萬載狂歌集	二册	同上	同年
狂歌師細見	一册	平秩東作編	同年

狂歌栗下風	一册	濱邊黑人撰	同年
狂歌濱のきさご	小一册	元木網編	同年
めでた百首夷歌	一册	四方赤良詠	同年
狂歌知足振	一册	普栗釣方編	同年
狂歌猿の腰掛	一册	濱邊黑人撰	同年
落栗草庵集	一册	元木網撰	同年
狂歌角力草	二册	釣方、光等撰	同四年
狂歌狂文老莱子	五册	四方赤良編	同年
狂歌いたみ諸白	小一册	朱樂菅江編	同年
後萬載集	二册	四方赤良撰	同五年
故混馬鹿集	二册	朱樂菅江撰	同年
狂文棒歌撰	一册	鳴瀧音人撰	同年
狂歌評判俳優風	三册	赤良、橘洲撰	同年

新玉狂歌集	一冊	四方赤良撰	同六年
五十人一首狂歌文庫	一冊	宿屋飯盛撰	同年
狂歌百鬼夜狂	一冊	赤良等撰	同年
狂歌天明睦月	一冊	朱樂菅江撰	同年
百人一首狂歌袋	一冊	宿屋飯盛撰	同七年
狂歌才藏集	二冊	四方赤良撰	同年
狂歌千里同風	一冊	同人撰	同年
狂歌天の川	一冊	著者未詳	同年
狂歌千代のためし	一冊	朱樂菅江撰	同八年
八重垣緣結	一冊	同人撰	同年
狂歌鸚鵡盃	一冊	同人撰	同年
繪本蟲えらみ	一冊	宿屋飯盛撰	同年
繪本汐干のつと	一冊	朱樂菅江撰	寛政元年

狂歌にせ物語	二冊	曼鬼武編	同年
狂歌數寄屋風呂	一冊	鹿津部眞顔撰	同年
狂歌春興帖	一冊	森羅萬象編	同年
狂歌初心抄	一冊	唐衣橘洲編	同二年
狂月望	一冊	紀定麿撰	同年
狂歌部領使	三冊	橘洲、飯盛等撰	同三年
狂歌めし合	一冊	朱樂菅江撰	同年
狂歌四本柱	二冊	つぶり光撰	同四年
狂歌伯樂春帖	一冊	同人撰	同年
御江戸餝鰕	一冊	烏亭焉馬編	同年
繪本吾妻遊	三冊	奇々羅金鷄編	同年
同百千鳥	二冊	同人編	同年
狂歌上段集	二冊	つぶり光撰	同五年

物中ごうれ百首	一冊	鹿津部眞顔撰	同五年
太郎殿犬百首	二冊	つぶり光撰	同年
繪本銀世界	一冊	撰者未詳	同年
狂歌東西集	二冊	三陀羅法師撰	同六年
狂歌三十六歌仙	一冊	同人撰	同年
新古今狂歌集	二冊	元木網撰	同年
狂歌二妙集	一冊	唐衣橘洲撰	同七年
狂歌仙臺百首	一冊	錢屋金埒編	同年
花ぐはし	一冊	鹿津部眞顔撰	同年
春日廿四孝	一冊	同人撰	同年
狂歌三十六歌撰	二冊	節松嫁々撰	同年
狂歌新手集	一冊	馬道霜解撰	同八年
狂歌立春抄	一冊	元木網撰	同年

晴天闘歌集	二冊	つぶり光撰	同年
金撰狂歌集	一冊	錢屋金埒撰	同年
美満壽組入	一冊	烏亭焉馬編	同九年
狂歌柳の絲	一冊	淺草市人撰	同年
狂歌梢の雪	一冊	菅江門人編	同年
狂歌太郎花者	一冊	麥原笛成撰	同年
白猿狂歌集	一冊	市川白猿詠	同年
狂歌弄花集	一冊	芦邊田鶴丸撰	同年
狂歌大體	一冊	朱樂菅江編	同十年
狂歌東都遊	二冊	淺草市人撰	同十一年
狂歌杓子栗	四冊	便々館撰	同年
狂歌東來集	二冊	酒月米人撰	同年
今日歌白猿一首	一冊	烏亭焉馬編	同年

狂歌初まなび	一冊	唐衣橘洲編	同十二年
闇雲愚抄	小一冊	奇々羅金鶏編	同　年
狂歌年代記	一舗	山陽堂山陽編	同　年

此外私のまだ見ないものも澤山有るだらうと思ひます。

尚ほ「狂歌師と小説」「狂歌師と狂詩狂文」「狂歌と浮世繪との關係」「狂歌が他の文藝に及ぼしたる影響」などお話し致したい事もあり、又狂歌師の傳記逸事など申上げる事はまだ澤山ありますが只だ長くなるばかりゆゑ此度は是れで御免を蒙ります……御退屈さま。（終）

昭和二年五月十二日印刷
昭和二年五月十五日發行

【私の見た明治文壇】
（定價金貳圓八拾錢）

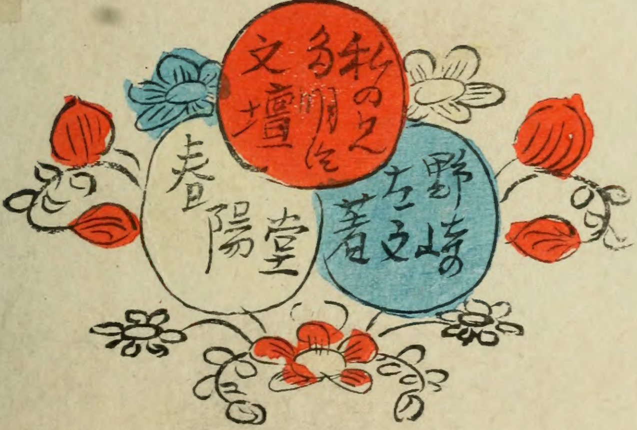
著作者檢印

著者　野崎左文
東京市日本橋區通四丁目五番地

發行者　利田利彥
東京市京橋區木挽町三丁目十二番地

印刷者　川村清次郎
東京市京橋區木挽町三丁目十二番地

印刷所　川安印刷所

發行所
東京市日本橋區通四丁目五番地
（電話大手五一・四二一〇）
（振替口座東京一六一一七）
春陽堂

EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 02953 6042